

ダタツツ剣風 ～悪の勇者と奴隷の姫騎士～

オリーブドラブ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

かつて、人類の希望という存在でありながら、戦争の兵器として人類に牙を剥いた勇者がいた。帝国勇者と呼ばれたその男は、やがて戦火の渦中に姿を消した。

それから六年。帝国の属国となった王国では、駐屯兵による横暴が繰り返されていた。彼らを食い止めるために奮闘する姫騎士ダイアンはある日、ダタツツと名乗る青年と出会う。だが、彼の実態はかつて最強と恐れられた「帝国勇者」だった！

帝国の悪徳貴族を必殺の剣技で打ち倒し、褒美も求めず立ち去ろうとするダタツツ。その背を追うダイアンは、恋心と怒りを胸に、ダタツツを王国騎士へと取り立てた。

彼への執着は果たして——恋なのか。憎しみなのか。

〔「Arcadia」「カクヨム」「ツギクル」「暁く小説投稿サイトく」「小説家になろう」でも掲載されています。また、表紙はスマートフォンアプリ「カスタムキャスト」で作成されたものを使用しております〕

目次

第一章 邂逅のブロンズソード

第1話	帝国勇者	1
第2話	姫騎士ダイアン	11
第3話	城下町の料亭	26
第4話	ハンナの恋	49
第5話	姫騎士の追憶	68
第6話	小さな騎士ローク	79
第7話	姫騎士の敗北	91
第8話	ロークの奮戦	99
第9話	ダタツツという男	107
第10話	ユニコン幻想	115
第11話	離れていく心	131

第12話	王国騎士団・予備団員ダ タツツ	149
------	--------------------	-----

第二章 追憶のアイアンソード

第13話	王国騎士ヴィクトリア	159
第14話	ある日の稽古	171
第15話	無謀な出動	177
第16話	勇者の剣	188
第17話	明かされる物語	205
第18話	勇者召喚	219
第19話	勇者の資格	226
第20話	少年の意地	235
第21話	勇者の剣の実態	245

第22話	帝国勇者の初陣	—	249
第23話	姫君達の祈り	—	256
第24話	王国將軍アイラックス	—	—
262	—	—	—
第25話	宿命の対決	—	274
第26話	父の面影	—	283
第27話	母との別れ	—	302
第28話	帝国勇者の最期	—	314
第29話	山村に迫る影	—	324
第30話	呪いの亡霊	—	330
第31話	少女の涙	—	346
第32話	過去との決別	—	355
第33話	流浪の剣士ダタツツ	—	—
第44話	ダタツツ剣風	—	485
第43話	ロークの勇氣	—	476
第42話	想い	—	465
第41話	十字の傷	—	456
第40話	王宮の死闘	—	444
第39話	運命の対決	—	434
第38話	式之断不要の威力	—	423
第37話	幕開け	—	417
第36話	名前	—	408
第35話	笑顔にしたい	—	398
第34話	追憶を終えて	—	390
第三章	贖罪のツヴァイヘンダー	—	375

第45話	王国の夜明け	497
第46話	新たな時代	504
第47話	王国勇者ダタツツ	508
最終話	次の時代へと	517
断章	生還のグレイウス	
第1話	フィオナの苦悩	521
第2話	地方都市の来訪者	532
第3話	小さな勇気	540
第4話	反撃の狼煙	548
第5話	リコリス親衛隊の勇気	555
第6話	奴隷商との決戦	560
最終話	王国勇者	569

真最終話	変わりゆく運命	
前編	変わる未来、新たな旅立ち	582
後編	君は、独りじゃない	595
番外編	虚勢の姫騎士	599
番外編	ジューシーにジェラシー	602
番外編	夢の世界に望む未来	605

第一章 邂逅のブロンズソード

第1話 帝国勇者

荒れ果てた大地に轟く、怒号の嵐。吹き上がる砂埃。

空に飛び散る血飛沫と、剣と剣が交わる衝撃音。

全ての事象が、戦場と称される一つの領域に結集していた。数多の意思が、その空間の中で激突し——失われていく。

「怯むな！ 帝国の侵略者から、我が王国の大地を守るのだッ！」

そのさなか。

馬上で雄々しく大剣を振るい、並み居る敵兵を薙ぎ倒していく猛者がいた。一角獣ユニコンをシンボルに持つ国旗を、空高く翳しながら。

艶やかな黒髪と、猛々しくも気高さを湛えた瞳を持つ、その男は——激戦のただ中に己の叫びを轟かせ、同胞達を鼓舞していく。

その荘厳な姿に焼き付けられた兵達は、身体の奥底から噴き出すような雄叫びを上げ、敵勢に向かっていった。

「声一つで、これほどの士気を……。さすがは王国一の守り手と謳われたアイラックス

將軍だ……！ 先の戦で、帝国随一の膂力を誇るといふアンジナルン將軍を破つただけのことはある」

「バルスレイ將軍！ 圧倒的に数で勝っているはずの我が方の軍勢が、アイラックスの軍に押されております！ このままでは……！」

「……やはり勇者の力を借りねば、この戦いを終わらせることは出来んか。——彼を呼び出してくれ。早々に決着を付ける！」

敵方の將軍も、その氣勢に息を飲む。だが、吞まれてばかりでは数で優位に立っていても戦には勝てない。二角獣バイコンを象つた帝国軍の国旗が、風に靡いて激しく揺れる。

帝国の兵士達は王国軍の気迫に圧倒され、徐々に後退している。ここで流れを変えるには、「転機」が必要だ。

——あらゆる気力をねじ伏せる、絶対的な「転機」が。

「奴らは戦意を削がれつつある……今だ！ 畳み掛けて立て直す暇を与えるなッ！」

「將軍！ 前方から、急速に接近してくる敵兵が——き、騎兵の速さではありませんッ！」

「なにッ……!? ……来たか！」

そして——王国軍の攻勢が、流れに乗じて行こうとする時。

その「転機」が、彼らの前に立ちはだかろうとしていた。

後退していく帝国軍と入れ替わるかのように、王国軍へ直進していく影。普通の兵士よりも小さな——少年のような体躯を持つその影は、馬にも劣らぬ速度で王国の軍勢に迫ろうとしていた。

「あれが……先の戦で先遣隊を皆殺しにしたという……！」

「『帝国勇者』かッ……！」

戦場を一望していたアイラックスと、その側近である王国騎士団長は——影の実体をいち早く看破し、戦慄する。

刹那、その小さな敵影が引き抜く剣の一閃が、王国軍の兵達を血に染め上げるのだった。

——悪しき感情を噴き出すような邪気を、その身に纏って。

数で勝る帝国軍を凌駕するアイラックスの力さえ、単騎で踏み潰す絶対的な「転機」。帝国勇者と呼ばれるその存在を前に、恐れを知らず進撃していた王国軍が、この戦で初めて歩みを止めるのだった。

アイラックスと同じ、黒曜石の色を湛える髪。強固な意志を持った眼差し。王国軍の鎧とも帝国軍の鎧とも違う、風変わりな形状を持つ漆塗りの甲冑。首に巻かれた、赤マフラー。

そして——この世界でただ一つの、細身の片刃剣。王国兵の血に染まるその刀身を見

つめ、アイラックスは眉を顰めた。

「あれが『勇者の剣』と『勇者の鎧』……。数百年前に異世界から召喚され、魔王を倒し世界を救ったという勇者の装備か……。先遣隊は、あの剣が持つ殺気に触れただけで気が狂うほどのプレッシャーを浴びせられたという話だが……」

「その神器を人間同士の戦争に使うとは、なんとたる冒瀆……！　そしてそれに恭順する、あの帝国勇者はなんとという愚か者なのだ……！」

帝国勇者が纏う装備を見遣り、騎士団長は激しく憤る。強く握り締められたその拳からは、赤い雫が滴っていた。

彼にとつてのあるべき勇者の姿とは、それほどまでに掛け離れているのだ。血の雨を浴びた、今の帝国勇者の容貌は。

「……なんにせよ、現代の勇者が我々にとつての脅威であることに変わりはない。——私が一騎打ちに出向こう、兵達が勢いを削がれている」

「いえ、私が先に行きましょう。將軍に万一のことがあれば、王国軍は士氣の大半を失います」

「騎士団長……」

「……お任せください。我が子に平和な王国を見せるためにも——私は、行かねばならぬのです」

だが、兵達に勢いを取り戻すための一騎打ちに志願したのは、そんな私怨が原因ではない。そんなことでは、騎士団長など務まらない。

彼が戦いに出向くことを決断させた最大の動機。それは、彼らが守るべき人々——掛け替えのない家族なのだ。

そのためにこそ、彼は今、命を懸けている。「帝国勇者の戦い方」という敵情報を、少しでも多くアイラックスに伝え、この戦いに活路を見出すために。

勝ち目のない戦いに、希望を齎すために。

「我こそは王国騎士団長ルーク！ 帝国勇者殿に、一騎打ちを申し出たい！」

「……」

勢いを殺され、膠着状態に陥った王国軍を掻き分け、騎馬に跨った二人の男が現れる。その二人——アイラックスと騎士団長ルークは、帝国勇者を一瞥し、この先に待ち受ける戦いの過酷さを予感していた。

そして彼らが互いに頷き合い——ルークの騎馬が先陣に踏み込んだ瞬間。帝国勇者は彼の気迫に触れ、本能的に剣を構えるのだった。

「その剣の構え。一騎打ちの受諾と判断させて頂く！」

「……」

「——行くぞッ！」

一触即発。その形容できる剣呑な空気の中で、先に動いたのはルークの方だった。彼の騎馬は強烈な踏み込みで土埃を巻き上げ、帝国勇者目掛けて突進していく。

一方、帝国勇者と呼ばれる少年は何一つ語ることなく——ルークの氣勢に怯むこともなく。ただ静かに、剣を構えていた。

(さあ……貴様の剣を見せてみる。この命、ただで貴様には——！)

そして、間合いを詰めたルークが、手にした両刃剣を振り上げた瞬間。

彼の胸を——片刃の剣が、貫いていた。

主の手元から打ち放たれたその剣は、二角獣バイコンの幻影を纏い——ルークの鎧ごと彼を貫通し、馬上から転落させてしまう。

その衝撃音が、静かになった戦場のただ中に虚しく響き渡っていた。

(——に、が、起きた。何が、起きたのだ。私は、なぜ……どのような技で……!?)

遠のいていく意識の中で、ルークは己の敗因を模索する。あまりにも一瞬の出来事ゆえ、自分が死んでいく理由さえ掴めない。

その悔しさが目元に溜まろうとしていた時。ようやく彼は、胸に突き立てられた勇者の剣に気づくのだった。

(そうか、奴は……恐るべき速さで、己の剣を投げ付けたのか……。剣士の半身たる剣を投げるなど、やはり貴様は勇者失格よ……)

自分が気づけたなら、アイラックスにも見えていたはず。その希望的観測に胸を撫で下ろすルークは、静かに目を閉じていく。

（ああ……ロークよ。せめてお前だけは、幸せを……）

そんな彼が最期に想い浮かべたのは、幼い我が子であった。父として、騎士として生きた彼の戦いは、その瞬間に——ようやく、終わりを迎える。

「ルーク……！」

その最期を見届けたアイラックスは、暫し目を閉じ——静寂に包まれた戦場の中で、黙祷を捧げる。

そして——僅かな時を経て、再びその眼が開かれた時。アイラックスの瞳には、燃え滾るような闘志が宿っていた。

ルークの命と引き換えに、帝国勇者の技を、己の眼に刻みつけて。

「遙か昔の帝国騎士が、空を舞う魔王の手先と戦うために編み出したという、伝説の対空剣術——『ていこくしきとうけんじゆつ帝国式投剣術』。数十年前に帝国から入手した古文書に記されていたが、まさか実在していたとはな」

「……」

「——ルークの命が、私にそれを教えてくれた。彼と同じ父親として……王国軍人として。私はなんとしてもそれに応えねばならん。貴殿を、倒さねばならん」

アイラックスの騎馬が、静かに戦場へ踏み込んでいく。ルークを失った王国軍の兵達は、継るようにその姿を見守っていた。

もはや彼らにとっては、アイラックスだけが希望なのだ。

帝国勇者はルークの骸からゆっくりと己の得物を引き抜き、アイラックスと対する。騎士団長のルークを倒したにもかかわらず、その眼には一片の驕りもない。

『チヲ……チヲヨコセ……』

しかし、その刀身から漂う禍々しい「力」は、今も帝国勇者の身体に渦巻いている。剣から響く「声」は、鏗元から血を求めるように呻いていた。

「……さすがだ。同じ剣士として、敬意を表する。改めて、私からも一騎打ちを申し出たい」

「……死ぬのが、怖くはないのか。あなたは」

そして、少年の眼にアイラックスが感嘆する瞬間——沈黙を貫いてきた帝国勇者が、初めて口を開いた。

今までの立ち回りとは裏腹に、その声色は……まるで、アイラックスを氣遣うかのような色を湛えている。

「死にはしないさ。私にも、帰りを待つ娘がいる。必ず生きて、娘の許に帰る。それだけだ」

「……ここで逃げ帰れば、容易く叶う願いじゃないのか。俺は、逃げる敵まで斬るつもりはない」

「私が望むのは、平和な王国に生きる娘に会うことだ。逃げ帰った先に、その平和はない」

帝国勇者の言葉を断ち切るように、アイラックスは背にした巨大な剣を大きく振りかぶる。そして、その切っ先が仇敵に向かう時——再び、この荒野を舞台に一騎打ちが始まろうとしていた。

「……その平和のためにも——行くぞ」

「……わかった。——来い」

そして、彼らの剣が交わる時。

この戦争の結末は、大きな変化を迎えていく……。

——私達が暮らすこの星から、遙か異次元の彼方に在る世界。

その異世界に渦巻く戦乱の渦中に、帝国勇者と呼ばれた男がいた。

人智を超越する膂力。生命力。剣技。

神に全てを齎されたその男は、並み居る敵を残らず斬り伏せ、戦場をその血で赤く染

め上げたという。

如何なる武人も、如何なる武器も。彼の命を奪うことは叶わなかった。
しかし、戦が終わる時。

男は風のように行方をくらまし、表舞台からその姿を消した。

一騎当千。

その伝説だけを、彼らの世界に残して。

第2話 姫騎士ダイアン

六年前。一つの大陸が広がるこの世界では、「勝敗が始めから見えている」戦争が起きていた。

大陸の大部分を統治する、絶対的な国力を誇る帝国。小国ながらも、豊かな土地に恵まれた王国。

戦になれば、どちらが勝つか。考えるまでもないだろう。

資源に溢れた王国の領土を狙う帝国に対し、王国軍が強硬に反発したがために発展した、この武力衝突。

王国は半年も持たないだろう。誰もが、そう予見していた。

だが。帝国は絶対有利と見られていたこの戦争で、思わぬ苦戦を強いられたのである。

仁知勇を備えた王国の英雄、アイラックス将軍。

彼の存在を中枢に持つ王国軍は勇猛果敢に戦い、帝国軍を幾度となく退けていたのだ。

開戦から五年。アイラックスにより侵攻を食い止められていた帝国軍は、周辺諸国に

隙を見せる事態を懸念するようになっていた。

そして——それを受けた時の皇帝は、ある決断を下す。

それは遙か昔、全世界を恐怖に陥れた「魔王」から人類を救うため、異世界から遣わされた「勇者」を召喚する儀式を行うことであった。

人類を救うために舞い降りるはずの「勇者」を、人間同士の戦争に使う。

その責を一身に背負う覚悟で、皇帝は儀式を決行し——勇者となる男を、この世界に呼び込んでしまったのだ。

以来、戦況は本来の形成へと引き戻されることになる。

さしものアイラックスも真の超人である勇者には敵わず、敗走を繰り返し——最後には討ち取られてしまうのだった。

これにより王国軍は瓦解し、敢え無く降伏。一人の將軍により覆された戦況は、一人の勇者により押し潰されてしまったのだ。

——戦後、王国は帝国の属国となり、終戦から六年が過ぎた現在でも、ほとんどの国士が帝国の統治下に置かれている。

それでも王国の民は、最期まで国のために戦い続けていたアイラックスを、英雄として讃え続けていた。

一方、勇者はこの戦争における帝国の英雄となったが、王国では「初めて人類に牙を

剥いた悪夢の勇者」であるとされ、彼を召喚した帝国に対する皮肉として「帝国勇者」と呼ばれるようになった。

だが、その頃には既に勇者も帝国から姿を消しており——その行方を知る者はいなかった。

帝国側は勇者に失踪された事実を隠蔽するため、最後の戦闘で戦死したと公表したが——彼の死を疑う者は少なくなかった。

しかし確固とした生存の証が見つかることもなく、いたずらに時間ばかりが過ぎていくうちに……やがて、生きているという噂は立ち消えになっていった。

そんな激動の時代から、六年。

「やつ……！ は、離してくださいっ！」

「いいじゃねーかよ、つれねえな。王国人たるもの、帝国人の言うことには従っておくもんだぜ」

「そーそー。負けた奴には拒否権なんてねーのさ」

帝国の支配下に置かれた、王国の城下町では——当たり前前に繰り返される横暴が、今日も民を苦しめている。

昼下がりの街道にある、小さな料亭。その入り口で、一人の少女を数人の男達が包囲していた。

均整の取れたプロポーションに、栗色のセミロング。翡翠色の瞳に、程よく日に焼けた健康的な柔肌。

そして、十七歳という年齢の割には幼く——愛嬌に溢れた顔立ちと、素朴な印象を与えるそばかす。その全身を彩るように包むウエイトレスの服。

そんな彼女に対し、男達は全員が鋼鉄で固められた兵士の鎧を纏っている。さらに彼らが被る、鬼の如き双角を備えた鉄兜が、陽の光を浴びて怪しい輝きを放っていた。

武装した兵士達が丸腰の女性を囲うというのは、本来ならば極めて異質な光景であるが——この街においては、その限りではない。

駐在している帝国兵が、王国人の女性に手を出す事案など、今に始まったことではないのだ。

昼下がりの街道とあれば、人通りも少なくない。事実、彼らのやり取りを遠巻きに眺めている人達は大勢いる。

だが、観衆の中に少女を助けようとする人間はいない。帝国兵に逆らえば、何をされるかわからない。それは誰かが警告するまでもなく、一つの常識としてこの街に浸透しているのだ。

「き、騎士団の方を呼びますよ！」

「呼べばいいじゃねーか、俺達に勝てるんならな」

「例のアイラックスの娘とやらは、出稽古で城下町にはいねーんだろ？ あいつがいねえ腰抜けの騎士団が来るってんなら、こっちも誠心誠意を込めてぶちのめしてやる」

「……………」

少女は声を高らかに上げ、視線で周囲に助けを求めるが——行人は困惑して顔を見合わせるばかり。

そうしている間にも、帝国兵達は無遠慮に少女の身体に触れていく。自分の肌を這うように撫でる男達の手には、彼女の表情は凍りつくように青ざめていた。

「ん？ 呼ばねーのかい、嬢ちゃん。なら、合意の上つてことだな」

「どうせなら詰所までエスコートしてやろうぜ。あいつらも溜まつてるらしいしな」

「そりゃいい。嬢ちゃんならきつとモテモテだよ」

「……………た、助けて……………」

「ハハ、怖がるこたあねーよ。みんな優しくしてくれるって」

彼女が怯えていることを知ってかしらずか、帝国兵達は少女の両脇を固めて移動を始める。それに逆らうことも許されないまま、少女は引きずられるように足を動かしていた。

「お、お待ちください帝国の方々！」

「あん？」

「そそ、その娘は私共の店で小さな頃から働いている大事な看板娘なんです！　どうか、どうか乱暴なことは……！」

「……つほおく……泣かせるねえ、いい娘じゃねえか嬢ちゃん。だったらなおさら、俺達で日頃の苦勞を勞つてあげなくちやなあ」

「そ、そんな！」

そんな時。

帝国兵達に縋り付くように、店のオーナーらしき初老の男性が制止に入る。

だが、彼の言葉を真摯に受け止めるような人間達なら、そもそも女性を強引に連れ帰るような真似はしない。

「お願いします、その娘は私達にとっては家族なんです！　お代ならお返ししますから、どうかその娘だけは……！」

「——ああもう、うるせえな！　グダグダ抜かすところの女だけじゃ済まなくなるぞ！」

「うがつ……！」

「キヤアツ！　ルーケンさんっ！」

懸命に食い下がる男性の鼻頭に、劍の柄が減り込む。痛烈な一撃を受けた彼は膝から崩れ落ち、帝国兵の一人から罵声を浴びせられた。

その光景を目の当たりにした少女は、我に返ると短い悲鳴を上げ、すぐさま彼のそばに駆け寄ろうとした——が、他の帝国兵達に両脇を固められては、身動きなど取れるはずもない。

ルーケンと呼ばれた男性は、なおも少女を助けようとするが——彼の覚束ない足取りでは、もう帝国兵達を追うことはできないだろう。

そうしている間にも、少女は帝国兵の男達に連れ去られようとしていた。

街の人々はその様子を見送りながら、やがて申し訳なさそうに目を伏せて、この場を離れていく。帝国兵にだけは、目を付けられないように。

それが、敗戦国の民が生き延びる術なのだから。

——だが。

「ちよつと待った!」

その理から外れた男が一人。

帝国兵達の前に現れた。

「あ? なんだお前」

「女の子に乱暴したり! 人に怪我させたり! そんなことをしてるあんた達を、見過ごすわけには行かないな! さあ、彼女を離せッ!」

「……はあ?」

身の程を知らない——としか思えぬ男の言葉に、帝国兵達は哑然としている。

それにより、数秒程度の沈黙が流れ——

「ぶつ……はははは！ なにお前！ 正義の味方気取りか?! しかもその格好で!」

「イカれた奴がいるもんだな、王国には!」

「や、やべえ! 笑い死にしそう!」

——爆笑に次ぐ爆笑。絶え間ない笑い声が、城下町の往来に轟いていた。

王国の騎士団ですら、怯えてまともに取り合えない帝国兵の前に、この台詞を吐けば笑われて当然なのだが……当の本人はきよんとしている。

「あ、あのな! ジブン、結構真面目に言ってるんだけど……!」

「ひひひ、わかった、わかったからもうこれ以上笑わせんなって。聞かなかったことにしていてやるからよ」

「イイ歳こいてダセエ格好してんじゃねーよ、ギャハハハ!」

「騎士団ごっこはそろそろ卒業しろよ、親が泣くぞ!」

そんな彼の傍らを素通りしつつ、男達は下品な笑い声を上げて往来を進んでいく。一方、少女は現れた男を虚ろな瞳で見つめていた。

彼らが笑う理由には、男の格好も含まれている。

ポロポロに擦り切れた青い服。くたびれた赤いマフラー。傷だらけの木製の盾に、刃

こぼれだらけの銅の劍。

下級貴族に雇われた傭兵でも、もう少しマシに武装しているだろう。物乞いがありあわせの物で劍士ごっこに興じているような姿であれば、笑われるのも当然である。相手が強大な帝国兵であるなら、なおさらだ。

黒曜石の色を湛える艶やかな髪や、逞しい身体つきに整った目鼻立ちというまともな特徴を、丸ごと帳消しにするみずぼらしさなのだから。

「ちよつ！ ちよつと待ってつてば！ まだ話は終わつちやいないぞー！」

しかし、そんなことを気にする素振りは全く見せず——彼は声を上げて帝国兵達を説得しようとしていた。

ルーケンが殴り倒された後だというのに、恐れを知らずに正面に回る男。そんな彼を一瞥した帝国兵の一人は、兜の奥から目の前の障害を睨みつける。

「……おい、グズ野郎。見逃してやるって言ってるのに、何してやがる！」

「だから！ 彼女を離せつて——」

「あつそう——じゃあ死ぬ」

ドスを利かせた声で脅しても動かない男の前に、帝国兵は苛立ちを募らせ……一振りの劍を、腰の鞘から引き抜いた。

その様子を目撃した民衆から、悲鳴が上がる。緑と青空に包まれた王国の街が、血に

塗れることになるかと察したのだ。

帝国兵に、躊躇はない。

「おらよっ—」

「—ッ—」

彼は瞬く間に剣を上段に構えると、鉄槌の如く振り下ろすのだった。白く煌びやかな刀身が、地面を打ち砕いていく。

——だが、血は流れていない。

その地面は未だ、石畳の色のままだ。

「んなっ!？」

「なんだ、ありやあ!？」

帝国兵達は、揃って驚嘆し——上空を見上げる。

そこには、彼らが予想だにしなかった景色があった。

「……フツ」

彼らが見上げた先には、斬られるはずだった男の姿がある。彼は斬撃を浴びる直前、帝国兵達が驚愕するほどの高さまで跳び上がっていたのだ。

人間業ではない。さらにその瞳は、度胸だけの愚か者とは違う——戦士としての凛々しさを漂わせている。

「なんなんだ、あいつはッ!」

剣を振り下ろした帝国兵は目を剥き、彼と視線を交わす。先刻とは掛け離れた雰囲気を見せる、得体の知れない相手——その存在を前に、彼は柄を握る手に汗を滲ませた。宙を舞う男は、そうして警戒する帝国兵達に不敵な笑みを浮かべ——幾度となく空中で身体を回転させながら、地面へと降りていく。

その余裕綽々な態度が、帝国兵達の緊張をさらに煽っていた。しかし。

「お、おい……! なんであんな奴が王国なんかにいるんだ! あんな体術、帝国の精鋭部隊の演武でも見たことないぞ!」

「わからねえ……! まさか、王国軍が秘密裏に養成していた暗殺部隊じゃ——」
動揺を隠しきれず、帝国兵達が声を荒げた瞬間。

「ふいつち!」
事故は、起きた。

「——は?」

不遜に口元を緩めながら、優雅に空中で回転していた男は——華麗に着地するものと思いきや、頭から地面に突き刺さってしまったのだ。

石畳さえ貫通する勢いで、彼の上半身は無惨に埋没し——空気に触れている下半身だ

けが、ヒクヒクと痙攣していた。

一応生きてはいるようだが、抜け出してくる気配はない。過程はどうあれ今の状況を見るなら、結果的には帝国兵達の勝利と言えるだろう。

だが、彼らはあまりの事態に開いた口が塞がらず、一つの疑問に思考回路の全てを支配されてしまっていた。

結局こいつは何だったのか、と。

「そこあなた達！ 何をしているのですか！」

その時。

涼風のように艶やかな声が、街道に響き渡る。

「げっ!？」

「まずい、あのお転婆姫か！」

それを耳にした帝国兵達は我に返ると、焦りを滲ませた表情で互いの顔を見合わせる。既に地面に突き刺さった男のことなど、眼中にはない。

「仕方ねえ、ずらかるか！」

「……クソツ、敗戦国の癖に偉そうにしゃがって。いつか絶対、ヒイヒイ啼かせてやるからな……！」

帝国兵達は短いやり取りの中で撤退することを選択し、足早にその場から逃走してい

く。その判断に滞りがないことから、この事態には慣れていることが窺えた。

あつさりとして少女を手放した彼らは、全く間に姿を消してしまふ。

彼女が顔を上げる頃には足音すらなくなっており、現場には石畳に突き立てられた男の下半身のみが残されていた。

「くっ………！ あの帝国兵達、どこへ………！」

「………!？」

すると、少女の眼前に——帝国兵達が退く原因となった声の主が駆け付けてきた。

「あ、あ、あの………！」

「………遅くなつてしまい、申し訳ありません。——お怪我はありませんか？」

透き通るような白い肌。太陽の輝きを浴び、眩い煌めきを放つ栗色のショートボブ。蒼く澄んだ瞳に、芸術の如く整い尽くされた目鼻立ち。

加えて十五、六歳前後の体格でありながら、その身体のラインは完成形に近い女性らしさを備えている。新緑の色を湛えた軽鎧とミニスカートの上からでも、そのなだらかなラインが窺えた。

さらに彼女の左腕には、一角獣の紋章で彩られた盾が装備されており、その腰には同様に一角獣の角を象つた剣が提げられている。

そんな彼女の凛々しい戦乙女の姿に、少女はすっかり目を奪われていた。慈しむよう

な微笑みを浮かべて手を差し伸べるその姿に、少女は年上でありながら完膚なきまでに魅了されてしまっている。

「そ、そんな……！ 私なんかには、もったいないお言葉です！ ダイアン姫！」

「いえ。戦に敗れた身とはいえ、わたくしも民を統べる王族の一人。苦しんでいる民のために力を尽くすのは、当然の責務です。それより……！」

「……そ、そうだ！ ルーケンさんっ！」

ダイアン姫と呼ばれた美少女は、腰を抜かしてしまった彼女の手を取り、ゆっくりと立ち上がらせる。次いで、鼻血を出しながらも壁に手をつき、なんとか立ち上がっていたルーケンのそばに歩み寄った。

「これはひどい……。ただちにわたくしが治療しましょう。ベッドの用意、お願いできますか？」

「は、はい！ すぐに！」

「……も、申し訳、ありません姫様……。あなた様のお手を、煩わせてしまうとは……」「あまり喋っては傷に障ります。あとはわたくしにお任せください」

ダイアン姫はルーケンの手を取り、真摯な眼差しで励ますように声を掛ける。彼はその手の温もりに触れ、頬に涙を伝わせていた。

その光景を目の当たりにしていた街の人々は、この国の王女の勇姿に釘付けとなり――

―自然と拍手を送るようになっていた。

そして、彼女がルーケンを見つめながら、腰にした剣を空へ掲げる瞬間……そこから新緑の光が迸り、ルーケンの全身を包み込んでいく。すると、歪んでいたルーケンの鼻頭が、次第に元の形に戻っていく様が窺えた。

この世界で彼女だけが使える、「回復魔法」の効果だ。この場でなければ決して見ることの出来ない光景に、人々の視線が集中していく。

事件が解決したわけじゃない。

それでも、最悪の事態だけは回避することは出来た。それだけは間違いないだろう。

「ところで……一つ、気になることがあるのですが」

「は、はい。なんででしょうダイアン姫」

しかし、この優しさと勇氣に溢れた王女には、一つの気掛かりがあった。

「あれは一体、なんなのでしょう……？」

「え、え〜つと……」

石畳に突き刺さった、得体の知れない下半身のことである。

第3話 城下町の料亭

王宮を囲うように造られた城下町は、緑豊かで活気に溢れた街である。この街が戦場となる前に終戦協定が結ばれたため、帝国との戦争に敗れ属国となった今でも、街の美しさは健在であった。

しかし帝国兵が常駐するようになってから、人々は彼らの横暴に怯える日を送っている。彼らに敵わない立場であることから、王国騎士団の機能が麻痺していることも大きい。

しかしただ一人、帝国兵に物怖じせず、毅然と対応できる騎士が今も居るのだという。かつて最期まで王国の未来のために戦い続けたと言われている、アイラックス将軍。その血を引く娘が、敗戦国となった今でも父に代わり、帝国兵の狼藉に抗していたらしい。

今は帝国の要請に応じて剣の出稽古に赴いているが——王国に帰ってくる日も近いのだという。

そのアイラックスの娘から手解きを受けた王女ダイアンも、萎縮している騎士団に代わり街の治安維持に力を注いでいるのだ。

敗戦により生じる責任に追い詰められた国王は大病を患い、王妃はその心労によりこの世を去った。ダイアンにとつて騎士の一人として戦うことは、妻を失い床に伏せた父を励ます意味もあつたのである。

——そう。彼女もまた、アイラックスの背中を見て育つた一人なのだ。

本来ならば王族が選ぶべき道ではなかっただろう。しかし若い彼女に他の道程を探すことは出来ず、それを教える者も現れなかつたのだ。

帝国兵を恐れない。そんな人間自体が、希少だつたのだから。

「そうだつたんですか……。ジブンとしては、そんな大したことをしたつもりはなかつたんですけどね」

「それが大したことなんだよ。ハンナが連れ去られそうになつた時はどうなることかと思つたが……。君が時間を稼いでくれたおかげで、姫様が駆け付けてきて下さつた。君には本当に感謝してるよ」

——その後、地面に突き刺さっていた男は町民の尽力により無事に引っこ抜かれ、今は看板娘を助けるために立ち向かつてくれたお礼として、ルーケンが経営する料亭で食事を取っている。

従業員用ベッドで一泊サービスという、豪華なおまけ付きで。

ルーケンは鼻頭を覆う包帯を撫でながら、大量のメニューを平らげていく男を微笑ま

しげに見つめていた。……どこか、遠くを見ているような目で。

そんな彼の表情を不思議に思いつつ、男は咀嚼していたパンを飲み込むと、静かに口を開く。

「……ダイアン姫かあ。あんなにお若いのに、国民のことをそこまでして守ろうとするなんて……凄いですよね」

「ああ全くだ。欲に目が眩んで殺戮に手を染めた帝国勇者には、爪の垢を煎じて飲ませてやりたいよ」

「……ええ、まあ、そうですね。全くその通りです」

自慢げに語るルーケンに対し、男の表情は固い。気まずい話題に触れてしまったかのように、その視線はあらぬ方向へ泳いでいる。

「しかし、よく食べるねえ君は。やはりあんなに激しく動ける体となると、それくらい食べなきゃ持たないもののかな」

「あ、す、すみません。遠慮も知らずにこんなにたくさん……」

「いいんだいいんだ、気にしなくて。年頃の男はたらふく食ってなくちゃな」

ルーケンはそんな男の様子に気づかぬまま、気さくに話を続けている。すでに夜の帳が下り、営業は終了している時間帯だが、そんなことは構いなしのようだ。

——本来ならば、あのような動きは武人を基準にしても「激しく動ける」で片付くれ

ベルではないのだが……戦士の世界に疎い民間人である彼らは、「そういうもの」で納得してしまっているらしい。

一部始終を見ていた町の通行人も、曲芸のようなものとして男のジャンプを見ていたのである。

「ところで君……ええと……」

「ダタツツです」

「そうそう、ダタツツ君。随分珍しい名前だけど、どこから来たんだい？ 見たところ、ハンナに近い年頃のように見えるが……」

「……とにかく、遠いところからですよ。歳は十九歳です」

「十九歳。そうか、十九歳か……」

その数字を聞き、ルーケンは腕を組んで黙り込んでしまう。ダタツツと名乗る男は、何事かとその顔色を窺っていた。

「あの、どうかしました？」

「いやなに。前の戦争で死んだ息子が、生きていれば今頃それくらいの年になってたんだよ。昔から札付きの悪ガキだったんだが、情には熱い奴だな。帝国が許せないって一心だけで、俺の言うことも聞かないで少年兵に志願したんだ」

「……」

「孤児のハンナにとつちや、頼れる兄貴分でもあった。俺には一言も話さなかったが——多分、ハンナがいるこの街を守りたかつたんだろうな」

あのウエイトレスの少女——ハンナが、ルーケンの料亭に拾われた孤児であることを、ダタツツは既に彼から聞き及んでいた。

死んだルーケンの息子とハンナは、兄妹のように育ってきたのだろう。戦争がなければ、帝国勇者がいなければ、それは今でも続いていたのかも知れない。

店の床を掃除をしながら、痛みに耐えるような面持ちで下を見つめる、残された彼女の姿がそれを物語っている。

だからこそ彼は、帝国兵達に泣きついてでもハンナを救おうとしたのだろう。妻を早くに亡くし息子も失った今、自分の家族は彼女しかいないのだから。

「だから、俺は心から感謝してるんだ。その息子の想いごと、この街を守ってくれている姫様には」

「……そうだったんですか」

「……ハツハハ、辛気臭い話になってしまったな。ところで、この先の宿はどうするつもりなんだ？ 当てのない旅を続けてる……とは聞いているが」

「あまり長く滞在する予定はないんで、適当に野宿で済ませるつもりです」

「なら、当分はここに泊まるといい。宿泊費と食費は、仕事の手伝いへの報酬として出し

てやる」

空気を変えるためか、ルーケンは話題を変え——意外な提案をする。その内容に、ダツツは思わず目を丸くしていた。

「ええ!?! い、いや、そんなの悪いですよ!」

「なあに。ハンナ目当ての客が増えてきて、人手が足りなくなってきたことだしな。君のような男なら、ハンナも気に入るだろう」

遠慮する彼に対し、ルーケンは乗り気で話を進めている。すると、その言葉に反応して——

「ちよ、ちよつとルーケンさんっ! 誤解されるようなこと言わないでよっ!」

——店の掃除をしていたハンナ本人が、顔を真っ赤にして割り込んでくるのだった。

「なんだハンナ。『すつごくい人なんだから泊めてあげようよ』って言ってきたのはお前だろうが」

「そ、それはそうだけど! 私は別にそういうつもりで言ったわけじゃないんだから!」

「ほう? そういうつもりとはどういうつもりのことを言うのかな?」

「……もう! ルーケンさんのばかっ!」

「ハツハハハ!」

ぷりぷりと頬を膨らませる彼女の様子を楽しみながら、ルーケンは声を上げて笑って

いる。彼のからかいに機嫌を悪くしたのか、ハンナはジトつと目を細めてダタツツの方を見遣った。

「……泊めてあげるのは本当だけど。えっちなことはダメだからね」

「あの、ジブンはなにも……」

「あと……その。あの時、助けようとしてくれて、本当にありがとうね。ダタツツさんの気持ち、嬉しかったから」

ただ、やはり感謝の想いの方が優っていたのだろう。彼への礼を一通り口にして、彼女は恥ずかしがるように退散していく。

すると。

「あ……あっ!？」

「——夜分に、失礼します」

ハンナは逃げた先の扉から、毅然とした面持ちで現れた来客に驚愕するのだった。

営業時間を過ぎたあとになって来たことに驚いているわけではない。その来客が……ダイアン姫であることが問題なのだ。

昼間と変わらない緑の軽鎧と、煌びやかな剣と盾。その装備に身を固めた彼女は、物々しい表情で料亭の中に足を踏み入れていく。

突然現れたこの国の王女に、三人は思わず目を見張るのだった。

慌てて両膝を突くルーケンとハンナに釣られるように、ダタツツも騎士の如く片膝を床に突け、剣を床に突き立てる。

「ひひひ、姫様!? なぜこのようなところまで……!」

「……よかった。痛みはもう引いているようですね。わたくしの魔法がよく効いているようで、何よりですわ」

「は、はい。姫様のお力添えのおかげで、この通りでございます。私共のような下々のために、なんとお礼を申し上げればよいのか……」

「下々、などではありません。あなた達という国民一人一人が、わたくし達の宝。王女として、その宝を守るために力を尽くすのは当然の責務です」

「は、ははっ! 身に余る光栄ですっ!」

「ありがとうございます、ダイアン姫っ!」

古の勇者が魔王を打ち倒し、今日に至るまでの数百年。帝国は領土拡大のため、幾度となく戦争を繰り返し……戦いのための兵器として、「魔王を討つため」に神から齎されたとされる「魔法」を行使してきた。

そのため、帝国の行いに怒った神の手により魔法の力は人類から失われ——人類最後の希望である「勇者召喚」の儀式を除く全ての魔法が、神の世界へ返納されたと伝えられている。

だが、勇者の伴として魔王に挑んだ僧侶が操っていた「回復魔法」のみは、その僧侶の血筋に残されていた。

異世界から召喚された勇者と共に戦い抜いた、その僧侶こそが——この王国の始祖なのだ。

伝説に語られる僧侶の血統を持つこの国の王族が、勇者召喚の儀式を行える帝国の皇族に並ぶ「魔法使い」であることは有名であり、大陸全土にも広く知られているのである。

ダイアン姫はその美貌ゆえ、数多くの求婚者を集めている人物であるが——諸外国の貴族や王族が彼女を求める理由は、美しさだけではないのだ。

(この世界に残った、数少ない魔法使い……か)

噂でしか知らなかった、唯一無二の存在を見上げ——ダタツツは彼女が背負っているものの重さを、垣間見るのだった。

そして振り子のように何度も頭を下げるルーケンとハンナを見習い、彼は深々と頭を垂れた。

そんな彼を静かに見つめるダイアン姫は——スウツと目を細め、静かな足取りで彼の傍へと歩み寄り。

「……頭をお上げください、旅のお方。お名前を伺っても？」

「……ダタツツ、と申します」

姫の言葉に応じて顔を上げるダタツツは、彼女の蒼い瞳と視線を交わす。

一方、ダイアン姫は片膝を突いているダタツツの姿を、品定めするかのような目で見つめていた。

胸に当てられた拳。垂直に突き立てられた銅の剣。整然とした佇まいの片膝立ち。

そのみずぼらしい旅人とは掛け離れた一面を、彼女は暫し凝視していたのだ。

「ダタツツ様……ですか。この度は帝国兵の横暴からわたくしの至宝を守つて頂き、誠にありがとうございます。頭から石畳に落ちたと伺つておりますが、お怪我の方はいかがでしょうか」

「ええ、これくらいなら全然問題ありません。頑丈さだけには自信がありますから」

「そうですか……。ご無事なようで、本当に何よりです」

「ははっ、ありがとうございます。——しかしダイアン姫。どうしてこちらへ……?」

「それにも、こんな夜更けに……」

「ダ、ダタツツ君!」

そんな彼女に対し、ダタツツは王女がこんな夜更けに尋ねてきた理由を問うていた。その発言を慌てて咎めるルーケンを掌で制し、ダイアン姫はゆつくりと口を開く。

「よいのです。確かに、夜の見回りまで王女のわたくしが務めているというのは、旅のお

方からご覧になれば不自然でしょうし」

「夜の見回り、でありますか……」

「はい。騎士団の方も、日頃から巡回や訓練はされておられるのですが……どうも、帝国軍の駐屯兵と接触するのを避けてばかりいるようで。今彼らが問題を起こした場合、諷められるのはわたくしだけ、という状態なのです」

「噂では、あのアイラックス將軍の御息女もたいそう勇敢なお方であると……」

「……ええ。ヴィクトリアはわたくしの劍の師匠でもありました。今は帝国まで出稽古に赴いていますが、じきにこちらへ帰ってくることでしよう」

遠い場所を見つめるように、ダイアン姫はダタツツから視線を外す。

——つまり。王国の騎士団が萎縮している今、帝国軍の乱暴を抑えることが出来るのは彼女と、ヴィクトリアと呼ばれる女騎士だけなのだ。

ダイアン姫自身もそれを深く承知しているからこそ、夜の見回りから抜けられないのだろう。

「そうだったのですか……それであなた様が、お一人でこんな夜更けまで。——おいたわしや」

「いいえ。わたくしはあくまで、王女という立場にものを言わせているに過ぎません。真に実力で彼らを抑えているのは、実質的にはヴィクトリア一人なのです」

「なんと……」

「そこで……あなた方に今後のことを忠告するべく、今宵こちらへ参ったのです」

「忠告、ですと？」

「はい」

そこで一度言葉を切り——ダイアン姫は薄い桜色の唇を、きゅつと結ぶ。その眼差しは沈痛な色を湛え、この料亭にいる三人を見回していた。

「……この辺りを巡回している帝国兵には、法はおろか人としての矜持すら守らない人間が数多く居ます。昼の件で、あなた方が目を付けられてしまった可能性もあるでしょう」

「……」

「わたくしも乱暴などさせないよう、今以上に目を光らせるつもりですが——あなた方も、どうかお気を付けて。特にダタツツ様は、明確に帝国兵と対峙してしまわれたようですから……」

「——わかりました。ダイアン姫も、どうか無理をなさらないよう……」

「ありがとうございます」

帝国兵の横暴について警告しているダイアン姫の表情は、身を斬られたかのように痛ましい。

自分一人では、守りたいものも守れない。ご安心ください、と言い切ることもできない。気を付けてと、忠告することしかできない。

その悔しさが、彼女の顔色から滲み出ているようだった。

それを察してか、ダタツツは労うように言葉を掛けて頭を下げる。彼の礼を見つめていたダイアン姫は、その言葉を受けてようやく元の凛々しい表情に立ち戻るのだった。

「十日後には、またババルオ様主催の親善試合が行われます。わたくしがそれに勝利した時は——もう一度、ここに立ち寄らせて頂きますね。次は、食客として」

「しよ、食客だなんて滅相もない！ このような場所に姫様が来られなくとも……」

「城の食事は毒味を繰り返しているせいで、いつも冷え切っているんです。その点、こちらの料亭からはいつも温かい食事の香りがして……。特に昼間、巡回している時に鼻腔を擽る肉の匂いがたまらないんです。いけませんか？」

「そして、それは……」

気丈な面持ちに復活したダイアン姫は、跪くルーケンに対して穏やかに微笑み——彼に冷や汗をかかせている。

その姿を横目に見ながら、ダタツツはこつそりとハンナに耳打ちしていた。

（あの、親善試合とは一体……？）

（定期的に、ババルオっていう醜い帝国貴族がダイアン姫の剣技が見たいって、自分の部

下と戦わせてるのよ。毎回、ダイアン姫が快勝してるんだけどね)

(なるほど。やはり、物凄くお強いんですね。ダイアン姫は)

(うん！ 向こうも弱つちいのぼつかりだから、実質的にはダイアン姫のカッコイイところが観れる演武みたいなものよ)

定期的に行われる親善試合。その主催者と思しき男の名を聞き、ダタツツは眉を潜める。

(……とところで、そのババルオとは?)

(戦後、城下町に屋敷を建てて居着いた好色ブサイク貴族よ。なんでも、王国の様子を監視する役割で来てるんだって。一応管理されてる立場だから、ダイアン姫も親善試合は断れないのよ……)

(そうだったんですか……本当に、大変なですね)

(うん。——でも、ダイアン姫にかかればどんな敵も楽勝よ。今までもそうだったんだから！)

溢れんばかりの自信を込めて、ハンナは小声で姫君の勝利を宣言し——ダタツツに向けてウインクする。

その頃にはダイアン姫とルーケンの話にも決着がついており、結局彼女が親善試合の後に料亭まで来客することとなっていた。

「では……わたくしも、そろそろ城に戻ります。あまりに遅いと、父も心配しますから……」

「ええ。おやすみなさいませ、ダイアン姫」

「姫様、おやすみなさいませ！」

「おつ……おやすみなさいませっ！」

踵を返して立ち去っていくダイアン姫。

その背を三人は、膝をついたまま見送るのだった。

しばらく続いていた緊張の一時は、彼女の姿と足音が消えた時——終わりを迎える。

「ぶっ……はああく！ まさかこんな時間に姫様が訪ねてくるなんてなあ……！」

「もう私、心臓が止まるかと思っちゃった！」

「しかしダタツツ君、姫様を前にしてよく物怖じしなかったなあ。だけど、もう少し慎ま

しくしてなきやいかんぞ」

「は……はあ、すみません。どうしても気になって仕方がなかったもので……」

「全く……まあ、この国の現状をよく知らんのなら無理もないか」

「帝国兵を怖がらない上に、ダイアン姫にいきなり質問しちゃうなんて。ダタツツさん、

ホントにただの旅人なの？」

「見ての通り、ただの旅人です」

緊迫感から解き放たれた瞬間、ルーケン達は溜め込んだ息を吐き出す勢いで、互いに言葉を交わし合う。

そんな中、興奮している二人を尻目に、ダタツツはダイアン姫が去った後の扉を静かに見つめていた。

一方、その頃のダイアン姫は。

(ダタツツ様のあの佇まい……それに、あの剣の立て方……。あれは騎士が高位の貴族や王族に接する際に使う、最も丁寧な礼法の一つですわ)

夜道を徘徊する帝国兵達に睨みを利かせながら、王宮への帰路についていた。自分の胸と臀部に向けられる、帝国兵達の劣情の視線には気付かないまま。

(……少なくとも、傭兵稼業で身につくものではありませんね。恐らくは元騎士か、騎士の家系の出身か……)

彼女の白い足が石畳を踏む度に、ダイアン姫の栗色の髪がふわりと揺れる。その艶やかな香りは、風に乗って城下町の街道へと流れていた。

騎士の礼法。その基本形は万国共通であるが、国ごとに細部が異なる場合が多い。騎士の礼法にお国柄が出る、と言ってもいいだろう。

ゆえに最も丁寧で原型に近い礼法を習得している騎士は少なく、今では王族と接する機会を持つ上流騎士くらいしか把握できていないのが現状なのだ。

その「原型に近い礼法」を、ダタツツは完璧にこなしていた。彼の実態を思案するダイアン姫は指先を唇に当て、さらに考え込む。

王宮の目前まで来ても、それは続いていた。

（しかし、我が国にはあの人を除いて、黒髪の騎士などいない……。帝国出身の元騎士だとするなら、この街の駐屯兵を恐れなかったことにも説明が付きませんが……）

門番の敬礼にすら気付かないまま、彼女は王宮の中へと進んでいき——とうとう、国王が眠る寝室前に辿り着く。

就寝前に病床に伏した父の許へ向かうのが、日課になっているのだ。無意識でも、そこに足を運んでしまう程に。

（上流騎士が身分を捨てて……あるいは隠して、なぜこの国に……？ 権威はおろか確かな武器も携えないで、勝者の立場にある人間が、なぜ……？）

その入り口となる扉に手を当てたところで……ダイアン姫は、一旦思考を断ち切る。父と会う最中に余計な考え事をしてはいけけない、という理性が働いたのだ。

（……ただ何にせよヴィクトリアが居ない今、この街に駐屯している帝国側が強引な手段に出ても、わたくし一人では民を守り切ることができない……。せめて味方であつてほしいと、祈る他ありません）

帝国の侵略が原因で母を失った身である彼女にとって、帝国出身の疑いがある人間を

頼るのは、本意ではない。しかし、個人の感情で敵をいたずらに増やすわけにはいかない。今は、その考えの方が強いのだ。

それに、たとえ憎い帝国の人間だったとしても。民を守る一助となつてくれる可能性が、ほんのわずかでも有るのなら、自分はそこに縋るしかないのである。

栄えある帝国騎士の身分を捨てて、敗戦国の王国に寝返るメリットが皆無であるとしても。彼の身の上を、全く知らない状況であるとしても……。

「失礼します……お父様」

「……おお、ダイアンか。聞いたぞ、今日も民のために……よく、働いてくれたようだ、な……ご、ごほつ！」

「あ、あまり力を入れて喋ってはなりません！　ほんの少し、ご挨拶をさせて頂くだけです……！」

「す、すまん……世話をかける」

「いえ……これくらいしか、わたくしには……」

「ダイアン……」

目の前で苦しむ父に……帝国に蹂躪される民がいらない、平和な王国の姿を見せるには。誰であろうと、助けを乞うていくしかないのだ。

父の幸せ。それがダイアン姫が望む、ただ一つの願いなのだから。

（お願い……誰か。誰でもいいから。お父様を……わたくし達を、助けて……！）

……一方。王宮から少し離れた場所にある、豪勢な屋敷では――

「ババルオ様、またしてもダイアン姫が我らに邪魔立てしたようです」

「ほう、またか。随分とまあ、気丈な小娘だな。――だからこそ、堕としがいもあるというものだが」

――二人の醜悪な男が、薄暗い一室の中で会談していた。

ババルオと呼ばれる、肥え太った髭面の男は、帝国製の煌びやかな装束に身を包んでいるが……その装束が泣き出しかねないほどの醜い顔の持ち主でもあった。

鼻は豚のように低く丸く、唇はでっぶりと太く前面に突き出ており、贅肉のあまり首は胴体とほぼ一体化してしまっている。繋がった太眉の下にある細い目は、窓から窺える王宮に向かっていた。

「今頃、ダイアン姫は夜の湯浴みに向かっていているのだろうな。くく、もうじきその肢体を儂が洗ってやるようになるのかと思うと、興奮が収まらんわい」

「ええ……全くですな。して、いかがされますか？　女を引つ掛けようとしては邪魔されてばかりで、兵達も苛立っているようですが」

「敗戦国の小娘とはいえ、れつきとした王族の一人だからな。皇帝陛下がお気に召しているアイラックス將軍の娘もいることだし、今まで簡単に手出しはできなかつた――

が、それも終わりだ」

強大な帝国を相手に五年以上も善戦した名将として、アイラックスの名は帝国にも轟いている。敵ながら見事な手腕であるとして、戦後に皇帝がアイラックスの奮戦を讃えたのは有名な話であった。

そういった背景もあり、属国という形になった王国の人間に対しても、帝国人は敬意を持つて接するように——と、帝国軍上層部からの勧告も行われたのだが……末端の帝国兵には、そんな意識はほとんどないのが実状である。

だが、それでも件の勧告がなければ、王国は帝国兵の略奪が横行する無法地帯となっていただろう。王国が正真正銘の属国となっていたなら、帝国兵達はダイアン姫にすら襲い掛かっていた。

王国の監視を任されている上流貴族であるババル才は、戦後間も無く帝国兵達を統括する立場となり、六年以上に渡りこの屋敷に居座り続けている。

彼が自らその任務に志願し、この城下町に居着いている理由の一つは、ダイアン姫にあった。

「アイラックスの娘がおらぬ今なら、小娘一人を墮とすことなど容易い。儂の妻として、たつぷりと仕込んでやるわい」

「……親善試合の準備は万全。楽しみですなあ、ババル才様」

「親善試合で『不覚を取り』、傷付いた姫君を『不思議な薬』で献身的に治療した儂に、美しき姫は『心を奪われ』めでたく結婚。アイラックスの娘が帰る頃には、儂は新国王となっている。……そしてあの娘も妾として、次代の王族を身籠ることになる」

隠すことなく獣欲を滾らせた瞳で、ババルオは王宮を射抜く。野望を語る彼の膨らんだ口元は、歪に吊り上がっていた。

アイラックスの娘——ヴィクトリアは帝国人を非常に毛嫌いしている。

それは帝国が父の仇である以上、当然のことなのだ。……王国に居座り、敗戦国の街となった城下町を牛耳るババルオに対する嫌悪感、一際強かったのだ。

しかし、その憎しみが込められた視線を浴びせられていたババルオは怒るところか——興奮すらしていた。

この強気な娘を屈服させて、自分の為すがままにすれば、どれほど満たされるか。皇帝さえ賞賛した、王国の誇りであるアイラックスの娘を我が物にすれば、どれほどの征服感が得られるのか。

その期待が、ババルオの衝動をさらに駆り立てていたのだ。

「そうなれば、この国の生殺与奪の全てはババルオ様のもの。もはや、誰にも止められませんか」

「そうとも。だいたい儂は、属国に成り下がった王国如きに気を遣わなくちゃならん今

の状況が、何より気に食わんのだ。何が敬意だ……敗者はどれほど立派に戦おうが、負けたからには敗者に過ぎんのだぞ！」

すると、彼は厭らしい嗤いから一転し——憤怒の形相で机を殴りつけた。その衝撃で、部屋を照らすロウソクの炎が大きく揺れる。

「仰る通りですな。勝者が敗者から何もかも奪い尽くすのは、当然のことでしょうに」
「全くだ！ 数千年、それこそ『魔王』を倒すために『勇者』が召喚された伝説が始まる以前から、長きに渡って帝国はそうして栄えてきたというのに！ 何が敬意だ、何が見事な奮戦だ！」

「ええ、ええ、その通りですとも。そのためにも今回の計画で、ダイアン姫を必ず手中に収めましょうぞ」

「無論だ！ そのためにわざわざ姫君の油断を誘うため、貧弱な傭兵ばかりを充てがって来たのだからな。アンジャルノン、ぬかるなよ」

「承知しております」

その炎による明かりの中に——ババルオとは違う、もう一つの人影が現れる。

ババルオとは桁違いの体格を持つ、大男の影が。

「このアンジャルノン、ババルオ様のため——必ずや、計画を成功させてご覧に入れましょうぞ」

「よし。……成功の暁には、おこぼれに与らせてやろう。好きな方を選ぶがいい」
「それは楽しみですな……」

夜の屋敷に、下卑た男達の嗤いが響き渡る。その悪しき闇を知る者は、誰もいない
……。

第4話 ハンナの恋

生い茂る緑と青空に包まれた草原の中に、一筋の砂利道がある。

帝国と王国を繋ぐ、その長い道程の上を、一台の馬車が悠々と進んでいた。さらにその前後には、馬に跨った騎士達が何人も配置されている。

「やはり、王国の景色はいつ見てもいいものだ。城塞に固められた帝都に居ては、お目に掛かれぬ情景であろう」

「そうですね。戦争により焼け野原となってしまった地域も多くあるそうですが……この辺りは城下町に近いこともあり、戦前の美しさを保っているようですぞ」

「……ああ。焼き払ってしまったのは我々、だがな」

その馬車の中で。

地平線まで広がる広大な草原を、二人の男が見渡している。そのうちの一人は、遅い口髭をなぞりつつ——悔いるように呟いていた。

——元々、大陸統一による世界平和を目指していた帝国は、大陸全土に資源を分配する体制を作るために、豊富な資源が集中している王国と同盟を結ぶことを目的としていた。

が、平和を謳歌していた王国にとって、それは侵略行為でしかなく……事実上の属国とされる事態を危惧した王国は強く反発し、それにより生じた緊張が武力衝突に発展してしまったのだ。

平和のための戦争。王国は、その矛盾の犠牲となったのである。

「……戦争とはそういうものでしょう。勝てば正義。負ければ悪。それだけのことで
す」

「そうだ。だからこそ、我々は強者の側に立つ者として、弱きを助ける名君であらねばならん。……そうでない者が権威を保てないことは、歴史が証明していよう」

「ババルオのことですか」

「ああ。……力による王国の蹂躪など、帝国貴族の風上にも置けぬ男だ。皇帝陛下の教育係だった大臣の息子でなければ、とうに位を剥奪されている愚物よ」

「しかし、バルスレイ将軍が自ら出向かれるとは……」

「……あんな男でも、陛下にとつてはかけがえのない恩師の息子。奴の悪事に気づいているがゆえに苦しめられている陛下をお救いするには、私が直接出向いて引導を渡す他あるまい。そのために、我が帝国軍選りすぐりの精鋭部隊を連れてきたのだからな」

バルスレイ将軍。その名で呼ばれた男の全身は紅の甲冑で嚴重に覆われており、頭部以外には露出している部分など微塵もない。

傷だらけの精悍な顔立ちからは、歴戦の勇士としての貫禄が窺える。

「しかし——アンジャルノンは腕力のみなら、勇者に匹敵すると言われるほどの武人。私も面識はないが、相当の使い手と見ていいだろう。……皮肉な話だが、明日は戦時中より過酷な戦いになるかも知れんな」

「奴はその実力にものを言わせ、多くの女性を言いなりにさせてきた経歴もある男。……ババルオがいなかったとしても、どこかで手を打つ必要はあったでしょう」

「ああ。奴らに王国が蹂躪される前に、お灸を据えねばなるまい。この国を統べる責任を、背負う者として」

窓から入り込む風に、銀色の髪が靡く。その揺らぎに撫でられた彼の瞳は、鋭く研ぎ澄まされていた。

これから始まる、壮絶な戦いを予見しているのだ。決して避けられない、死闘を。

「私が出した勧告を気にも留めず、王国をいたずらに傷つけ陛下を苦しめる。——奴の罪は、果てしなく重いぞ」

「ええ。……しかし、将軍殿が奴の暫定統治まで引き継ぐというのは本当なのですか？ 帝国軍最高司令官の座を、後進に譲ってまで……」

「私も、もう若くはない。王国の資源を得て、帝国の安泰が揺るぎないものとなった今、私にできる役割など高が知れている。己の力で立ち上がっていく国を見守る余生とい

うのも、悪くはあるまい」

草原を見つめる、バルスレイ將軍の鋭い瞳は——地平線の彼方に聳える、王宮の影を
目にした時。

光り輝く聖劍の如く。鋭利に冴え渡り——狙う先に在るものを貫いていた。

(……「ダタツツ」よ。お前が案じていた、この国の未来——今こそ私が切り開いてみせよう)

——その、城下町の運命を変える一団が近づいて来る頃。

ルーケンの料亭は「いつも通り」の激戦に見舞われていた。

「ハンナちゃんあん、ビールおかわり！」

「もー、さつき飲んだばかりでしょ！ 昼から飲み過ぎてちやダメ！」

「おーい、ハンナちゃん！ こっち来て一緒にお茶しない？」

「私仕事なんだってば！」

「へっへへ……ハンナちゃん、相変わらずいいケツして——あだだだだ！」

「お触り禁止ッ！」

その原因の一つである看板娘のハンナは、常連客との日常会話に興じつつ、着実に注文をこなしていく。

長い経験により培われた、その迅速な立ち回りを遠巻きに眺めながら——ダタツツは

皿洗いに奔走していた。

「……いつ見てもすごいですね、彼女」

「ま、元気だけは誰にも負けないって専らの評判だからな。それしか取り柄がない、とも言うがね」

「ルーケンさん聞こえてるッ!」

「うひつ、こえーこえー」

彼の隣で料理しているルーケンはのんびりとした口調で喋る一方、手は全く止めておらず、ハンナのツツコミを受け流しながら猛烈な速さで料理を次々と完成させていた。

大量の注文を的確に消化し、流れるようにご馳走を並べていくルーケン。それを手早く、客が待つテーブルへ運んでいくハンナ。

無駄のない、洗練され尽くした彼らの動きを目の当たりにして、ダタツツは強く息を飲む。そして、自ずと悟るのだった。

——これが、プロフェッショナルの動きなのだ。

「ダタツツさん! ぼけっとしてしないで早く持つてきて!」

「ほらほら! 女の子を待たせてんじやねーぞ新入りウェイター!」

「は、はいただいま!」

ハンナと常連客の声に驚き、我に返るダタツツは大慌てで料理を運んでいく。そんな

彼の姿を、若い男性客達は嫉妬心を滲ませた表情で見つめていた。

「おい、なんだよアイツ。あんな奴ここで働いてたか？」

「十日くらい前に入ってきた新人だよ。旅人だったらしいけど、帝国兵の連中からハンナちゃんを庇った縁で就職したって話だぜ」

「けつ、庇うだけなら誰にでも出来るっつーの。ちよつと顔がいいからって、調子こいてハンナちゃんに近寄りやがって」

そんな彼らの険しい表情に気づかぬまま、ダタツツはぎこちない動きで食事を運んでいる。一方、歳を重ねた常連客は若い男性客達とは違い、大らかに笑いながらダタツツを見守っていた。

「ハツハツハ！ 頼りねえなあ兄ちゃん！ もつとキリキリ働かなくちやダメだぞ！」

「は、は、はいっ！」

「おーいあんちゃん、ビールおかわりまだなのかい!？」

「す、すみません！ すぐに——」

「——だかああらあ！ おじさんはもう飲んじやダメだつてば！ ダタツツさんを振り回すのはやめてっ！」

「うひよつ、恋する乙女は大変だねえ。彼氏のために毎日大わらわ！」

「うるさ〜い！」

常連客達が新人のダタツツをおちよくり、それを注意するハンナをからかう。そんな光景を、ルーケンが微笑ましげに見つめる。

それが——この数日間、料亭で絶え間無く繰り返されるやり取りであった。

加えてハンナ自身が、怒りながらもダタツツへの好意を否定しなかつた部分も、常連客の煽りに燃料をくべる結果を招いている。そうなつてしまえば、弄られないはずがないだろうに。

「……おい新入りい！ こつちの皿下げてけよ！」

「はいっ！ た、ただいま！」

——そして。そんな光景を見せつけられて、苛立ちを募らせたのか。

若い男性客達のうちの一人が、声を荒げてダタツツを指名する。その声を背中に浴びた彼は驚くように飛び跳ねると、緊張した表情で若者達のテーブルに向かった。

「で、ではお下げしますね……」

「なにチンタラしてんだ、さっさとしろよ！」

「は、はい！」

ダタツツはたどたどしい手つきではありながらも、一つずつ丁寧に皿を重ねていく。しかし若者達は、そのゆつくりとした動作に怒りをぶつけていた。

それを受けて、ダタツツは「チンタラしている」ことだけが理由とは思えない苛立ち

に戸惑いながらも、せつせと皿を回収してテーブルを離れようとする。

——が。

「ふいつちつ!?!」

突然、ダタツツはつんのめるように前に倒れ、顔面から床に激突してしまった。さらに、その後頭部に重ねた皿が墜落してしまったのである。

そこを中心に、重なった皿が破片となって飛び散ってしまうのだった。

「ダタツツさん!?! 大丈夫っ!?!」

「お、おいおい兄ちゃん大丈夫かよっ! 怪我しちまったんじゃねえか!?!」

その瞬間を目撃したハンナは大慌てで持ち場から離れ、ダタツツの側へと駆け寄っていく。彼女に放置された常連客も、自分の注文より倒れたダタツツの方を気にかけていた。

「……おーおー、困ったもんだ。仕事がトロい上に店の皿まで割っちゃまって。こんな奴雇ってたら、この店潰れちゃうんじゃないかねーの」

「ははは、言ってる言ってる」

「おいあんた、これ以上迷惑かけないうちに辞めといたら? ハンナちゃんが可哀想だと思わないわけ?」

「……………」

一方、若者達は冷やかすような口調でダタツツをなじり、彼を見下ろしていた。彼らの嫌らしい視線は、徐々に倒れたダタツツから——彼の側に腰を下ろしたハンナの胸元へと向かっていく。

「おいおめーら！ 兄ちゃんに対して随分な言い草じゃねーか」
「本当のことだろ！ だいたい、こんな使えない奴のせいでこつちは怪我しそうになつたんだぜ！」

若者達の言葉遣いに、常連客達は眉を吊り上げて反発する。そんな彼らに対し、若者達は悪びれる様子もなくさらにダタツツを罵倒した。

ハンナも無言で彼らを睨みつけたが、ダタツツが店の皿を割ってしまったことも仕事の能率が芳しくないのも事実であるため、何も言えずにいた。

——しかし彼女は、ダタツツが転倒した原因が若者達にあることには気づいていない。

彼らはダタツツが背を向けた瞬間、後ろから彼の足を引つ掛けていたのだ。ハンナからは見えないように、彼女が目を離れた瞬間を突いて。

目撃者がいなければ、罪は立証できない。皿を割った原因が若者達にあると、証明する術はない。

ハンナは直感で彼らの仕業であると勘付いてはいたが、その証拠がないことに唇を噛

み締めていた。

(……とにかく、ダタツツさんの方を見なきゃ)

犯人をとつちめることは出来なくても。せめて、ダタツツの怪我だけは処置しなくてはならない。

そう思い立った彼女は、彼の容体を見ようと、皿が直撃した黒い髪に手を伸ばす。

——すると。

「もも、申し訳ありませんお客様！　お怪我はありませんでしたか!？」

「きゃああああ!？」

「どわああああ!？」

大量の皿の破片に当てられ、切り傷だらけになったダタツツが——頭から血を流したまま、勢いよく立ち上がったのである。

その姿に仰天したハンナと若者達は、驚きのあまりひっくり返ってしまっているのであった。

「な、ななっ……!？」

「本当に申し訳ありません！　ぼんやりしてたみたいで……。すぐに掃除しますから!？」

「ダ、ダダ、ダタツツさん！　それより頭！　血!？」

「あ、すみませんハンナさん！ 大事な皿を……」

「そんなの別にいいから！ 怪我してるんだから動いちやダメだよお！」

「ジブンなら心配いりません、それより破片を片付けなきゃ、皆さんが怪我をしまします！」

「怪我してるのはダタツツさんでしょっ！」

自分の怪我を全く意に介さず、せつせと皿の破片を拾い始めるダタツツ。そんな彼の姿に、ハンナは困惑して声を上げていた。

その一方で、足を引つ掛けた自分達に恨み言の一つも言わないダタツツに、若者達は言い知れぬ不気味さを覚えていた。

「け、けっ！ てめえみたいな木偶の坊、掃除を済ませたらさっさと消えちまえ！ 目障りなんだよ！」

「そうそう！ あんたみたいな女目当てのゲス野郎には、靴磨きがお似合いさ」

「全くだぜ、お前がいると思うと飯が不味くなるんだよっ！ 何よりハンナちゃんに迷惑だろうがっ！」

「……あ、あなた達いい加減にっ——！」

その不快感が、さらに彼らを迫害へと駆り立てていた。口々にダタツツに罵声を浴びせる若者達に、ハンナがついに逆上する——直前。

「ほう、お前達には靴磨きがお似合いなのか？」

「……!?」

地獄の底から唸るような声が、辺り一带に響き渡る。

本能に恐怖を叩き込むような、その声色に——若者達は震え上がり、咄嗟に振り返った。

そこには鬼——ならぬ、ルーケンが立ちはだかっている。

……そう。彼はしつかりと若者達の犯行を見ていたのだ。

彼らがハンナの気を引くために、ダタツツに恥をかかせようとしていることに、早くから感づいていたのである。

若者達も、ハンナに見られないようにすることに気を配り過ぎたせいで——自分達が彼女に近付けない一番の原因だったはずのルーケンの存在を、失念してしまっていた。

結果——彼らは、一番バレてはならなかった相手に、犯行の一部始終を見られてしまったのである。

「さて……奥でたつぷりと聞かせてもらおうか。お前達がどんな靴を磨きたいのかを、な」

「ひ、ひい、い、い……!」

逃れられない地獄を予感し、若者達は顔を蒼白にして震え上がる。その内の一人は

この空気から逃れようと、テーブルを蹴り倒して店の外へと走り出すが――

「待ちなさいっ!」

「あぎやっ!」

ハンナに後頭部をフライパンで叩かれ。

「逃がさねーぞ若造!」

「ぐえっ!」

常連客達のヒップドロップを浴び、敢え無く御用となつてしまふのだった。

その流れを目の当たりにして、残つた若者達はさらに震え上がる。そんな彼らの様子に気づく気配もなく、ダタツツは未だに破片を拾い続けていた……。

「お、終わった……! 皆さん、お騒がせしてしまい申し訳ありませんでした! 破片は全部回収しましたので、ご安心くだ――あれ? どうされたんですかお客様?」

……その作業が終わる頃には、既に若者達がげっそりと痩せ細るまで絞られていたことは、言うまでもない。

ルーケンに締め上げられた若者達は、泣く泣く店を去り――再び料亭に平穩が戻るのだった。

そして、その夜……頭に包帯を巻いたダタツツが、散らかった床を掃除していた時のこと。

「ね、ダタツツさん。頭の怪我、どう?」

「あつ、ハンナさんお疲れ様です。おかげさまで、随分と良くなりましたよ。ルーケンさんは?」

「ルーケンさんならゴミ捨てに行っちゃったよ。それにしても、大したことなくて良かったあ……」

「ええ、ハンナさんのおかげですよ。ありがとうございます」

「だけど、あんまり無理しちゃダメよ。あとは私が片付けとくから、ダタツツさんはもう休んでて」

「いえ、ジブンは全然平気ですから。こうしてお世話になっていることですし、もう少し手伝わせてください」

「……」

厨房の皿洗いを終えたハンナが、不安げな面持ちでダタツツの側に歩み寄っていた。彼女の手当てを受けた彼は、その心配を他所に笑顔を浮かべ、働き続けている。

「……私が休めって言ったなら休みなさい! 上司としての命令ですっ!」

「わっ!?!」

そんな彼に業を煮やしたハンナは、爪先立ちになってダタツツの両肩を掴むと、無理矢理に椅子へ座らせてしまった。彼女の行動に抵抗する間も無く、ダタツツの腰は最寄

の椅子に沈み込んでしまう。

間髪容れず、ハンナは彼から箒をひったくり、掃除を再開していく。彼女の迅速かつ強引な手段に翻弄されるダタツツは、啞然とした表情で彼女の背中を見つめていた。

「あ、あの……」

「私がいいって言うまで席は立たないこと！ いいわね！」

「は、はいー！」

「……よう」

さらに振り向きざまに釘を刺され、彼はその椅子から動けなくなってしまう。そんな彼の様子を一瞥した彼女は、深く頷くと箒がけの作業へと戻っていく。

そうしてダタツツの仕事が強奪した彼女は、手際よく隙間の埃や汚れを掃き出していくのだった。

やがてダタツツよりも遥かに速いペースで掃除を済ませた彼女は、息つく暇もなくコーヒーを淹れて戻ってきた。

二つのカップを手早くテーブルに置き、ダタツツの隣の椅子に腰を掛け——ようやくガスを抜くように息を吐いたのである。

「ふう〜……。終わった終わった」

「……ホントに手慣れているんですね。お見事でした」

「べ、別にこんなの特別なことじゃないわよ。ダタツツさんが大袈裟過ぎるの」

「だとしても、ありがたいのは本当です。それにコーヒーまで淹れて頂けて……」

「私が飲みたかったから淹れただけよ」

ハンナは憑き物が取れたような表情でカップを手に取り、穏やかにコーヒーを口にす。その様子を見届けてから、彼女に続くようにダタツツもカップへ手を伸ばしていた。

ただ、ハンナのように静かに飲むことは出来ておらず、度々ズルズルと音を立てては眉を顰めている。

そうやって飲み方を試行錯誤している彼の横顔を、彼女は苦笑いを浮かべて見守っていた。

「……んっ、んん？」

「ふふっ、ダタツツさんたらホントに不器用なんだから」

「す、すみません。なるべく早く直しますから」

「大丈夫なのかな？」

「大丈夫ですつてば！」

頬杖をついて微笑むハンナに対して、ダタツツは頬を赤くして反論する。その姿を、彼女は懐かしむように見つめていた。

「……ルーケンさんが言つてた通り。本当によく似てるのね、お兄ちゃんに」

「お兄ちゃん？」

「うん。ほら、前にルーケンさんが話してたでしょ。ダタツツさんと同い年の息子がいた——つて」

「……！」

ハンナが何を思つて自分を見つめていたのか。それを悟つたダタツツは、唇をきつく噛みしめる。

その様子を見遣る彼女は、少しだけ寂しげな表情を滲ませていた。

「……大丈夫。そんな顔しないで。さすがに六年も経つたんだもん、そこまでメソメソしてないよ」

「——そうでしょうか」

「うん。お兄ちゃんもきつと、生きて帰つてくれてたら……ダタツツさんみたいに助けようとしてくれたと思うの。不器用なところもお人好しなところも、本当にそっくりだから。——まあ、お兄ちゃんほど悪戯好きじゃなさそうだけど？」

「あ、あはは……」

だが、重い空気にさせないためか、彼女は一転してからかうように笑みを浮かべる。それに釣られてダタツツも、苦笑いするようになっていた。

——その中で彼は確かに、実感していた。これが、ハンナという少女の持つ優しさなのだ。

「だから……何があつても、ダタツツさんは死なないこと。いいわね？」

「……はい、わかりました」

自分の胸を小突く、彼女の小さな拳。その温もりが、ダタツツの胸中へと深く染み付いていく。

「それでよし。じゃ、明日は店もお休みだし、一緒にダイアン姫の親善試合見に行こうよ。景気付けに！」

「ええ。ジブンも一度、見てみたいと思つてたんです」

「でしよでしよ！　じゃあ、今日は早く寝ないとね。大事な日なんだから、寝坊しちやダメよー！」

「はは、了解しました」

ハンナは軽くウインクすると、飲み干されたコーヒーカーップを手にテーブルを立ち去つていく。その背中を見つめるダタツツの目は、彼女自身ではなく——その先にある何かを、見据えているようだった。

——ルーケンが、窓の外から覗いていたのである。ニヤニヤと、嫌らしく口元を吊り上げて。

「お熱いねえ、相変わらず」

「んなっ!? ち、ちっがくう!」

それに気づいたハンナが、お決まりのリアクションを見せている頃。ダタツツはふと、明日の親善試合のことを思案していた。

思い浮かべているのは——主催者の名。

(帝国貴族のババルオ……か)

心の中で、その名を呟く彼の瞳は——どのような剣よりも鋭く、研ぎ澄まされている。

第5話 姫騎士の追憶

四角い窓の形に切り抜かれた光が、一室に深く差し込んでいた。その中に立つダイヤン姫の手には、陽を浴びて艶やかに輝く剣が握られていた。

莊嚴に彩られたその柄を見つめる彼女の瞳は、この先に待ち受ける戦いを前に、刀身に劣らぬ鋭さを讃えている。

(勝てるかどうかは……わからない)

だが、その胸中には言い知れぬ不安の色も滲んでいた。アイラックス將軍の敗死を知らされる直前の時のような——言葉にならない、恐怖が。

(それでも、わたくしは……)

しかし、彼女に不戦敗という選択肢はない。根拠のない恐れに吞まれてはならないと、彼女の理性は今も闘い続けている。

そして艶やかな光沢を放つ鞘に、直刃を納めた彼女は腰掛けていたベッドから立ち上がり——窓の外に窺える青空を見つめた。

件の親善試合は今日の正午。

これ以上帝国に屈してはならない、という誇り以上の理由を背負い、彼女は自室を後

にしていく。

絶対に負けられない理由が、彼女にはあるのだ。

——三ヶ月前。ヴィクトリアが帝国に旅立ち、僅かばかりの時間が過ぎていた頃。

彼女の教えに則り、自ら剣の稽古に励み続けていたダイアン姫の耳には、ある噂が届いていた。

城下町に駐在している帝国貴族のババルオが、町の若い娘達を権力で囲い込み、慰み者にしてている。さらに、その手先である帝国兵達も、街に繰り出しては町民を苦しめ続けていく……と。

無闇に剣を振るつては己を傷つけるのみ。滅多なことで、王女の自分が剣を取つてはならない。その教えを、ダイアン姫は頑なに守り続けてきた。

無鉄砲な行為をしては、ヴィクトリアにも父にも心配をかけてしまう——それだけは、理解している「つもり」だったから。

しかし、生来のお転婆さと正義感の強さに裏打ちされた、彼女の気性は……眼前の現実に目を背けることを許さなかった。

ダイアン姫は、萎縮した王国騎士団に代わり、剣を取ることを選んだのだ。

「そこまでは、あなた達！」

町娘の手を握り、路地裏へ連れ込もうとする帝国兵の男達。その鎧に固められた背中

に、姫騎士の怒号が突き刺さる。

「なんだあ、この嬢ちゃん。そんなエロいカッコして、誘ってん……の……ッ?!」
「たあああッ!」

既に町娘は帝国兵達に服を破かれ、あられもない姿にさせられている。その様を目撃し、容疑を掛ける必要すらないと見たのだろう。

電光石火の速さで間合いへ踏み込んだ彼女は、抜き切った剣を上段に振り上げ——瞬く間に帝国兵の兜を叩き割るのだった。

「が、あ……!」

闘いに躊躇は無用。一瞬で決めねば、力で押し負ける。そのヴィクトリアの指導に準じた速攻を浴び、帝国兵は膝から崩れ落ちていく。襲われていた町娘は、その瞬間を呆然とした表情で見つめていた。

頭そのものは無事であったが、兜を割られた衝撃に脳を揺さぶられては、もう立つてはいられない。その一撃が生む衝撃音を耳にした他の帝国兵達は、彼女の強さをその時になつてようやく理解するのだった。

「この女ッ……!」

「いい気になりやがってッ!」

それを悟り、微かな間を置いて帝国兵達の脳裏を過つたのは、戦意。自分達を害する

敵を排除しようという、生物としてごく当たり前の感情だった。

その本能の赴くままに、帝国兵達は剣を抜いて姫騎士に襲い掛かっていく。一对多数の戦いは心得ていない彼女は、冷や汗を頬に伝わせ——柄を握りしめた。

(怖い……！——けど、わたくしがやるしか！)

精一杯の勇気を振るうため——そして、その奥底から悲鳴を上げる、恐怖心を封じるために。

しかし、帝国兵達とダイアン姫の距離が詰まる瞬間。

「よさぬか無礼者共！」

「……!?!」

戦場になりかけていた路地に、鶴の一声が上がるのだった。

双方が視線を向けた先に立っていた、肥え太った醜男と——その背後に控えている巨漢。その姿を目の当たりにした帝国兵達は、顔面から一切の血の気を失い、即座に膝を突く。

決して逆らってはならない、絶対の存在を前にした人間の対応であった。

「もも、申し訳ありませんババル才様！」

「こ、この小娘がいきなり……!」

「貴様ら、このお方をどなたと心得る！——この王国の由緒正しき血統を継いでおられる、

ダイアン姫様であるぞ！」

「んなあ……っ!? ひ、姫つて……!」

その絶対の存在——ババルオにより、ようやく姫騎士の正体を知った帝国兵達は、驚愕のあまり目を剥くと大慌てで彼女に膝を突くのだった。

「た、たた……大変ご無礼を……!」

「……」

必死に頭を床にすり付け、一転して許しを乞う帝国兵達。そんな彼らの様子を冷やかに見つめるダイアン姫は、その視線を彼らの上役であるババルオへ注ぐ。

その視線を浴びてなお、ババルオは焦りを見せることなく、恭しく頭を垂れていた。後方に控えていた巨漢——アンジヤルノンも同様の対応を見せている。

「……私の配下が大変失礼致しました。こうしてお会いになるのは初めてになりますな、ダイアン姫」

「——敗戦国になろうとも、民が私の宝であることには変わりありません。今後もこのようなことばかりが続くのであれば、わたくしもこの剣を振るわざるを得ませんよ」

「おお……なんと頼もしい。帝国軍の誇りを忘れた、猿のような兵ばかりで私も手を焼いていたところなのです。そちらのお嬢様のような美女を前にすると、いつもこうなのです」

襲われていた町娘の肩に、アンジャルノンがそっと毛布をかける。その感触を経て、ようやく自身に迫る危機が去ったのだと実感した彼女は、肩を震わせ涙を流していた。

その様を眺めながら、ババルオは大仰に手を広げ、ダイアン姫を褒め称えていた。

「どうしたものかと思っていたのですが……あのヴィクトリア嬢の他にも、このようなお方がいらしたとは。今後、このようなことがないよう指導は徹底するつもりですが——万一の時は、遠慮は無用です。私としても、この美しい王国の大地が涙に濡れるのは忍びない」

「ひ、ひい……い……」

「……」

この帝国兵達に次はない。王女の判断で斬つてよし。そう言い切られた本人達は、己が置かれた状況に震え上がるのだった。

だが、その言葉に真摯さなど欠片もないことを、ダイアン姫は知っている。王国に涙を流させているのは、他ならぬ——この男なのだということ。

ヴィクトリアから聞かされていたババルオの醜聞。その話に違わぬ噂。そして、今日の当たりにした、ババルオ本人の下卑た眼差し。

全てが、ダイアン姫の胸中に訴えているのだ。戦争に負けても、勇者に負けても、大切な人を失つても——この男にだけは、屈してはならないと。

「しかし……我が帝国の兵士を、こうも完膚なきまでに打ち倒してしまわれるとは。ダイアン姫様もヴィクトリア嬢に劣らぬ剣技の持ち主のようですな。我が帝国の兵士達が習得している帝国式闘剣術ていこくしきとうけんじゆつなど、足元にも及ばぬ様子」

「……ありがとうございます」

「いやはや、本当に素晴らしい。是非とも、その洗練された貴方様の剣を拝見したいものですな。先程は現場に到着したばかりで、見逃してしまいましたし」

「……」

齒の浮くようなババルオの台詞に、ダイアン姫は眉を顰める。そんな彼女の反応に目もくれず、ババルオは話を続けた。

「そこで——いかがでしょう。ダイアン姫様の剣腕を披露して頂く代わりに、私が王国に干渉する範囲を狭めるというのは？」

「……!？」

その時に飛び出てきた話に、まともに取り合うつもりはなかったダイアン姫が、初めて目を剥いた。そして、彼女の反応を見逃さなかったババルオの口元が——獲物を捉えた獣の如く、歪に吊り上がる。

王国を監視するババルオが、城下町の支配から手を引く。それはダイアン姫をはじめとする王国側にとっては願っても無い話だ。

終戦協定では、帝国の監視つきである代わりに王族の政権が保障される形になっているが、実質的には監視役のババルオによる恐怖政治が敷かれていると言っている。

ババルオの私兵である帝国兵達に王国騎士団や町民が怯えているのが、その証だ。それを率いているババルオ本人が手を引くことは、王国に真の平和が戻ることを意味している。

だが、ダイアン姫の剣術を見たいというババルオの要求とはどう考えても釣り合わない。必ず、何らかの「裏」がある。

「貴方様は国の自由を勝ち取れる。私は高貴な剣を拝見出来る。悪い話ではないでしょう」

「……」

それでも、その話はダイアン姫の関心を強く引きつけていた。罨であると頭でわかっ
ていても、挑まずにはいられない。

そう思わせることが狙いだとしても……それ以外に、王国が苦境から抜け出す道があるとは思えない。

そんな逡巡が、彼女の脳裏を支配する瞬間。

「それに。貴方様の勇姿を……ご覧になれば……お父上もさぞお喜びになるでしょう」

「……ッ！」

最後に囁かれた悪魔の声が、彼女に決断を迫るのだった。

(ヴィクトリアは、きつと反対する。罨に違いないって。わたくしだって、それはわかっている。でも、わたくしはそれでも……！)

帝国の支配下に置かれ、敵兵の力に怯える国民。その姿に心を痛め、憔悴していく父。そんな光景に苛まれてきた六年間を払拭できる唯一の方法が、目の前にある。

「……わかりました。わたくしの拙い剣でよければ、お見せしましょう」

「貴方様ならば、そう仰ると信じておりました。貴方様が戦う度に、王国に自由が戻っていく——実に素晴らしい、愛国心ですな」

戦う理由は、それで十分だった。

かくして彼女は、帝国による王国の支配を狭めるため、ババルオが主催する親善試合に参加することになったのである。

それから三ヶ月。ダイアン姫はババルオが差し向ける傭兵達と戦い、徐々に彼の支配から城下町を解放していくのだった。

三ヶ月前までババルオの私兵が闊歩していた街道では、争いに生きない人々の営みが平穏に築かれつつある。未だに帝国兵達の狼藉が続いている通りもあるが、それでも少しずつ、この町はかつての平和を取り戻していた。

そして、今日。

この試合に勝ちさえすれば、いよいよ王宮付近の地域がババルオの監視から解放される。そうなれば、萎縮している王国騎士団も勢いを取り戻せるだろう。

あと一勝。あと一勝で、この国に平和が戻る。どれほどその考えが甘かったとしても、今の彼女にはそれに縋る以外には手が無いのだ。

——たとえば、それが。ヴィクトリアが不在の間に自分を籠絡し、王国を支配下に置こうとするババルオの謀略だったとしても。

もはやダイアン姫に、選択肢などないのである。

彼女が自分の勝利しか信じない性格であつたならば、今この瞬間くらいは幸せだっただろう。しかし、そこまで彼女は愚かでもない。

薄々、勘付いているのだ。この戦いの先にある、非情の結末を。

(何が剣腕の披露……い……こんな扱い、奴隷も同然ですわ……い……)

何もかも投げ出して、逃げ出したくなるような結末を。

それでも、彼女は進まねばならない。

国民のため。自分の身を守るようにと、剣技を授けてくれたヴィクトリアのため。そして、最後の肉親である父のため。

勝てない勝負だとしても、逃げられない理由があるのだから。

——だから、せめて。

誰にも聞かれることのない、王宮の廊下の中で。継るように、壁にもたれて。「……ひ、ひぐっ……うっ……！」

人知れず、涙を流すのだ。

試合の場でだけは、泣かないように。

「誰か、誰でもいいから、助けてっ……！」

あるはずのない助けを、求めて。

第6話 小さな騎士ローク

「ほら、ダタツツさんモタモタしない！」

「ちよちよ、ちよつと待ってください！」

「ハツハハ、だらしないぞダタツツ君！」

青き空が晴れ渡るこの日。店を休みにして町へ繰り出した三人は、親善試合が開かれるババル才邸へ向かっていた。

ダイアン姫の勇姿を観るべく、意気揚々と店を飛び出していくハンナ。そんな彼女に手を引かれ、慌てて駆け出すダタツツ。その背を突き飛ばすように押し、豪快に笑うルーケン。三者三様の動きで店を後にする彼らを、道行く人々は微笑ましく見送っていた。

「……それにしてもダタツツさんの剣と盾、ホントにボロボロね。買い換えはないの？」

「い、いやあ。その日暮らしの毎日で、新調する余裕もなくて……」

「しよーがないんだから。じゃあ、試合が終わったらマシなモノに換えましょうよ。大分給料も溜まったでしょ」

「いえいえ、ジブンにはこれくらいで十分なんですよ」

その道中。

ハンナはダタツツの腰に提げられた銅の剣と木の盾を見遣り、ため息をついていた。買い換えを勧める彼女に対し、ダタツツ本人は苦笑いを浮かべて首を振る。

「……せつかくの男前なのに」

「ジブンにはもつたいたい台詞ですよ」

「き、聞こえてた!？」

「わりとはつきり」

「わ、忘れて! 今すぐ!」

ダタツツの済ました対応に頬を赤らめ、ハンナは照れ隠しに拳を振り上げる。そこからポカポカと繰り出されるパンチを、ダタツツは穏やかに胸で受け止めていた。

端から見れば、付き合い始めて間もない恋人同士にしか見えないやり取りである。そんな彼らを後ろから見つめながら、ルーケンは吹き出しそうになる笑いを懸命に堪えていた。

「……ん?」

ふと、ダタツツが苦笑いを浮かべ、そんな彼へと視線を移した時。

笑いを噛み殺していたルーケンの、さらに奥で——人通りに紛れて身を隠し、こちらを覗き込んでいる子供の姿が窺えた。

年齢はおよそ十三、四歳。サファイアのように蒼く、短く切り揃えられた髪を持つその子供は、ブラウンの瞳でこちらを射抜くように見つめている。

(あの子は……)

だが、それよりもダタツツの目を引く特徴があった。

騎士団の正規団員の証である、青い制服。それを身に付けた小さな身体を守る、鉄製の甲冑。

王国騎士団のものと同じ形状で造られた、その小柄な鎧は——本物と寸分違わぬ輝きを放っていたのである。普通の子供が持つような、おもちゃなどではない。

帝国兵の兜と対を成すかのように額から伸びる、鉄兜の一角も……確かな力強さを示しているようだった。

「ダタツツさん？ あ……」

異質な存在に目を向けていたダタツツの視線を、ハンナが追う。そして、振り返って子供に気づいた彼女は、一瞬だけ憂いを帯びた表情を浮かべた。

「どうした？」

だが、二人の反応を訝しむルーケンが振り向いた頃には、例の子供は既にその姿を消していた。

何事だと首を傾げる彼を尻目に、ダタツツはハンナに問い掛ける。

「ハンナさん、あの子は……」

「……ローク君っていう、王国騎士団の見習いよ」

「騎士団の見習いって……。見たところ、十五歳にも満たないのに」

「お父さんが王国騎士団の団長でね。アイラックス將軍の片腕だったお父さんが亡くなった後、騎士団に引き取られたの。戦後に産まれてすぐに、お母さんも病気で失って、身寄りもなかったから……」

「そうだったのですか……」

ロークという子供を語るハンナの顔色は暗い。苦境に立たされ続けてきた幼子への憂いが、その表情から滲み出ている。

「お兄ちゃんを殺して、アイラックス將軍を殺して、団長を殺してローク君を苦しめて……。帝国勇者は、一体何の為に皆を……」

「……」

「あつ……ご、ごめん。ダタツツさんにこんなこと言っても、しょうがないよね」

「……いえ、別に。それにしても、あのローク君——なぜこちらを見ていたのでしょうか」

「きつと、帝国兵に立ち向かったダタツツさんを一目見たかったんじゃないかな。ダタツツさん、結構町じゃ噂なのよ？」

「買ひ被りにもほどがありますよ。結局、勝負にすらならなかったんですから」

「強い弱いの話じゃないよ。勇気を出して戦ったことが凄いんだから。きつと、ローク君もそう思ってるんだよ。男の子って、そういうのが大好きだしね」

自身の行動を讃えるハンナに対し、苦笑を浮かべるダタツツは——かつてロークが潜んでいた人通りの方を一瞥し、唇を噛み締めていた。

亡き父の誇りだったはずの王国騎士団が萎縮している中で、恐れを知らずに帝国兵に抗った旅人に対し——騎士団長の忘れ形見は、何を思ったのか。

それを知る術は、彼にはない。

（何の為に、か……）

ただ、ロークという幼子に課せられた運命が残酷なものだったということだけは、確かだった。

——そして、昼下がりの時刻が近づくと。

ババルオ邸には姫君の勇姿を求める民衆が、群れを成して集まっていた。

ダタツツはダイアン姫の名を叫ぶ町民達の勢いに圧倒され、息を飲む。その隣では、ハンナが得意げな笑みを浮かべていた。

「どう？　ちよつと驚いたでしょ」

「……ホントにダイアン姫の活躍がメインになってるんですね。人気を考えたら当然な

んでしようけど……」

「ハハ、姫様が勝った時の熱狂ぶりはこんなもんじゃないぞ」

近くに立っていても、ルーケンやハンナの声が霞んでしまうほどの歓声。その凄まじさを前に、ダタツツはたじろぐように周囲を見渡している。

「キヤーツ！　姫様あーツ！」

「姫様あ〜！」

「王国万歳、姫様万歳！」

中には、王国の国旗を振ってダイアン姫を讃える観客もいた。そんな彼らの眼前に——とうとう、その熱狂の源泉である張本人が現れた。

新緑の軽鎧を纏う、一輪の華。

風に靡く、ブロンドの髪。

その姿を民衆が認める瞬間、観衆の興奮はさらに激しく、大きく膨れ上がる。

「ひ、ひめさまっ！」

すると——溢れんばかりの、その熱狂の波に流されるように。

町に住む幼い少女が、色とりどりの花々で造られた花飾りを持って姫騎士の前に現れた。どうやら、ダイアン姫の応援のために持参してきたらしい。

「あ、あの……これ……！」

「——ありがとう。あなたのためにも、必ず勝つてみせますわ」

「……はいっ！」

たどたどしい彼女の様子に笑みを浮かべ——ダイアン姫はその花飾りを受け取り、鎧の中にしまい込む。この戦いで、傷物にしないために。

一方、丹精込めて作った一作が王女の手に届いたことに、少女は弾けるように喜んでいる。……その笑顔は、姫騎士に戦場へ踏み込む勇気を与えるのだった。

「……はッ！」

短く氣勢を張り上げ、軽やかに跳び上がる姫君。

彼女のしなやかな身体が、屋敷前に造られた闘技舞台の上に舞い降り——瞬く間に、王国の紋章が描かれた盾から、煌びやかな直剣が引き抜かれるのだった。

その切っ先が太陽の光を浴び、煌煌と輝く。彼女の一举一動に注目していた民衆は、その剣が纏う凛々しさに絶対の勝利を期待するのだった。

「ダイアン姫えーッ！」

「姫様あーッ！ いつも以上に凛々しいお姿ですぞーッ！」

ハンナとルーケンもその例に漏れず、無我夢中でダイアン姫にエールを送っている。ダイアン姫自身も、それに応えるように華やかな笑みを浮かべていた。

「……」

——だが。

その中でただ一人、ダタツツだけは。

(彼女は強い。観衆の勢いもある。だけど……)

場の流れに馴染まない、神妙な面持ちを浮かべていた。その眼差しは、ダイアン姫の表情へと向かっている。

恐れと涙を覆い隠し、覚悟という石膏で全てを塗り固めた、彼女の表情へと。

だが、彼女自身は気づいてはいない。自身の胸中に渦巻く感情が、観衆の一人に看破されていることに。

「おおお……！　なんと気高く、凛々しいお姿！　何度拝見しても素晴らしい限りでありますなあ！」

「……ババルオ様」

闘技舞台を見下ろせるバルコニーから、姫騎士の勇姿を讃えるババルオ。頭上に立つ諸悪の根源に向け、ダイアン姫は警戒した視線を送る。

「此の度も是非、その麗しき剣技を拝見したいものです」

「相手がまだ来られていないようですが」

「……申し訳ありません。少々、準備に時間の掛かる男でして。しかし、そろそろそれも終わる頃でしょう」

だが、ババルオにそれを気にしている様子はない。ニヤニヤと厭らしい笑みを浮かべつつ、恭しく頭を下げるのみだった。

その様子と物言いを訝しむダイアン姫は、不穏な空気を肌で感じ取り、眉を顰める。だが、いくら思索したところで、今すぐ答えが出るわけではない。気にしたところで、仕方ないのか——彼女が、そう判断しかけた時。

「……ッ!?!」

彼女の視界が、一瞬だけ揺らぐ。

ほんの僅か。意識して気付けるか気付けないか。その程度の小さな揺れを、彼女は敏感に感じていた。

（——い、ま、のは）

揺れていたのは——地面。正しくは、闘技舞台。

それが意味するものを頭で考えるより速く、彼女は後ろを振り返り……刹那。

「——っ!?!」

「さすがはダイアン姫。優れた感性をお持ちのようだ」

先程とは比にならない振動に、彼女の警戒心が最高潮に緊張する。

その地響きの震源——人間のものとは思えぬほどに大きな足が、闘技舞台の床に踏み込まれる瞬間。足元を通してダイアン姫の全身に、さらに強烈な衝撃が突き刺さるの

だった。

その振動を浴びた彼女が、その巨大な足から上を見上げた先には——全身を赤い鎧に包み込み、人間の身長並みの直径を持つ鉄球で武装した、色黒の大男が立ちはだかつていた。

この男。常にババルオに付き従っていたこの男を、ダイアン姫は知っている。自分を邪な眼差しで見下ろしている、この男を。

「アンジャルノン、殿……」

「私を覚えて下さったとは、光栄の極みでございますな姫様。その榮譽に応えるべく、私も全身全霊を込めて参りましょう」

帝国軍人アンジャルノン。

六年前の戦争にも参加していたという剛の者。ババルオに仕える、帝国兵達の実質的なりーダー。過去に多くの略奪を繰り返し、女を喰い物にしていたという噂がある好色漢。

その程度の情報しか把握していないダイアン姫でも、明確に理解していることがある。

——今まで戦ってきた相手とは、比べものにならない強さであること。

そして、この戦いに負けた時。自分が、女として大切なものの全てを、奪われること

を。

「……いいでしょう。望むところです」

「なんと健気で、美しく勇敢な方だ。私の部下共にも見習わせたいものですな」

それでも、立ち向かわねばならない。精一杯の虚勢を張って。

せめて、民に涙を見せないように。

その決意が、柄を握る手に注がれ——ダイアン姫が持つ王家の剣が、太陽を浴びてまばゆい煌めきを放つ。

彼女が戦闘態勢に入るまでを見届けたアンジェルノンは、それに続くように鉄球を構える。

素人目にもわかる。今までとは格が違う戦い。その幕が上がる瞬間を前に、観衆は固唾を飲んで静まり返っていた。

「ル、ルーケンさん。ダイアン姫、大丈夫なのかな……」

「バカ言うんじゃないよ！ 姫様を信じろ、いつもみたいにキメてくれるって……！」

ハンナを叱咤するルーケンの肩は、微かに震えている。彼らも何処と無く不安げな表情で、闘技舞台に立つ姫騎士を見つめていた。

他の人々も一様にダイアン姫を案じ、静かに試合を見守っている。しかし、その中で

(アンジャルノン、か……)

——ダタツツだけは、ダイアン姫ではなく……彼女と相對するアンジャルノンを見つめていた。

(まさか、ここで会うことになるなんてな)

第7話 姫騎士の敗北

宙を舞い、円を描くように動き回る漆黒の鉄球。その得物を操るアンジャルノンの瞳は、どす黒い欲望を滲ませ、ダイアン姫を貫いていた。

逆らうことを許さない圧倒的な力。向き合う者を圧殺するその迫力に、ダイアン姫の心が震え上がる。

(わたくしは、恐れない！ 恐れてはいけない！)

だが、まだ折れてはいない。最後の砦——理性は、まだ生きている。

自身を狙い、弧を描いて襲い来る鉄球の一撃をかわし——彼女の凜とした眼差しが、眼前の仇敵を射抜く。

次いで、彼女の身体が弾き出されるように、アンジャルノン目掛けて突進していく。その踏み込みの速さに、赤い巨漢が目を剥く瞬間——

「やああッ！」

「ぬ……!?!」

——彼女の滑らかな曲線を描く肢体が、床の上を滑るように……アンジャルノンの股下を潜り抜けるのだった。

鉄球をかわしてからの、流れるようなスライディング。一切の無駄を許さないその立ち回りは、見るものを魅了するほどの鮮やかさを放っていた。

「とあッー！」

その流れは、まだ止まらない。

アンジャルノンの背後に回ったダイアン姫は、背を向けた体勢のまま飛び上がる。その姿勢から後方に体を回転させ——太陽を背に、巨人の頭上へ舞うのだった。

「捉えたッー！」

「ぐー!？」

そして、アンジャルノンがダイアン姫を捕捉する頃には。彼女は両膝で彼の頭を挟み、王家の剣を逆手に構えていた。

反撃の一切を許さない、体格差を利用した速攻。アンジャルノンがそのスピードを捉えるより速く、彼女の剣が真紅の兜に突き立てられるのだった。

「……………」

悲鳴を上げる暇もなく痛烈な一撃を浴び、赤い巨漢は足元をふらつかせる。兜には幾つもの亀裂が走り、その奥にある生身の頭は振動に脳を揺さぶられていた。

「はっー！」

その反応に確かな手応えを覚えたダイアン姫は、短い叫びと共にアンジャルノンの胸

板を蹴り、反動を利用して間合いを取る。

残心を取る彼女の視線の先では、アンジアルノンの巨体が膝から崩れ落ちようとしていた。

「や……やった！」

「姫様が勝った……勝ったんだ！」

「やったああああ！ 姫様ああああ！」

ダイアン姫の勝利を象徴するような、その光景を目の当たりにして——民衆は高らかに歓声を上げる。

悪辣な巨漢を打ち倒す正義の美少女という、圧倒的なカタルシスを生むこの瞬間に、観客は熱く沸き立っていた。

「ルーケンさん！ やった、やったよおお！」

「当たり前だろ、姫様は無敵さ！ 一対一で帝国の兵になんぞ、絶対負けやしねえ！」

ハンナやルーケンも、涙を貯めて狂喜している。未だに渋い顔で試合を観ているダッツを、尻目に。

（やった……！ 手応えは確かにあった！ これなら後は、「あの技」でとどめを刺せば……！）

一方。片膝をついて俯き、震えているアンジアルノンを前に、ダイアン姫は強く拳を

握り締めていた。

確実に決まった一撃。怯んだ敵。それだけの現実が目の前にあるなら。

希望を持つても、いいのかも知れない。恐れなくても、いいのかも知れない。

そんな期待が、彼女の胸を満し――

「やってくれたな」

――アンジャルノンの俯いていた顔が持ち上がり、憤怒の貌が窺えた瞬間。

赤く、巨大な拳が唸りを上げて。

姫騎士の体に減り込むのだった。

「……………!?!」

「敗戦国の小娘が調子に乗りやがって。ひん剥く前に、ここでお仕置きだ」

今までとは違う、低くくぐもった声で、アンジャルノンは毒を吐く。内に隠していた

黒い感情を、剥き出しにして。

痛みに叫ぶことさえ許さない、高速の鉄拳。その、巨漢の質量にものを言わせた一発を受けて――ダイアン姫の体が、激しく吹き飛ばされるのだった。

闘技舞台の床を抉り、転がっていく姫騎士の痛ましい姿を目撃し、沸き立っていた観衆が凍り付く。

正義が悪を打ち倒す、勧善懲悪の劇となっていたはずの試合が。強者のみが勝つ真の

闘いとなる瞬間であった。

「う、ぐ………！」

全身を打ち付けられたダイアン姫は、呻き声を上げて己の体を抱き締める。咄嗟の反射で急所への命中は避けた彼女だったが、両者のパワー差はそんな工夫さえ吹き飛ばすほどに大きい。

今の一発だけで、すでに彼女のダメージは戦闘続行に支障を来すレベルに達していたのだ。

「く、う………！」

「ほお、まだ立てるか。……無理はしない方がいいぞ。どうせ『可愛がる』なら傷などない綺麗なカラダがいいからな」

ふらつきながらも立ち上がるダイアン姫に、アンジャルノンは一転して品性に欠けた言葉を浴びせる。

だが、今の彼女にはそれに反応する余力さえ残されてはいなかった。苦悶の表情を民に隠すことも出来ず、ただ立ち上がることにのみ意識を集中させている。

それが、彼女の限界なのだ。これほどのダメージでさえなければ、回復魔法を行使することも出来たはずだが——もう、彼女にはその余力すらない。

「ル、ルーケン………さん………」

「おつ、おい！ 騎士団はどうしたんだよ！ やめさせろよ、こんな試合！」

ダイアン姫のそんな姿を見て、観客も長い夢から覚めつつあった。血の気を失った表情で試合を見つめるハンナの肩を抱き、ルーケンは声を荒げて騎士団を呼ぶ。

だが、この場に王国騎士団の人間はいない。ババルオの権勢に屈し、帝国兵を恐れている彼らが、ここに来れるはずはないのだ。

帝国兵を恐れないことで知られるダイアン姫と、彼女を信奉する民衆を除けば、このババルオ邸は魔境なのだから。

「……」

「諦めろ。こうなることは始めから決まっていたのだ。お前は、ただ甘い夢に酔っていただけに過ぎん」

突き付けられた現実が、傷付いたダイアン姫の胸に突き刺さっていく。王家の剣を杖にようやく立ち上がった彼女だったが、すでにその心は折れかけていた。

(……全て、計画されていたことだったのですね。わたくしが、今日まで勝ち残ってきたことも、全て……！)

恐れていた可能性の群れが、自分を喰らい尽くそうと襲い掛かってくる。その感覚に、彼女の両膝が啞うように震えていた。

民のために耐えぬこうとしていた矜持さえ崩れ、熱い雫が頬を伝っていく。自分とい

う人間を形作っていたものが全てが、音を立てて瓦解していくのがわかる。

（弄んで、蹂躪して、支配して……！　この国は、民は、お父様は、わたくしは……そんなことのために……！）

そんな中。

悔しさという、ただ一つの「怒り」に由来する感情が、彼女の胸を染め上げた時。

悲しみの全てをぶつけ、訴えるように。

今まで培ってきた剣術の基礎さえ捨てた、がむしやらかな剣技で。

ダイアン姫は、王家の剣を振り上げ——アンジャルノンへ向かっていく。

勝てないとしても、せめて一矢だけは報いたい。それだけの願いが、彼女を突き動かしていた。

だが。

「往生際の悪いッ！」

「あうっ……！！」

それさえも、紅の巨人は道理を覆す「力」を以て踏み躪るのだった。

裏拳の一撃を浴びたダイアン姫は真横に転がっていき、擦り傷だらけの姿で闘技舞台の上へ横たわる。命中の瞬間、舞台の周辺では痛ましい光景を目の当たりにした観衆の悲鳴が上がっていた。

倒れ伏したダイアン姫は、身を震わせるばかりで動き出す気配を見せない。最後の力を振り絞った一矢さえ容易く跳ね返されてしまったことで、挫けまいと抗い続けてきた心が、とうとう折られてしまったのだ。

もう、彼女は立ち上がることはできない。全ての支えを、崩されてしまったのだから。「……わ、たく、しは……」

彼女の視線の先では、床に突き刺さった王家の剣が輝いていた。失意の底に沈み行く彼女を、見下ろすかのように。

その視界がぼやけ、景色が歪んだ時。彼女はようやく、自分が泣いていることに気付くのだった。

「なんの、ために……!」

夢も希望も平和もない未来。力無き者が受ける屈辱の洗礼。

逃れようのない事実だけが、彼女の目の前に残された。

第8話 ロークの奮戦

ダイアン姫にはもはや、突き立てられた王家の剣に、手を伸ばす力すら残されてはいない。試合の決着は、ついたと言っていていいだろう。

——だが、アンジャルノンは歩みを止めない。横たわる姫騎士を見下ろしたまま、じりじりと近寄って行く。

その表情は、闘いを終えた武人のそれではなく——仕留めた獲物を見つめる、狩人の色を湛えていた。

彼の貌を見た者は、その先にある未来を想像し、戦慄を覚えていく。

「おお……まさかこのような結果になるうとは。真に上に立つ者として、我々が責任を取らねばなりませんな。ババルオ様」

ダイアン姫の傍らでようやく立ち止まったアンジャルノンは、試合内容を見下ろしていたババルオに視線を移す。

巨大な両腕を大仰に広げ、哀しむような声を上げながら。

「うむ……その通りであるな、アンジャルノンよ。経緯はどうあれ、一国の姫様を傷付けてしまったことは事実。我が帝国の医療技術を以てして、ただちに治療しなくてはなる

まい」

ババルオも、大袈裟に嘆き悲しむように頭を抱え、聞こえよがしに今後の「流れ」を創り出そうとしていた。

姫の身柄を一時でも預かれば、あとは「オンナを言いなりに出来る」薬でどうとでもなる。そうなれば王国はババルオ一人の手中に落ち、全ての国民が喰い物にされる。

水面下で進行しつつあるその計画を止められる人間など、いるはずがない。仮に居たとしても、その人間が何かをする前に全てが終わっている。

野望の実現を目の前にして、ババルオの醜悪な口元は、歪に吊り上がった。その邪念に満ちた眼差しは、痛ましい姿で倒れている姫騎士の肢体に注がれていた。

「ルツ、ルーケンさんどうしよう！ どうしたら……！」

「ち、ちくしょう！ このままじゃ姫様が……！ こうなつたら……！」

このままババルオ達の言う通りに事が運べば、自分達の希望——ダイアン姫に、良くないことが起きるに違いない。直感でそう悟った民衆は、自分達で姫君を取り返そうとしていた。

「へへへ……やめとけよ。ババルオ様がああ仰ってるんだぜ？ 帝国のご厚意に与れるなんて、光栄なことなんだからさ」

「う、うるさい！ 帝国の連中に姫様を渡せるものかよ！」

「へつ、そうかい。まああんた達がどう言おうと、ここを通さないのが俺達の任務だ。試合の巻き添えで怪我人を出しちや悪いっていう、ババル才様の温情による——な」

「ぐ……！」

しかし、闘技舞台を塞ぐ帝国兵達は厭らしい笑みを浮かべて、その行く手を阻んでい
る。丸腰の人々に、嬉々として剣を向けながら。

怪我人を出さないための措置。そんなものは、外部に手を出させないようにするための
の方便に過ぎないことは、誰の目にも明らかだった。

……しかし、その権威の力は道徳さえ飲み込み、人々の想いを踏みにじろうとしてい
る。それを抑止する力は、彼らにはない。

力こそが正義。それは、揺るぎない真実なのだから。

「あ、あいつら勝手なことばかり……って、あれ？ ダタツツさんは？」

「ん？ さつきまでそこに……」

一方で、ルーケンとハンナがダタツツの姿を見失っていた、その瞬間。

「ま、待てっ！」

帝国の蹂躪に、抗う者が現れた。

力が無くとも、残された気力だけを振り絞り——世の真理に立ち向かう者が居たの
だ。

王国騎士団の鎧を纏い、短剣を振りかざすその姿は——騎士と呼ぶにはあまりにも頼りない。

しかし。そのブラウンの強き瞳は……圧倒的な体躯を誇る巨漢を、強く睨み上げている。

「ロー……ク……」

か細い声でその名を呼ぶ姫騎士は、我が目を疑うように驚愕の表情を浮かべていた。

この小さな騎士がここに立っている。その状況から導き出される末路が、脳裏を過つたのだ。

容赦を知らない今のアンジヤルノンの前に立つなど、あまりにも無謀。十三歳前後という幼さを考えても、ロークの行動はあまりにも思慮に欠けている。

恐らく、それは本人も理解しているのだろう。小さく震える膝が、それを証明している。

「オ、オツ、オレは王国騎士団所属、ロークだ！ ダイアン姫の身柄は、オレ達王国騎士団が預かる！ お前達の出番はないっ！」

——それでも、立ち向かわなくてはならなかったのだ。

何処の馬の骨とも知れない旅人に、王国騎士団の立場を奪われてはならない。騎士団長の忘れ形見である自分に残された、たった一つの誇りだけが、この者を突き動かして

いた。

「あ、あのチビいつの間に！」

「クソガキが、そこを動くな！」

民衆と帝国兵の対峙に紛れ、闘技舞台上がり込んできた乱入者に、帝国兵達は目を丸くする。

次いで、そこから摘み出そうと数人が舞台へ登っていった。

「……待て。せつかく王国騎士団の代表がお出ましになったんだ。言い分くらいは聞いてやろうじゃねえか」

「ア、アンジャルノン様！　しかし……」

「言いたいことぐらいは言わせてやりな。どうせ、何も変わりやしねえ」

だが、その動きをアンジャルノンが制止する。もはや絶対絶命である王国側が、どんな抵抗を見せるのか——どんな風に、絶望してくれるのか。それを愉しみにしている表情だった。

その貌に恐怖を覚えた帝国兵達は、後退りするように舞台から降りていく。対面しているローク自身も、その恐ろしさに触れていたが——逃げ出すことはなかった。

股下から湯気を上げてても、膝が笑っていても。剣先が震えていても。

背中だけは、向けていなかったのだ。

「ほう、頑張るじゃないか」

「もう一度、言う！　ダイアン姫の護衛は、騎士団の仕事だ！　帝国の手なんか借りない、汚い手でオレ達の姫様に触るなっ！」

「なるほどな。しかし、そういう説得は文官の仕事だぜ坊や。剣を持つて闘技舞台上がったからには——」

嘲るように嗤うアンジャルノンに対し、ロークは精一杯声を張り上げる。

その背に続く騎士は一人も居ない——が、ブラウンの瞳に宿る勇気だけは、騎士団全員分に匹敵する輝きを放っていた。

「——その剣で意見を通すんだな」

その輝きを、吹き飛ばすように。

アンジャルノンの鉄球が空高く舞い上がり——ロークの足元を粉碎する。

「……………あ……………」

声を出すことも叶わず、その小さな身体は衝撃に飲まれ、宙へ投げ出されていく。

幼子にすら容赦をしない、その一撃を目撃し、観衆からさらに悲鳴が上がった。

力無く吹き飛ばされていくロークの影を見つめるダイアン姫は、声にならない叫びを上げ——目尻に涙を浮かべる。

（許して……………！　助けてなんて言わないから！　運命に逆らったり、しないから！　だ

からっ……!」

もう、自分のことなどどうでもいい。

今日の前で繰り広げられている惨劇さえ止められるなら、奴隷になっても構わない。

そう思えてしまうほど、彼女の心は限界まで追い詰められていた。

(もう誰も、傷つけないで……! お願……!)

絶望の淵に立たされた心。その奥底から、そう泣き叫んだ時。

「……!?!」

ロークの影とは違う——もう一つの影が、ダイアン姫の視界を横切った。

その影はロークの身を攫い、舞い降りるように闘技舞台の上へ立つ。

風に靡く、黒い髪。赤いマフラー。

それが目に入った時。

ダイアン姫は思わず残された力を振り絞り、身を起こすのだった。微かに残された可能性に、縋り付くかのように。

「あ、あ……」

意識を失い、力無く瞼を閉じているローク。その小さな身体を抱える彼の瞳は、どのような名剣よりも鋭利に研ぎ澄まされている。

出会った時のような、間の抜けた色など一切ない。別人のような「実態」が、そこに

現れていた。

それを目撃し、ダイアン姫の胸中に生まれた可能性が、徐々に希望として膨らんでいく。

たとえば、「それ」が幻だったとしても。もう、彼女には「それ」しかないのだから。

「その剣で意見を——か。確かにその通りだな」

そんな彼女を一瞥する、根拠もなく縋られた男——ダタツツは。

「おかげ様で、ジブンが戦う理由が出来た」

腰の鞘から銅の剣を引き抜き……低く唸るような声で、真打ちの登場を宣言するのだった。

第9話 ダタツツという男

「……なんだ、てめえは」

「文無しの旅人だ」

獲物を射抜く狩人の眼で、アンジヤルノンはダタツツを一瞥する。ロークを抱え、闘技舞台へ着地した彼の身のこなしを目撃した巨漢は、目の前の男がただの旅人ではないと睨んでいるようだった。

一方、ダタツツは彼と視線を交わすことなく背を向け、闘技舞台から降りていく。その両腕に、小さな騎士を抱えて。

「や、野郎！ また俺達の邪魔……を……」

その進路上に立ち塞がったのは、およそ十日前にダタツツを斬ろうとしていた帝国兵だった。一度ならず二度までも自分達の邪魔に入ってきた浮浪者に、彼は容赦なく剣を向ける。

——だが。ダタツツの眼差しが漂わせる殺気に触れた瞬間。

彼は本能に命じられるまま、動きを止め……通り過ぎていく彼の背を追うことすら出来なかつた。

そして。

ダタツツの足が止まる時——彼の目の前には、呆氣に取られた様子のルーケンとハナが立っていた。

「ダ、ダタツツ君、君は……」

「ルーケンさん、隙を見てダイアン姫の身柄を運び出してください。ハンナさんは、ローク君を」

「えっ、あ、う、うん……」

彼らの理解が追いつかないうちに、ダタツツは二人にロークを預け、踵を返していく。向かう先は、闘技舞台。

その行き先を見遣り、ハンナはダタツツが何をするつもりなのか悟り——冷や汗をかいたのだった。

「ダ、ダタツツさん！」

「はい」

「……き、気を付けてね」

「ええ。ありがとうございます」

だが、彼が持ったただならぬ雰囲気飲まれていた彼女は、その背を引き留めることが出来なかった。

せめてもの思いで掛けた言葉に微笑む姿を見ても、不安は拭えず。彼女の手は、動悸を押さえるように豊かな胸の上で強く握り締められていた。

そんな彼女の見送りを背に受け、ダタツツは闘技舞台へ戻っていく。民衆は彼に道を譲るように、左右へと広がっていた。

しかし、帝国兵達は——再び剣を抜き、その行く手を阻もうとしている。

「待ちやがれ。さつきから舐めた真似しやがって、覚悟は出来てるんだろうな」

「俺達は榮えある帝国の兵士様なんだぜ。その俺達を無視して、アンジャルノン様のごころに行こうなんざ——」

ダタツツの殺気に気づかない兵士達は、苛立ちを募らせるように剣先を揺らし、彼を睨み付ける。口々に、恫喝の言葉をぶつけながら。

そんな彼らに、ダタツツは何も言い返さない。

「……」

何も言い返さないまま。

「がっ——」

「あっ——」

銅の剣の一閃で、障壁を薙ぎ払うのだった。

「なっ!?!」

「や、野郎ふざけやがって！」

「俺達に逆らったこと、後悔しやがれ！」

刃の潰れた銅の剣による「打撃」を浴びた帝国兵達が、次々に宙を舞い——地に墜落していく。その瞬間を目撃した他の帝国兵達は、怒りをぶつけるように一斉にダダツツへと向かつていった。

「容赦はしない。悪く思わば勝手に思え」

その憎しみをさらに凌ぐ、強大な「力」。それを表現する斬撃の嵐が、帝国兵達の身体を舞い上げて行く。

まるで、ダイアン姫やロークの思いを蹂躪した、アンジャルノンのように。

「な、何をしておる！ あんなみずぼらしい小僧一人に！」

ロークが吹き飛ばされた時までは余裕を保っていたバルオも、次々と自分の私兵が薙ぎ倒されていく様を目の当たりにして——徐々に血の気を失いつつあった。

一方、獅子奮迅の勢いで帝国兵達を打ち倒していくダダツツの姿に、民衆は嘖き上がるような歓声で沸き立っていた。

「す、すげえ！ すげえぞ兄ちゃん！」

「行け行け、やっちまえ！」

「姫様達の仇をとってくれッ！」

見掛けからは想像もつかないダタツツの剣技。次から次へと帝国兵達を打倒していくその技に、人々は魅入られたように称賛を送る。

だが——彼の闘いを間近で見ていたダイアン姫は。

(あの剣術は……！ やはり、彼は……！)

称賛どころか、恐怖すら覚えていた。単純な「速さ」こそ超人的であるもの——その動作そのものは、彼女がよく知る剣術の動きだったのだ。

——帝国式闘剣術。自分達を苦しめた、恐怖の剣の。

だが、そうとわかっていながら。

(なん、なの……。この……。感じ……)

ダタツツの凛々しい横顔を見つめる彼女の胸には、恐れとは違う感情が渦巻いていた。

恐怖の色とは異なるリズムで、高鳴る動悸。甘く切ない、胸の痺れ。

——それは、憎むべき帝国の戦士に対して……あつてはならない感情だった。

「は、はは……すごい、全くすごいなダタツツ君は！ 一体何者なんだ、あの子は！」

「わ、わからない……けど……」

一方、そんなことを知る由もなく、両腕を振り上げて歓喜しているルーケンに対し——ハンナは両手を胸に当て、不安げな面持ちで戦いを見守っていた。

(あの巨体を相手に、どうやって戦うのよ……ダタツツさんっ)

ダタツツに立ち向かう帝国兵達が居なくなっても——その表情に安堵の色が現れることはなかった。アンジャルノンがいる限り、戦況が苦しいことには変わらないのだから。

「……見事な技だな。まともな剣でさえあれば、皆殺しにも出来たろうに。しかも、帝国軍人しか習得できねえはずの帝国式闘剣術の使い手ときた。……だが、帝国兵崩れの傭兵にしちやあ技が洗練され過ぎてる。何者だ、てめえ」

「さつきも言っただろう。ただの、文無しの旅人だ」

「同郷の帝国人にも語る気はない、つてことか。まあいい、どうせ俺には勝てんのだ。無理に聞くこともあるまい」

その思案を裏付けるように、アンジャルノンは鉄球を振り上げ——冷酷な眼差しでダタツツを睨み付ける。

それに応えるかのように、ダタツツも鋭い眼差しを眼前の巨漢へぶつけるのだった。「おつ、おのれ役立たず共が！ アンジャルノン、さつきとその小僧を叩き殺せ！」

あと一步というところで、二人の乱入者に計画を狂わされ、既にババル才は平静を失っていた。恥も外聞もなく、バルコニーから大声で喚き散らすその姿に、民衆は敵対心を剥き出しにしていく。

「負けるな兄ちゃん！ そんな奴ぶちのめしてやれっ！」

「姫様を助けてっ！ もうあなたしかいないのっ！」

そんな民衆の歓声には目もくれず、ダタツツはただ静かにアンジャルノンを見据えていた。——その視線目掛けて、アンジャルノンの鉄球が襲い掛かるまで。

「……ッ！」

孤を描き、覆い被さるように墜落してくる鉄製の隕石。その影がダタツツの全身を覆う瞬間、彼は咄嗟に横へ転がり回避する。

「甘いわ若造がアアアッ！」

——だが、アンジャルノンはその回避を読んでいた。

闘技舞台に鉄球が墜落した直後。彼は鉄球を繋ぐ鎖を手繰り寄せ、水平に腕を振るう。

すると、その動きをトレースするかのようには鉄球は真横に向かい、弾かれるように飛んでいく。

転がった直後で、体勢が整っていないダタツツを仕留めるために。

「……！」

再度の回避は間に合わない——そう判断したのか。

ダタツツは転がる時の姿勢のまま、即座に木の盾を構えた。次いで来たる衝撃に備え

て、身を屈め――

――木の盾ごと。

吹き飛ばされてしまうのだった。

紙切れのように弾き飛ばされ、闘技舞台から転げ落ちていく若き剣士。その姿を一瞥し、紅い巨人は歪に口元を吊り上げた。

木の盾「だった」木片は塵と化して宙を舞い、先程まで歓声を上げていた人々の頭上へと降り注いでいく。

その光景に言葉を失った民衆は、絶望を滲ませた表情で、倒れたまま動かないダタツツの姿を見つめていた。

そして。

「――ダタツツさああああんツ！」

彼の戦いを見守り続けてきた少女の悲鳴が、ババルオ邸にこだまする。

第10話 ユニコン幻想

倒れ伏したダタツツの痛ましい姿に、泣き崩れるハンナ。暫し啜り泣いていた彼女は、やがて顔を上げると——憎しみを込めた視線をアンジャルノンにぶつける。

「ダイアン姫も、ローク君も、ダタツツさんも……みんな、あんたのせいであらう」

「……ふん。力においては勇者に匹敵するとも謳われたこの俺に歯向かったんだ。当然の結果だろうよ」

悪びれる様子もなく鼻で笑う巨人は、好色の目でハンナを見下ろす。王国を手に入れた暁には、この娘も手籠めにしてやろう。そんな考えが、表情に出ているようだった。

その視線に気づかないまま、ハンナはアンジャルノンからダタツツへと再び視線を移し、目元に涙を溜める。

（私達だけ、なんで奪われてばかりなのよ。戦争に負けたのがそんなにいけないことなの？ 弱い私達が悪いの？ 誰か、誰か答えてよ……！）

膝をつき、嘆き悲しむ彼女に差し伸べられる手はない。助けは来ない。

助けるべき立場である者達に、力がなければ——弱き人間は屠られるのみなのだから。

——だが、しかし。

「……………どこを、見ている」

彼女を救うべき人間に、力が伴っていないと——決まったわけではない。

ハンナの肢体を営めるように見つめる、アンジャルノンの背後で——血だるまの剣士が、己の得物を杖に立ち上がるようにしていた。

「……………あつ……………」

その姿を目の当たりにして——ハンナの涙に込められた想いが、「嘆き」から「喜び」に変わっていく。花が開くように、その表情が笑顔に変わる瞬間。

ダタツツは、残された銅の剣一本を携え、再び立ち上がるのだった。

「……………てめえ!」

「……………悪いな。あの程度でくたばってはいられないんだ」

頭から血を流し、ふらつきながらも、彼の黒い瞳は強く煌き——アンジャルノンの巨体を射抜いている。その灯火は、戦う前から少しも弱っていない。

「……………てめえ、いくらで雇われた。その身なりからして、王国に仕えているわけじゃねえだろう。この国に大した義理があるわけでもないつてのに、よく立ち上がる気になったもんだな」

「その女の子の料亭に、居候させてもらってる。義理ならそれで十分だ」

「……その程度の対価で命を張るとは、愚かな奴だ。帝国についていれば、美味しい酒に酔うことも良い女を抱くことも出来たろうに」

「力だけが正義のお前達に、か？」

自分達を揶揄するようなダタツツの物言いに、アンジャルノンは僅かに眉を顰める。――が、その面持ちは常に、優位に立つ者が見せる「余裕」の色があった。

「それが真実だろう？ 王国は弱いから負けた。勝った俺達こそが強者であり、正義。どのような理屈を並べようと、現実には在る力こそが真実。弱者を助ける考えなど、弱い己が生きるための方便に過ぎん。真に強い者とは、弱者を蹂躪する権利を持つ者のことだ」

「……力が強ければ弱者を蹂躪する権利がある——と？」

「無論だ。もし俺達が間違いであるなら、それは力によつてのみ正されるだろう。そんな力があれば、の話だがない！」

高らかに己の道理を語るアンジャルノン。その狂気を孕んだ眼は、見る者達の本能に恐怖を植え付けていく。

だが——最も近い位置からその眼差しを浴びているはずのダタツツは、一步も退くことなく睨み返していた。

「あつや」

「なんだと?」

水平に構えられた銅の剣が、光を浴びて鈍い輝きを放つ。

満身創痍となっているダタツツの一部として、その存在は一際強く煌めいていた。

「強い者が正しい。それこそが真実。確かにその通りだろう。——なら、お前はもう強者などではない」

「ふざけたことを。……虚勢にしか頼れないとは、惨めだな」

「虚勢かどうかは今にわかる。彼女達に正義がないと言いたいのなら——その「正義」の在り処、ジブンが教えてやる」

刹那、ダタツツの眼差しは剣に勝る鋭さを放ち——アンジャルノンの巨体さえ飲み込む程の殺気を、迸らせた。

「……威勢だけの若造が!」

その殺気に吞まれかけた巨漢は、自分をほんの一瞬でも怯ませた眼前の男に、激しい怒りを募らせる。

この男だけは絶対に殺す。その思いを乗せた鉄球が、再び鎚の如き軌道を描いてダタツツの頭上に迫った。

「——ッ!」

それを間一髪、上空に飛んでかわすダタツツ。——しかし、既にアンジャルノンは追

撃の姿勢に入っていた。

「無駄だア、どこに跳ぼうが俺の鉄球からは絶対に逃げられんツ！」

アンジヤルノンの丸太のような腕が、下から挟るかのように振り上げられる。直後、鉄球はその動きに追従し、滞空しているダタツツへと向かっていった。

「だっ、駄目えっ！」

まるで生物のように獲物を付け狙う、漆黒の鉄塊。その姿に恐怖するハンナは、耳と目を閉じ悲鳴を上げる。

——ダタツツが撃ち落とされ、叩き潰される未来を予感して。

「……おおおおッ！」

だが。

その未来は、幻に終わる。

激突の瞬間。空中で身を翻したダタツツは、鉄球を蹴ることでそこを足場に変え、さらにジャンプしたのだ。

軽やかに鉄球の追撃を回避した彼は、風に舞う葉のように地に降り立ち——再び剣を構える。……今度は、頭からは落ちなかつたようだ。

「なっ……なんだと!？」

「当たらなかつたのが、そんなに不思議か？」

嘲るような言葉で語る、その口調は氷のように冷やかなものだった。今までのダタツツとは全く違う——別格の剣士が、そこに居たのだ。

「……えっ……あ……！」

再び沸き立つ歓声の嵐。耳を塞いでいても響いてくるその喧騒に、ハンナは我に返ると——目の前に広がる光景に歓喜の涙を流すのだった。

まだ、ダタツツは生きているのだと。

「なんだ、さっきの動きは……！ さっきまでとは、まるで別人ではないかッ!?」

「容赦はしない、とは言ったがな。最初から本気を出すなどとは一言も言っていないぞ」「なにをツ……！」

「あの二人が受けた痛みの、数千分の一でも味わってからでなければ——お前如きとやり合う気にもならなかったからな」

涙に滲む景色の向こうで、ダタツツは鋭い眼差しと共に剣を振り上げ——アンジャルノンの巨体へ肉迫する。

その電光石火の如き速さに、巨人は目を剥き……本能に襲い来る恐怖と相対した。

「このっ……小僧がアアアアッ！」

鉄球の間合いから、一瞬にして懐へと入り込むダタツツ。

その正面に、ダイアン姫を沈めた鉄拳が迫る。己に降りかかる「恐れ」を、振り切る

うとするかのように。

アンジャールノンにはたとえ鉄球をかわされても、鋼鉄の籠手で固められた拳という武器がある。それを攻略しなければ、この巨壁を粉碎することは出来ない。

しかし、真つ向からダタツツに迫っているこの拳をかわせば、そこに隙が生まれる。その僅かなタイムラグがあれば、伸び切った鉄球を引き戻すことも出来る。

ダタツツが決定打を放つには、アンジャールノンの鉄球が戻ってくる前に、剣が届く間合いまで接敵するしかない。しかしこのまま直進すれば鉄拳に激突し、かわせば攻撃のチャンスを失う。

そのジレンマの中で——ダタツツは恐れることなく、ただひたむきに進み続けている。まるで自分に迫る危機など、認識していないかのように。

そして——その勢いに身を任せたまま、籠手に向かい剣を振り下ろそうとする。

(バカめ、いくら腕が立とうと剣がなまくらでは勝ち目などない。そんな銅のおもちやでは、俺の拳を粉碎することなど——)

一見すれば自殺行為でしかない、その行動を嘲り……アンジャールノンが口元を緩める

「ていこくしき帝国式——『とう投』けんじゆつ剣術」

——刹那。

ダタツツの手元から、銅の劍の柄が離れ……その刀身は、銅色の矢と成る。一角獣ユニコンの幻影を纏うその一閃は、神獣の一角の如き鋭さで——アンジャルノンの額を狙う。

その擦り切れた切っ先は、空を斬り裂き風を断ち——巨人の拳を掠めていった。

「……が、あッ……!?!」

そして。

「——『飛劍風』」

劍の先端が真紅の兜に激突した瞬間。

アンジャルノンの兜と、ダタツツの劍が——同時に碎け散るのだった。

刹那——衝撃により生まれる風が、闘技舞台を吹き抜けて……ハンナの頬を撫でる。

「……劍けんの、風かぜ……」

その風に触れた彼女が、唇を震わせ呟く頃。

激突の轟音が闘技舞台に響き渡り——人々が静まり返る。そして、アンジャルノンの

巨体が、地響きを上げて倒れ伏していった。

受け身も取らず——頭から。

「……武器を失った以上、ジブンに戦闘を続行出来る能力はない。お前の勝ちだ、アン

ジャルノン」

それは、この巨人の意識が完全に刈り取られたことを意味している。

攻撃を繰り出したのは、アンジャルノンが先であった。ダタツツは、「後から」剣を投げた。

にもかかわらず、先に命中したのはダタツツの剣。それほど速さで放たれた一撃が、アンジャルノンを打ち抜いたのである。

「もう一度立ち上がることが出来れば、な」

倒れ行く様など見るまでもない——とでも言うのか。ダタツツは力尽きたアンジャルノンの方を見向きもせず、バルコニーから戦慄の表情を浮かべるババルオを見上げた。

「さて。残るはお前一人だが、どうする？ お前だけなら得物がなくとも、どうにでもなるぞ」

「な……なんだ。なんなんだ、お前は！」

「ただの旅人。何度もそう言っているはずだ」

ババルオは顔面蒼白のまま、辺りを見渡している。残っている兵はいないのか。儂を守る味方はいないのか。視線が、そう訴えているようだった。

しかし、その心の叫びはどこにも届かない。闘技舞台を囲っていた帝国兵達は、全員ダタツツに打ち倒されている。

（こんなバカなことが、あつてたまるものか。この王国を手に入れる計画が……儂の国

が、あんな小僧一人に！)

予期せぬ障害により、全てを失う恐怖。その反動による猛々しい憎しみを込めて、バルオはダタツツを睨み付ける。

「ぬうううあ……！」

「……」

しかし、アンジャルノンを破ったダタツツがその程度で怯むはずもなく——冷ややかな眼差しで、絶えずこちらを見据えていた。

(……とにかく、ダイアン姫だ。ダイアン姫さえ手に入れば、起死回生のチャンスはある！)

その瞳に射抜かれ、バルオは正攻法では敵わないと、ようやく本能で悟る。次いで己の視線を、倒れたままのダイアン姫に移すのだった。

「……ふ、ふふ。良いのか？ 次代の国王に、このような不敬を働いて」
「獄中の王になりたいのなら、好きにしろ」

「——獄中へ堕ちるのは、貴様だッ！」

刹那。バルオはバルコニーから闘技舞台へ向け、懐に忍ばせていた球状の物体を投げ込んだ。

それは爆発するように弾け飛ぶと——周囲一帯を灰色の煙で包み込むのだった。

(煙幕……？ この隙に逃げるつもりか？ ——いや、違う！)

その煙は民衆が集まっている場所にまで蔓延しており、ダタツツの後ろで人々はパニックに陥っていた。

そんな中で、ダタツツはババルオの狙いを悟り——煙の向こうで微かに見える、ルーケンの姿を捉えるのだった。

(ぐ、ふふ。ダイアン姫の身柄さえ手に入れば、計画の軌道修正はできるはず。役立たずのアンジヤルノンなど、もうどうでもよい。ダイアン姫を攫い、儂の奴隷として調教すれば結果は同じだ！)

一方、ババルオは周囲の混乱に乗じて、煙に身を隠しながら闘技舞台上に上がり込んでいた。身動きが取れないダイアン姫の、肢体を狙って。

(……む？ 妙だ。確かに姫はこの辺りに……！)

だが——起死回生の手段さえ、狙い通りには行かず。ババルオは、闘技舞台の上を彷徨い続けていた。

先程まで居たはずのダイアン姫が——忽然と、その姿を消していたのである。

(バカな、バカなバカなバカな！ このままでは煙が晴れて……！)

思い描いた未来から、かけ離れて行く。その恐怖を前に、ババルオの全身から血の気が失われつつあった。

何が原因で。何のせいで。その答えを求め、自らが撒いた煙の中を徘徊する醜男。時間経過により煙幕が消え去り、そんな彼の姿が衆目に晒された時。求め続けた答えは、ようやく明らかとなる。

「あ、あの平民ッ……!」

姫を担ぎ上げ、闘技舞台から逃げるように走り去っていく影。その背を見つけたバルオは、己に在る全ての憎しみを注ぐように——ルーケンを睨み付けるのだった。

「ルーケンさんっ!」

「へっ! ダタツツ君があれだけ頑張ったんだ、俺が働かねえでどうするよ!」

「ルーケンさん……やったああっ!」

ハンナのもとへ帰還したルーケンは汗だくの顔を上げ、得意げな笑みを浮かべる。姫を抱えたその姿に、ハンナは喜びを爆発させるように抱きつくのだった。

彼らの様子と、ダイアン姫が倒れていた場所に佇んでいるバルオ。それらを目の当たりにした人々は、状況を悟ると——

「やった……姫様が帰ってきたああああ!」

「バルオの奴、姫様を攫おうとしてたんだ……なんて奴だっ!」

「だけど、もう大丈夫そうぞ! 大手柄だなルーケンさんっ!」

——二人以上に、歓喜の渦を巻き起こすのだった。その様子を一瞥するダタツツも、

口元を微かに緩めている。

アンジャールノンや私兵団は倒され、ダイアン姫の身柄も奪還された。

もう、ババルオを守るものは何もない。

力だけがものを言う舞台に立つ彼は、ダタツツとの対峙を余儀無くされるのだった。

「ぐ、ぬ、うあ……！」

「——さて。手札はもうなくなってしまったな。力が正義、とするならお前が悪者になつてしまふが、どうする？」

「な、なんなんだ……！ アンジャールノンを倒した剣術といい……貴様、一体何なのだ——」

「帝国式投剣術のことか。帝国の上流貴族のお前なら、知っているはずだろう」

「投剣術……投剣術だ?!」

ダタツツの口から語られた、帝国式投剣術という流派。その名を聞いたババルオは、直に見た彼の技と照らし合わせ——自らの私兵達が身につけていた闘剣術とは違う存在にたどり着くのだった。

——帝国式投剣術。

この世界を支配していた魔王を倒すため、異世界から勇者が召喚される数百年前。まだ、投石機も発達していない頃。

魔王が使役する飛竜の群れに、多くの兵士達が蹂躪されていた。剣も槍も届かず、矢では鱗を貫けない。そんな空の尖兵に対抗するべく、当時の帝国騎士達は矢や槍に勝る質量を持つ剣を、正確に投擲する術を練り上げたのである。

矢の如し速さで竜の鱗を貫く、飛空の剣。それが、帝国式投剣術。

臂力に恵まれた一部の兵士にしか扱えぬその技は、勇者が現れる時代が来るまで人類の矛であり続けたという伝説を残している。

だが、投石機や大砲の発達に伴い、投剣術は歴史の中で廃れていき……実戦で使う兵士はいなくなつたと言われている。

今では古文書にその名が僅かに登場するのみであり、そういった類に触れる機会を持つ特権階級——皇族や上流貴族の一部にしか知られていない。

（あのバルスレイ将軍が投剣術の研究をしていたと聞いたことはあるが……まさか、この小僧……！）

帝国軍最高司令官として、王国と戦い抜いた猛将バルスレイ。投剣術を現代に繋いでいる者など、その男しかない——バルスレイはそう踏んでいた。

しかし、ここにいるのはバルスレイではない。彼以外の男が投剣術を学び、体得までしているとは、にわかには信じられなかつたのだ。

そこでバルスレイは、ある一人の男の存在を思い出す。

六年前の戦争の中で——バルスレイの指揮下のもと、鬼神の如き剣技を以て王国軍を、アイラックス將軍を屠った劍士がいたことを。

(そんなバカな……いや、しかし……それ以外には考えられんツ！)

その存在と、ダタツツの影が重なっていく。目に映るビジョンに、ババルオは息を飲むのだった。

「貴様は帝国のツ……！」

そして——ビジョンが示した仮説を語るべく、肥え太った唇が動き出した時。

「——そこまでだ、ババルオ。王国の民を苦しめてきた罪、今こそ清算してもらおうぞ」
民衆の背後から迫る、騎馬の群れ。その軍勢に守られた馬車の中から響く、荘厳な声
が——この場にいる全ての人間から、注目を集めるのだった。

ババルオの私兵達とは違う、煌びやかでありながら儼かな雰囲気を湛える鎧を纏う——
帝国の精鋭騎士団。その一団は鮮やかに剣を抜き放ち、瞬く間に臨戦態勢に入っ
ていく。

そして、彼らの背後に立つ指揮官——艶やかな銀髪と逞しい口髭を持つ、壮年の騎士
は。己が歩んできた歴戦の道に裏打ちされた、鋭い眼差しで——精鋭騎士団の登場に怯
えるババルオを射抜くのだった。

「逃げられるなどは——思わぬことだな」

「バルスレイツ……!!」

バルスレイ将軍と、その直属である精銳騎士団に包囲され——ババルオは、四面楚歌となる。

……そして、この瞬間。ババルオの権勢による支配は、終わりを迎えるのだった。

第11話 離れていく心

ババルオ。アンジャルノン。彼らの私兵であつた帝国兵達。

その全員が今、縄で縛り上げられている。闘技舞台に纏めて放り込まれたその様を、バルスレイは冷ややかに見つめていた。

「力を持つこと——強者であることの重さを知らぬ者ほど、早く身を滅ぼす。それを悟るには、些か遅すぎたようだがな」

「おのれバルスレイツ！ この儂にこのような無礼を働くとはッ……！」

「礼を欠いたのは貴様の方だろう。貴様が働いた悪行のために、皇帝陛下はいたく悩み苦しんでおられる。——その元凶たる貴様が、礼節を語るな！」

「……ひ、ひはっ……！」

研ぎ澄まされた眼光が、有無を言わさぬ鋭さを帯びて、ババルオの眼を貫いていく。その殺気に？まれ——唾を吐いて反抗していたババルオは、あつさりと萎縮してしまうのだった。

為政者としての度量すら持たないその姿に、バルスレイは軽くため息をついて周囲を見渡していく。拘束された帝国兵達とアンジャルノンは意識が混濁しているのか、捕縛

された時もほとんど無抵抗だった。

事情を聴取してきた配下の騎士達によると——ある一人の旅人の仕業なのだという。

「……」

その旅人は今、舞台の上まで駆けつけてきた少女の対応に当たっている。彼の胸ですり泣く少女の後ろでは、民衆が彼を讃える声を上げていた。

一方。ある男性の肩を借り、ようやく立ち上がった姫騎士は——腑に落ちない、と言いたげな視線を旅人に送っている。それは、彼女一人だけではなかった。

旅人の活躍をただ純粋に称賛する者もいれば、そのただならぬ強さを持つ彼は何者なのか、と訝しむ者もいる。戦いを終えて熱が収まり、民衆に冷静さが戻ろうとしているのだ。

ダタツツと呼ばれる旅人の背を見遣り、バルスレイは目を細める。その瞳は、「見知った人間」を見つめる色を滲ませていた。

「ダタツツさんっ……よかった……よかったよおっ……!」

「ハンナさん、そんなに泣かないでください。ジブンは大丈夫ですから。それより、あの子は……」

「街の人が、手当てしてくれて……今は料亭でぐっすり眠ってるよ……。ダタツツさんのおかげで、ローク君も……」

「……そうですか。大事に至らず、何よりです」

すすり泣く少女——ハンナは、戦いの終焉を悟るや否や闘技舞台上に上がり込み、真つ先にダタツツの胸に飛び込んでいた。その行動の速さから、彼を案じる想いの強さが窺い知れる。

「しかし……まさか帝国軍の元司令官が来るなんてなあ。しかも、ババルオの野郎を捕まえに……」

「……バルスレイ將軍は元々、王国を尊重する姿勢を取っていました。ババルオ様の話を聞き付け、こちらまで参られたのでしよう」

「すると、この將軍様が居るなら王国は大丈夫つてことですか!? 姫様!」

「ええ。ババルオに支配されていた頃とは、正反対の……街になるでしょう」

バルスレイ將軍を見つめ、ダイアン姫はそう断言する。その言葉を受け——民衆は大いに沸き立つのだった。

「おい、聞いたか! もうババルオの支配は終わったんだ! この国に、やっと本当の平和が来たんだツ!」

「もう王国を苦しめるヤツはいない! もう、ババルオの時代は終わりだ!」

「王国万歳! ダイアン姫万歳ツ!」

六年に渡るババルオの支配に苦しんできた人々は、その苦しみを喜びに変え、声を上

げる。今日を迎えるために生きてきた、と言わんばかりの歓声だ。

ダタツツの実態を思案していた一部の人も、その吉報に心を奪われている。

「……」

しかし。王国に住む人間の誰もが喜んでいるはずの、この狂喜の渦の中。

その中心にいるはずのダイアン姫だけが、浮かない表情のままだった。

彼女の視線は未だ、正体不明の旅人に向かっているのだ。

「……ダタツツ、様」

「あ、ダイアン姫！ お怪我は……！」

「構いません。私ならこの程度の負傷、どうとでもなります」

声を掛けられたダタツツは慌てて駆け寄ろうとするが、ダイアン姫は片手を伸ばして

それを制止する。それが遠慮ではなく——警戒によるものであることは、彼女自身の眼

の色が物語っていた。

その視線を受け、ダタツツも表情を引き締める。彼女が自分にそのような眼差しを向

ける理由に、勘付いたのだ。

「ダタツツ様。あなた様のおかげでババルオの魔手から、この国を守ることが出来まし

た。父に代わり、王国を代表して感謝致します」

「いえ、そんな……。ジブンは当然のことをしたままでですよ」

「——帝国の剣術で帝国指折りの武人を倒すことが、当然のことですか？」

どことなく事務的な言葉遣いで礼を言うダイアン姫に、ダタツツが遠慮するように頭を下げた時。彼女は問い詰めるように、語気を強めた。

その剣呑な雰囲気に触れ、ダタツツの眉が微かに動く。次いで、戦いが終わったにもかかわらず緊張が解けない姫君の様子を見て、ハンナの表情にも不安の色が現れてきた。

ダイアン姫に肩を貸しているルーケンも、ただならぬ状況に目を見張っている。

「ダタツツ、さん？」

「ひ、姫様？ それってどういう……」

「ババルオの私兵達とアンジャルノンを打倒したあなた様の剣。速さや威力こそ桁違いでしたが、あの型は間違いなく帝国式闘剣術のものでした。——帝国出身のあなた様が、なぜババルオと戦う必要があったのですか？」

「て、帝国出身って……!」

「本当なのかい、ダタツツ君!」

「……」

近くで話を聞いていたルーケンとハンナは、驚愕の表情を浮かべてダタツツを見遣る。彼を見つめるその瞳は、困惑の色に塗りつぶされていた。

ダタツツはその視線を浴び、いたたまれない表情で目を伏せる。そんな彼の反応を見て、ルーケンとハンナはダタツツという旅人の知られざる一面を、垣間見てしまうのだった。

「……確かに彼は、帝国出身の剣士です。しかし、今はどこにも属さぬ流浪の傭兵。いつでもどこで誰のために戦おうと、不思議ではない身の上です。貴方がたが気にすることはありません」

「……!? バルスレイ將軍、彼をご存知なのですか!？」

その時。

ダタツツの側に立つバルスレイの言葉に、ダイアン姫が目を見開く。一介の傭兵と元司令官に繋がりがあるといふ、にわかには信じがたい事実には彼女は驚愕していた。

「彼は以前、私の下で修業していた名うての騎士だったのですが……数年前、旅に出たきりです。ここで会うとは思いませんでしたよ」

「そう、だったのですか……。しかし、戦勝国である帝国の身分を捨ててまで、なぜ王国に……」

「私と道を違えても、王国を尊重する気持ちは彼にもあります。恐らくは風の噂でパバルオの話を知り、居ても立っても居られなかったのでしょうか」

「……」

そんな彼女を説き伏せるように、バルスレイは次々とダタツツの人柄を語っていく。ダイアン姫はそれを受け、半信半疑の面持ちで再びダタツツを見遣るのだった。

（帝国軍の総司令官であり、戦後の王国を擁護されていた方が、わざわざ嘘を吐くとは思えない。だけど……彼の下で修業していた経験だけが、あの途方もない強さの理由なのでしょうか……）

信じられないわけではない。それでも、納得しきれない。そんなもどかしさを抱えて、ダイアン姫はダタツツを見つめていた。

「バルスレイさん……」

「嘘は言っていないだろう。ここでお前に会えると思わなかったのは本当だ。とにかくこの場合は、私の言い分に乗じておけ」

「……」

ダタツツの方も、心配げな表情でバルスレイの方を見上げていた。そんな彼を元気づけるように、バルスレイは穏やかに微笑んでいる。

「ま、昔がどうだったかは知らないが今のダタツツ君は、俺達の味方ってことだよな。バルスレイ様がそう言うんだ、間違いない！」

「そつ、そうだよ！ それにダタツツさんの歳だったら戦争にも行つてないはずだし……きつと、これから仲良くなれるよねっ！」

一方、ルーケンとハンナは今の話でダタツツが信頼に足る人物であると判断したらしく、すっかり落ち着きを取り戻しているようだった。

その根拠には——ダタツツの年齢を考慮すると、六年前の戦争に参加していたとは考えにくい——というものがあつた。当時の帝国軍では、少年兵の募集は行われていなかったからだ。

あの争いのただ中にいなかったのなら……王国人の血に汚れていないのなら、今からでも分かり合えるかも知れない。そんな期待が、帝国出身という壁を乗り越えようとしているのだ。

「そうだ！ どこにも属してないってなら、今から王国の騎士団に入ったらどうよ！

ダタツツ君の腕なら、間違いなくトップエースだぜ！」

「う、うん、そうだよ！ それ、すっごくいいと思うな！」

「……その時はハンナ、差し入れて胃袋挿んでやりな」

「だっ……だからそういうのじゃないってばああ！」

帝国出身だとしても、今からなら。傷付けあっていない今なら。

王国人として、彼を迎え入れたい。騒ぎ立てる彼ら二人の、そんな想いが目に見えるようだった。

「……」

しかし。

ダタツツはその想いに応える素振りを見せず、再び目を伏せる。彼らの気持ちを知つてなお。

——否。知ったからこそ、目を伏せたのだ。

「……そうか。そういうことだったのか。ようやく合点が行ったぞ！ バルスレイツ
！」

「……なに？」

すると——縛り上げられ、意気消沈していたババルオが突如怒号を上げる。禿げ上がった頭に浮き出た血管が、その興奮の凄まじさを物語っていた。

その唐突な変貌に、バルスレイは眉を顰める。この醜男が今更暴れ出したことへの呆れが、表情に現れているようだった。

そんな政敵の顔色に構わず、ババルオは唾を飛ばして声を荒げる。精一杯の鬱憤を、ぶつけるかのように。

「貴様……初めから儂を失脚させることが目的で、今まで泳がせていたのだなッ……！」

この街の娘達を、生贄にして！」

「何を言い出すのかと思えば、どう解釈しようとして貴様の勝手だが、我々は帝国貴族の尊厳のために貴様を裁いたに過ぎん。タネを蒔いたのは貴様だ」

「——そうやって儂の地位を奪うのが狙いだったのか……！　死んだと見せかけた『帝国勇者』を利用してッ！」

帝国勇者。

その一言が飛び出した瞬間。

「帝国、勇者……!?!」

「帝国勇者って……あの、六年前の戦争で王国軍を蹂躪したっていう……」

「あの、帝国勇者……!?!」

この場にいる人間全てが——凍り付いた。

喜びの渦は消え去り、氷原が広がるように辺りは静まり返る。誰もが、ババルオの言葉に耳を奪われていた。

「貴様ッ……!?!」

「帝国勇者に剣を教えた貴様のことだ。帝国勇者を死んだことにしていたのも、今日になって再来したことも、全て儂を追い落として自分が王国を手に入れるための策謀だったのだろうッ！」

「——お前達！　この男をさっさと連行しろ！　これ以上戯言を吐かせるな！」

「ぬううあッ！　離せッ、離さぬかアッ！」

その注目に乗じるように、ババルオはさらに声を張り上げていく。バルスレイを糾弾

するかのよう。

それに激昂したバルスレイの命により、精銳騎士団は直ちにババルオの両脇を固め、馬車の中へと連行していった。彼が馬車に入れられ、扉が閉まるまで——バルスレイと「帝国勇者」への罵詈雑言は続いていた。

そうして騒動の火種が断たれ、再び場は静けさを取り戻したが——すでに辺りに漂う不穏な空気は、取り返しをつかない重さに達している。

ババルオが「帝国勇者」と呼び、憎しみの視線を注いだ男——ダタツツ。

彼の全身には、王国に住まう全ての人々の「畏怖」の眼差しが注がれていた。

王国に住まう全て。そう、ハンナやルーケンも、その例外ではなく。

彼の側には、王国人は一人も居なくなっていた。

今しがた証明された彼の強さが、「帝国勇者である」という言葉に圧倒的な説得力を持たせていたのだ。

「う、そ……ダタツツ、さん、が……!」

「帝国、勇者……!?!」

あれほどダタツツに近づいていたはずの二人の心が、弾かれるように離れていく。悍ましいものを見る眼で自分を見つめるハンナとルーケンを見遣り、ダタツツはその変化を悟っていた。

ダタツツは帝国勇者と呼ばれた、悪魔の尖兵だった。真偽を問わず、その噂が民衆を通じ、城下町一帯に轟くのは時間の問題だろう。

(自分と同じ年頃の息子を奪うのは、どんな気分だ帝国勇者……！)

帝国勇者と解るや否や、怯えるハンナを抱き寄せ、憎しみの視線をダタツツに向けるルーケン。怒りや哀しみをなймаぜにしたその胸中は、強く表情に表れている。

その眼差しを浴びたダタツツは、眉を顰めて瞼を閉じ——沈黙を貫いていたが。

「……じゃあ、バルスレイさん。ジブンは、もう行きます」

「ダタツツ……」

たった一瞬の苦笑いを、バルスレイに向け——踵を返していく。自分がここに居てはならない。そう、眼差しで語りながら。

そうして、立ち去ろうとする彼が闘技舞台を降りる瞬間。

「帝国勇者が……帝国勇者が生きてたんだ！」

「につ、に……逃げろおおお！ みんな殺されちまうぞおおおっ！」

「きやああああ！」

彼の進行方向に立っていた民衆が、悲鳴を上げて散り散りに逃げ出していく。かつてダタツツに称賛を送っていた人間全てが、蜘蛛の子を散らすようにこの場から離れようとしていた。

そんな逃げ惑う人々の背を、ダタツツは静かに見送る。諦めの表情にも似たその面持ちは、民衆の人影が消えかけた頃に、ダイアン姫に向けられた。

「……申し訳、ありません。ただの旅人として力になれることがあれば、と思っていたのですが……やはり、ジブンが来るべきではなかったようです」

「……否定を、しないのですね」

「ジブンから語るつもりはありませんでしたが、嘘まではつけませんから」

警戒を絶やさず自身を睨みつけるダイアン姫に対し、ダタツツは苦笑を浮かべたまま白状するように語る。己を象徴する「帝国勇者」の名を、ありのままに受け入れて。

「いいのか。お前は、それで……」

「ジブンに出来ることはここまでです。今の王国に友好的と知られているあなたが来た以上、ジブンはもう必要ありません。ここに居ても、いたずらに町のみんなを怖がらせてしまうだけです」

「——それで、今度はどこに行くつもりだ。皇女殿下は、今もお前を想い続けておられるのだぞ」

「——ここではない、どこかです。今は、それだけしかわかりません」

引き留めるように声を掛けるバルスレイに対し、ダタツツは振り向くことなく歩みを進めていく。「自分を想う人がいる」という言葉に一瞬だけ止まった足も、数秒だけの間

を置いて再び動き出していた。

だが。

「待つてくださいッ！」

ダイアン姫の叫びが、ダタツツの動きを止める。

彼女の叫びに反応して思わず振り返る彼の目には、ルーケンの肩から離れ、ふらつきながらも両の足で立ち上がる姫騎士の姿が映し出されていた。

「……ダイアン姫……!?」

「なぜ、なのです。わたくし達を苦しめ、母上を！ ロークの父上を！ アイラックス將軍を！ 王国の人々を奪ったあなたが！ なぜ、今になってわたくし達を助けるのですか！ なぜ、『帝国勇者』が——わたくし達を救って下さった、あなたなのですかッ！」
ダイアン姫はいつになく興奮した様子で、畳み掛けるように声を張り上げていく。その表情は怒り以上に——悲しみに溢れていた。

おとぎ話の王子様のように颯爽と駆けつけ、華麗な技で窮地を救う美男の剣士。それは本来ならば、女としての心を焦がし——淡い恋さえ抱かせてしまうような存在。

しかしその実態は、自分達から全てを奪った「帝国勇者」だった。その受け入れがたい事実が、ダイアン姫の中に負の感情を芽生えさせているのだ。

その責め立てるような言葉の波を浴びて、ダタツツは逡巡するように僅かに目をそら

し——

「王国と戦う理由を失ったから、ですよ」

——絞り出すような声で、小さく呟くのだった。追い詰められた人間が吐き出す、真実の言葉として。

（そんな……そんな一言で、わたくし達をこんなにも惑わせて……ッ！）

その言葉を受け、ダイアン姫は桜色の唇を強く噛み締める。彼女の中で渦巻く、帝国勇者への怒りは——憎しみとは異なる色を滲ませていた。

彼に救われた恩があるからこそ。自分達のために戦った彼の勇姿に、一時でも惹かれた自分がいたからこそ。彼が帝国勇者であることが、許せなかったのだ。

（許せない……！ あなたが「帝国勇者」でさえなければ、ただの「帝国出身の剣士」でしかなかったなら……こんな苦しい気持ちにもならなかった！ あなたに、もつと素直に、ありがとうと言えた！）

そして、彼女の王女として——女としての怒りは。ある方向へと向かっていくのだった。

「……そうですか。だから帝国の身分を捨て、ただの旅人になった、と？」

「……そうなります」

「わかりました。ならばわたくしも、『ただの旅人』としてのあなたを相手に、話をさせ

て頂きます」

「えっ……!?!」

ダイアン姫の冷たい氷のような声色に、ダタツツは言い知れぬ恐怖を感じ——目を見張る。彼女の近くに立っていたルーケンとハンナも、その恐怖を間近で体感していた。

「ただの旅人の、ダタツツ様。ダイアン王女の名において——あなたの腕を見込み、王国騎士団の予備団員として推薦させて頂きますわ」

「一国の王女」が「流浪の旅人」を、予備とはいえ騎士として推薦する。本来ならば異例の状況であり、根無し草の旅人が手にできる最高の栄誉であるはずのその交渉は——凍てつくような冷たい空気の中で行われていた。

「ひ、姫様、本気ですか!?! だってこの男は……!?!」

「過去はどうあれ、ここにいるダタツツ様はただの旅人です。それに腕の立つ人間を一人でも多く取り立てることは、騎士団が萎縮している我が王国の急務」

「し、しかし……!?!」

「——それに。ダタツツ様の用事は終わっても、わたくしの用事は終わっておりませんので」

ダタツツを警戒するルーケンに対し、にこやかに語るダイアン姫。しかし、その瞳は——氷のように冷ややかで、氷柱のように鋭い。口元のような緩みの色は、まるでない。

その歪さが、ルーケンを黙らせ——ダタツツを戦慄させていた。三十センチ近い体格差を物ともせず、真つ向から自分を見据えるダイアン姫の眼光に当てられ、ダタツツはえもいわれぬ威圧感を覚えるのだった。

「もちろん、引き受けて頂けますわね？　ダタツツ様」

「いえ、ジブンは……」

「引き受けて、頂けますわね？　帝国勇者などとは違う、ただの旅人のダタツツ様」

選択の余地など与えない、と言わんばかりであった。炎の如き激しさと、吹雪の如き冷たさを兼ね備えた彼女の怒気は、帝国勇者さえ黙らせる勢いを持っていたのだ。

帝国勇者が無所属である今、その力を王国の手元に置けるチャンスがあるなら活用すべき。そんな打算を口実に、彼女は己の怒りを眼前の旅人にぶつけようとしていた。

それは、彼女なりの「復讐」だったのかも知れない。

「……わかり、ました。謹んで、拜命致します」

「……ええ、ありがとうございます」

だが、帝国勇者として王国を苦しめていたダタツツには、それに逆らえない負い目がある。ゆえに彼は彼女の胸中を悟ってなお、従う道を選ぶのだった。

「……とんでもないことに、なったものだ」

去り行くダタツツを引き留め、あまつさえ騎士団に引き入れてしまったダイアン姫の

眼力。

その威力を目の当たりにしたバルスレイは、ため息まじりに——肩を落とす「帝国勇者」を見遣るのだった。

「……」

一方。

そんな彼らのやり取りを、ルーケンの腕の中で見守るハンナは。

（ダタツツ、さん。あなたは、本当にお兄ちゃんを……）

悔いを残した表情で、ダイアン姫に跪くダタツツを見つめていた。

第12話 王国騎士団・予備団員ダタツツ

「ふっ……はッ!」

ババル才邸を舞台にした戦いから、十数日の時間が過ぎる頃。

あの日と変わらない青空の下——王国騎士団予備団員ダタツツは、独り練兵場で素振りに励んでいた。

手にした木剣は幾度となく空を切り、赤い縁取りで造られたプロテクター状の予備団員用鎧が、太陽の輝きを強く照り返している。

正規団員の兜に在るものより、一回りほど小さい一角も、眩い煌めきを放っていた。

「お……おい。いいのか、いつまでもあんなことさせといて。飽きさせて機嫌を損ねたりしたら、俺達の命が危ないんじゃないやあ……」

「じゃ、じゃあお前が行けよ! 帝国勇者の稽古相手なんかできるわけないだろ!」

「なんで帝国勇者がここに居着いてんだよ……姫様は何をお考えで……!」

その姿を、王国騎士団の正規団員達は遠巻きに眺めていた。——しかし、誰一人としてダタツツに話し掛けようとする者はいない。

帝国勇者をダイアン姫が従えたという噂は、既に町中のみならず、王宮内にも広がっ

ている。

だが——王国の騎士になつたとしても、人々にとって彼が、恐るべき「帝国勇者」であることに変わりはない。

帝国兵にさえ萎縮していた騎士団が、帝国勇者として知られたダタツツに、近付けるはずもなかつたのだ。

バルスレイ將軍がバルオに代わり監視役となつた今では、帝国の駐屯兵の人数は大きく削減され、町民に横暴を働くこともなくなつたが——帝国勇者の存在ゆえ、人々に渦巻く「恐れ」は未だに根深く残されている。

そんな状況であるがゆえに彼は、本来ならば雑用が主任務であるはずの予備団員でありながら、掃除も洗濯も任せられず——全ての団員から距離を置かれている。

劍の稽古に応じる人間も、雑用を任せる人間もない。そうなれば結局は、独りのまま劍を振るい続けるしかないのだ。

（皆が怯えているのがわかる……。バルオのような奴に付け入らせないためにも、当分はダイアン姫の命に従うことにしたけど……。長居はできない。せいぜい、ヴィクトリアという人が戻ってくるまでの「繋ぎ」ってところか）

すると——運動を長時間続けていたせい、ダタツツの体に巻かれていた包帯が、はらりと落ちてしまった。アンジャルノンとの戦いで負った傷は、今も残っている。

そう——ダイアン姫は、ダタツツに回復魔法を施さなかったのだ。

本来在るべき姿から最も遠く離れた帝国勇者に、由緒正しき血統が成せる秘術を捧げる。

その行いに、彼女は踏み切れなかったのである。

そしてダタツツも、そんな彼女に術の行使を求めるとはせず——結局は王宮の医師による、他の騎士と変わらぬ待遇の治療を受けたのだ。

「……また、医師殿に世話をかけてしまうな」

彼を恐れているのは騎士や町民達だけではない。彼の治療を請け負っている担当医も、普段から酷く怯えた様子でダタツツに接していた。

本来なら包帯が取れるほどの運動は避けねばならず、それを破れば彼の叱咤が飛ぶはずなのだが——ダタツツに対してはそれもない。ただ震えながら、包帯を取り替えるのみ。

それが自身への恐怖によるものだと知っているダタツツは、苦い表情で包帯を拾う。これ以上動いて包帯を落とせば、医師の寿命を縮めるだけだからだ。

（日課の素振りもこなせない毎日になってしまったな……。王国を狙う敵が減るのは、いいことかも知れないが）

練兵場から背を向け、立ち去る仕草を見せるだけで——騎士達の安堵する声が聞こえ

てくる。その息苦しさにため息をついて、ダタツツは静かに歩き始めた。

——王国の姫君が帝国勇者を召し抱えた、という噂は城下町を中心に広がりつつある。諸外国の耳に入るのも、時間の問題だろう。

それを信じる者はダイアン姫の血筋を狙うことはなくなるだろうし、帝国勇者の死を疑わない者は返り討ちに遭う。ダタツツが留まれば今後も王国が安全であることは、紛れもない事実であった。

しかし、彼の力という防壁の内側に生きる人々は、その限りではない。

かつて自分達を敗戦国に墮とした最強の男が、騎士として我が物顔で国内を闊歩する。それは国民にとって、街中に猛獣を放たれるよりも遥かに恐ろしいことなのだから。

いたずらに王国人を恐れさせず、他国の干渉も遮る方法。

その答えが「誰にも関わらない」ことに行き着くまで、そう時間は掛らなかつた。

(こうして王宮内から出ないようにすれば、少なくとも町のみんなは……ハンナさんやルーケンさんは、怖がらずに済む。今はきつと、これでいいんだ)

自分に向けられた、深い悲しみと怒り。あの二人の視線から確かに感じた、剥き出しの感情。

その記憶は克明に、彼の脳裏に焼き付いている。誰もが彼を避ける理由を、突き付け

るかのように。

そしてそれが当たり前なのだ、ダタツツは受け入れようとしていた。諦めようとしていた。

「待てっ！」

——だが。

それを、当たり前前にさせない者がいた。

正規団員の鎧を纏う、小さな騎士。その人物には——恐れを微塵も窺わせない、晴れやかな瞳がある。

今の正規団員の誰もが持たない、騎士としての掛け替えのないものを秘めたその瞳は——この国に災厄を齎した最恐の男を、ただ真っ直ぐに射抜いていた。

「……ローク君か。すっかり元気になったみたいで、よかつたよ」

「るっせえ帝国勇者！ どういういきさつで騎士団になったか知らねえが、オレはお前を認めてなんかいねえんだからな！」

ダイアン姫の治療を受け、全快したロークの全身からは、弾けるような氣勢が溢れている。

鎧の輝きに見合う気高さが、その小さな身体に詰め込まれているようだった。

「ば、バカ！ 逃げろローク！」

「お前まで殺されちまうぞ！」

そんな正規団員達の叫びにも耳を貸さず、その瞳は強くダタツツを貫いていた。

「いいか、帝国勇者。父上の仇は、オレが必ず取ってやる。だからそれまで、ここから逃げるんじゃないぞ！」

「……ああ、わかった。いつでも、受けて立つよ。ところで、どこまで付いてくるつもりなんだい？」

「一日中さ。オレは姫様から、お前の監視役を任されてるんだ。それに、こうしてお前に引っ付いて研究していれば、お前を倒す作戦も立てられる！」

——だが、駆け引きにおいては年相応のようだ。当の「仇」本人の前で、鼻高々に手の内を語るほどの愚策はないというのに。

隣を歩きながら胸を張り、どうだと言わんばかりに胸を張るロークの姿を、ダタツツは微笑ましく見守っている。だが、彼はある場所に辿り着いたところで、困ったように眉を顰めてしまった。

「……なるほどな。だけど、ここから先はよした方がいい。君には刺激が強いからね」

「え？　——あ」

ダタツツとロークが辿り着いたのは——水浴び場。練兵場での訓練を終えた騎士達
が、鍛錬の汗を流す場所だ。

その入り口を前にして、ロークの顔が真っ赤に染まる。ダタツツが言う通り、「彼女」には刺激が強過ぎたのだ。

ロークの正体は、騎士団のような宮内の人間以外にはほとんど知られていない。男帯の騎士団に囲まれて育った結果、このような男勝りに育ったことも含めて。

「……っ！」

「すまない。なるべく早く済ませるから、そこで待っていてくれ」

ロークは唇を強く噛み締め、ダタツツを睨み上げる。そんな彼女に苦笑いを浮かべながら、ダタツツは水浴び場へ――

「ダ、ダ、ダタツツ殿！」

――入っていく直前。一人の騎士が、彼を呼び止めた。慄くようなその表情は、他の団員と同じ色を湛えている。

何かの用件があり、怯えながらもダタツツに報告しに来たのだろう。正規団員が予備団員にへりくだるといふ、本来ならばあつてはならない状況に、ロークは拳を握り締めている。

そんな彼女の姿を一瞥し、速く彼の用件を済まさねばならないと察したダタツツは、素早く視線を報告に来た騎士へと移す。

「どごうしました？」

「あ、い、いえ……。実は先程、民間人から騎士団への寄付がありました……。予備団員の剣と盾に充ててほしいと……」

「予備団員の……？」

現状、予備団員はダタツツ一人しかいない。戦前は数十人規模の人数だったが、王国がアイラツクス將軍を失い、敗走を繰り返していくうちに辞任していく団員が続出し、戦後となった今では赤縁の鎧を着た騎士が街をパトロールすることはなくなっていた。

ゆえに今の時期に予備団員充ての寄付をするというのは、ダタツツ個人に寄付をするに等しいと言える。彼が唯一の予備団員であることが広く知られている以上、それを知の上で寄付をしてきた可能性が高い。

帝国勇者に寄付をすることで、媚を売ろうとしているのか。そうしなければ殺されると思っているのか。

（あるいはその両方、か……しかし）

内心でため息をつきながら——ダタツツは報告の内容を思い返した。

剣と盾に充ててほしい。つまり、アンジャルノンとの戦いで破損した銅の剣と木の盾に代わる装備を新調したい、ということだろう。

装備を、買い換えてあげたい。

そんなことを言ってくれた人が居たことを、ダタツツは静かに思い出していた。

(まさか……いや、まさか)

自分を見つめる、怯えた瞳は——今も深く脳裏に焼きついている。だが、ほんの僅かな可能性の欠片は、ダタツツの心を捉えて離さない。

「それから、その寄付者から差し入れもありまして。騎士団食堂に昼食が届けられていますので……」

「——わかりました、ありがとうございます……」

言うが早いのか、ダタツツは食堂に早足で向かっていく。焦りの色を漂わせる彼の様子を目の当たりにして、報告に来た騎士とロークは目を丸くし、互いに顔を見合わせていた。

驚愕に値する出来事であったからだ。帝国勇者が、焦っていると。

(……この、香りは……!)

その頃。廊下を渡り食堂に近づいていくダタツツは、鼻腔を擽る香りに引き寄せられていた。

帰巢本能の如く——よく知る「香り」を、求めて。

そして、扉を開いて……食堂へ踏み込んだ、その時。

(……ああ、やつぱり)

どこか懐かしく、遠い香り。二度と見ることはないだろうと、思い続けていた景色。

それが今——ダタツツの前に広がっていた。

パンとスープ。脂が乗ったステーキ。

……あの料亭で見慣れたランチが、ダタツツの席に用意されている。

「……本当に。買い換えてくれたんだな……」

震える片手で顔を覆う彼の口元は、安堵するように緩んでいた。ようやく、わかったからだ。

自分に向けられた感情は——憎しみだけではなかったのだと。

第二章 追憶のアイアンソード

第13話 王国騎士ヴィクトリア

大陸の大部分を制覇し、数多の軍勢を従える帝国。その中枢である大都市——帝都の中央には、雄大な帝国城が聳え立っている。

そして、帝国を統べる皇帝の眼前には今——最強と名高い王国の剣士が跪いていた。その周囲では、名だたる帝国貴族や騎士達が拍手を送っている。

「王国より来たる勇敢な剣士ヴィクトリアよ。貴女の指導が功を奏し、我が帝国軍はより精強な力を手にすることが出来た。この国を統治する者として、礼を言う」

「……ありがたき、幸せ」

煌びやかな装束に身を包む皇帝は、白い髭を撫でながら、自身がヴィクトリアと呼んだ女性を見下ろした。

腰に届くほどの長さを持つ、ストレートの黒髪。雪のように白く、透き通る柔肌。紅色を湛える艶やかな唇。

男性にも劣らぬ長身でありながら、その豊満さを激しく強調している胸と臀部。滑らかなくびれを描く、その肢体。

それらを鎧と兜に覆い隠した絶世の美女は、皇帝の前で跪き——黒曜石の色を湛えた瞳で、彼の眼を見上げていた。

「貴女の働きがなくば、大陸の統一による世界平和という帝国の悲願は大きく遠のいていただろう。さすがは、かのアイラックス將軍の御息女だ」

「……ありがとうございます。劍の道で此の身が評価されるのであれば、父も浮かばれることでしょう」

兜によつて表情こそ隠し通しているが、ヴィクトリアの顔色は険しさを滲ませている。

（父上……私が、どうしてこのような……！）

六年前に父・アイラックスを失う以前から、彼女は彼の指導の下で劍を学び続けた。た。

その教えの中で彼女は、ある一つの矜持を説かれていた。「戦で軍人が命を落とすのは当然。軍人の娘として、戦争が終わった後に相手を怨むような浅ましさを持つてはならない」——と。

ヴィクトリア自身、その教えを真摯に受け止め、戦後の六年間を生きてきた。……が、彼女の奥底にはまだ、捨てきれぬ人として、娘としての感情が渦巻いている。

父の仇が、目の前にいる。だが、その父に怨んではならぬと教わっている。

敬愛する父を奪った帝国は、許せない。だが、そのために父の想いを踏み躪ることも出来ない。

そうした私怨と矜持の板挟みに苛まれ、彼女は今も皇帝の前で、苦悶の表情を浮かべ続けているのだった。

帝国人が本当に、平和を追求するために戦う人々ばかりだったならば——皇帝のような理想を確かに持っていたならば、その怨みを乗り越えることは今より容易かつただろう。

しかし実際のところ、帝国貴族の多くはババルオのような私欲に塗れた俗物ばかりであり、武人ですらもアンジャルノンのような人間がいる始末。

ここで帝国兵を指導している間も、自分に下卑た笑みや好色の視線を向ける人間は星の数ほど居た。

(あんな腐った豚共のために、父上は……！)

その現実が、「偉大だった父は、こんな連中に屈するしかなかったのか」と、ヴィクトリアの憤りに拍車を掛けていた。

(なのに、あなたは……死んで逃げようというのか、帝国勇者！)

そして、その怒りの矛先は今——父を殺めた張本人である帝国勇者へと向かっている。六年前に死んだと言われている、帝国勇者へと。

「余も、そう願っている。——さて。此の度の活躍に敬意を表し、貴女には授けたいものがある。……持つて参れ」

「……………」

すると。皇帝は片手を上げ、誰かを呼び寄せるように声を上げる。

次いで、飾られた言葉で口々にヴィクトリアを褒め称えていた貴族達が、一瞬にして静かになってしまった。

（なんだというんだ……こうしている間にも、ババルオが王国を——姫様を脅かしているというのに！）

それは用事が済んだ以上、早くダイアン姫の下に帰還したいと考えていたヴィクトリアにとっては苛立ちを募らせる展開だった。元々、王国の立場を悪化させないために出稽古に赴いたに過ぎないのだから。

帝国の金品や勲章に興味を持たない彼女には、褒賞など枷にしかならない。兜の奥で歯を食いしばり、彼女は皇帝が見つめる方向に視線を移す。

——そこには。

ウエディングドレスのような白装束に身を包む——可憐な少女が立っていた。

鮮やかな蝶の髪飾りで纏められた、艶やかな銀髪。水晶の如く透き通る、きめ細やかな柔肌。芸術にも優る絶対的な美貌。蒼空のように澄んだ瞳。

見る者全て——そう、先程まで激しく苛立っていたヴィクトリアでさえ、我を忘れて見惚れる程の美しい美少女が、この場に現れたのだった。

(……そうか……この方が……！)

ヴィクトリアに、この少女との面識はない。しかし、会ったことがなくとも誰であるかは明らかであった。

皇女フィオナ。この帝国を統べる血統を持つ、皇帝の一人娘。

——そう、ダイアン姫と同じ、この世界における数少ない「魔法使い」なのだ。

(勇者召喚の力を持つ、皇族の正当後継者……！　しかし、病弱でほとんど公の場に出ることはない和聞いていたが……？)

まるで妖精のような風貌を持つ皇女は、父に招かれると、静かにヴィクトリアの方へと近づいて行く。その両手には、一振りの剣が握られていた。

(なん……だ？　あの剣は……)

黒い鞘に納められた、異色の剣。直剣とは異なる線を描くその刀身は、ヴィクトリアの関心を掴んで離さなかった。

帝国製とも王国製とも違う形状の柄。そこから発せられる「何か」が、彼女の心を引き寄せていたのだ。

「六年前。帝国勇者は貴女の父君、アイラックス將軍を打ち破った。——しかし帝国勇

者が亡き今、この地上に貴女を凌ぐ剣士はいまい」

「——ッ！」

「よって、貴女が帝国勇者を超えた証として……この『勇者の剣』を授けよう」

その正体——勇者の剣の刀身を前に、ヴィクトリアは息を飲む。

(これ、が……！)

父を倒した剣を目の前に差し出され、彼女の動悸は大きく跳ね上がった。

「この大陸を統一し、平和な世界を創り上げるためとはいえ……戦争に勇者の力を利用した以上、神が我が血統に勇者召喚の力を残すことはないだろう」

「……」

「ゆえに、もうこの剣を帝国が保持する必要はないのだ。——この世界にもう、勇者はいないのだから」

六年前の皇帝の決断により、神の怒りを再び招いたのであれば、人類に残された希望である「勇者召喚」の力さえ失われる。

ならば金輪際、この世界に勇者が現れることはなくなるのだ。そして勇者でなければ使いこなせないとと言われる勇者の剣も、無用の長物と化す。

ゆえに皇帝は、勇者に次ぐ強さを持った彼女に、この剣を託したのだ。帝国勇者を超えた証——すなわち、帝国勇者の「首」の代わりとして。

「勇者でなければ抜き放つことも叶わない剣だ。武器として貴女が使うことは出来ぬが……好きに扱うがよい」

「……」

皇帝は穏やかな声色で、ヴィクトリアに語り掛ける。父を失った彼女を、気遣うかのように。

その一方で、皇女のフィオナは鎮痛な表情を浮かべて、勇者の剣を捧げていた。その顔色から、帝国勇者の死を深く悼んでいることがわかる。

（帝国勇者の剣……か。これを持ち帰れば、天に召された父上にも申し訳が立つ、か……）

そんなフィオナの面持ちや皇帝の様子を見遣り、ヴィクトリアは己に渦巻く苛立ちを鎮めて行く。

愛する者を失う悲しみ。それは決して自分だけに課せられたものではないのだと、改めて思い知らされたからだ。

（皇帝陛下は敵である私を気遣い、皇女殿下は帝国勇者の形見を、この私に託されている。ここまでのことをされて、いつまでも苛立ってはいは……私の立つ瀬がなくなってしまうな）

ダイアン姫を案じる想いと、今日の前に在る心遣いに応えたい想い。二つの感情が螺

旋となり、彼女の胸中に渦巻いていた。

(姫様……暫しお待ちを。すぐにこの剣を手土産に、そちらへ馳せ参じます)

そして、彼女は——この心遣いに応えた上で、全速力で帰国することを決断した。

怨みを忘れたわけではない。しかし、今はそれに気を取られている場合ではない。

自分は王国の騎士であり、ダイアン姫を守る使命があるのだから。

その想いを胸に、彼女はフィオナから剣を受け取る。か細い腕から鞘が離れる瞬間、フィオナが浮かべた儂い表情から——彼女の、帝国勇者への想いの深さが窺えた。

彼女の気持ちを悟り——その上で気付かぬ振りをして、ヴィクトリアは己の両手に鞘を握り締める。心の奥で……愛する人の形見を授けてくれたフィオナに、一礼を捧げて。

——その時。

(……しかし。勇者でなければ抜けない、というのは本当なのだろうか。この剣を一目見た瞬間から——何か、惹きつけられるようなものを感じていたのだが)

剣に眠る形容し難い「力」が、ヴィクトリアの心を吸い寄せていた。

この謁見の場で剣を抜くなど、神をも恐れぬ愚行の極み。だが、それでも彼女は——その手を、柄に伸ばしていた。

そう。

「この時既に彼女は——」

「……………どうしたのだ？ ヴィクトリアよ」

「皇帝陛下。この剣が勇者にしか抜けぬ代物であるというのは、真ですか」

「——勇者でない者には、如何程の剛力を以つてしても抜けん。それだけが真実だ」

「そうですか……………ならば」

——勇者の剣に、魅入られていたのだ。

「な、に……………!？」

「……………!？」

次の瞬間。

眼前で起きた光景に、皇帝やフィオナ——そして、この謁見の場に集う人間全てが、驚愕し……………戦慄する。

皇帝に背を向けたヴィクトリアは——天に切っ先を捧げるように。

「なぜ——私に抜けるのですしょう」

勇者の剣を——抜き放ったのだ。

柄を握り、抜刀するまでの流れには……………一切の淀みもない。抜けないどころか——まるで、彼女のためだけにこの剣が在るかのようだった。

『ワガ、タマシイ……………ヤドリギ……………ミツケ、タリ……………』

刹那。

この場にいる人間の誰とも一致しない、深い地の底から唸るような声が——彼女の心に響き渡る。

だが、その声は誰の耳にも入らない。剣の柄を握る、彼女以外には。

「な、なぜだ。なぜ、ヴィクトリアに勇者の剣が……！」

ありえない事象を前に、皇帝は額に汗を滲ませる。一方、フィオナは剣を抜いてからのヴィクトリアの変貌振りに、言い知れぬ恐怖を覚えていた。

今のヴィクトリアには——女騎士としての気高さが感じられなかったのだ。例えるなら——血に飢えた狂戦士。

「急がねば……！一刻も早く王国へ帰還し、ババルオの血でこの剣を染め上げねば……！」

兜の奥で、彼女の瞳は獐猛に血走っている。己の内に抑え込まれた黒い感情の全てが、濁流となり鎧の節々から溢れ出ているようだった。

「え、衛兵ツ！ヴィクトリアを鎮め——」

その全身から放たれる殺気を前に、本能で危機を感じた皇帝が、衛兵を呼んで彼女を抑えようとする——直前。

「皇帝陛下、申し上げますツ！」

謁見の場に、一人の帝国騎士が駆け込んできた。兜から滴る汗の量から、相当な急ぎ足で駆けつけてきたことが窺える。

急を要する報告があるのだろうか——あまりにも間が悪い。

「なんだ、こんな時に！」

「申し訳ありません！ 急ぎ、お耳に入れたい話が……！」

今は到底それどころではない——のだが、報告に来た騎士の表情を見るに、そちらに切迫した事情があることも想像には難くなかった。

やがて、数秒にも満たない間を置いて、皇帝はひとまず報告を聞くことを優先する。

「——手短かに申せ！」

「ハッ！ 王国に、我が帝国の勇者様と思しき人物が現れましたッ！」

そして、その報告はさらにこの場を驚愕の渦に叩き込むのだった。

人々は大きくどよめき、フィオナは両手で口を覆い、目を見開く。皇帝はあまりにも突飛な報告内容に、開いた口が塞がらずにいた。

そしてヴィクトリアは瞳を鋭く研ぎ澄まし——報告に来た騎士を見据えている。

「なんだとツ!? それは真かッ！」

「バルオの制裁に向かわれたバルスレイ將軍の部隊が到着する直前、アンジャルノンを含むバルオの私兵団全員が、たった一人の剣士に打ち倒されたという情報がありま

した！ その剣士は、首に赤いマフラーを巻いていた、とも……！！」
「赤い、マフラー!?!」

騎士が齎す情報の一つに、沈黙を貫いていたフィオナが初めて声を上げる。ババルオの処遇に鎮痛な表情を浮かべていた皇帝も、その情報に思わず耳を奪われていた。

帝国勇者をよく知る人物にとって、彼がいつも首に巻いている赤マフラーは、彼を指し示す大きな特徴の一つであった。

（帝国勇者を指導していたバルスレイ殿が、ババルオを……。そうか、だから帝国勇者が……！！）

次々と舞い込む帝国勇者の情報に、ヴィクトリアの眼差しは益々鋭さを増していく。

「勇者様が、生きている……！！　勇者、様がつ……！！」

一方、フィオナにとっては、その情報は一条の光明だったのだろう。彼女は控え目な胸の前で指を絡ませると、安堵するように膝から崩れ落ちていった。

「……そうか。生きているのだな。帝国勇者……！！」

そして、勇者の剣を鞘に納めたヴィクトリアは——妖しい笑みを浮かべて、王国の方角を睨み付けるのだった。

第14話 ある日の稽古

——ある日の夕暮れ。

王宮内の、練兵場にて。

「うおおおおおッ！」

一人の騎士が雄々しい叫びを上げていた。

「彼女」の氣勢に乗せて放たれる斬撃は、眼前の仇敵を正確に捉え——

「……惜しい」

「あうっ!?!」

——あつさりど、いなされてしまう。

赤い制服と、赤い縁に彩られた鋼鉄の鎧を纏う、黒髪の騎士。その仇敵に受け流された一閃は空を斬り、正規団員用の証である青い柄の剣は、勢いのまま持ち主の手から離れてしまう。さらに持ち主であるローク自身も、つんのめるように転んでしまった。

そんな彼女——ロークの剣が、宙を舞って地に突き刺さる瞬間。この戦いは、終幕を迎える。

赤いマフラーを巻いた、黒髪の騎士……即ちダタツツは、ロークの手元から離れた剣

を一瞥すると、静かに彼女へ歩み寄る。その表情は戦いの最中と変わらない穏やかなものだったが、相対するロークの面持ちは険しさを保っている。

そうして、自身に対する敵対心を決して緩めない彼女の様子を見遣りながら、ダタツツは小さな少女騎士の前に片膝を突いた。

「ただ真つ直ぐ斬り掛かるだけじゃなく、相手の動きをよく見るべきだったな。……今のは惜しかった。惜しかったけど、それでもその歳からは考えられない強さだ。きつと君なら、すぐにもつと腕を上げて——父上の仇だつて、討てるよ」

自虐するように乾いた笑みを浮かべ、ダタツツは彼女に手を差し伸べる。だが、ロークはさらに目を鋭く光らせ、その手を払いのけてしまった。

「触んなよっ！ お前の教えなんかなくなつたつて、オレは強くなれるんだつ！ 父上を殺した奴の力なんで、死んでも借りるもんかよっ！」

「……その怒りはもつともだ。手を借りたくないのも、もつともだ。けど、そんな奴から盗めるものもある。自分の血肉に、繋げることだつてできる。——それは、覚えていてくれ」

彼女が背負う悲しみは、怒りとしてダタツツに突き立てられていた。その鋭さを浴びるダタツツは、胸を痛めるように眉を顰めつつも——諭すように、言葉を僅かに紡ぐ。

(「こんな小さな娘に、俺は……」)

これ以上無為に刺激して、彼女の神経を削るわけには行かない——そう判断したダタツツは、半ば強引にロークの手を引いて彼女を助け起こすと、踵を返して練兵場から立ち去ろうとする。

洗濯用として用意され、楕円状に巻かれていたロープを肩に抱えて。

——が。

「……！」

その眼前に立っていた、一輪の花——ダイアン姫の存在が、彼を立ち止まらせる。彼女は敵意を僅かに滲ませた表情で、ダタツツを待ち続けていたのだ。

憎しみと、その裏側に隠された感情をない交ぜにした、姫騎士の表情は——ダタツツを責め立てているかのようだった。

「これはダイアン姫……。ご機嫌麗しゆうございます」

「挨拶など結構です。それよりダタツツ様、稽古が終わったのであれば、お時間を頂けますか？」

「……？」

「父が……あなたと話がしたいと」

そんな彼女の口から語られた用件は、ダタツツの関心を強く引き付ける。この王国の現国王が、自分と話をしたいというのだから。

この国に災厄を齎した帝国勇者が、その国王と直に会う。その危うさを考えてか、ダタツツを見るダイアン姫の顔色は、普段以上に険しいものになっていた。

「……わかりました。直ちに参りましょう。すぐに片付けますので——」

「あなたの用事を待つてはいられません、すぐに来てください」

「え、ちよ、ちよつと……!?!」

剣呑な雰囲気を湛えるダイアン姫は、ロープを片付けようとするダタツツの手を引き、強引に彼を王族の寝室まで連行していく。

思わず彼がたじろいでしまうほどに、その動きには無駄がなかった。彼女が纏う刺々しい空気が、一切の問答を許さぬ強制力を生み出しているのだ。

(……あなたが、帝国勇者などでさえなければ……)

そうして、彼女がダタツツを睨む理由は、憎悪か恋か。あるいは、その両方か……。その答えは、ダイアン姫自身ですら見つけられないままだった。

一方——もう一人。

ただならぬ想いで、ダタツツを睨む少女がいた。

(なんでだよ……! なんで帝国勇者が、オレ達を助けるんだよ! なんで今更になつて、味方になるんだよ!)

その想いを抱える者——ロークは、先程ダタツツに握られた手を見やりながら、強く

唇を噛み締める。そこから滲む血の色は、彼女の憤りを表現しているかのようだった。

……彼女もまた、ダタツツに複雑な感情を向けている人間の一人だったのだ。

父を殺めた張本人であると同時に、自分やダイアン姫を——ひいてはこの王国を、バルオの手から救ってくれた恩人でもある。そんな彼に、どのように接すればいいのか。

幼い彼女には、その戸惑いを怒りに変えてぶつけるしかなかったのである。

(もつと速く味方になってたら……父上だって死なずに済んだのに！ 姫様だって、もつと笑顔でいられたのに！)

そして——今。手に触れた彼の温もりが、ロークの心をさらに惑わしていた。

ダタツツに引かれた自分の手を見つめていた彼女は、姫君と共に去りゆく彼の背中に視線を移す。その時、彼女は初めて——敵意以外の色を、表情に滲ませていた。

(……こうなったら、意地でも確かめてやる。あいつが、ホントに味方になったのか。なんで味方になったのか。あいつに付いて行って、全部オレが暴いてやるんだ！)

そう決意してからの彼女の行動は、「迅速」の一言に尽きるものだった。

地面に刺さったままだった自分の短剣を素早く引き抜くと、転がるように駆け出して二人の後を追跡し始めたのだ。ダタツツの全てを知ろうという、執念にも似た彼女の想いが、その速さに表れていた。

さらに彼女は、その速さを維持したまま全く物音を立てずに、二人の後を尾行していた。ダイアン姫は彼女に気づくことなく、真つ直ぐ王室へ向かっている。

(……ダイアン姫は気づいていないことだし、ここは好きにさせておくか)

一方、ダタツツは気づかないままの姫騎士を見遣りながら、チラリとロークの方を一瞥する。ローク自身はダタツツに看破されていることに気づかず、追跡を続行していた。

(へへっ……二人ともオレには気づいてねえな。よおし、この調子でいつか、あいつの正体を暴いてやるっ！)

そんな彼女は、意気揚々とした表情を浮かべ、二人を追う形で王室に向かっていくのだった。

第15話 無謀な出動

「貴殿のことは、噂には何度も聞いた。が、こうして直に会うのは初めてになるな」

「……はい」

日も沈み、夜の帳が下りる頃。ダタツツは、国王が横たわるベッドの前に跪き、臉を閉じて頭を垂れていた。

そのベッドの後ろには、一振りの巨大な剣が飾られている。その大剣は、黄金の柄と白銀の刀身から、まばゆい輝きを放っていた。

「私の後ろに飾られた剣。貴殿ならば、見覚えがあらう」

「ええ。——アイラックス將軍の剣、ですね」

「うむ。貴殿に敗れたアイラックスが遺した、唯一の遺品。今の私やダイアンにとって は、御守りのようなものだがな」

一見すれば、病床に伏した国王と一人の騎士でしかない。だが、彼らの過去には浅からぬ因縁が渦巻いている。

我が国を敗戦国に墮とされ、妻を失い、娘を危機に晒された国王。その未来を王国に齎した、帝国勇者。

双方の間には、埋め難い溝が広がっている。

「——私欲のために、神器たる勇者の装備を戦争に利用し……我が王国を蹂躪した災厄の勇者。その行いを皮肉るように、貴殿を『帝国勇者』と呼ぶ者もいる」

「……」

だが。

国王の口調には、怒りも悲しみも滲んでいない。あるがままの事実を、ありのままに語るのみであった。

大切な民を失った苦しみのあまり、心を病んでしまったのか。そう勘繰るダタツツに對し、国王の表情には曇りの色すら窺えない。

憎しみさえ超える「人格」の為せる業が、彼の姿を形作っているのだ。

「しかし——貴殿は戦後、死を偽って帝国を去り、私達の前に再び姿を現した。それも、私達の窮地を救う救世主として」

「それは……」

「ダイアンから聞いている。王国と戦う理由を失ったから、であったな」

国王が伏しているベッドの傍らに控え、完全武装でダタツツを警戒しているダイアン姫は、父に名前を出された途端に瞳の鋭さを増した。ダタツツは彼女の眼差しに貫かれながらも、真摯な眼で国王を見上げる。

「ならば……貴殿には私欲など、なかつたのであろう。貴殿が噂通りの、強欲に塗れた男であつたならば——帝国軍人としての地位を捨てることも、ババルオと争うこともなかつたはずだ」

「国王陛下……」

その瞳を見つめる国王の表情は、真摯そのものであつた。ダタツツを睨んでいたダイアン姫も、彼の真剣な横顔を一瞥すると——父の言葉を信じようと、警戒を薄めていく。「——だからこそ、知りたくもなる。貴殿が如何なる理由で剣を取り、我らと戦う道を選んだのか。何故、貴殿が『帝国勇者』となつたのか」

「……」

「それを知ることが出来れば——多少は、この私に残された悲しみも薄れよう。憎しみも、乗り越えられよう。理解し合うことを投げ出せば、残るものは負の感情のみなのだから……」

そして、ようやく。国王の想いが——言葉として、ダタツツに届けられるのだった。

ダタツツが、ただの悪党ではないのなら。止むを得ず、戦つていたというのなら。

その理由を知らねば、やりきれない。

ダイアン姫やロークが抱える、そのもどかしさを代弁する彼を前に……ダタツツは逡巡するように目を伏せる。

(ただ俺を憎む方が、ずっと楽だったはずだ。それでも、この人は……)

憎み合いを続けられ、争いが繰り返され——人々はいたずらに血を流す。

統治者として、それだけは避けねばならない。これ以上、民を苦しめてはならない。

その想いを乗せた眼差しを、ダタツツは直視できずにいたのだ。

(話すべきだろうか。俺の、浅はかな理由を)

彼が背負うものの重さと、自分が帝国勇者として戦った理由。それは決して、釣り合いが取れるようなものではなかった。

話せば、彼らを失望させてしまうだろう。そんな理由で、自分達は大切な人々を奪われたのかと、落胆してしまうだろう。

だが。

そうとわかっていても、語らないままではいられない。国王の想いに、触れてしまった以上は。

「……国王陛下。ジブンは——」

決意にも、諦めにも似た心境で、ダタツツは重い口を開く。どのような反応をされよう、あるがままに語る他ない。

そう、己に言い聞かせて。

——しかし。

「盗賊だーッ！ 野盜共が城下町に侵入してきたぞーッ！」

「野盜だど?! なぜ今になって?!」

突如、宮内に響いた騎士達の喧騒が、その続きを断ち切ってしまう。非常事態を報せる鐘が鳴り、王宮内は一瞬にして臨戦態勢に突入するのだった。

さらに王室まで轟いてきた声の一部を聞き取り、この場に居る人間達は、即座に状況を把握する。

「バルオが去り、バルスレイ將軍が監視についたこの状況で盗みを働く賊だど……?」

正気の沙汰ではないな」

「——お父様、わたくしが出向きますわ。帝国兵達がほとんどいなくなっているとはいえ、騎士団の士気はまだ回復しきっておりません。野盜共に吞まれる前に、わたくしが現場で指揮を執りますわ」

「ダイアン、しかし……」

「心配ならいりません。お父様が信じた、新戦力も居るのでから」

たじろぐことなく、素早く行動に移ろうとするダイアン姫は、国王の心配を他所に戦闘準備を始める。鞘から抜き放たれた剣が、窓から差し込む月光を浴びて鮮やかに煌めいた。

その柄を握る姫騎士の瞳は、半信半疑の色を滲ませて、予備団員の眼を射抜く。

「……協力して頂けますね？　ダタツツ様」

「もちろんです、姫様。しかし、ここを出て階段を下り、正門から出動したのでは時間が掛かり過ぎる。敵方の規模次第では、対処が遅れてしまう可能性もあります」

「遅れてしまう——って、なら一体どうすれば……」

だが、その色はダタツツの進言により、瞬く間に戸惑いの色へと変化する。

今、自分達がいる王族の寝室は王宮内でも最高層の場所に位置している。ここから現場まで移動するのに、普通に階段で降りる以外にどのような方法があるというのか。

「ジブンにお任せを。——では国王陛下、暫しお待ちを。直ちに賊を成敗して参ります」

「ちよ、ちよつとダタツツ様……!?!」

「ダタツツ?!　貴殿は一体何をしようと……!?!」

そんな彼女の焦りを他所に、ダタツツは寝室の門前に置いていたロープを拾うと、一瞬の躊躇もなく窓に向かって疾走していく。

窓から飛び降りるつもりなのか。そう察した国王は咄嗟に声を上げるが、ダタツツは聞く耳を持たずに窓へ急接近する。

そして、彼の予測をなぞるように、勢いよく窓に身を乗り出し——

「さ、行こうかローク君。一番の修業は実戦だ」

「んのわあっ!?!」

「ローク!? あなたいつの間につ?!」

——窓の上に張り付き、寢室を覗き見していた少女騎士を、窓の内側に引きずり下ろすのだった。壁に張り付き、最高層までよじ登って来ていたロークの行動力に、ダタツツは苦笑いを浮かべている。

一方、あり得ない場所からあり得ない人間が出てきたことに、ダイアン姫は目を丸くしていた。

そんな彼女の驚愕ぶりを他所に、ダタツツは腰の鞘から予備団員用の剣を引き抜き——その赤い柄と窓の縁に、取り出したロープを括り付けていく。

そして——その状態のまま、彼は剣を振りかざし。

「帝国式投剣術……飛剣風——」

アンジャルノンを仕留めた必殺の投剣術を、撃ち放つのだった。

空を斬り、宙を翔ける鋼鉄の刃は、月明かりを浴びながら——城門近くにある井戸へと急接近していく。括られたロープを、そこに導いていくように。

「……よし」

それから程なくして……鉄の剣の切っ先が、井戸の木柱に突き刺さる。その柄と窓の縁を繋ぐロープは、一直線に張り詰めていた。

ロープを握り、その緊張を確かめるダタツツは、深く頷くとロークの小さな体を左の

小脇に抱え込む。

「え、お、おい」

「さあ、しつかり掴まって。少し揺れるからね」

一切の無駄を許さない、流れるような動きと——今、自分が置かれている状況を目の当たりにして、少女騎士はこの先の展開を予想してしまふ。

その予想を裏切ることなく、ダタツツは首に巻いていたマフラーをするりと解き、ロープの上に引つ掛ける。そして、そのマフラーに飛びつくように——ロークを抱えたまま、窓の外へと飛び出して行くのだった。

重力に引かれ、窓から落ちていく二人の身体は、ロープに引つ掛けられたマフラーを掴むダタツツの右手によって、空中で静止する。

そして——斜め下に向かって緊張されたロープの下を、猛烈な勢いで滑り降りていくのだった。

「どわあああああああ！」

その速度と、王族の寢室から城門近くまで空中を直進して移動するという異常な状況に、ロークは絶叫を上げる。彼女の叫びは非常事態を示す鐘よりも強く、王宮中に轟いていた。

「……」

「……なんとという、男なのだ」

あまりに型破りなダタツツの出動に、国王もダイアン姫も言葉を失っている。洗濯用のロープを使って戦いに向かう騎士など、この国においては前代未聞なのだ。

小国の王宮ゆえ、それほど高く造られているわけではないとはいえ、普通に考えれば自殺行為以外の何物でもないのだから。

「……はっ！ いけない、わたくしも行かなくては……！」

それでも、いつまでも立ち止まってはいられない。ダイアン姫は自分がやるべきことを思い出し、面持ちを引き締める。

——が、ダタツツが残したロープを使うことには、若干の抵抗があった。彼の力を借りて現場に向かうということは、帝国勇者の助けがなければ何もできない、ということになってしまう。

そんな思いが、彼女の脳裏を過っていたのだ。

（しかし……彼が先に現場に到着して事件を解決してしまつたら……わたくしが何もできないまま終わってしまう。そんなことになったら、それこそ王国の非力さが露呈されてしまいますわ）

だが、ダイアン姫はそれでも、己に言い聞かせる。

あの速さなら、ダタツツはすぐに井戸に降り立ってしまうだろう。自分一人がセオ

リー通りに階段を下つていたら、到着する頃には何もかも終わっているに違いない。

騎士団も姫騎士もろくに活躍しないまま、帝国勇者の力一つで事件を解決されようものなら、王国の名誉は今度こそ死滅する。

それだけは、なんとしても回避しなくてはならない。憎き仇敵に全てを委ねるなど、あつてはならない。

その気高く猛々しい對抗心が、ダイアン姫に火を付ける。

「絶対に、屈しません……！　帝国勇者になど、絶対につ！」

「ダ、ダイアン!？」

怒りに顔を赤らめ、ダイアン姫はダタツツを追うように窓目掛けて爆走する。軽鎧の背後で揺らめく、己の白マントを破りながら。

「やああああああつ！」

そして、娘の暴挙に驚愕する父を尻目に——新緑の鎧を纏う姫騎士が、夜空へ向かつて舞い飛ぶのだった。

ダタツツに倣うように、白マントをロープに引っ掛けた彼女は、その両端を両手で掴み、勢いよく城門へ滑り降りていく。

「きゃああああああつ！」

その想像を絶する速度に、悲鳴を上げながら。

「……彼を、信じてよかったのだろうか」

——そして。

やがて静寂を取り戻した寝室に、ただ一人残された国王は。

あまりに型破りな帝国勇者の実態と、それに対抗しようとする娘の無鉄砲さに……頭を抱えるのだった。

第16話 勇者の剣

月夜に照らされた城下町。

本来ならば静けさに包まれているはずの、その空間は今——突如始まった野盗達の襲来により、混沌の渦へと巻き込まれていた。

飛び交う怒号と悲鳴。剣と剣が交わる轟音。幾重にも響き渡る叫びと衝撃音は、一向に絶える気配を見せない。

逃げ惑う人々を守るように、剣を取り賊に立ち向かう一角の騎士団。彼らは帝国兵への恐れを払拭するかの如く、勇ましい雄叫びを上げて野盗達に挑んでいた。

——が。

「こいつら……よ、様子がおかしい！　しよ、正気じゃないっ!？」

「斬られても怯まないなんて、気でも狂ってるのかよ!？」

盾で殴ろうと剣で斬ろうと、怯むことなく憑かれたように戦いを続ける野盗達の——
狂気の瞳に、呑まれつつあった。

「ウ、ガ、アアアアッ!」

「グウ、アアアッ!」

戦意ではない。むしろ、恐怖。

「何か」を恐れるあまり、狂気の渦へ堕ちた野獣達は、本能の赴くままに剣を振るう。その「何か」に比べれば、騎士団の剣など気にもならないのだろう。それほどの恐怖が、男達を支配しているのだ。

悲鳴にも似た男達のけたたましい叫びは、獣の咆哮の如く夜空に響き渡り、騎士団の氣勢を圧倒していた。

「どうなってるんだよこいつらは！　なんでこんなに……！」

「とにかく下がれ！　退却して態勢を立て直せ！」

もし騎士団の気力が勝っていたならば、自分達の敗走が住民達の危機に直結するとうことを忘れることはなかっただろう。

退却している間に、どれほどの被害が齎されるのか——その重さを見失った彼らは、精神に異常を来たした野盗達に背を向け、次々に戦線を離脱していく。

「あ、あ……！」

救うべき人々を、見捨てて。

——野盗達の暴走により、炎上する料亭。そこから足を引きずるように地を這い、逃げようともがく少女が一人。

退却していく騎士団の背に、手を伸ばしていた。

しかし、彼らがか細い手に気づくことはなく、彼女の目に映る騎士団の姿は徐々に小さくなっていく。

そして——ついにその影が見えなくなる瞬間。

「ウギ、アアガアアッ！」

「ひっ……！」

彼女の視界を、狂人の姿が埋め尽くす。

振り上げられた斧と血走った眼の色は、少女の心に絶望を齎し、その顔から血の気を失わせる。

逃げる術もない。守ってくれる人間もない。もはや少女には、死という末路しか残されていない。

誰もが、そう信じて疑わない——そんな光景が、彼女の前に広がっている。

「逃げろハンナああああ！」

その横から、壮年の男性が角材を振るって野盗に挑み掛かるが、効果など望めるはずもなく——敢え無く、野盗の肘鉄に沈められてしまうのだった。

「ゴがあっ……！」

「ルーケン、さんっ……！」

鼻から血を噴き出し、膝から崩れ落ちていく男性。その痛ましい姿に、少女は唸るよ

うに、声にならない悲鳴を上げる。

——そして。邪魔者はいなくなつた、と言わんばかりに。

野盗の凶刃が、再び少女へと向けられる。

もはや、少女に残された道は、祈ることしかなかつた。

(助けて……誰か! 姫様、ローク君つ……!)

彼女は心の奥底から、絞り出すように名を叫ぶ。たとえ、その声が届かないとわかつていても——彼女には、そうすることしか出来ないのだ。

(……ダタツツ、さんっ!)

その名を呼び——

「帝国式投剣術、飛剣風ッ!」

——男の叫びが、轟くまでは。

「……え……」

どこからともなく聞こえてくる、少女にとっては聞き覚えのある、若者の声。

それが彼女の耳に入る瞬間。

夜空から矢の如き速さで降り注いだ一振りの剣が——野盗の脚を、串刺しにしてしま
う。

「……ウグアアアッ!」

野盜は唸り声を上げながら崩れ落ち、のたうちまわっていた。

どれほど精神が肉体を凌駕しようとも、脚の筋肉を断たれば人は立てなくなる。物理による強制力が、野盜をねじ伏せたのだ。

肘鉄に沈められた男性も。その一閃を目の当たりにした少女も。その光景を目撃し、目を見開く。

そして、次の瞬間。

彼女達の前に、声の主が降り立ち——赤いマフラーを靡かせた。

正規の騎士のものより、一回り短い兜の角。そんな、少しだけ頼りないシンボルとは裏腹に……黒い瞳は眩いばかりの凛々しさを放ち、残る野盜達を見据えている。

「ダタツツさん……!」

その姿を見つめ——少しだけ、安堵するように。少女は、彼の名を呟くのだった。

「……」

だが、彼と視線が交わる瞬間。その表情は陰りを帯び、彼の眼差しを避けるように伏せてしまった。

そんな彼女を見遣るダタツツも、顔色に憂いを滲ませている。

彼らを隔てる溝は、今も深いままなのだ。

ダタツツを睨む男性——ルーケンの瞳が、それを物語っている。

「おいこら帝国勇者ああ！ てめえ無茶苦茶しやがってえええつー！」

すると、その静寂を突き破るかのように——少女騎士の叫びがこだまする。

その声の主は、憤怒の形相で街角から顔を出すと、ダタツツ目掛けて突進を敢行した。それをひよいかわし、ダタツツは険しい表情のまま周囲を見渡す。既に彼らは、狂乱の男達に取り囲まれていたのだ。

民家の屋根。路地の影。あらゆる場所から、妖しい瞳がぎらついている。そこから迸る殺気を感じ取ると、ロークも狙いをダタツツから野盗達へ切り替えた。

——闘いの気配は、否応なしに少女を戦士に変えてしまうのだ。

刹那。

「グガアアアアッ！」

雪崩の如く、野盗達が踊り掛かる。理性など欠片も持たぬ、猛獣として。

「だあああつー！」

「……ッ！」

そして、相手が猛獣であるならば。理性を保持する人間として、騎士として、毅然と立ち向かわねばならない。

その矜持を胸に、ロークは短剣を振りかざして野盗達に向かつていく。ダタツツも彼女を援護するべく、その後ろに続いていった。

野盜達の一人は、本能で敵の接近を感じ取ると、薙ぎ払うように斧を水平に振るう。(相手の動きを、よく見る……!)

その動作を、あくまで冷静に見据えて——小さな騎士は垂直に跳び上がり、一閃をかわす。彼女の立ち回りには、憎むべき敵から学んだ教訓が生きていた。

「だあああああッ!」

そして、ジャンプによる勢いを利用した縦一文字の斬撃が、野盜の脳天に直撃する。錆びた鉄兜は敢え無く砕け散り、野盜は仰向けに昏倒するのだった。

しかし、その勝利に酔いしれる暇などない。すでに彼女の真横から、別の男が槍を突き出していたのだ。

「飛劍風ッ!」

だが、それよりも疾く。

ダタツツの鉄の剣が矢と化し、槍を粉碎してしまうのだった。

「今だ、ローク君! あとは脚を斬れ、ば……!?!」

そして壁に突き刺さった剣を引き抜くと、敵を無力化するための手段を進言するのだが。

「——はああああッ!」

それを実践したのは、少女騎士ではなく——

「姫様ッ!？」

「……ローク。後で水浴び用の桶を持って練兵場に立つてなさい」

——深緑の軽鎧を纏い、優雅に舞う姫騎士だった。

「ダイアン姫……!?! まさか、あのロープで!?! なんて無茶を……」

「その無茶を通したあなたにだけは、言われたくありませんわ」

厳しい表情でダタツツを睨むダイアン姫は、王家の剣の刀身に纏わり付く血糊を払うと、視線を敵方へ移す。

その額からは、野盗達の狂気を前にしてか——大粒の汗が滴っていた。

「なんなのでしよう、この得体の知れない狂気は……。略奪を目論む人間の眼ではありません。むしろ、何かを恐れているかのような……」

「……何かを、恐れて……」

ババル才が去り、バルスレイ将軍の監視により治安が改善された城下町に攻め入るなど、本来ならば無謀の極み。

その上、彼らの瞳からは正気も失われている。悍ましい存在から、恥も外聞も捨てて逃げようとするかのような——「恐怖」から。

その、彼らを包み込む「恐怖」は……帝国勇者として戦い抜いてきたダタツツさえ凌ぐのか。彼の強さを目の当たりにしても、野盗達は戦いを止めようとはしなかった。

「ジブンの技を前にしても、一步も退く気配がない……。つまり、それ以上の恐怖が彼らの精神を汚染している、ということなのか」

「ダタツツ様以上、ですって……!?!」

「な、なんなんだよそれ……!」

野盗達を支配している狂気。その実態を見据えようとするダタツツの言葉に、ダイア姫とロークは表情を強張らせる。帝国勇者を超える恐怖などあり得るのか、と。

「それよりまず、あの火災を何とかしないと……。放っておいたら、他の民家に燃え移る一方だ」

「そ、そんなこと言ったって、どうすりゃいいんだよ! 他の正規団員は逃げちまつたし……!」

野盗達の襲撃により、火災に包まれている料亭。その火の手は、周辺の民家にも及ぼうとしていた。

このままでは、被害はさらに拡大してしまう。近くに住む住民の多くはすでに避難しているが、やがてはその避難先に飛び火する可能性もあるだろう。

だが、消火活動を始めるには人手がいる。騎士団が逃げ出した上、野盗達との戦闘も続いている現状では、消火に注力できるはずもない。

「どうすれば……くッ……!」

「——やむを得ません。ダイアン姫、バルスレイ將軍が来るまでの間……頼みます。あの火だけでも、消さないと」

「えっ……ダ、ダタツツ様!？」

それでも、なんとかしなくてはならない。

自分達の店が燃えていくばかりか、周りの町々さえ傷付けていく様を見せつけられ、苦悶の表情を浮かべる二人の民間人。

そんな彼らを見遣るダタツツは、そう判断したのでらう。

ダタツツは鉄の剣を構え、一気に燃え盛る料亭の前に駆けつける。

「帝国式投剣術——」

そして、飛劍風の構えを取り——さらに、柄を握る腕を螺旋状に捻りながら。

「——螺旋風らげんふうツ！」

天に向かい、剣を打ち放つのだった。

飛劍風のエネルギーに回転の力を加えられた刀身は、周囲に旋風を巻き起こし——土埃や破壊された家屋の破片を、空高く吹き上げていく。

「きやあああつ！」

「うわあああつ!？」

その風圧は、炎の威力さえ飲み込み——料亭を取り巻いていた火の手を、瞬く間に掻

き消してしまふのだった。

……そう。ダイアン姫とロークの悲鳴が終わる頃には。全てが、終わっていたのである。

螺剣風の威力により、火災ごと吹き飛ばされた料亭。それが在った場所だけが、台風の際のような廃墟と化していた。

その圧倒的な破壊力を前に、ダイアン姫とロークは驚愕するばかりだった。

「……な、なんてヤツだ……!」

「これが……帝国式投剣術の、真の威力……!?!」

旋風を巻き起こし、天へ旅立っていた剣が、地上へ墜落してくる頃。ダタツツは踵を返し、鞘を天に掲げていた。

その鞘に、堕ちゆく剣が納まり——乾いた金属音が響き渡る時。彼は、静かに歩み始める。

ダタツツは振り返ることなく、ダイアン姫達の方へと進んでいった。鉄の剣を握っていた右腕を、庇うように左腕で抱えながら。

憎めばいいのか、礼を言えればいいのか——そう思い悩む民間人達に、背を向けたまま。

「ダタツツ、様……!」

「帝国勇者……!」

料亭を破壊したこと。火災の拡大を阻止したこと。その両方の事実が、彼を見つめる者達の心を惑わせている。

それにダタツツの様子を見れば、今の技を放つために右腕を痛めたことも容易に窺い知れる。そんな彼を責め立てることに、彼女達は葛藤を覚えていた。

「ギアアアアアッ！」

——すると。

その土気の乱れを、崩壊した理性の果てに残された本能で感じ取り——野盗達が武器を掲げてなだれ込んでくる。

ダイアン姫とロークは無数に煌めく狂乱の瞳を見据え、ダタツツを守るように各々の剣を握り締めた。

「帝国式投剣術ツ……飛剣風！」

刹那。

ダタツツとは異なる——古強者の声が、夜空に轟き。

野盗達の先頭に立つ男の膝が、突如砕け散り——片足を失った男が、うつ伏せに倒れていく。

さらにその男の足元に広がっていた石畳が弾け飛び、その破片が周囲の野盗達を打ち抜いていった。

そして……その爆心地には。

帝国騎士の剣が、深く突き立てられていた。

大の男の鍛えられた脚を、紙切れのように切断し——それだけに留まらず、石畳まで破壊していく圧倒的な破壊力。

その威力を生み出す、目にも留まらぬ疾さ。

この二つが揃わねば、決して起こり得ない現象が今、この戦場に広がっている。

「これは……!?!」

驚嘆する姫騎士達は、声が轟いた方向へ振り返り——現象を起こした者の姿を視界に捉えるのだった。

「……遅くなつたな」

民家の屋上に立つ、赤い鎧を纏う銀髪のお騎士。

彼の眼は、戦場に立つ古強者の色を湛え——残る野盗達を射抜いていた。その視線はやがて、右腕を押さえたまま戦況を見守っているダタツツへと向かう。

「……螺旋風を使ったのだな。全く、相変わらず無茶をする」

「バルスレイさん……」

「飛剣風の派生技にして、最強の破壊力を誇る帝国式投剣術の奥義。——だが、刀身を回転させて貫通力を高めるために、腕を捻る動作が加わるため、関節に掛かる負担が非常

に強く、自らの剣士生命を縮める諸刃の剣でもある。……それゆえに安易に多用してはならぬ、と教えたはずだがな」

「……」

「——それを知った上でも使わねばならぬ。そうお前は決意したのだろうか？ この街の人々のために」

帝国式投剣術。すでに歴史の中で失われていた、その技を使いこなせる人間など、帝国勇者以外には存在するはずがないのだ。

彼にその剣を伝えた、バルスレイ將軍を除いては。

「——ならば、あとは我々に任せておけ。王国騎士団と姫騎士様が時間を稼いでくれたおかげで、万全の準備で事に臨むことが出来たのだからな。さあ、この街に手を出す愚者共に、然るべき鉄槌を下す時が来たぞ！」

「ハッ！」

彼の背後に控える、深紅の甲冑に身を包む帝国騎士達。彼らは主の命に応じると——怒号を上げて野盗達に襲い掛かっていった。

僅かな時間を代償に、完全な武装で戦闘に臨んでいく彼らの氣勢は、突発的な襲撃に乱された王国騎士団とは比べ物にならない気迫を放っている。

さらに脚を斬れば無力化できるという情報を得ているためか、彼らの戦いには一切の

迷いも試行錯誤もない。

ただ為すべき任務を、全速力で遂行していくのみ。そう言わんばかりの素早さで、帝国騎士達は次々と野盗達の脚を斬り裂いていった。

「つ、強い……」

「これが帝国の、騎士なんだ……」

ダイアン姫とロークは、その流れるような戦いぶりに目を奪われ、一步も動けずいた。ババルオの私兵達とは天と地ほどの差がある、バルスレイの部下達の剣技は、彼女達に「帝国騎士」の真の力を悟らせたのだ。

「……」

一方。ダタツツは、彼らの剣技ではなく——圧倒され、鎮圧されていく野盗達を注視していた。

帝国勇者だった自分を凌ぐ恐怖。その実態を解明しようと、己の眼を光らせて。

(あの恐れ方……節々に見える切り傷……。まさか……いや、もはやそれ以外には……)そして——帝国騎士達により野盗達が全員無力化され、地に倒れ伏した時。

戦いの終わりを空気で感じ取ったダタツツは、剣を鞘に納めると……静かな足取りで倒れた野盗達の内の一人に近づいていく。

「ダタツツ殿。まだ奴らは死んだわけではありませんせぬ、お下がりにください」

「……心配ない。ジブんに任せてくれ」

引き留めようとする騎士を片手で制し、ダタツツは倒れた野盗の側で片膝をつく。足を失った痛みで、少しは正気に近づいたのか……野盗は怯えるように身を震わせ、抵抗する気配を失っていた。

（……やはり、間違いない）

野盗達に起きた、精神異常。それは、ダタツツがよく知る現象だったのだ。

怯えた野盗を見つめる彼の眼に、もう戸惑いはない。彼にとつては、あり得るかも知れなかった可能性が、現実のものとなったただけなのだから。

「ダタツツ様、もしや何かわかったのですか？」

「……ええ、わかりました。ジブンには、よくわかります」

その言葉に、ダイアン姫とロークは目を見開き——帝国騎士達は互いに顔を見合わせ。バルスレイの表情も、より険しいものになっていた。

「ダタツツ。まさかとは思いますが……」

「そのまさか、です。バルスレイさん」

神妙な面持ちで、ダタツツはバルスレイと視線を交わし——その場に立ち上がる。

「この野盗達を支配していた狂気。それは、『勇者の剣』によるものだ」

そして。

彼の瞳は、野盗達の身体に残る傷跡を映していた。

第17話 明かされる物語

「本当なのか、バルスレイ將軍」

「……ええ。私も薄々は感じておりましたが……彼自身がそのように申し立てている以上、間違いないかと」

夜が明け、街が平穏を取り戻した後。

王の寝室にて、二人の人物が神妙な面持ちで言葉を交わしていた。

「この国を統べる国王も。その監視を務める帝国將軍バルスレイも。深刻な表情を浮かべ、今の事態を憂いている。」

野盜達を狂わせた「恐怖」の実態は、六年前の戦争で王国を追い詰めた「勇者の劍」の力によるもの。

かつての持ち主がそう証言したことが、その説に説得力を与えていた。

「牢に閉じ込めた賊共は、今もなお恐怖に囚われ続けています。あの症状は……私にも、見覚えがありますな」

「そう、か……。しかし、どういうことなのだ。『勇者の劍』とは本来、勇者にしか扱えぬ代物ではなかったのか……？ それに……」

そして——「その説に説得力があること」が、国王をさらに思い悩ませている。

今、病床に伏している彼の手元には、帝国の皇帝から届けられた書状が握られていた。その文面には、出稽古に赴いていたヴィクトリアが、授与された「勇者の剣」と共に行方をくりましたことが告げられていたのである。

「なぜ、あのヴィクトリアが……」

彼女が謁見室で剣を抜き、瞬く間に姿を消す。そのような大事件が起きていたことに、国王の心はさらに苛まれていた。それが事実ならば、野盗達を狂わせたのは彼女が振るった剣によるもの、ということになる。

王国を代表する騎士が、民を苦しめる遠因となっていた——などとは、考えたくない。何より、彼女は父のような清廉潔白な騎士であり、決してそのような振る舞いをするような人間ではない。だが、否定するにはあまりにも条件が揃いすぎている。

本来ならばとうに帰国しているはずのヴィクトリアが未だに帰らないままにいることも、国王の焦りを募らせていた。

書状には、帝国側は民衆を混乱させないために事件を隠蔽し、「ヴィクトリアは『勇者の剣』を無事に受け取り、王国へ帰っていった」——と帝都に報じていることが書かれていた。

今の平和な日々は、嵐の前の静けさだともいうのか。……国王はその報せを受け、

そう感じている。

「……そのはず、ですが私には何とも……。当代の勇者である彼なら、何かわかるかも知れませんが……」

「そうだな……して、彼は何処へ？」

「先程、街までパトロールに向かったようです」

「パトロールだと？　今まで住民への刺激を避けるために、王宮から出ることを避けていた彼が……？」

当代の勇者——ダタツツが、パトロールに出ている。

今まで自分に怯える人々を案じて、王宮の外へ出ることを避けてきた彼が、騎士としての職務で街に繰り出しているという事実。それが意味する事態の重さが、国王の心にさらなる重圧を与えるのだった。

「国王陛下。事の全貌は未だ見えぬままでありますが……良からぬ事態に備えておく必要はあります。当分は、私の部下達も王宮の警備に加えさせて頂きたい」

「うむ……そうだな。我が王国の勇猛なる騎士達を先の戦争で失った今、萎縮した騎士団を支えられる存在は限られておる。ダイアンにいつまでも頼るわけには行かぬし、ロークは勇敢ではあるものの、今の騎士団を牽引するには些か力不足だ。歯痒い限りだが、終戦協定が結ばれている今、貴殿ら帝国騎士以外に頼れる当てはない。——頼める

か、バルスレイ殿」

「——お任せください。力ある者の責務として、御身は我々が身命を賭してお守りします」

苦悩の果てに国王が出した答えに、バルスレイは表情を変えぬまま深く頷く。

かつて自分達から幸せを奪い去った仇に、頭を下げた救いを求めねばならない。その苦痛は、察するに余りある。

その痛みを汲むバルスレイに出来ることは、これ以上の被害を回避するための体制を築くこと以外にない。寝室の門前で警備している騎士達にも、練兵場で訓練に励む新兵達にも、迫ろうとしている危険を打ち払う力はないのだから。

『勇者の剣』は人智を超越した神器。その威力が万一、牙を抜かれたこの王国に向かうものなら……この地は、瞬く間に血の海となるう)

銀髪の老将は、城下町の方角へと視線を移す。その向こうに、希望の光を求めて。

(ダタツツよ。人類が、あの剣が纏う『力』に立ち向かわねばならぬとしたら……それができるのは、現世の勇者であるお前だけなのかも知れんな……)

——そして、その頃。

城下町に広がる、石畳の街道に——とある騎士が佇んでいた。

野盗に破壊された建物の修繕のため、資材を担いで道を行き交うを人々を見つめる、

黒い瞳は——白いフードにその輝きを隠し、痛ましい光景を真摯に見据えている。

「ちよつと……あそこに居るの、騎士団の人じゃないの?」

「野盜共が来た時は何もしなかったクセに、よく今になってのこのこと……」

「姫様やローク君以外、ともに戦いもしなかったって話だぜ、あいつら。バルスレイ將軍達がいなかったら、街は火の海だったって話だ」

「全く、情けない……戦争で死んだ先人達に申し訳ないって考えはないのかね。早いところ、ヴィクトリア様に叩き直されてくれねえかな……」

騎士団に支給される白いマントとフードにより、己の姿を覆い隠している彼は、町民達の冷たい視線や陰口を浴びせられても、一步もそこから動く気配を見せない。

(古の時代、魔王を打ち倒した「勇者の剣」。それは即ち、人類を超越した魔物を打ち払う、さらに強大な超常の力……)

ダイアン姫に花を捧げていた少女の、軽蔑するような視線を受けても——
(それを振り下ろす先を失った今、「勇者の剣」はもはや……暴発を待つ災厄の存在ではない。その兆候が、この光景なんだ……)

——無言を貫き通し、破壊された町の姿を、ひたすらその眼に刻み続けている。

「そーいや、帝国勇者も戦ったのかな……。噂じゃ、姫様達と一緒に野盜達をとつちめたらしいけど」

「まさか！ どうせ騎士団みたいに途中で逃げたか、参加すらしなかったに決まってる。王国人を大勢殺したあいつが王国を守るために戦ってたなんて、俺ア信じらんないね」

「よせよ、ルーケンの店の前でそんなこと……」

帝国勇者を噂する人々の言葉は、ある人物の名前が出たところで打ち切られた。その名の持ち主——廃墟の前で黙々と復興作業を続ける男性は、無言のまま眉を顰めていた。

その隣で彼を手伝う、そばかすの少女も、町民達の言葉を受け、表情を曇らせていた。彼女の両手に在る、焼け焦げた料亭の看板が、戦いの痛ましさを物語っている。

帝国勇者が旅人を装い、ルーケン達を騙して料亭で働いていた、という話は有名だ。

かつて彼の味方をしてきた常連客達は、口々に彼を罵り続けていたが、それが少女にそのことを思い出させてしまうことに繋がると気づき、口を塞ぐ。

（挫けてなんか、いられないよね。天国のお兄ちゃんにも……みんなを守ってくれたダタツツさんにも、笑われちゃう）

しかし。

その少女——ハンナは、それでも逆境に負けまいと、気丈な面持ちで空を見上げ……白装束の騎士に微笑みかけるのだった。

私達は大丈夫だから、心配しないでください——と、勇気付けるかのように。

それを見た人々は、これ以上の陰口を続けることの無意味さを悟らされたのか。気まぐずい表情を浮かべ、蜘蛛の子を散らすようにこの場から離れていく。

やがて騎士の方もハンナの想いを汲んでか、何も語らぬまま踵を返して立ち去るのだった。

(ハンナさん……やっぱり、強いんだな。君は)

そして——路地裏でフードを脱ぎ去った、黒髪の騎士は。

彼女の強さに惹かれるように、一度だけ振り返ると……そのまま王宮へと歩みを進めていこうとする。

「こんなところにいらつしやいましたか。——探しましたよ」

すると。路地裏の入口に差し込む光を背に浴び、一人の姫騎士が姿を現す。その登場に、黒髪の騎士——ダタツツは一瞬だけ驚くように目を見開き、ため息をついた。

「その様子だと、腕はもう大丈夫のようですね」

「ダイアン姫。今はいつまた戦いが始まるかわからない状況なのです、迂闊に歩いてはいけません。バルオの雑兵とはわけが違うのですよ」

『『勇者の剣』の力……ですか。確かにその通りでしょうね。けれど——』

そうして、彼女がここに居ることを無謀と見なそうとするダタツツ。

しかし。そんな彼と視線を交わす、ダイアン姫の眼差しは――

「――あなたでも解決出来ない程の事件であつたならば……安全な場所など、どこにもないでしょう？　王宮から頑なに出てこなかったあなたが、ハンナさんの無事を確かめるためだけに、わざわざパトロールと言い張つて外に出る程の事件……となれば」

「……！」

「わからないとでも？　……わたくしは、何から何までまであなたに縋るほど、弱い姫騎士でいるつもりはありませんわ」

――アンジャルノンと戦つていた時とは、比にならない鋭さを湛えていた。

「お遊び」としてババルオに用意された相手とは違う、死と隣り合わせの戦いを経験したことが、いつしか彼女に剣士としての変化を齎していたのだ。

そんな彼女の面持ちを前に、ダタツツは悟る。彼女はもはや、守られるだけの姫君には戻れないのだと。

「……さあ、用が済んだのなら城に戻りましょう。あなたには、聞かなくてはならないことがあります」

「――わかりました。ただ……」

「ただ？」

「……もう一人。それを聞かせなくてはならない人がいるのです。もはや、隠し通せな

いところに来てしまいましたから」

訝しむ彼女に対し、ダタツツはそう答えると、視線を王宮の方角へと向ける。

——正しくは、その中にある練兵場へと。

「……」

そんな彼の背を——その右腕を、ダイアン姫は静かに見つめている。

あの時も、アンジヤルノンとの戦いの時も。彼女はダタツツに回復魔法を施そうとはしなかった。

恐れているからだ。一度でも彼を癒してしまえば、一度でも彼に心を開いてしまえば……自分はずぐに、骨抜きにされてしまうと。それほどまでに、彼に惹かれてしまっている事実を、認めてしまうのだと。

(認めない……認める、ものですか……)

桜色の唇を噛み締め、拳を握り——姫騎士は、彼の背を睨み続けていた。

——その後。

「……なんだよ、オレを笑いに来たのかよ」

騎士団が訓練に励む中。練兵場の片隅で、両手に水浴び用の桶を抱え、反省の意として立たされている少女騎士が一人。

拗ねたような表情で、パトロールから帰ってきたダタツツを見上げていた。

「違う。……君も聞いていただろう？　昨日、国王陛下の寝室でジブンが話そうとしていたこと」

「……………」

「あれを、寝室で改めて話そうと思う。君にも、一緒に来てほしいんだ。今度はちゃんと正門から入って、ね」

「……………別にいらねえよ、そんな氣遣い。そんなことより……………」

「ん？」

「あ、い、いや、なんでもねえ」

少女騎士——ロークの本音としては、その誘いには飛びつきたくてたまらなかつた。傷付いても味方がいなくても、この国の人々のために奮闘できる彼が、なぜ帝国勇者として自分達に牙を剥いたのか。それを知ることができる、絶好の機会だったからだ。

しかし。それ以上に彼女は——城下町の火災を食い止めるため、片腕を痛めていたダッツの体調が気掛かりだったのだ。

規律を乱したことにより、反省させられていることへの氣まずさ。目の前の男への想いを知られたくない、という恥ずかしさ。

それらの氣持ちが絡み合い、ロークは腕への氣遣いを言葉に出せず、俯いてしまう。そんな彼女の胸中を察してか——ダッツはフツと微笑むと、彼女の両手に提げられ

た桶を優しく取り上げた。

「あっ……………」

「ダイアン姫から許可は降りてる。謝らなきゃいけないって思うなら、ジブンも一緒に謝るよ」

「で、でも！」

「腕なら平気。ありがとう、気遣ってくれて」

「……………」

「さ、行こう？ ダイアン姫も待つてる」

その笑みに、ロークは翻弄されるように頬を染め——意地を張る余裕もないまま、彼に手を引かれ、寝室へと向かっていく。

まるで、エスコートされる淑女のように……。

——そして。

王族の寝室に集まった五人の男女。

ダタツツ。ダイアン姫。ローク。バルスレイ。国王。

一堂に会する彼らの中で、初めに口を開いたのは——

「さて……………ダタツツよ。そろそろ、思い当たることを話してもらいたい」

——真紅の鎧に己を固める、老練の武人。バルスレイだった。

長きに渡る戦いの人生により培われた眼光が、国王の前に跪くダタツツへと向けられる。

その眼差しを浴びるダタツツは、自分の隣で案じるようにこちらを見つめるロークの視線を他所に、真摯な表情で顔を上げる。

話すべきことを纏めた人間が、見せる貌だった。

「ヴィクトリア様が、『勇者の剣』を使える理由……。それは恐らく——」
そして、彼は静かに。

「——彼女が先代勇者の血を引いているから、であるかと」

この場に居る人間全員に、衝撃を叩き込むのだった。

「先代勇者?! それは誠なのか、ダタツツ殿!」

「つまり、ヴィクトリアは——アイラックスは、勇者の末裔だったと?!」

「本当なのですか、ダタツツ様!」

「ヴィクトリア、様が……!?!」

どよめく四人に対し、ダタツツはあくまで冷静な面持ちで話を続ける。彼らが驚く様子も、全て予測していたかのように。

『『勇者の剣』は勇者にしか扱えない。その力が遺伝するものであったとしたら……: ヴィクトリア様が使えることにも、説明が付きましよう』

「……確かに、アイラックスもヴィクトリアも、滅多にいない黒曜石のような黒髪を持ち主。お前と同じ、異世界から来た勇者を先祖に持っている、という説は確かにあり得るかも知れん……」

この世界に伝わる伝承では、勇者は魔王を倒した後、旅に出て行方を眩ましたと言われている。その後、戦友の僧侶が統治する王国に子孫を残していた——とするならば、この仮説にも可能性が生まれてくるだろう。

アイラックスが健在だった頃から、その強さ故に「彼が勇者の末裔ではないか」という説は密かに囁かれていた。だが、それには確証に至る根拠などなく、あくまで噂の域を出ないものだったのだ。

その噂が今、当代勇者のダタツツによつて証言されたことで——突如、真実味を帯びたのである。

「しかし……。アイラックスやヴィクトリアが勇者の血を引いていたとして……。なぜ、彼女は『勇者の剣』を持って行方を眩ましたのだ……。しかも野盗共を狂わせ、城下町に被害を齎すなど……」

「お父様！ ヴィクトリアは、そんなことをする人間ではありませんん！」

『『勇者の剣』の力に、彼女が操られているとするならば……。今のヴィクトリア様は、危険な状態かも知れませんが』

「操られて……いるだと？ 『勇者の剣』とは、そんな禍々しい力を宿した剣だったというのか？」

ダタツツの言葉に、バルスレイは眉を顰める。彼と共に戦場を駆け抜けてきた自分にさえ、気付かなかつた闇があつたというのか——と。

「……ジブンが、帝国勇者として生きていた頃の話にも繋がることです。——全てを、お話ししましょう」

そして——こちらを見遣るロークを一瞥し、ダタツツは穏やかな口調で……ダイアン姫の、食い入るような視線を浴びながら。

己の過去を語る。

——それは。

異世界の少年、「ダタツツ」こと——「伊達竜正」だてたつまさきの追憶であつた。

第18話 勇者召喚

ある、夏の日。

喪に服した人々の中に——他の人とは異なる服装に身を包む少年がいた。

新品のブレザーを着た、初々しい顔立ちを持つその少年は——暗い闇に沈んだ表情で、視線の先にある遺影を見つめている。白いハンカチで涙を拭う、母の涙声を聞きながら。

そんな彼の瞳には、在りし日の父の笑顔が、映し出されていた。

(なんで。なんでだよ。なんで、俺じゃなくて……父さんが……死んじゃうんだよ)

どうして、こうなってしまったのか。自分はどうすれば良かったのか。

そう思い悩む彼の脳裏には——父の最期が、色濃く刻まれている。

数日前——少年が、小学校一年生の夏休みを満喫していた頃。

大好きな父と共に楽しんだ海水浴の帰り。……少年は明日から、また楽しい一日が始まるのだと、信じて疑わなかった。

夕焼け空を見上げる彼の瞳には、希望の色しかなかったのだ。

横断歩道を駆け出す瞬間、眼前に信号無視のトラックが現れるまでは。

「竜正あああつ！」

何もかもが、一瞬の出来事だった。

最愛の父が、必死の形相で自分の名を叫んだのも。その勢いのまま自分を突き飛ばしたのも。——自分の身代わりとなり、トラックに撥ねられたのも。

何もかもが一瞬で、砕け散つたのだ。少年が信じていた日常が、全て。

——そして、全てが終わつた時。

トラックの運転手が呼んだ救急車のサイレンが響く中、少年は呆然とした表情で……倒れ伏した父の傍に、膝を突いていた。

だが、そんな彼の様子とは裏腹に——我が子を見遣る父の表情は、穏やかなものだった。

息子の無事に安堵し、微笑む彼は、何も語らず……あるいは、語れず。静かに、眠るように。

瞼を閉じ——目覚めることはなかった。

生まれた頃から傍にいた、掛け替えのない家族は、もういない。

父だった遺体は灰となり、この世から消え去つた。

それでも。生前の父の姿は、少年の心に深く住み着いている。共に過ごしてきた日々も、最期の瞬間に見せた笑顔も。

色褪せることなく、少年の中に生きていた。

(父さん……俺……)

自分のせいで父が亡くなったこと。その重さを背に感じながら、少年は隣にいる母を見遣る。

夫を喪った悲しみに沈む彼女の姿は、少年の心をさらに締め付けた。

(せめて……母さんは……母さん、だけは……!)

その重圧に追い詰められた少年は、悲痛な表情で決意を固める。

残された母は、自分が守らなくてはならない。母を、一人にしてはいけない。

父を殺してしまった今の自分に、出来ることがあるとすれば……それだけなのだから。

——しかし。

少年は、それすら叶えられなかった。

……数年後。中学校の入学式を迎える日。

時間が傷を癒してくれたのか、少しだけ元気を取り戻していた母と、いつも通りの挨拶を交わす。

「じゃ、行つてきます」

「ええ。……行つてらっしゃい。気をつけてね」

「……うん」

そして、微かな笑みを浮かべる母の顔を、その目に焼き付けて——家を出た瞬間。まばゆい光が一瞬にして、少年の目の前を覆い尽くす。

「なッ、なんだッ!?!」

余りの輝きに、目を覆う少年。気づけば、周囲の景色も全て、白い光に遮断されていた。

「か、母さんッ!」

何が起きたのか、判断する暇もなく。彼は、すぐ近くに——はずの、母を呼ぶように叫んだ。

しかし。その声が母に届くことはない。彼が今いる世界は、私達が暮らしている世界とは……遠く離れているのだから。

「——え? こ、ここは!?!」

そう。ここはもう、地球ではない。

「おお……成功したのか!」

「あの少年が、伝説に伝わる異世界の勇者なのか!」

「これでようやく、戦争が終わる……! 私の子も、遠征から帰れるぞ!」

煌びやかな装飾で全てを彩る、帝国の皇室。帝国中の名士が集まる中、決行された勇

者召喚の儀式の、現場なのだ。

「なんだ……！　なんなんだよ、ここは!?」

震える声を漏らしながら、少年は戸惑いの表情で辺りを見渡す。高貴な服装に身を包む、見知らぬ男達がざわめきながら、好奇の目で自分を見つめている状況に、少年は混乱していた。

（異世界!?　勇者!?　伝説!?　この人達、さつきから何を言ってるんだ!?）

家を出た瞬間、目の前に現れた光に目を瞑ったと思えば、こんなところにいる。そんな現実離れた事象に、少年の理解は全く追いつかないままだったのだ。

「——皆の者、静粛に。神より遣わされた勇者の御前であるぞ」

そうして絶え間無く続く男達の声に、少年の理性が耐え切れなくなる直前。

荘厳な男性の声が響き渡り——瞬く間に、この場を静寂に包ませてしまった。

「……!?」

その声の主——艶やかな装束に身を包む初老の男性は、少年を見つめながら静かに歩み寄る。その隣に、同様の装束を纏う一人の少女を伴って。

周囲の間は、その男性と少女が進む道を畏れるように明け渡していった。その様子を見れば、彼らのことを全く知らない少年でも二人がどういふ人物なのかは理解できる。

(この人が、この中で一番偉い人……なのかな?)

彼ら二人が、この状況を説明してくれるのだろうか。あるいは、この夢の世界のような場所なら出してくれるのだろうか。

そんな微かな希望を頼りに、少年はこちらに近づく彼らに、助けを求めようような視線を送る。

「お初にお目にかかる。余は、この帝国を治める皇帝である。異世界の勇者殿、遙か遠い世界から、よくぞ参られた」

「皇女、フィオナでございます。勇者……様」

「え、えっ……と……!?!」

だが、目の前までやって来た彼らは、少年の希望に沿うことなく——その場に片膝を突いた。

明らかに高い身分の持ち主である二人が、見ず知らずの自分の前に跪く。その状況に、少年はさらに狼狽してしまうのだった。

「この戦争に終止符を打ち、世界に統一された平和を齎すには——貴殿の力が必要なのだ。どうか帝国の、ひいてはこの世界の未来のため、力を貸して頂きたい」

「私からも……お願い申し上げます。勇者様」

(な、何が……何がどうなってるんだよ。俺、どうしたらいいんだ……!?)

あり得ない状況に、突如叩き込まれた少年は頭を抱える。

——そして。そんな彼を、遠巻きに見つめる男がいた。

(異世界の勇者……か。仮に伝説通りの強さだったとするなら……私の技を、託してもいいかも知れんな)

その男——在りし日の猛将バルスレイは、真紅のマントを翻すと……人知れず、皇室から立ち去っていくのだった。

第19話 勇者の資格

異世界に突如召喚された少年、伊達竜正。

彼は今。帝国の勇者として帝国製の鎧と兜を身に付け、剣の稽古を受けていた――

「うがあッ!？」

「……ふざけた話だ。このような素人の少年が勇者とはな」

――が。

三ヶ月以上も続いているバルスレイ將軍との稽古の中で、一本も取れない状況が続いているのだった。

召喚されて間も無く、竜正は皇帝からこの世界の説明を受け、自分が何の為に異世界から召喚されてきたかを知らされた。

帝国と王国の戦争。数で勝る帝国を圧倒する、アイラックス將軍の存在。その対策として残された最後の手段である、勇者召喚の儀式。

それら全てが、皇帝の口から語られたのである。

――この戦争を終わらせなければ、元の世界に帰すことはできない、ということも。

勇者として召喚された時点で、竜正は常人を超えた身体能力を宿されていた。その力

に物を言わせれば、元の世界への帰還を強要することも出来ただろう。

——しかし、竜正はそれをしなかった。否、出来なかったのだ。

祈るように自分を見つめる、皇女フィオナの瞳。王国への遠征で我が子を失った遺族の、すすり泣く声。

それらを目の当たりにした竜正は、強硬手段に踏み切れず——勇者として戦い抜き、一日も早く母のもとへ帰ることを選んだのである。

しかし……ごく普通の中学生として生きてきた竜正には、当然ながら剣の心得などない。それでも勇者として与えられた身体能力を駆使し、大抵の帝国騎士には勝つことも出来た。

——だが。帝国騎士の頂点に立つ、バルスレイ将軍は別格であった。

素人ゆえに無駄が多く、隙だらけだった竜正は、老練な技術を持った彼により徹底的に叩き伏せられてしまうのだった。

刃を潰した訓練用の剣とはいえ、すでに竜正の身体は痣だらけである。

「くそっ……！　こんな、ことで……終われるかっての……！」

「ほう、あれだけ生身の部分に打ち込んでやったのに、まだ動けるか。打たれ強さだけは伝説通りだな」

しかし、バルスレイに勝てないからといって、諦めるという選択肢はない。彼に勝つ

て戦場で戦えることを証明しなければ、戦いに参加することもできない。母に会える日も、遠ざかっていく。

元の世界へ帰るには、強くなるしかない。強くなって、勝つしかないのだ。

「だが、それだけだ。今の貴殿では、アイラックス打倒の切り札になどなり得ない。そればかりか、『勇者の剣』を抜く資格すらあるまい」

「んだとッ……！」

「——そうではない、というのなら剣で証明してみせよ。戦場では強者こそが正義。口先など糞の役にも立たんということ覚えておけ」

「……このおおおッ！」

帝国の練兵場に、少年の雄叫びと悲鳴、そして剣戟の音が響き続ける。それは夜の帳が下りるまで、絶え間無く続いていた。

——その戦いが、ひとまずの終わりを迎える頃。

「……はあ」

バルスレイが去った後の、荒れ果てた練兵場の中で。竜正は一人、練兵場の中心に仰向けで寝そべり、地球と変わらない夜空を見上げてため息をついていた。

（母さん、今頃どうしてるのかな……。心配、してるよな）

やろうと思えば、バルスレイの目を盗んで皇族を脅し、地球への送還を強いることも

出来ただろう。だが、それをやってしまえば、あの幼い皇女は深く悲しむに違いない。そうまでして母のもとへ帰ったとして、果たして自分は耐え切れるのだろうか。いや、できない。

人を悲しませて自分だけ逃げるなんて、できない。——そんな情が、竜正をこの世界に繋ぎ止めているのだった。

「勇者様？」

「……あ、フィオナ様」

その時。竜正の顔を覗き込むように、十歳前後の幼い皇女が顔を出してきた。さらりと下に垂れた銀髪が、月光を浴びて幻想的な輝きを放つ。

——病弱ゆえ、昼間の陽射しに耐えられない彼女は、夜中にしか散歩にも出られないのだ。無論、彼女からやや離れた練兵場の隅には、護衛の近衛騎士が数人控えている。彼らは勇者とはいえ、ぼつと出の存在でしかない竜正が気にくわないのか、彼に対しては厳しい視線を向けていた。

「そのように畏まらないでくださいまし、勇者様。……どうかフィオナ、とお呼びください」

「そ、そつか。えーと……じゃあ、フィオナ」

「はい」

皇女という地位ゆえに、対等な友人などいなかった彼女にとって、竜正の存在は非常に大きいものであった。それゆえに彼女は、呼び捨てにされた瞬間——月明かりにも勝る美しい笑顔を、彼に向けるのである。

「勇者様、今日もお疲れ様でしたね。でも、あと一息ですわ。今まで涼しい顔をされていたバルスレイ将軍が、初めて汗をかいていらしたものだ。城の窓から見ても迫力が伝わるほどの、接戦でしたわ」

「勝てなきや意味ないさ……。早くバルスレイさんに、認めてもらわないとなあ」

「……一日でも早く、お母様の元へ帰るため、ですか？」

「ああ。……きつと、母さんも心配してるから」

そう語る竜正の目には、眼前の美少女ではなく——視界に広がる夜空の、遙か彼方に在るであろう自分の世界が映されていた。

一方、フィオナはそんな彼の様子に顔色を曇らせていた。戦争が終われば、彼はこの世界からいなくなってしまう。そう考えてしまったからだ。

「それよりさ。君も、俺のこと勇者様って呼ぶの、やめなよ。別に俺、まだ勇者として認められたわけでもないらしいからな。『勇者の剣』ってのを貰って、初めて正式に認められるんだろ？」

「確かにそうですが……しかし、私にとって勇者様は既に、本当の勇者様なんです」

「本当の?」

「……はい」

だが、母に会いたいという彼の願いを無下にはできない。その葛藤に苛まれている彼女は、傷と剣だこだらけになった竜正の手に、白く瑞々しい自分の掌を重ねる。

「私、勇者を召喚すると決まった時……本当は、怖くて仕方がなかった。逃げ出したくて、たまらなかつたのです」

「怖い……? 勇者が?」

「……はい。古に伝わる魔王すら屠る存在であるということは、それ以上の力の持ち主であるということ。もし、何かの拍子に勇者様のお怒りに触れるようなことがあれば、この帝国は……民はどうなってしまうのかと……私はずつと、不安だつたのです。先代勇者のような、正義と愛に溢れた傑物が来るという確証など、ありませんから」

「そっか……ただただ強い上におつかない奴だつたら——つて考えたら、そりゃあ怖いよな」

左右に首を振り、肩を震わせて語るフィオナ。そんな彼女の様子を見遣り、竜正は召喚術者として彼女が背負っていたプレッシャーの重さを垣間見るのだった。

(でも、それって俺が本当の勇者だつて話と、どう関係あるんだろう?)

——フィオナの考えに、少しばかり首を傾げながら。

「だから、初めて勇者様にお会いした時は……驚きましたわ。私と数歳程度しか離れていないような人が、本当にあの、伝説に伝わる勇者様なのか——と」

「あはは……確かに、そりゃあ拍子抜けだな。敵ついおっさんが出てくるかと思つたら、俺みたいなガキだもんな」

「……けれど。今ならわかります。そんなあなただからこそ、真の勇者なのだ」と

「俺、だからこそ？」

フィオナの言葉に、竜正はさらに混乱する。自分に、勇者としてどんな適性があるというのか——と。

「バルスレイ將軍は……比類なき強さを誇る帝国最強の武人。戦つた相手は、訓練であつても瞬く間に戦意を失つてしまう——と言われています。私も、彼に挑んだせいで剣を握れなくなつた騎士を何人も見てきました」

「そつ……か。そうだよな。確かにあの人、恐ろしく強いもんな」

「——けれど。あなたは何度彼に打ち倒されても、怯むどころか益々戦意を燃やして、立ち向かつて……。あんな風に戦える騎士を、私は今まで見たことはありません」

「あ、あれは単に往生際が悪いだけだよ」

自分をしきりに褒め称えるフィオナの言葉に、照れ臭さを覚えたのか——竜正は頬を染めて自虐する。だが、そんな彼の言葉に、銀の姫君は小さく首を振つて否定するの

だった。

「いいえ。私は——あなたの戦いを見て、ようやく理解しました。勇者……すなわち勇気を持つ者とは。魔王さえ凌ぐ絶対的な強者などではなく——如何なる相手にも立ち向かえる心の持ち主を指すのだと」

「立ち向かえる、心……？」

「……私は今まで、自分の身体の弱さに甘えて……昼間でも室内に塞ぎ込んだままで、外の景色を見ようとしませんでした。けれど、練兵場から聞こえてくるあなたの叫びが……私をここへ誘ったのです」

「……」

「もし。恐れることなく、バルスレイ將軍に立ち向かっていくあなたの勇気を目にすることができなかつたら……私は今も、こうして外に出ることもなく、自分の弱さに屈していたに……違いありません」

言葉を重ねるフィオナは、徐々に語気を強めていき——やがて竜正の手を、か細く白い両手で懸命に握り締めていた。

その夢くも気高い彼女の瞳は、竜正の眼を真っ直ぐに射抜いている。

「だから私は……私に勇気を授けて下さったあなたを、勇者様とお呼びし——お慕い申し上げるのです」

「フィオナ……」

「たとえあなたが違うと仰つても。私は、あなたを勇者様と呼び続けます。力ではない強さで人々に勇気を与えるあなたこそ、真の勇者なのですから」

そんな彼女の、愚直なまでの素直さに——竜正は苦笑いを浮かべて、自分の手を握る白い肌を見遣るのだった。

「……真の勇者、か。随分、ハードルが上がっちゃったな……」

今の自分に来ることなど、たかが知れている。

それでも。目の前で、自分を慕うと宣言した少女のために——ほんの少しでも、前に進まねばならないと。

(ここで俺が頑張らなきゃ……この娘の想いも、裏切っちゃうんだよな)

——少年は、人知れず誓うのだった。

第20話 少年の意地

そして——翌日の練兵場。

竜正は、城の窓から自身を見守るフィオナの眼差しを背に受けて……バルスレイとの稽古に臨んでいた。

「……」

「ほう。何があったか知らぬが……目の色が、昨日までとは違うな」

一人前の剣士——には至らない技量ではあるものの、その面持ちはすでに戦士としての覚悟を、微かに滲ませていた。

そんな彼の変貌が、皇女フィオナに由来しているとは露も知らないバルスレイは、感心するように竜正を見据える。

そして——稽古が始まった。

（ただがむしやらに向かうだけじゃダメだ……。相手がどう動くか。それに対抗するためには、自分がどう動くべきか。それを見据えて動くんだ……！）

訓練用の剣が再び火花を散らし、練兵場に衝撃音を響かせる。連日続くその激しさを受けてか、徐々に兵達も観戦に集まるようになっていた。

——そんな中。この剣戟の中で、竜正の「戦闘」は大きく変貌していた。

より素早く、より強い一撃を叩き込めばいい。それだけを考えて戦つていては通用しない強敵・バルスレイ。

そんな彼に抗するためには、力押し of 剣術から卒業しなければならぬ。日々の稽古の中で培った経験を経て、そう気づいたので。

そして。

その変化は——先手を打とうと横薙ぎに払われた、バルスレイの素早い剣をジャンプで回避する瞬間に現れていた。

「む……今の一閃を躲すか」

「……ッ！」

猪突猛進な戦いばかりを繰り返していた少年が、一転して冷静な立ち回りを見せて自分の一閃をかわしたことに、バルスレイは目の色を変える。

バルスレイが見せる僅かな仕草一つから、次の攻撃を読み——回避する。それは口にするれば簡単だが、彼の剣速に対応できる身体能力が要求される、至難の技なのだ。

ゆえに——彼と戦い、再起不能にされた剣士を数多く見てきているギャラリーは、竜正の動きに度肝を抜かれていた。彼を妬み、野次を飛ばすために来ていた近衛騎士達も、その戦いぶりに圧倒されている。

帝国騎士共通の剣技である帝国式闘剣術の訓練を始めて、三ヶ月程しか経っていない少年が、あのバルスレイ将軍と渡り合っている。

——その事実が、人々に衝撃を齎し。

確信を呼んだ。

彼は——竜正は本当に、伝説に伝わる勇者なのだ。

(今までのような、「母親に会いたい」という動機が生む「焦り」に突き動かされた戦い方では、このような冷静な立ち回りは出来ん。負け続けたことで考えを改めたか、あるいは——他に負けられない理由が出来たのか)

一方、彼と相對するバルスレイも竜正の急激な成長に目を見張っていた。實際の剣技は未だに荒削りではあるものの、竜正が帝国式闘剣術の極意を徐々に——そして確実に吸収しつつあることを、剣を交えることで実感しているのである。

このまま成長し続けるのなら……あの古の剣術を、伝授できるかも知れない。そんな考えが、バルスレイの脳裏を過る。

(だが、あの剣術を伝える前に——確かめねばなるまい。この少年が出し切れる、真の全力というものを)

しかし、まだ足りない。まだもう一步、足りない。そう判断するバルスレイは、瞳をさらに鋭く研ぎ澄まし——さらに素早い剣閃を放つ。

「ぐわあッ!」

急激に速度を上げる老将の剣。その速さに対応しきれず、竜正の土手つ腹に強烈な刺突が炸裂するのだった。

骨を軋ませ、内臓を押し潰すその衝撃に、竜正は目を見開き苦悶する。地べたを転げ回り、震えてうずくまる彼の姿に、人々は今までバルスレイに敗れてきた騎士達の影を重ねるのだった。

——やはり、如何に勇者といえど付け焼き刃ではこの程度なのか。

——バルスレイ將軍に勝てる騎士は、この帝国にはいないのか。

——アイラックスを倒せる人間など、ありえないのか。

口々に囁く人々の声も、激痛に苦しむ竜正には届かない。彼は痛みに苛まれながら、自分とバルスレイとの間にある絶望的な差を、改めて思い知らされるのだった。

(この少年が背負う欠点——それは小柄な体格ゆえのリーチの短さにある。今の一撃を完全に再現したとしても、彼の剣が私に届くことはない)

大人と子供。その物理的な体格差が、竜正の進撃に歯止めを掛けているのだ。

……その現実を彼に突き付けるバルスレイには、ある一つの想いがあった。

(——だが、実戦にそんな言い訳は通用せん。子供だろうが剣を取って戦う以上は立派な戦士だ。その壁を越えられぬ者に、戦場に立つ資格はない。……力無き兵など、あつ

てはならんのだ)

アイラックス將軍の力により膠着状態を保ってはいるものの、国力の差で王国が圧倒的に不利であることには変わりない。

その差を僅かでも埋めるため、今の王国は国民から少年兵を募り、戦争に参加させている。——半人前にも値しない、遊びたい盛りの子供達を。

そうして犠牲になった幼い命を、バルスレイは敵将として幾度となく見てきた。だからこそ彼は、勇者として祭り上げられ、戦争に巻き込まれたこの少年を厳格に指導しているのだ。

せめて……母に会いたいと願う彼の想いが、異世界の戦場に散らぬように——と。

一方、竜正は目の前に突き付けられた難関の前に、再び焦りを募らせていた。

如何に強力なパワーを持っていようと、当たらなければ意味がない。それを当てさせるための「武器」がなければ、前には進めない。

その非情な現実が、竜正に重くのしかかるのだった。

(俺が大人になるまで待って、言いたいのか!? 冗談じゃない、それまで母さんを独りぼっちになんて……させるもんか!)

それまで保っていた戦いのリズムを捨て、竜正は元のがむしやらかな剣術でバルスレイに挑みかかる。だが、二人の間にある差は勢いで覆せるような甘いものではない。

喉に痛烈な刺突を受け、竜正は再び吹き飛ばされてしまったのだった。

「げほっ……がはッ！」

「——これが真の戦い、というものだ。この壁が越えられぬまで、貴殿を戦場に立たせるわけにはいかん。まして、この帝国に伝わる秘宝である『勇者の剣』を託すことなどできん」

冷酷なバルスレイの言葉が、竜正の胸を締め付ける。

——自分ではここまでが限界なのか。一日も早く母に会おうなど、甘かったのか。

（ごめん……母さん。俺は、俺は……）

その弱い心が、竜正の身体から力を奪い——彼の剣を握る手を、緩ませていく。

もはや、今日の彼には立ち上がる力などない。

誰もが……バルスレイさえもが、そう感じた瞬間であった。

「——勇者様あつ！」

こんなむさ苦しい騎士達の世界とは、最も無縁であるはずの。

静かな一室で、療養しているはずの。

幼い皇女の叫びが、風に乗って練兵場へ響き渡るのだった。

「……皇女殿下!?!」

「み、み、見ろ！ 皇女殿下がお見えになられているぞ！」

「なぜ皇女殿下がこのような場へ!？」

その声を聞き取った観衆は、この帝国の頂点に近い存在を目の当たりにし、騒然となる。城の窓から練兵場を見つめるサファイアの瞳は、その喧騒を気にも留めず、倒れ伏した少年に一途な眼差しを注いでいた。

「立って! 立ち上がって! そしていつか、お母様のもとへ……けほつ、一日も、早く……!」

病弱な身体を押しした反動に苦しめられ、幾度となく咳き込みながらも、彼女は懸命に声を張り上げる。そんな姿を前に、騎士達は慌てて救援を要請し、騒ぎ続けていた。

「何をしているか貴様ら! 早急に皇女殿下を医務室へお連れせぬかッ!」

そして——内心で驚愕しつつも、あくまで冷静に状況を見つめていたバルスレイは騒ぎ立てる騎士達を一喝する。次いで、彼女の叫びから……立場を越えた竜正との繋がりを悟るのだった。

「実績を立てる前から皇女殿下と関わりを持つ、か……。貴殿が勇者でなければ、今頃は不敬罪で首が飛んでいたところだな」

「ぐ、う……:ファイ、ファイオナ……!」

「——だが、これでようやく貴殿が急成長した理由が読めた。さあ、皇女殿下の御心に添えてみせよ。ここで屈するようなら、あと五年は修練を続けてもらう」

「……ッ！」

鋭い眼光で自身を射抜くバルスレイと、竜正は倒れ伏したまま視線を交わす。その眼には——もはや、諦めの色はない。

（誰が……諦めるものかよ！　フィオナがあんなにも、俺のために……頑張ったのに！　俺がここで挫けたら、全部が無駄になる！　フィオナの想いが、無駄になるッ！）

震える両足に鞭打ち、ふらつきながらも——立ち上がる。身体こそポロポロだが、その瞳は戦う前より熱く煌めいていた。

（無駄になんて、させない！　俺が、させるものかアッ！）

そして、剣を握る力が——最高潮に膨れ上がり、眼前の敵へ狙いを定める。その一点に集中された殺気を浴び、バルスレイの気力が一気に引き締まった。

（来るか！）

そう身構えるバルスレイを目掛けて、竜正は刺突の体勢で突進する。先程と変わらないう様子で突撃してくる少年に対し、老将は油断することなく眼を細めた。

（刺突と見せかけて横薙ぎか。切り上げか。さあ、来るなら来い。私も、その全力に応えてみせ——）

そして、双方の間合いが——バルスレイが届き、竜正が届かないところまで詰まる瞬間。

竜正の剣が、手元から離れ——

（——なんとッ!?!）

——矢の如し速きで、バルスレイの胸を打ち抜くのだった。

「届かないのなら、届かせればいい……! そうだよな、バルスレイさんッ!」

少年は反動により跳ね返ってきた剣をキャッチし、慢心することなく残心を取る。敵に油断を見せてはならない、という師の教えを真摯に受け止めている証だ。

（信じられん……! 荒削りな狙いだつたとはいえ、私に教わる前から己の感性のみで投剣術を放つとは……!）

一方、胸を押さえているバルスレイは、竜正が咄嗟に見せた気転に目を見張っていた。そして、今こそ彼は確信する。

この若き勇者こそ、失われた帝国の秘剣——帝国式投剣術を受け継ぐに相応しい剣士である。

（幼いこの少年に託すのは非情かも知れん……が。もはや、彼しかまい。アイラックスを越えられるのは——この世界に、彼一人だ）

そして——バルスレイ将軍が一本を取られた、という非常事態を目の当たりにして静まり返っていたギャラリーを前に、老将は高らかに宣言する。

「——見たか! これぞ、我が帝国が誇る伝説の勇者の剣! この剣が我らの切っ先と

なり、帝国の未来を切り拓くのだ。皆の者！ この若き勇者と共に、帝国の安寧を築き上げるのだッ！」

その宣言を受け、騎士達は僅かな沈黙の後——爆発するような歓声を上げる。

皆、確信したのだ。バルスレイ将軍と勇者が共に立ち上がれば、必ず王国に——アイラックスに勝てるのだと。

そして、勇者を讃える歓声を聞き——騎士達により医務室へ連れられていたフィオナは。

「勇者……様あ……」

自らが思慕の情を寄せる少年の勝利を知り、暖かな笑みを浮かべるのだった。

第21話 勇者の剣の実態

「——よくぞ、勇者の資格を勝ち取ってくれたな。タツマサよ。これで余も心置き無く、貴君に『勇者の剣』を授けることができる」

「はい。……ありがとうございます。ごさいます。皇帝陛下」

——その夜。

竜正はバルスレイに連れられ、謁見室へ訪れていた。広大な真紅のマットや絢爛な装飾で彩られた謁見室は、静寂に包まれており……この場には皇帝とバルスレイ、竜正の三人しかいない。

玉座の前に立つ皇帝の前に、並んで跪くバルスレイと竜正は、静かに主君の言葉に耳を傾けていた。

「フィオナは貴君を大層気に入っているようだな。……これからも勇者として、あるいは友として、支えになってくれ」

「……皇帝陛下。俺は——」

「わかっておる。戦争が終われば、約束通り元の世界に帰そう。娘の傍に居てくれぬのは心残りであるが、母上のもとへ帰りたいという貴君の願いに背きはせん。——今は、

この戦を終わらせ、いたずらに犠牲者を出さないことが先決なのだ」

「……はい」

「療養中のフィオナも、それを望んでいるはず。余は、そう信じておる」

そして——皇帝は装束の懐へ手を伸ばし。古びた包帯で包められた、一振りの剣を掲げた。

「そのためにも今は、勇者である貴君と——この『勇者の剣』が必要なのだ」

「……これが、勇者の……」

剣を手に、皇帝は玉座から竜正の前へと、静かに足を運ぶ。やがて、勇者である少年の前に——その剣が捧げられた。

「包帯を取るがいい。貴君には、その権利がある」

「……」

「勇者の剣」が纏う、ただならぬオーラ。包帯の上からでもわかる、その威圧を受け——竜正は、言葉を失っていた。

そして、そのまま皇帝の言葉に無言で頷き、彼は剣を取る。……次いで、その感触に、彼はある違和感を覚える。

（なんだ……この形。この国の騎士達が使ってる剣と、全然違う）

「勇者の剣」と聞いて、帝国騎士の剣に近い形状を予想していた竜正にとって——実際

に触れた「勇者の剣」のシルエツトはあまりにもイメージからかけ離れていたのだ。

——これは、まるで……。

「……………」

吸い寄せられるように手を伸ばし、包帯を巻き取っていく。彼の脳裏に渦巻く「まさか」という感情は、剣が包帯から露出していく毎に膨れ上がっていく。

そして——黒く塗られた剣の鞘が完全に露わになる時。その「まさか」は、確信に変わった。

「これ、は……………」

黒塗りの鞘。微かな曲線を描く刀身。柄巻きを施された木製の柄。

それは、少年がよく知る形だった。

「これぞ、数百年前に召喚された先代勇者が、魔王を打ち破るために用いた伝説の神器——

『勇者の剣』。貴君にはこれを以て、我が帝国に力を貸してもらいたい」

「……………」

鼓舞するような口調で語り掛ける皇帝に対し、竜正は無言のまま「勇者の剣」の全貌を見つめる。

（これが「勇者の剣」って……………！ だって、これ……………）

そして——異世界から来た自分にしかわからない「勇者の剣」の「別称」を、呟くの

だった。

「日本刀、じゃないのか……!?」

第22話 帝国勇者の初陣

竜正が「勇者の剣」を手にして——さらに一ヶ月が過ぎた頃。

「よいな……タツマサ」

「……ああ」

争いとは無縁の世界に生きていた少年が、戦士として戦場に立つ日が——ついに訪れたのだった。

彼の目には今、度重なる戦いにより荒れ果てた大地が広がっている。

「かつては、美しい草原だったこの地も……幾年も続く戦により、見ての通りの有様だ。一日も早く、この戦争に終止符を打たねば、王国も我々もいたずらに犠牲を増やすのみ。

——その鍵を握っているのは、お前なのだ。わかるな？」

「……わかつてる」

「……なに、臆することはない。お前には私から勝ち取った『勇者の剣』と、その身に纏う『勇者の鎧』があるのだ。お前は迷うことなく、戦えばいい」

「……」

かつて、先代の勇者が纏ったと言われている「勇者の鎧」を身に付けた彼の姿は——

少年の故国に伝わる「武者」の面影を色濃く残している。

偶然にも、生前の先代勇者と近い体格を持つていた彼に託された、漆塗りの甲冑は——帝国騎士達の中でも異彩を放つ形状であった。

(……そうだろうな。先代の勇者が戦国時代の鎧武者だったのなら……俺くらい小さくたつて不思議じゃない)

少年が知る、この鎧が存在していた時代は——彼が生まれ育った時代と比べて、男性の平均身長が著しく低いのだ。

ゆえに、「子供」である竜正が「大人」の鎧を着ることも可能なのである。

(数百年前にここへ召喚された、これの持ち主は——どんな気持ちで戦ってたんだろう。どんな想いで、この剣を取ったんだろう……)

すると。

自分の姿を見下ろして、そう逡巡する彼の首に——赤い巻布が掛けられた。

少年の体躯と比べて、あまりにも長いその巻布は、風に靡いて激しく揺らめいている。この状態で動き回れば、いくら本人が小柄であっても、目立つことは想像に難くない。

「えっ……?」

「——風変わりな格好とはいえ、お前の体格で乱戦状態の戦場へ飛び込めば、こちらはすぐに見失ってしまうだろうからな。士気の要となるお前が見えなくなつては、兵達も不

安になろう」

「バルスレイさん……」

「我々は、お前を戦乱の世へと引き摺り込んでしまった。……だが、私はお前を決して独りにはさせません。この赤色が、その誓いの証だ」

「……」

独りにはさせせない。その言葉は、この世界に居るただ一人の異世界人である竜正の胸に、深く染み込んでいた。

父を失い、母と離れ離れになり、たった一人でこの世界に迷い込んだ彼にとって——その一言は、何よりも必要な言葉だったのである。

竜正は首に巻かれたマフラーを握り、唇を噛み締める。——そして、礼を言おうと顔を上げた瞬間。

「敵襲！ 我が軍の前方に、王国軍の先遣隊を確認ッ！」

双角の兜で頭部を固めた帝国軍の斥候が、息を切らしてバルスレイの前に駆けつけてきた。片膝を着き、必死の形相で戦況を伝える彼の眼差しを見遣り、銀髪の老将は一瞬のうちに目の色を変える。

「小手調べ、というところか……。本来ならば、切り札である勇者は本隊との決戦まで温存しておくべきだろうが……」

そして、力無い少年とは違う……一人の戦士としてここにいる、竜正の瞳を一瞥し。「……で彼らの出鼻を挫けば、戦局を変えることもできよう。——現代に蘇りし勇者の初陣だ！ 皆の者、勇者タツマサと共に……王国軍を討つぞッ！」

腰にした剣を天へ掲げ、竜正の出撃を宣言するのだった。彼の宣言を受け、兵達はけたたましい雄叫びを上げ、それに応えていく。

竜正は、そんな彼らの氣勢にたじろぐ様子もなく——むしろ焚き付けられたかのように、剣呑な眼差しで戦場を射抜いていた。

(……それにしても。初陣でありながら、ここまで落ち着き払っているとは……。やはり勇者とは、人の常識からは逸脱した存在なのであろうな)

一方。

バルスレイは新兵が抱えるような、過度な緊張感を全く見せず、あくまで落ち着いた物腰で戦場を見つめる少年の姿に、内心で驚嘆していた。

いくら勇者とはいえ竜正という少年は、ただの人間であるはず。母に会いたいという想いゆえに、焦りを募らせるような——情に溢れた人間のはず。

だが、今の彼にはそんな「人間らしさ」がまるでない。戦うためだけの人形のような——ある種の不気味ささえ、その瞳に滲ませていた。

本来ならば、そこで気付くべきだったのだろう。——彼はすでに、「勇者の剣」と銘打

たれた妖刀に魅入られているのだと。

しかし。竜正が「勇者」という特別な存在であることが、バルスレイの無理解を招いていたのだ。

真の勇者は初陣であろうと、恐れることはないのだと……戦いの世界に慣れ過ぎた老将を、納得させてしまったのである。

そして、その納得は——竜正への誤解となるのだ。

——やがて先遣隊を狙う、帝国軍の弓による迎撃を皮切りに……戦が始まった。

轟く怒号。響き渡る、剣と剣が交わる音。散る命と、飛び散る血潮。

命を削り合う、男達の叫びが——絶え間無く荒野にこだまする。

「……ッ！」

そのさなかで。

唇を噛み締め、恐怖を振り払うように突き進む少年は、敵軍の群れに飛び込むと。

「——おおおおッ！」

腰にした一振りの刀を抜き放ち——幾人もの命を、その刀身の錆へと変えていくのだった。白い刃に、赤い血潮が纏わり付き……少年の視界を肉片が染め上げていく。

「な、なんだッ!?!」

「あの少年兵は……!?!」

乱戦の只中に突如現れた、得体の知れない怪物。その存在に、王国軍の陣形が僅かに乱れると——

「今だッ！ 勇者の導きに従い、この戦場の血路を開けえッ！」

——バルスレイの怒号に突き動かされた兵達が、雪崩の如き勢いで王国軍へ接敵していくのだった。

予想だにしなかった敵軍の「新兵器」を前に、王国軍は為す術もなく数で勝る帝国軍に押し潰され——敗走していく。

それは、アイラックスという男によつて一度は覆された戦況が、本来の形へと揺り戻される瞬間であった。

（俺は……俺は必ず、母さんのところへ帰るんだ。そのためなら——）

——そう。

この戦いで初陣を飾った若き勇者は。

（——なんだって、やってやる。誰だって、殺してやる！）

命を奪うことを恐れることもなく、数多の兵士をその手にかけてのだ。

人の胸中に微かに潜む「殺意」を膨らませ、理性を押し潰す「勇者の剣」の力によつて。

——意識を乗っ取るわけではない。あくまで、己自身の胸に在る悪意。剣はそれを、

強く引き出しているに過ぎないのだ。

だからこそ、後に少年は——ありのままの自分が犯した罪を、知ることになる。

『タリナイ……チ、チガ……タリナイ』

手にした剣の囁きに従い、戦い抜いた先の——絶望を。

第23話 姫君達の祈り

かつて、この王国は豊かな土地に恵まれた、平和な国であった。……数年前から始まった帝国の侵略がなければ、それは今も続いていたのだろう。

大陸全土の統一による世界平和を目指す帝国は、王国が持つ豊富な資源や土地に以前から着目していた。それは帝国だけではなく、国力の拡大を狙う周辺諸国も、王国の領土に狙いを定めていた。

ゆえに時の皇帝は、大陸最大の軍事力を有する帝国の手で王国を管理し、その豊かな大地が争いの火種となる事態を回避すべきであると考え——帝国の傘下に入るよう、王国への交渉を試みたのである。

しかし、その交渉が侵略の口口であると見ていた王国軍は強硬に反発。やがて両者の緊張は、武力衝突へと発展するのだった。

——それから、数年。

今もなお、王国の大地を懸けた戦いは続いている。

「勝てるでしょうか……アイラックス将軍。今度は帝国屈指の武人と謳われる、バルスレイ将軍の軍団が相手と聞いています……」

「……案ずることはありません、姫様。父上は王国最強の騎士なのです。誰が相手でも、必ず王国軍に勝利を齎しましょう」

王宮の窓辺から、戦場の方角を見つめる少女が二人。王女ダイアンと——アイラックスの血を引く、ヴィクトリア。彼女達は今、遙か彼方の荒野で死闘を繰り広げている王国軍の勝利を、静かに祈り続けていた。

「……そう、ですよね……」

九歳という幼さでありながら、王族としての責任を強く感じているダイアン姫は、鮮やかな金髪を揺らしながら……小さな胸元を不安げに握りしめている。

「——大丈夫です。絶対に大丈夫。万一のことがあろうとも、姫様は私が命に代えてお守り致します」

そんな彼女の傍らに寄り添い、励ますように肩を抱く、黒髪の美少女——ヴィクトリアは、十二歳という年齢を感じさせない落ち着きで、幼い姫君を支えていた。

その落ち着きは——父、アイラックスへの絶大な信頼に由来するものであった。父なら負けない。父ならどんな相手にだって勝てる。

そう信じて疑わないからこそ、彼女は恐れることなく——戦いの行方に目を向けることができたのだ。

それゆえに彼女は、後に知ることになる。

愛する家族を失う悲しみ。信頼の根幹が崩れ去る絶望。全てを奪われる恐怖。それら全ての悪夢が彼女に襲い掛かる日は——そう遠くはないのであった。

——その頃。

王国とは比にならない領土を持つ、帝国の中心——帝都の中央に立つ、帝国城の皇室では。

「……勇者、様……」

艶やかな銀髪を揺らす、一人の美少女——皇女フィオナが、愛する少年の身を案じ、青空へと祈りを捧げていた。

あらゆる宝石に勝る美しさを持つ彼女の瞳は、その少年が旅立った先へと向かっていく。——そう。血と慟哭が渦巻く、荒野へと。

「案ずるな、フィオナ。タツマサならば、必ずや帝国に勝利を齎してくれよう。信じて、帰りを待つのだ」

「お父様……」

「百戦錬磨のバルスレイと、あの若さで渡り合える才覚……。勇者の力は本物だ。アイラックス将軍とも、対等以上に戦えるだろう。余は、そう信じておる」

その傍らで、フィオナの肩に手を置く父——皇帝は、娘を勇気付けるためか、鼓舞するような強い口調で彼女に語り掛ける。

彼は既に見抜いているのだ。竜正を想う、娘の胸中を。

(この戦争を一刻も早く終わらせねば、王国の資源が失われ、多くの命が失われる。……だが、そのために余は神の使いたる勇者を戦争に利用し……罪なき少年に、剣を握らせてしまった)

娘の想い人に課してしまつた業の深さに、皇帝は人知れず胸を痛める。そして——己が犯した罪の重さを、改めて見つめ直すのだった。

(余の罪深さは、未代まで語り継がれることであろう。神も、二度と勇者をこの世界に導きはすまい。勇氣と愛に溢れた異世界の若者

など……この世界には勿体無い)

そうして、己を責め立てつつも。

皇帝は、なおも神に縋る。

(——神よ。神罰があるならば、この暴君にのみ下されよ。そして願わくば……あの少年に、安らぎが訪れんことを……)

自らの理想のために、剣を取ることを余儀無くされた少年と、その少年を想う愛娘。彼らに齎される未来に、光が差すことを……願うのだった。

そして、その願いに近づくために——皇帝は一人の父として、娘の肩を静かに抱く。その温もりに触れたフィオナは、不安げな表情で父の顔を見上げた。

「今は、療養に専念することがお前の務めなのだ。彼の帰還を、笑顔で迎えられように。……わかるな？」

「……はぐ」

フィオナ自身も、父の振る舞いから自分の想いが勘付かれていることは察しており——彼の言葉に逆らうことなく、静かに踵を返す。父の配慮を、無為にせぬために。

——が。外の世界が、完全に視界から消え去る直前。

銀髪の皇女は、後ろ髪を引かれるように……一度だけ振り返る。

「……どうか……どうか、ご無事で……」

次いで、今にも消えてしまいそうなほどの、か細い声を絞り出す。その声色には、拭いきれない不安の色が渦巻いていた。

予感が、あつたのだ。

勇者の身に、何かが起きる——そんな、予感が。

そして……竜正の身を案じているのは、彼女だけではない。

遠く離れた、争いのない世界。その異界の、どこかに。

彼の影を追い求めるように、彼が暮らしていた街を彷徨う女性の姿があつた。

その手には、少年の顔写真が写された紙が何枚も握られている。

女性は道行く人々にその紙を手渡し、彼に繋がる情報を懸命に探し続けていた。

だが、人々はそんな彼女に関心を向けることはなく——我関せずと言わんばかりに踵を返し、立ち去っていく。

それでも彼女は——諦めない。

「竜正……どこにいるの。……早く、帰っておいで」

行方不明となった息子の顔写真を見つめ、彼女は再び歩み出す。

「……お母さん、待ってるから」

いつの日か。我が子に会える日が来ると、信じて。

第24話 王国將軍アイラックス

——その頃。

帝国軍の別働隊は、王国軍本隊の戦力を分散させるべく、陽動作戦を決行していた。勇者を擁する帝国軍本隊の攻撃力で、一挙に敵本隊を撃滅するための、重要な布石として。

……しかし。

「ふん……バルスレイなどに手柄を渡してなるものか。王国軍を——アイラックスを討つのは由緒正しき名門出の、この俺様だ」

別働隊を指揮する武将、アンジャルノンは——課せられた任務に、私情を挟もうとしない。

戦の最中に独断で行動内容を変えるなど、愚策の極み。しかし、王国軍本隊とアイラックス將軍を侮っていた彼は、戦を終えた先にあるものにはか目を向けていなかったのだ。

そして、彼の判断に恭順する兵達もまた——同じ視野で、この先にあるであろう未来を夢想している。

（王国人の女共はいいモン食つてからか知らねえが——美人が多いって話じやねえか。敵軍を突破して王都に一番乗りすりやあ、略奪し放題だ。あの糞真面目なバルスレイに先を越されちゃあ、それも出来んしな）

戦に勝てば、何をやっても許される。どれほど女を奪おうと、街を焼こうと、それを咎める者はいない。善悪を決めるのは、戦を制した者だけなのだから。

——アンジャルノンとは、そういう男なのだ。

さらに彼は——部下達にもその考えを浸透させるために、敢えて末端の兵達の給与を減らしている。敵国からの略奪を、彼らの収入源とするために。

そしてまさに今、アンジャルノンの兵達は目前に見える楽園を前に、飢えた野獣と化していた。もはや、彼らには真つ当な理性など欠片程も残されていない。

金品を奪う。女を犯す。それだけの欲望が、アンジャルノン率いる帝国軍別働隊を突き動かしているのだ。

そして——飢えた野獣共は、立ちほだかる王国軍本隊を視界に捉えた瞬間。

「行くぞ者共！ 奪え、殺せ、壊し尽くせ！」

「ウオガアアアオオアアアッ！」

地獄の底から這い出た鬼の如く——けたたましい雄叫びを上げ、進撃を開始した。アンジャルノンの号令が、首に繋がれた理性という名の鎖を、完全に破壊してしまったの

だ。

陽動という本来の目的を見失った兵達は、本能の赴くままに突撃していく。

「——来たな。王国の精鋭たる騎士達よ、ここが正念場だ！ これ以上、奴らにこの大地を汚させてはならん！ 誇りに懸けて迎え討てエツ！」

「おおおおおおおおおッ！」

だが、その氣勢を真つ向から受けている王国軍本隊は、誰一人として怯んでいない。アイラックスのカリスマにより精神を支えられた彼らには、後退の二文字はないのだ。

程なくして、両軍は激突していく。

欲望のため。家族のため。それぞれに決して退けぬ理由を背負い、彼らは血潮を浴びせ合う。

絶え間ない絶叫と剣戟の衝撃音が、荒れ果てた大地を駆け巡る。一瞬の中で多くの命が失われて行く中、アイラックスはかけがえのない部下を一人でも多く救うべく、先陣を切つて大剣を振るい続けていた。

一方、アンジャルノンは後方に座して飢えた兵達をけしかけるばかりであり、自らの得物である鉄球を使う気配を全く見せない。すでに数多くの兵がアイラックスに討たれているにも拘らず、その重い腰は未だに馬上から動かずに居た。

（ちっ………思っていたよりは精強だな。あれほどまでに追い込んだ兵達を相手に、精神

面で屈さぬとは。アイラックスの噂も、まんざらデタラメばかりではなかった、ということか……)

犠牲となつていく兵の命など気にも留めない——という様子で、アンジャルノンは膠着している戦況を見つめていた。

今迄アイラックスに挑んだ武將達が不甲斐なかつただけ。王国軍など恐るるに足らず。そう思い込んでいたアンジャルノンは、眼前の現実を前にして、ようやくそれが誤りであることを気付いたのだ。

(しかし、奴がここに辿り着く頃には向こうも憔悴し切っていることだろう。それから俺の鉄球で料理してやればいいだけのことよ。——愚かな王国騎士共への見せしめとして、な)

士気のをであるアイラックス將軍さえ討てば、残った王国軍は烏合の衆に過ぎない。だから、先頭で戦うアイラックスに兵達をぶつけ、疲弊したところを討てばいい。

その作戦自体は、悪手ではない。しかし彼は、一つ誤算していた。

飢えた帝国兵を蹴散らし、王国軍の道を切り開いていくアイラックスは——全く息を切らしていなかつたのだ。

馬上から身の丈を越える大剣を振るい、兵を率いて進撃する。それだけの激しい戦い

を絶え間無く続けていながら、アイラックスは疲れた気配もなく、前進しているのである。

（バ、バカナ……ええい、化け物がッ！）

彼が自分の陣地に近づいてくるに連れ、そのことに感づくようになったアンジャルノンは、アイラックスの底無しの体力を前に驚愕し——額に脂汗を滲ませた。

だが、既に時遅し。アイラックスの圧倒的な戦闘力により勢いを殺された帝国兵達には、飢えさえも忘れるほどの恐怖に駆られ、徐々に後退するようになっていた。

（バカナ、バカナバカナ！ 負けるだど!? 偉大なる帝国軍の武將たるこの俺が、名門出のこの俺が！ こんなちっぽけな国の將軍一人に、負けるだど!?）

もはや、アイラックスのスタミナを奪う術もない。アンジャルノンはこれほどの相手と真つ向から戦わねばならない事態に直面し、焦りを募らせる。

己のプライドを激しく傷付ける現状を前にして、彼の思考は冷静さを失っていくのだった。

そして——アイラックスだけでなく、王国軍の騎士達までもがアンジャルノンの近くに迫る頃。

「やあああああつー！」

戦禍に紛れていた、一人の少年兵が——戦いの激しさを掻い潜り、アンジャルノンに

飛びかかった。その手には、少年兵用の粗悪な銅の剣が握られている。

「……」

「あうっ！」

少年兵の銅の剣は馬上のアンジアルノンに命中した——が、その威力はアンジアルノンの鎧を貫くにはあまりにも非力であった。

蚊が刺した程度のダメージすら与えられないまま、銅の剣は弾き飛ばされてしまい——少年兵は、アンジアルノンに首根っこを掴み上げられてしまった。

自分に挑みかかってきた少年兵を見つめるアンジアルノンは、無言のまま少年兵の首を締め上げ——こめかみに血筋を浮き上がらせた。

こんな小さな少年兵までもが自分の邪魔をしてきた。その出来事が、アンジアルノンのプライドにより深い傷を与え……彼の怒りを掻き立てたのだ。

「クソガキがああああッ！」

「あが……あつ……あつ……」

アンジアルノンは怒りのままに少年兵を吊り上げ、首を絞めていく。少年兵は抵抗することもままならず、舌を出して目を剥いた。

「……ハ……ンナ……」

そして、少年兵の首が完全にへし折れる寸前。彼は、従軍する直前まで兄妹のように

育ってきた少女に、想いを馳せる。

それを最後に、幼い命が戦場に散っていく――

「トウアツ！」

「ぬっ！」

――刹那。

ついにアンジャルノンのもとへ辿り着いたアイラックスの大剣が、少年兵を掴む腕に向かつて振り下ろされた。

その瞬間に殺気を感じたアンジャルノンは、咄嗟に少年兵を投げ捨て、その一閃を回避する。アイラックスはその直後、転げ落ちるように馬上から飛び降り――地面に激突しようとしていた少年兵をキヤツチした。

そして――双方の視線が交錯する。

「おのれ……小国の将軍風情が、この俺に楯突くとは！」

「――その小国の将軍風情に、冷や汗をかかされる気分はどうだ。帝国軍」

馬上のアンジャルノンを睨み上げるアイラックスの瞳は、眼前の巨漢が背負う鉄球に怯むことなく、手にした大剣を静かに構える。気を失った少年兵を、その片腕に抱きながら。

「そんな格好で戦うつもりか。――俺もなめられたものだ」

「ならばその得物で、私の侮りを払拭してみせろ」

「……言われるまでもないわッ！」

言うが早いか、アンジャルノンは炎を吐くかのようにけたたましい雄叫びを上げ、手にした鉄球を振るう。風を切る鋼鉄の塊が、轟音を上げてアイラックスの頭上へ肉薄した。

しかし、黒髪の將軍は紙一重でそれをかわすと——少年兵を庇うように身を翻し、鉄球の衝撃により飛び散る砂利を背中で受け止めた。

超重力の鉄球が落下することによる余波の威力は、計り知れない。ただの砂利でも速度が付けば、鋭利な刃物になる。

弱っている少年兵がそれを浴びれば、直撃せずとも命はなかっただろう。

そう判断してからのアイラックスの行動の速さに、仕掛けたアンジャルノンも目を見張る。背中に傷を負ったアイラックスは、片手で大剣を構えたまま痛みを表情に出さず、あくまで冷静に相手の出方を見ていた。

「愚かな……そんな荷物を抱えているばかりに、余計な痛手を負うとはな」

「貴様にとつては荷物でも、一人でも戦える人間が必要な我々にとつては、かけがえのない仲間。——決して、こんなところで死なせはしない」

「それが愚かだと言っておるのだッ！」

そんな彼の姿勢を鼻で笑い、アンジャルノンは横薙ぎに鉄球を振るう。空を裂く鉄塊が弧を描き、アイラックスに迫った。

だが、彼はそこから動くことなく——少年兵の小さな身体を空中に振り上げ、即座に大剣を両手で構える。

そして、宙へ舞い上げられた少年兵の身体が、重力に引かれ落下を始める瞬間。

息を吸い込み氣勢を充実させ、アイラックスは迎え撃つかのように大剣を水平に振るう。

刹那、その巨大な刀身は横一文字の閃光を描き——悪しき存在に裁きを下すかのよう

に。
 「王国式闘剣術——おうこくしきとうけんじゆつ式之断不要にのたちいらずツ！」

振り抜かれた一閃で、圧倒的質量と速度を持っているはずの鉄球を……打ち返してしまふのだった。

そう。二度目の斬撃は要らない。この一閃だけで、全てを終わらせる。そう、宣言するかのような一撃を以て。

「ぐっ……ああアツ！」

そして、その宣言通りに。

打ち返された鉄球が、馬上に座したアンジャルノンの顔面を直撃する。まさか自分の

鉄球がそっくりそのまま打ち返されるなどとは微塵も考えていなかった彼は、全くその反撃に対応できなかったのだ。

為す術もなく落馬し、赤い巨漢は地響きを立てて墜落する。

一方、その瞬間を見届けることもなく、アイラックスは踵を返して大剣を大地に突き立てた。彼にとっては、もはや敵の意識など確かめるまでもないのである。

そして、彼は空いた両手を広げて——空から落ち行く少年兵を穏やかに受け止めた。気絶しているものの、命には別状がないことを確認する彼は、僅かに頬を緩ませる。

一騎打ちは、アイラックスの完勝。

その光景は、弱りつつあった帝国軍の戦意に、とどめを刺すこととなった。

「アンジヤルノン將軍が……負けた……!」

「終わりだ……もう、終わりだアアア!」

指揮官を失い、統制が取れなくなった帝国兵達は我先にと逃げ出していく。意識のないアンジヤルノンを引き摺り、退散していく彼らを追うことなく、アイラックスは部下達に目を向けた。

「……皆。よくやってくれた。この戦いは我々の勝利だ!」

「將軍! なぜあのままとどめを刺さなかったのです! それに勢いがこちらにある以上、この流れに乗じて奴らを撃滅すれば……!」

「騎士団長。敵方はこちらの十倍以上の軍事力を有しているのだ。一度や二度の勝利に浮かれ、深追いするのは危険過ぎる。それにあの巨体を運ばせれば、それだけ人員——つまりは戦力を削ることができる」

「しかし……！」

「ルーク。私は王国軍の命運を預かる者として、誰一人犬死にさせるわけには行かないのだ。この少年兵も……お前も」

「……」

追撃より部下達の生存を優先するアイラックスに、騎士団長ルークが食ってかかる。だが、彼の判断が自分を慮つてのことと知ると、強くは追及できなくなっていた。

そんな彼に苦笑するアイラックスは、去り行く帝国軍の背を見遣り、ふと耳にした噂を思い返す。

（帝国がこの戦争に、異世界の勇者を投入しているという話……。事実ならば、私は神の使者に剣を向けねばならなくなる。——勝ち目など、ないやも知れん）

人間同士の戦いは負け知らずでも、魔王さえ凌ぐ超人に通用するとは限らない。

どれほど平和を愛する気持ちは持とうとも、それを実現できる力がなければ無意味であるということ、戦いの中で嫌というほど学んできたアイラックスにとつて、その事実は計り知れないほどに重い。

（それでも……私は行かねばならん。国王陛下の御身、ダイアン姫様の笑顔……そして
ヴィクトリア、お前の未来を守るためにも……！）

だが。アイラックスの瞳に翳りはない。

あくまで、気高い王国の戦士として。

帝国勇者との対決に、向かおうとしていた。

——そして、僅か数日の時を経て。

同じ髪の色を持つ二人の剣士が、邂逅する。

第25話 宿命の対決

「——私が望むのは、平和な王国に生きる娘に会うことだ。逃げ帰った先に、その平和はない」

王国軍本隊がアンジヤルノンの軍勢を破り、帝国軍の主力部隊と激突するさなか。

一騎打ちに敗れ、落命した騎士団長ルークに代わり——アイラックス将軍は。

「……その平和のためにも——行くぞ」

「……わかった。——来い」

戦友の命を奪った帝国勇者と、剣を交えるのだった。

「シッ……！」

「——ッ！」

太刀合わせは——速さも威力も、完全に互角。

それを剣から伝わる衝撃で察した双方は、互いに目の色を変える。一筋縄では行かない相手だと、悟らされたのだ。

だが、アイラックスと竜正の間には、決定的な違いがある。それは——体格と得物の大きさ。

同じ速さと膂力を持つているのなら、身体が小さい方が、より小回りが利いて優位に立てる。

巨大な大剣と細身の日本刀で同等の戦いができるのなら、後者に軍配が上がるのだ。

「……………」

一瞬の太刀合わせからそれを察したアイラックスは、竜正が手首を返して次の一閃を放つ前に、身を引いて斬撃をかわす。大剣で防御に入ろうとしては、間に合わないと判断したためだ。

そして、大剣による攻撃より出の早い正面蹴りで、竜正の追撃を食い止める。

「くッ……………」

畳み掛けようとしたところへ、圧倒的にリーチで勝るアイラックスの蹴りを貰い、竜正は思わず後ずさった。腹部に伝わる衝撃は内臓を揺さぶり、少年の口元からは微かに血が滴る。

「て、帝国勇者がダメージを受けたぞ……………」

「やはりアイラックス將軍は最強だ！ 伝説の勇者にも負けていないッ！」

「將軍！ どうか、どうか騎士団長の…………犠牲となった兵達の無念を、晴らして下さいッ！」

その光景を前に、一騎打ちを見守る王国軍から歓声上がる。一方、初めて帝国勇者

がダメージを受ける瞬間を目の当たりにした帝国軍には、どよめきが広がっていた。「静まれいッ！　まだ闘いは、始まったばかりであるぞッ！」

そんな彼らバルスレイは一喝するが、兵達の不安は拭えない。動揺を隠せずにいる帝国軍を見遣りながら、アイラックスは静かに口を開く。

「——まさか、異世界の勇者も私と同じ、黒髪黒目の持ち主だとはな。私が数百年前の勇者の末裔……だという噂を耳にした覚えがあるが、あながち間違いでもないのかも知れんな」

「……」

「だから、というわけではないが。出来れば、貴殿とこれ以上戦いたくはない。退いては、貰えぬか」

戦いを望まず、撤退を促すアイラックス。その勧告に、竜正は勇者の剣を構え直し、眉を顰める。

「……敵討ちが望みではないのか。このまま退いたとして、あなたに付いて戦ってきた兵達は、納得するのか」

「納得させるさ。ルークも、あの勇敢な少年兵も、今戦っている兵達も。皆、この王国の平和と安寧を守るために戦っている。私にとっての勝利とは、帝国軍の撃滅ではない。

この戦争の——終結だ」

「そうか——だが、残念だったな。俺にも、退けない理由がある。言葉で止められるとは、思わないことだ」

理想を語るアイラックスに、竜正は冷徹に剣を向ける。そんな少年の姿に、王国の將軍は険しい表情のまま——目の色に微かな憂いを滲ませる。

(……見たところ、娘に近い年頃のようだ。こんな少年が、勇者の力を振るわされていようとは……。それも、戦争の道具として……)

一方。アイラックスの胸中を知る由もないまま、竜正も胸に突き刺さるような痛みを覚えていた。さっきの蹴りのせいでは——ない。

(どうしてだ。あの人を見ていると……父さんの顔が、ちらついて離れない。確かに少し似ているけど——あの方は父さんじゃない、斬らなきゃならない「敵」なんだぞ!)
勇者の剣の力により、殺意に囚われているはずの竜正は今、その奥底に封じ込められたはずの、本来の伊達竜正としての感情に苛まれていた。

戦いの中で生きるうちに、忘れかけていた父への想い。それを呼び起こすアイラックスの姿を前に、竜正は胸を締め付けられている。

剣に唆されるまま、人を斬り続けていた事実。目を背けていた、己の罪に。

(俺は……人を、この手で……!)

「どうした。退くのか。退かないのか」

「う——お、ああああああアアッ！」

そして、帝国式投剣術を使うこともなく、八つ当たりのように——アイラックスへと斬り掛かっていくのだった。

「ぬうつ、トオアッ！」

「ぐううつ……！」

竜正の——勇者の持つ超人的腕力。そのパワーに物を言わせる一閃が、アイラックスの大剣に衝撃を加える。周囲を怯ませる轟音が響き渡り、剣の風が荒野を吹き抜けた。

刹那、アイラックスの反撃の一撃が、下から切り上げるように竜正を狙う。それを受け止めた少年は、勢いを殺しきれず、空高く打ち上げられてしまった。

「……せめて。苦しみを知る前に、その魂を安らぎの空へ！」

「……！」

間髪容れず、アイラックスは上空から落下してくる竜正を狙い、大剣を両手で構える。そこに、先程までのような憂いの色はない。

互いに戦士としてこの地に立った以上、同情も侮りも不要。勇者との戦いを通し、竜正がただの「少年」とは言い難い存在であることを肌で感じ取った彼は、戦士として竜正と対する決意を固めたのだ。

（悪く思うな——などと言うつもりはない。存分に私を恨め、憎め。その思い全て、私の

墓標へ持つていく！」

式之断不要の体勢に、迷いはない。迷いなき一閃が、少年の身を切り裂こうとしている。

「——死ねない。死ねないんだ、俺はッ！ 死ねないんだよ、父さんッ！」

一方。

竜正もまた、その構えから迸る殺気を感じ取り——迷いを捨てなくては勝てない状況であると悟るのだった。

少年は迷いなく、空中で勇者の剣を構え——狙いをアイラックス將軍へと定めた。

「——帝国式投剣術か。しかし、さっきの決闘でその威力と速さは掴んでいる。それに空中から放つとなれば、威力を高めるための足の踏み込みや体重移動もできん。……貰ったな）」

ルークを貫いた飛剣風の全容を思い返し、アイラックスは油断なく大剣を握り締め。確信した勝利を、実現させるために。

そして——大剣の間合いである地上付近まで、竜正が近づいていく瞬間。アイラックスは決着を付けるべく、大剣の振るう——直前のこと。

「王国式闘剣術、式之断ッ……!?!」

「——おおおおおおッ！」

突如、少年は空中で体を捻り、滞空時間の中で猛烈な回転を始める。

そして、少年の手から離れた勇者の剣は、技を放とうとするアイラックスへと打ち放たれていった。——螺旋を、描くように。

「帝国式投剣術——螺旋風ッ！」

飛剣風を遥かに凌ぐ威力と貫通力を持つ、螺旋風。その技により宙を駆ける剣先は——咄嗟に防御に移ろうとしたアイラックスの大剣を弾くと、鍛え抜かれた片足を貫いていく。

まるで、螺子を締めるかのように。

「——ぐおおお、あッ！」

予想だにしない一撃を片足に受け、アイラックスは苦悶の表情で傷口を見遣る。

脚に付けられた螺旋状の傷からは、大量の血が噴き出していた。

「おお……ああッ！」

アイラックスはその痛みを噛み殺し、傷口から突き立てられた勇者の剣を、一気に引き抜いていく。

その勢いのまま、彼の手から離れてしまった日本刀は弧を描くように宙を舞い——持ち主の足元へ突き刺さるのだった。

「ぐ、ううう……！」

だが、無事に着地したはずの竜正は右腕を押さえてうずくまったまま、動く気配を見せない。螺剣風が持つ威力の代償を払わされた竜正は、目の前に突き立てられた勇者の剣を握ることも出来なくなっていたのだ。

「無敵のアイラックス將軍が……そんな……！」

「に、逃げる……逃げるんだ！ 勇者に……帝国勇者に勝てるわけがないッ！」

だが、彼よりは脚を貫かれたアイラックスの方が重傷である。その結末から將軍の敗北を察した王国兵達は、アイラックスに肩を貸しながら撤退を開始していく。

「逃すかッ！」

「待て軍団長。——深追いする必要はない」

「しかし、バルスレイ將軍！ ここで奴らを逃しては……！」

「——アイラックスを一度でも退け、奴らの勢いを止めたのだ。この場でなくとも、決着はつく。遠からず、な」

そんな王国軍を背後から仕留めようとする軍人を諭し、バルスレイは竜正を見遣る。

体重移動が使えない空中からの発動でも、螺剣風は壮絶な威力を持つている。その反動に苦しむ戦友の姿を、銀髪の將軍は沈痛な面持ちで見つめていた。

そして——王国軍がこの荒野を去っていく中で、竜正は一人、うずくまったまま震える手で、勇者の剣を握り締めた。

(……父さん……!)

父への想いが蘇ると、それに連なるかのように——竜正の脳裏に、犯した罪の重さがのしかかっっていく。

いつしか彼は——敵対するアイラックスに、父の面影を重ねるようになっていた。

(……母さんのところへ帰ろうとするのが、そんなにいけないのか!? 父さん!)

こちらに剣を構えるアイラックスの姿が、自分を止めようとする父のように見えた竜正は、より激しい胸の痛みを受け——表情を歪ませる。

勇者を初投入した、この戦で——確かに竜正は勝利を飾ることに成功した。

だがそれは、彼が生涯背負い続ける十字架が現れたことを意味している……。

第26話 父の面影

辛くもアイラックスを退けはしたが、目に見える勇者の疲弊を目撃した兵達は、樂觀できる現状ではないことを悟っていた。

伝説の勇者を戦線に投入して、ようやく辛勝。その結果は、前線に立つ兵達に緊張を走らせる。

——しかし、留まるわけには行かない。休息の時間をあちらに与えては、膠着状態を打破することなどできない。

一日も早く戦争を終わらせるには、前に進むより他はないのだ。

母のもとへ帰るため。少年は剣を取り、身を引きずるように戦いに明け暮れていく。誰かの幸せを犠牲にする。その重圧を、剣の呪いに塗りつぶされながら。

(俺は……俺は……)

だが。幾多の戦いを乗り越え、王国の中枢——城下町へ近づく頃には。重ね過ぎた罪の記憶は、呪いで誤魔化せない程にまで積み重なっていた。

自分に斬られた人間が、絶命する瞬間。苦悶の表情。零した涙。一人一人の全てが、脳裏に焼き付いていく。

なまじ良心を胸に残しているせいで、その記憶は深く竜正を追い詰めていた。

彼がもし、ただ「操られている」だけだったならば。剣のせいに出来たならば。心が壊れかける程には、至らなかつたかも知れない。

（何人殺せば、戦いは終わる？ 何人殺せば、母さんのところへ帰れる？ 何人殺せば、俺は……）

だが、勇者の剣にそこまでの力はない。この妖刀はただ、所有者が元々持っている攻撃性——殺意を、引き出しているに過ぎないのだ。

それを本能で感じ取っているからこそ、竜正は思い知らされているのである。自分は、自分の意思で人を斬っているのだと。

——もしも、そばにいたバルスレイが、思い悩む竜正の胸中を察していたなら。勇者の剣の邪気に、気づいていたなら。

救われる道も、あつたかも知れない。

だが。終戦から六年が過ぎるまで、そのもしもはとうとう訪れなかつたのだ。

王宮を中心に据える城下町を背に、最後の防衛戦に臨む王国軍との決戦。

その時も彼は——独り、心を蝕む呪いに、苦しんでいたのである。

「この戦いで、五年に渡る戦乱に終止符を打つ！ 大陸に大平を齎し、永遠の平和を築き上げるため——行くぞ、帝国の勇士達よ！」

「我が王国の命運は、この一戦に懸っている！ 散って行った真の英雄達の想いに、我らは応えねばならん！ 一人たりとも、この先へ通すなッ！」

双方の将の叫びに、兵達は怒号で応え——戦士達の咆哮が、大空へと響き渡る。

血で血を洗う彼らの死闘は、最終局面を迎えようとしていた。

かつては美しい深緑に彩られていた平原は、兵達に踏み荒らされ荒野と化し。深く広がっていた森は、火矢により炎の海と成り果てた。

そして、赤く染まる大地の中で。竜正は赤いマフラーを靡かせながら——憑かれたように戦い続けている。

「……………」

「……………来たか、勇者」

やがて、激戦のさなか。兵達の剣戟を背に、竜正は戦乱の渦中で帝国兵を蹴散らすアキラックスと遭遇する。

馬上から、迫る雑兵を大剣で一掃していくその姿は、有無を言わせぬ絶対的な「武力」を物語っていた。足の負傷をもともしないその勢いは、周囲を圧倒し続けている。

再びあいまみえる、帝国の勇者と王国の英雄。その双方が持つ力を、本能で察したのか。

両軍の兵達は戦いを続けながら、導かれるようにその場から離れていく。竜正とアイ

ラックスを、円で囲うように。

「……君には、引き寄せられるものがある。同じ髪の色だから、勇者だから……ではない。上手くは言えないが……暖かい何かを、私は君に感じている」

「……」

「だからこそ、冷徹な眼で剣を振るう今の君には、違和感を覚えてならない。まるで、負の感情だけを引き出されているかのような……そんな、不自然さがある」

「だとしたら、何だというんだ」

「——その原因が何かはわからない。だがもし、君が帝国に脅されて戦っていることが原因だと仮定するならば……私はやはり、君と戦わずに済む道を探そうと思う」

アイラックスは、気づいていたのだ。竜正が抱える闇の存在に。

だが、それが剣の呪いによるものとまでは知らぬ彼は、竜正に渦巻く負のオーラの原因が帝国の圧力によるものと判断していた。

無論、戦争へ参加していること自体は紛れもなく竜正自身の意志である。だが、勇者の剣が齎す呪いの力がなければ、こうも簡単に人を斬ることは出来なかつただろう。

当たらずと雖も、遠くならず。そんなアイラックスの判断を前に、竜正は唇を噛み締める。いつそまるきり見当違いな答えを出してくれた方が、少しは楽になれたかも知れなかつたのに。

「私には君と同じ年頃の娘がいる。あの子が笑顔で暮らせる世界を守るためにも、私はこうして戦っているのだ。——大人として、騎士として。私は、次代を担う子供達を守りたい。……その中には、きっと君もいるはずだ」

「……いるわけがないだろう。俺はもう何人も、人を殺している。俺自身の意志で俺のためだけに、何人も。そんな奴が、そこにいるはずがない。絶対に」

「違う。——君は、好んで人を殺せる人間ではない。そんな人間が、辛そうな顔で剣を握れるものか」

「……！」

自身の声を拒み続ける竜正に、アイラックスは真摯な眼差しを注ぎ——馬上から飛び降りる。螺剣風で貫かれた足で着地しながら、表情一つ変えない彼の姿に、竜正は思わず目を奪われてしまった。

「強者こそが正義と信じて疑わぬ、帝国の思想に凝り固まってしまえば……君はその胸に残された温もりも失ってしまう。子供が子供を殺す、そんな時代を作ってしまう。私は——君も、救いたいんだ」

「……バカなことを言うな！ 俺を救う前にやることがあるだろう！ 俺を倒さなきゃ、あなたの家族も危ないんだ！ 子供だからとか、そんなこと関係ない！ 俺は俺のために戦ってきたんだ、あなたもあなたのために戦え！」

「——やはり、人を斬る悪魔の勇者には向かないな。君は」

声を荒げ、アイラックスを睨みつける竜正。そんな彼の険しい表情を、静かに見つめる王国最強の戦士は——静かに大剣を振り上げる。

「ならば望み通り、私も私が望むままに戦わせてもらおう。私のためにも——『勇者』としての君を打ち倒し、君をその『役目』から解き放つ」

「減らず口を叩くんじやないッ!」

腰から抜刀しつつ、竜正は感情のままに斬りかかってくる。そんな彼を迎え撃つかのように、アイラックスも空へ掲げた大剣を——杭を打つかのように振り下ろした。

竜正は紙一重でそれをかわし、高速抜刀からの一閃でアイラックスを仕留めに掛かるが——

「うぐあッ!」

「……忒之断不要、にのたちいらす破散弾はさんだん」

——強力な一撃が生む衝撃波により、周囲へ打ち出された大量の石つぶてが、竜正の全身に命中した。

なまじ紙一重でかわしてしまつたがために、彼は至近距離でその猛攻を浴びてしまつたのだ。小さな身体の隅々に伝わる衝撃と激痛に、少年は苦悶の声を漏らして転倒する。

「あ、ぐ……い！」

「一閃に込められた力を以て、いかなる敵も粉碎する。元より小回りが利かぬなら、その一撃が生む力で、あらゆる状況を覆す。それが、王国式闘剣術の極意だ。大振りの得物だろうと、付け入る隙は与えん」

「だっ……たらー！」

初撃をかわしたとしても、その威力が生む波動が行く手を阻む。小手先の技術でかくぐれる剣術ではないのだ。

石つぶてを全身に浴び、兜を破壊された竜正は、額から流れる血を拳で拭い去り——剣の切っ先をアイラックスへ向ける。

次いで——矢を引き絞るかのように、剣を握る手を腰付近まで引き付けた。……帝国式投剣術の、体勢である。

「——できるかな。式之断不要は鉄球さえ容易に打ち返す、比類なき攻撃力を持つ剣技だ。いかに君の投剣術が優れていようと、撃ち落とされれば意味はない」

「いいさ。——撃ち落とせやしない！」

「そうか………たいした自信だ」

竜正の剣先は、アイラックスの大剣へと向かっている。眉間を狙えば一瞬だが、そこへ撃ち込んだとしても、彼は確実に捉えてしまうだろう。

いかに強力な投剣術といえど、横からの切り払いで弾かれれば意味はない。側面からの衝撃に弱い投剣術の狙いを読まれるということは、命中率の半減を意味している。

……ゆえに、弾くために必要な武器そのものの破壊を狙う方が、勝率が高くなるのだ。

「……」

その確率と螺剣風に懸ける竜正の頬を、冷や汗が撫でる。一方、そんな彼の緊迫した表情を前に、アイラックスも目の色を変えた。

（何か策があるのか……あるいは、覚悟を決めたか。何にせよ、あの剣を捉えることができなくば、私に勝機はない。こちらはただ、全力で迎え撃つのみだ）

竜正の出方を窺いつつ、大剣を握る手に力を込める。風が吹き抜け、足元の砂が空へさらわれても、その身はびくともしない。

双方が石像のように固まったまま、時間ばかりが過ぎていく。互いに睨み合う中、兵士達だけは絶えず戦いに明け暮れていた。

まるで、その空間だけが時空から切り離されているかのように。

螺剣風か。忒之断不要か。

雌雄を決する一瞬が近づく中、竜正の脳裏に——ふと、母の姿が過る。

この戦いを越えた先にあるものを、想像したからだ。

（母さんは……受け入れてくれるだろうか。血に汚れた俺の手を——握ってくれらるだろ

うか)

未来を夢想した先に待ち受ける、不安。そんなものを抱えて戦えば、足元を掬われるとわかっていても……考えずにはいられなかった。

(いや……考えるのは、やめた。帰れる日が来れば、きつと答えは見つかるはず。戦争が終わらなくちや、帰ることも出来ないんだ。——今はただ、戦おう。戦って、帰ろう。今はたぶん、それでいい)

そうして、自分なりに折り合いを付けるまでは。

(迷いは——振り切れたか)

そんな彼の様子を静かに見つめていたアイラックスは、竜正の眼の色を見て、戦うことへの最後の迷いが失われたことを悟る。

剣を捨てられなかった少年の決断に胸を痛めながらも、それを決して表情には出さず——彼はゆっくりと大剣を握る手に力を込める。

少年自身が引き返す道を断ち切った以上、もはや戦いを回避する術はない。

武力を以て、傷と罪に塗れた少年の戦いを終わらせる。それが、アイラックスの決断であった。

「これで——最後だ」

そして。

彼の眩きを、合図とするかのように。

「——あああああああッ！」

「——おおおおおおおッ！」

互いの足元から、破裂するように砂埃が吹き上がる。

螺旋風が巻き起こす竜巻が。式之断不要が生む風圧が。地面の砂を舞い上げていく。

弓矢を凌駕する速さと、槍を超える鋭さで、勇者の剣は螺旋を描いてアイラックスの大剣へ向かっていく。

（狙いは——私の剣か！）

眉間でも心臓でもない。

人体の急所からは明らかに外れた狙いに、意表を突かれたアイラックスは、式之断不要を放つタイミングを僅かに外してしまった。

本来ならば確実に螺旋風を撃ち落とせる瞬間を外され——大剣の一閃に重量の勢いが乗る前に、螺旋風の一撃が巨大な刀身に命中してしまう。

「う……………ぬー！」

体重が前方に乗る前に、後方へ大剣を弾かれたアイラックスの重心は、一気に後ろへと引つ張られていく。その衝撃を受け、仰け反るアイラックスは完全に無防備となってしまう。

「はあああああッ!」

その一瞬に、勝機を望み。

竜正は痛みを押し殺し雄叫びを上げ、アイラックス目掛けて突進していく。螺剣風の反動で跳ね返り、空高く舞う勇者の剣を、「左手」でキャッチしながら。

だが、すでにアイラックスも迎撃の体勢に入ろうとしている。一瞬で柄を握り直し、式之断不要の構えを取る彼の瞳には、自分に急接近してくる竜正の姿が映されていた。

螺剣風で右腕を痛めた竜正には、もう左手しか残されていない。だが、不慣れな左手での飛剣風では、正確な狙いなど不可能。

だから竜正は、博打に出ているのだ。接射による飛剣風で、勝利を掴むために。

「ぬっ、う——あああああッ!」

「く……おおおおおおあッ!」

けたたましい叫びと共に、アイラックスの大剣が振り下ろされていく。同時に、竜正は左の腰に勇者の剣を引き付け——飛剣風を放つ。

だが——その刀身に纏わりつく二角獣の幻影からは……まるで憑き物が落ちていくかのように、一本の角が霧散しつつあった。

そして。

二角獣が……一角獣に成り果てる時。

双方の決死の一撃は、互いを打ち倒してしまう。
しかし。

相討ちにも見えるその一瞬で、勝敗は決していたのだ。

「う……う」

竜正は地に倒れ伏したまま動けず、左肩を痙攣させながら苦悶の声をあげている。だが、その身に大剣で切り裂かれた痕はない。

一方。仰向けに倒れ、空を見上げるアイラックスの胸には——勇者の剣が、墓標のよう突き立てられていた。

——あの一瞬。

竜正は、式之断不要より先に飛剣風をアイラックスの胸へ叩き込んでいた。しかし、その直後に式之断不要を放とうとしたアイラックスの腕が、上段から竜正の左肩を打ち抜いていたのだ。

圧倒的に体格で勝るアイラックスの拳を、小さな身体に受けてしまえば、もうまともに動くことはできない。

「……」

両腕がまともに動かない状態のまま、竜正は身をよじり前方を見遣り——ようやく、決着が付いていることを悟るのだった。

そして——この結末を見届けた兵達は、確信する。帝国の勝利を。王国の敗北を。

「勝った……勇者様が勝ったぞ！ 我が帝国が勝つたんだ！ もはや恐れるものなどないッ！」

「アイラックス将軍が……そんな……！」

帝国軍は歓喜の声を上げ、王国軍は悲嘆と共に剣を落とす。降伏の意思を問うまでもなく、この戦には決着が付いていた。

アイラックスの敗北を目撃した瞬間、王国軍の兵達は、崩れ落ちるように戦意を失っていたのだから。

「タツマサ……」

決闘の行く末を見つめ、バルスレイも安堵の声を漏らす。その瞳には、命を賭して戦場を駆け抜け、ついに戦争を終結へ導いた少年の姿が映されていた。

——だが。

「我が帝国に齒向かった愚か者どもが、死を以て償え！」

「俺のダチの仇だ、死ねえ！」

戦いは終わっているのに。剣を振るう音も人々の悲鳴も、途絶えてはいない。

この長い戦乱で、幾つもの大切なものを失ってきた帝国兵達は……士気を失い、戦えなくなつた王国兵を猛襲したのだ。

白旗など揚げさせない。徹底的に皆殺しにしてやる。

そんなどす黒い憎しみが、この戦場——否、戦場だった荒野に蔓延していた。

今、この場で繰り広げられているのは戦いではない。一方的な——蹂躪である。

「やめろ、やめぬか！ 剣を収めよ、もう戦いは終わったのだぞ！」

その憎悪が生む負の力は、バルスレイの叫びを以ってしても抑えることは叶わなかった。帝国兵は次々と王国兵を颯り殺しにしていく。

さらに女性兵は、鎧を脱がされ辱めを受けていた。長い遠征と戦いで疲れ果てた帝国兵達には、もはや真つ当な理性など残されていないのだ。

「やめ、ろ……やめろ……！」

喋ることも叶わぬまま、悲痛な面持ちでその光景を見つめるアイラックス。そんな彼の視線を辿ることで、竜正はようやくやく状況を理解するのだった。

だが、無理を重ねた身体は言うことを聞かず、竜正は立ち上がることもできずにいた。それでもなお、彼は戦いを止めようとしていた。——そう。血に飢えた狂戦士だったはずの彼が、この惨劇を止めようとしていたのだ。

勇者の剣でも抑え切れないほどに罪悪感が溢れてきた頃に、剣が手元から離れたことで、本来の自我が強く前面に出るようになったためだ。

今の彼は、極めて素の「伊達竜正」に近い状態にある。

「やめろ、やめろ、やめろ！ やめるん、だあああああッ！」

竜正はひたすら叫び、帝国兵達を止めようとする。が、帝国兵達はまるで聞く耳を持たず、無力と化した王国兵を次々と蹂躪していった。

（やめろ……もう、やめてくれ……！）

自分と共に戦い、同じ釜の飯を食い、背を預け合って生きてきた仲間達が、暴虐の限りを尽くしている事実。そんな彼らを止められない無力感。

その全てが一つになり、竜正の心を飲み込んでいく――。

（お願いだ……どうか……もう……！）

――それは、勇者の剣が増幅しうる負の感情の一つ。

「……やめてくれえええええッ！」

人が「悲しみ」と名付けたその感情は、持ち主の心を通して勇者の剣へと繋がっていく。

『……カナシイカ。カナシイカ。オマエノセイデモ、カナシイカ』

勇者の剣は、そんな彼の心を抉りながら。彼の胸中を、「現象」へと変えていく。

竜正の胸に募る痛みは、勇者の剣の刀身から放たれる暗雲となり、この荒野を覆い尽くしてしまった。

心の闇というものを象徴するかのような禍々しさを持つ、その雲は……瞬く間に空へ

広がり、全ての兵士がその悍ましさを感じ取る。

人間の本能に訴えかける、その異様な空気は——理性を失いかけた帝国兵達ですら、手を止めるほどの圧力を持っていた。

「……あ、ああ」

竜正はその光景と空を見上げ、悟る。

これは、自分が生んだ雲。自分が抱えてきた闇と、罪の全てなのだ。

——自分という人間は、これほどまでに醜いのだ。

目に見える形でそれを思い知らされた少年は、やつとの思いで身を起こしても、立ち上がることが出来ずにいた。自分の罪深さを、我に返った今になって、知ってしまったのだから。

「——我が軍の勇者が、敵将アイラックスを討ち取った！ この戦いは我々の勝利である！ 双方、武器を取めよ！ これ以上、この地をいたずらに血で汚すことは許さんツ！」

一方、バルスレイはこの現象により兵達の勢いが削がれたことを感じ取り、すぐさま怒号を上げる。その声は暗雲に気を取られていた帝国兵達の耳に突き刺さり、彼らの意識を現実へと引き戻した。

「……」

そんな彼らを一瞥しつつ、竜正は倒れたまま動かないアイラックスへと視線を移す。微かに胸が上下に動いていることから、まだ生きていることが伺えた。

自分を救うと。血に汚れた自分を救うと言った、彼。

ふと、そんな彼の言葉を思い起こした竜正は、ふらつきながらも立ち上がると……身を引きずるように、彼のそばへと歩み寄っていく。

そして、彼の顔が見えたところで、力尽きたように両膝を着いた時——彼が、笑っていることに気づいた。

「……や、はりな」

「え……」

優しい眼差し。温もりに溢れた笑顔。

そんなものが罪を重ねた自分に——それも、こんな場所で。向けられるなんて。

ありえない。これは夢だ、きつと夢だ。

父さんが、こんな俺を……愛してくれるなんて、嘘だ。

——そう、心の中で叫ぶ竜正に、アイラックスはまるで我が子に注ぐような眼差しを送っている。

自分の命を対価に、息子を守った竜正の父と——全く同じ笑顔で。

「君は、悪魔などでは、ない。血が流れることを悲しむ気持ちがある、人間だ……。ルー

クはああ言ったが……やはり、君は……違う」
「……」

アイラックスは己の血に染められた手を、震えながら竜正へと伸ばしていく。その指先は、知らぬ間に頬を撫でていた少年の涙を、優しく拭っていた。

「君が悪魔ならば。悪の勇者だと言うならば……涙など、流せまい。彼らを、止めることもできまい。君は紛れもな、く……」

「……」

それが、最後の力だったのだろうか。

彼は言い終えることなく、手を下ろし——生気を失った瞳は、暗雲が消えた虚空を見つめ続けていた。

もう、胸は動いていない。荒い呼吸も聞こえない。

あの時と、同じだった。

自分を守るために死んでいった父の、最期と。

「……あ、あ」

声にならない声を漏らし、竜正はアイラックスの瞼を静かに閉じる。その見開かれた瞳からは、悲しみの感情がとめどなく溢れていた。

(この世界でも……この世界でも、俺は、父さんを……！)

父を殺し。母を独りにさせて。母のもとへ帰るために戦っていたかと思えば、もう一度父を殺していた。

父と同じ愛情を、敵であるはずの自分に注いでくれた、この人を。

(俺は、俺は……！)

その結末が。優しい父の死に顔が。

崩壊寸前だった竜正の心に、とどめを刺す。

「……あ、あ、あああ、あああああああああッ！」

この世の悲しみ全てを、声として吐き出すかのように。アイラックスの骸のそばで、竜正は悲鳴を上げ、のたうちまわる。

それに気づいたバルスレイが駆けつけ、懸命に正気を取り戻そうと呼び掛け続けたが——彼は血を吐いて気を失う瞬間まで、延々と泣き叫んでいた。

父とアイラックスの笑顔を、決して消えない記憶として、己の心に刻みながら。

第27話 母との別れ

アイラックスの戦死から、約三週間。

帝国と王国の間には、終戦協定が結ばれていた。

すでに王宮を囲う城下町は帝国軍の支配下に置かれ、ババルオによる統治が始まっている。

しかし——王国が降伏した今でも、戦況の打開を諦め切れず、戦いを続けている敗残兵達があった。

王国近辺の森を中心にゲリラ戦を敢行する彼らは、王国側からの命令にも耳を貸さず、国の復興を目指して抵抗を続けている。

彼らの対処を任務とするババルオの配下達は、森ごと焼き討ちにすることで解決しようと考えたが、王国の豊かな土地を傷付けることを良しとしないバルスレイの方針により、地道な白兵戦を続けるよう強いられていた。

……一方。

短期間で戦いを重ね過ぎたことで精神に異常を来たした——と、判断された竜正は療養のためとして王国から離れ、帝国へと帰還していた。

王国最強の戦士が倒れた今、帝国の勝利は揺るぎないものとなったからだ。

「瘦せたな……タツマサ」

「……皇帝、陛下」

「今まで、よく戦ってくれた。そなたの小さな身体が背負う悲しみ、目に見えるようであるぞ。さぞかし、辛い思いをしてきたのだろう」

謁見室にて、労いの言葉をかける皇帝に対しても、竜正はまともに反応することさえできずにいた。そんな彼の姿に、そばに控えていたフィオナも鎮痛な面持ちになる。

この世界に來た頃に着ていたブレザーも、いつしかかなり小さくなってしまっていた。竜正の肉体的成長は、彼がこの世界で過ごした時間の密度を物語っていた。

「勇者、様……」

「……タツマサよ。貴殿の力により、この帝国の勝利は盤石となった。国を代表し、礼を言う。そして——余も、約束を果たさねばなるまい」

心を痛める娘の様子を一瞥し、皇帝は空に手を翳す。——すると一瞬にして、虚空に白い光の渦が生まれた。

その輝きを前に、竜正の目から失われていた光が、微かに蘇る。

「……！」

「この先に、貴殿の帰るべき場所がある。もう、罪の意識に苛まれる必要もない。辛いもの

であれば、全て忘れても構わぬ。——貴殿はもう、自由だ」

勇者送還の儀。その秘術が生む光に、竜正は目を奪われていた。

この世界へ召喚された、あの日と同じ輝きが今、目の前に広がっている。その事実が、竜正の意識を釘付けにしていた。

「勇者様……」

「……フィオナ、わかつていたはずであろう。遠からず、このような日が来ると。さあ、笑って彼を見送りなさい」

「はい……」

そんな彼の様子を見遣り、フィオナは別れの瞬間がすぐ近くまで迫っていると感じていた。自分に勇気を与えてくれた、最愛の少年が——この世界から、いなくなってしまう。

仕方のないことだとしても。わかつていたことだとしても。その事實は、少女の心に重くのしかかっていた。

(けれど……私は……)

しかし……愛する彼が苦しむような真似だけはできない。ここで泣き喚いて引き留めるのは簡単だが——フィオナは母との再会を夢見る竜正の横顔を思い出すたびに、そのような邪念を懸命に追い払っていた。

「勇者様……おめでとうございます。ついに、成し遂げられた……のですね」

「フィオナ……」

「さあ、ご自分のふるさとへお帰りください。——母上が、待つておられるはずですよ」

「……ありがとう」

今にも崩れ落ちてしまいそうな——儂い笑顔。それを見遣り、竜正はふらつきながらも、静かに立ち上がる。

「……それじゃあ……今まで、ありがとうございました。どうか、お元気で……」

そして少しずつ、光の向こうへと歩を進めていった。後ろから僅かに聞こえる、すすり泣く声には気付かぬふりをして。

「勇者、様……私は……いつまでも、あなた様をお慕いしております……」

竜正の姿が、光の中へと消えていく。

その瞬間、たがが外れたように——フィオナは、ありのままの想いを言葉に乗せ、竜正がいた場所へ呟いていた。

とめどなく溢れる涙。崩れ落ちる膝。喉の奥から漏れていく泣き声。少女は何一つ、抑えることができなかった。

しかし、皇帝はそんな娘を咎めることもなく。父として静かに、泣きじやくる娘を抱きしめていた。一方で、帝国の統率者として生き抜いてきた歴戦の瞳は、自分が作り出

した光の渦を見つめている。

竜正を遙か彼方へ誘つた渦は、時間と共に少しずつ小さくなり始めていた。術者である皇帝が、術の維持より娘を優先したためだろう。

この光が消えれば、この世界と竜正の世界の繋がりはなくなる。もう、彼が帰つて来ることはない。

だが、これでいい。光の渦が消える頃には、竜正も無事に向こうへ着いているはず。

遙かに遠い異世界の彼方、とあつては、安否を確かめる術もないが——竜正なら大丈夫だと、信じる他ない。

（タツマサよ……ありがとう。誰がなんと言おうと、余にとって貴殿は紛れもなく「勇者」であつたぞ）

娘を抱きしめ、皇帝は光の先へと消えて行つた少年に、精一杯の賛辞を送る。

そんな父の胸の中で、フィオナはただひたすら、継るような姿勢ですすり泣いていた……。

「——ハ、ハ、ハ」

……そして。

竜正の視界には——懐かしく、穏やかな景色が広がっていた。

石造りの塀。電柱。見慣れた造りの住宅街。どれも、あの日から——召喚された日か

ら、変わっていない。

その光景だけで、竜正は強く実感していた。自分は——元の世界に帰ったのだと。

「…………え…………？」

だが。

帰還に成功した余韻に浸る間など、与えられはしない。

我が家へ帰ろうと歩みを進めた瞬間。竜正の目に、とある張り紙が飛び込んできたのだ。

それには、行方不明になったある少年の顔写真が大きく写されている。しかも辺りを見渡してみると…………それと全く同じ張り紙が、幾つも張られていることに気づいた。

「…………俺…………？」

行方不明者の名は、伊達竜正。数ヶ月前に消息を絶ち、依然行方がわからないままであると、その張り紙には記されている。

さらに、張り紙の端には連絡先も書かれていた。竜正は、その電話番号をよく知っている。

——母の、連絡先だからだ。

「…………母、さん…………！」

竜正はこの張り紙一枚で、自分がいない間のことを把握してしまう。

異世界に召喚されている間、行方不明となっていた自分を探すために、母はこんな張り紙をあちこちに張りながら、懸命に情報を集めようとしたのだろう。

息子が異世界に勇者として召喚されていた、ということなど、知る由もないのだから。(母さんは……大丈夫、なんだろうか)

張り紙の数は尋常ではない。しかも、自分がいなくなつてからかなりの日数が経過している。

もしかしたら憔悴のあまり、気を病んでいるかも知れない。

しかも今日は平日なのか、住宅街の中なのに人がまるで感じられない。そのことが、竜正の不安をさらに煽る。

言いようのない孤独感。母の安否。それら全てが、竜正の心を押し潰そうとしていた。

すると——その時。

「息子さんは帰ってくるのでしょうか!？」

「警察の捜索も手詰まりになつている、という情報もあります。それについて何かコメントは!？」

「伊達さん、答えてくださいよ! 伊達さん!」

曲がり角の向こうから、数人の声が響いてくる。何を喋っているかはわからなかった

が、竜正は無意識のうちに扉をよじ登って内側に飛び込み、身を隠した。

声の主達は竜正には気づくことなく、扉のそばを通過していく。その間も、彼らの声はひっきりなしに住宅街に響き続けていた。

「……!?!」

そして、彼らが竜正が隠れていた扉を完全に通り過ぎた時。声の主達の話し声をはっきりと聞き取った竜正は、血相を変えて扉から身を乗り出した。

視界に映るのは、マイクやカメラを構えた報道陣らしき人々の後ろ姿。そして、彼らの追及を受けているのは――

(母さん!?)

――間違いなく、会いたいと願っていた母の背中だったのだ。

「伊達さん。先程も申し上げた通り、息子さんの搜索は警察でも難航しているらしいんですよ。そろそろ、亡くなってる可能性も考えないと、余計に辛いのでは……?」

「そもそも彼が行方不明になった原因がわからない、というのは本当なのでしょうか？」

家庭環境に耐えかねて――という理由でいなくなる、つてのもよくある話ですよ。ああ、別に息子さんのことを言っているわけではありませんが」

報道陣は冷淡な口調で、母を責め立てるような言葉を並べていく。そんな追及にさらされ続けている彼女の横顔は、無惨なほどに痩せこけていた。

(母さん……！)

それを目にすれば、母がいかに苦勞してきたかが容易にわかる。わかつてしまう。

とにかく、終わりにしなければ。一刻も早く母のもとへ帰り、無事を報告しなければ。

そう焦る竜正は、後ろから報道陣に囲まれた母を救おうと、一気に駆け出していく――が。

「大丈夫です。あの子は強くて優しい子ですから。……いつかきつと、元気に帰ってくる。私は、そう信じています」

「……ッ！」

にっこりと笑顔を浮かべて、報道陣にそう宣言する彼女の姿を前に、踏みとどまってしまった。

勢いを失った竜正の疾走は、やがて歩みとなり……棒立ちとなり。最後は、両膝を地に突ける結果となっていた。

母は……信じている。自分が、あの日と変わらないままの、「優しい子」であると、信じている。

自分のためだけに多くの命を奪った帝国勇者の、自分が――「優しい子」だと。

(ち、違う。違うんだ。違ったんだ。母さん、俺は優しくなんか……優しくなんかなかったんだ……！)

竜正は瞳から光を失ったまま、静かに立ち上がる。そして――

「……竜正？」

――息子の悲しむ声を、聞いたような気がして。

母が振り返った時には。

「どうしました、伊達さん？」

「あ……いえ、なにも……」

竜正は再び、この世界から姿を消していた。

――心の底から、願ったからだ。

この世界から。自分を。消してくれと。

「タツマサ、そなた……!」

「勇者様……!?!」

そうして、竜正は再び――遙か遠い世界へと、舞い戻ったのである。

世界と世界を繋ぐ扉である、光の渦が消える寸前。二度と現れるはずのない少年が、この世界へ姿を現した。

「なぜ……なぜ戻って来られたのです!?! 母のもとへ帰ることが、あなたの願いではなかったのですか!」

「……フィオナ。俺は、もう……帰れない。帰る場所が……もう、ないんだ」

「な、なんですって……!？」

その現象に、フィオナは目を見開き、驚愕する。少年が望み続けていたはずの、故郷への帰還。それを投げ捨ててしまった彼の行動が、信じられなかったのだ。

だが、竜正の荒んだ瞳を見つめる皇帝は、その理由に勘付いていた。長く故郷を離れ過ぎたせいで死んだことにされていたか。抛り所としていた居場所を、他人に奪われたか。

そうして居場所を失ったから、彼はここへ戻らざるを得なかったのだと。——もはやこの子には、帰る家すらもないのだ、と。

「皇帝陛下。俺、王国に行きます。……まだ、戦いは終わっていないのでしよう？」

「……うむ。しかしだな、もはや貴殿が出向く程の規模の戦いは——」

「——これ以上、この世界から目を背けていたら。俺が奪ってきた命が全て、本当に無駄になってしまう。……そんな、気がするんです」

「タツマサ……」

皇帝がそう悟る頃には——少年は瞳から希望の色を失ったまま、憑かれたように立ち上がる。

——そして、彼は再び旅立っていく。未だ憎しみと悲しみが渦巻く、王国の戦地へ。勇者の剣を、携えて。

第28話 帝国勇者の最期

王国の中心地である城下町。

英雄アイラックスの国葬のため、国民が皆一様に喪に服していた。

「ああ、アイラックス様……」

「どうなつてしまふんだ、この国は……」

嘆き悲しむ人々の鎮痛な表情。王宮からそれを見つめる幼きダイアン姫は、塞ぎ込んで部屋から出て来なくなつてしまったヴィクトリアの身を案じながら、父の方を見上げていた。

——彼女自身も、最愛の母を失つたばかりだというのに。

「お父様……ヴィクトリアも、アイラックス將軍も……かわいそうです……」

「……心配するな、ダイアン。諦めなければ、必ず光が差す。それを、アイラックスの奮戦が教えてくれた。……いつか必ず、ヴィクトリアもこの悲しみを乗り越えてくれるであらう」

今にも泣き出しそうな娘を抱き上げ、国王も国中を覆う嘆きの色を見つめる。アイラックス亡き今、この国を帝国の蹂躪から守れるのは自分しかない。

(……どう交渉したところで、王国が帝国の属国となる以上、私の影響力など高が知れている。それでも、私はやらねばならん。ダイアンのためにも、アイラックスのためにも……！)

——そのために身を削る覚悟を、彼は人知れず固めていた。

一方、城下町の周辺に広がる、草原を越えた先——深き森に覆われた地で。

己の敗北が認められぬ王国の敗残兵達が、いまだに抵抗を続けていた。

「ぐあつー！」

「ぬっ……奇襲か！」

「卑怯者どもめが……どこだ、出てこいッ！」

地の利で勝る彼らのゲリラ戦法には、数で優位に立っている帝国軍も手を焼いていた。

すでに世間的には「戦後」である以上、この戦鬪が外部に知れる前に、敗残兵を一掃しなければならぬ帝国側としては、頭の痛い問題だったのである。

「く、バルスレイ將軍の命令がなくなれば、とうに森ごと焼き払っていたというのに……！」

「……いや。こうなれば、敢えて何もかも焼き尽くしてしまえばいいのではないか？」

敵方が暴走した結果——とでも言えばいい。全員死人にしてしまえば、漏れる口もないからな」

「なるほど……クク、そうだな。それがいい。我らはあくまで、敗戦を受け入れない愚者共に引導を渡しているに過ぎん。終戦協定を受け入れない騎士など、死あるのみだ」

それはあまりにも破壊的であり、衝動的な発想であった。だが、彼らに躊躇いはない。終わっているはずの戦いを、終わらせる。そのみが自分達の使命なのだ、称して。一切の躊躇も見せず、帝国兵の一人が松明を手にする。その先が、森へ向かう瞬間――

「――！」

茂みから覗く小さな矢が閃き――帝国兵の側頭部を撃ち抜く。

一瞬にして動かぬ骸と化し、己の人生に幕を下ろされた彼の手から、松明が落ちた。その光景を目の当たりにした他の帝国兵達は、背筋を凍らせて周囲を見遣る。

「ど、どこだ……どこにいやがる！」

表情を引きつらせ、茂みを見渡す帝国兵達。そんな彼らを草に隠れて狙っているのは――年端もいかない二人の少年兵であった。

（焦るなよ、ロッコ。いくら戦死した親父さんの仇だからって……）

（わかつてるよ、ルドル。――生きて戦い続けなきゃ、父さんの仇を討つこともできないんだ。無駄死にするつもりはないよ）

先程の狙撃は、確実に命中させるためとはいえ、かなり敵に接近した状態から放つて

いた。万一、狙えるタイミングを確保する前に気づかれていたら、命はなかっただろう。——事実、王国軍の敗残兵達の多くは血の気の多い若者であり、彼らの死因のほとんどが、経験の浅さからくる「深追い」であった。この辺りにいる敗残兵も、もはやこの少年達しかないのである。

(さあ、残りは二人。じっくりと追い詰めて……みんなの苦しみを少しでも……！)

そして、ロッコと呼ばれた少年もまた——その死因に近付こうとしていた。

一気に残る帝国兵達を仕留めようと、身を乗り出した彼の目の前に——新手が現れたのである。

(あいつは……?)

さらに、ロッコはその新手的姿に違和感を覚えていた。

帝国兵達と同じ格好をしていることから、帝国兵の一員であることは想像できるが——背が凄まじく低い。自分達と、変わらない年頃ではないのか。

(帝国軍は少年兵の募集はしてない……って、父さんは言ってたけど……)

(じゃあ、あいつは一体……?)

この世界では希少な黒髪を持つている彼は、二人の帝国兵達と合流しようとしていた。——彼も帝国軍の一員だというなら、今が絶好のチャンス。

(……やるしか、ないな。ごめんよ、僕達と同一年くらいなのに……。でも、僕達だって

こんなところで死ぬわけには行かないんだ)

僅かな逡巡を経て、ロツコは小さな帝国兵を狙撃することを決意する。まだ向こうは自分達に気づいていない。今なら、確実に仕留めることができる。

ロツコは、自分を見守る親友ルドルの視線を背中で受けながら、ゆつくりと茂みから矢の先を覗かせる。

その狙いは、黒髪の少年の眉間を確実に捉えていた。

(ごめん！)

そして——弓を引き絞る手に纏わり付く、迷いを振り払うように。

ロツコは一気に矢を放つ。

——が。

(え……)

その矢は、眉間の前に引き上げられた鞆に激突して弾かれ、宙を舞っていた。

射られる瞬間、腰の鞆を顔の正面まで持ち上げ、矢から自分を防御する。そんな芸当、「射られると知っていないければ」到底できるものではない。

「あつ——あー！」

その事実にもロツコがたどり着く頃には——すでに彼の眉間に、勇者の剣が突き刺さっていた。十数年の人生を終えた彼の体は、親友のそばに力無く横たわる。

「ロ、ロッコ………！ うわあああつ！」

生まれた頃から、ずっと共に生きてきた友人。そんな彼が、僅か一瞬で動かぬ肉塊に成り果てた。

その事実押し潰された、最後の敗残兵——ルドルは、悲鳴を上げて森の奥へ駆け出していく。

「いた！ いたぞ、あそこだ！」

「クソガキが、叩き殺してやる！」

彼を見つけた帝国兵達は恐怖に怯えていた表情を一変させ、鬼の形相で茂みに足を踏み入れて行った。

そして、この場の生存者は黒髪の少年一人となり、森には本来あるべき静寂が訪れる。
「……ごめん。ごめん………」

少年は小さく呟くと、ロッコだった骸の額から自分の剣を引き抜き——開かれた眼を、優しく閉じさせる。

そして、悲しみに暮れた表情を浮かべながら、帝国兵達を追うように茂みの奥へと進んでいくのだった。

（……一体、いつになったら……終わるんだ）

——やがて少年は茂みの先にある、深い崖へとたどり着く。すでにこの場には帝国兵

達が到着しており、彼らは最後の敵を血眼になつて捜査していた。

「クソ、どこに行きやがったあのガキっ！——あつ、ゆ、勇者様！」

「げ、現在は残る敗残兵共を捜索しているところまでして……！」

「……わかつています。引き続き、捜索の方をお願いします」

自分を畏れるように距離を置く帝国兵達を一瞥し、少年は崖を覗き込む。彼の目に映る闇は、底が見えないほどの深さであつた。

まるで——少年の罪を象徴しているかのように。

（あいつが……ロツコを、みんなを……ちくしょう、ちくしょうっ！）

そんな彼の背を、草葉に隠れた敗残兵が狙つていた。茂みに伏せ、帝国兵達に気づかれない位置から少年を狙うルドル。

その手には、傷だらけの銅の剣が握られていた。

（ハンナ……親父……俺に、俺に力を貸してくれ！）

故郷で帰りを待つ家族を想い、ルドルは短剣をより強く握り締める。そして、その切っ先が少年を捉え……太陽の光が、刃に鈍い輝きを与える瞬間。

「わアアアアアアッ！」

絶叫と共に——ルドルの小さな身体が、茂みの外へと弾き出されていく。

「なっ、あんなところに!？」

「勇者様、危ないッ！」

その叫びに反応した帝国兵達は、懸命に少年に呼びかける。だが、彼はそれに気づく素振りすら見せず――

「……ッ！」

――悲鳴も上げられないまま。その背に、銅の剣を突き刺されるのだった。

「……ぐ……」

「ハンナアアアアアッ、親父いいいいっ！」

血飛沫を上げる少年の身体はぐらりと傾き、崖の奥へと落ちていく。その後を追うように、ルドルも勢いのまま墜落していった。

一瞬にして、闇の中へと消え去った二人。残った帝国兵達は、その瞬間を呆然とした表情で見送るしかなかった。

そして、この場に訪れた静けさを前に――ようやく彼らは我に返り、事の重大さを悟るのだった。

「……おい。どうするんだ。勇者様が、崖に……！」

「と、とにかくバルスレイ將軍に知らせろ！ 早く！」

大声を上げて喚き散らしながら、帝国兵達はその場から走り去っていく。一方、崖下に広がる闇の中では――

「……ぐ、ううつ……」

——死に損なった少年の、すすり泣く声が響いていた。

暗い闇に支配された、深き地の底。その中で生きる少年の腕には——墜落の衝撃により、粉々に体を砕かれたルドルの首が、抱かれている。

あの崖から落ちていながら、勇者と呼ばれる少年は生き延びていたのだ。ルドルの方は、当然の結末を迎えているにも拘らず。

「なんでだよ……どうしてなんだ……」

少年は——帝国勇者「伊達竜正」は、この戦いで死ぬはずだった。自ら、そう望んでいたのだ。

だから、ルドルの殺気に気づいていながら知らぬ振りをして、より確実に自分が殺されるために、崖の近くにも立った。

だが、結果はこの有様。私利私欲のために多くの命を奪った自分が生き残り、愛する家族のため、命を賭したルドルが死んだ。

こんな馬鹿なことがあるか。こんな不条理な話があるか。自分は、死んで罪を償うことすら、許されないのか。

仇を討たせることも出来ないのか。

そう絶望する竜正は、誰もいないこの闇の中で、ひたすら泣き言を吐き出し続けてい

た。日が暮れても夜が明けても、掃討戦が終わっても。

竜正の嗚咽は絶えることなく、この闇に響き続けていた。

(死ぬことすら許されぬなら……俺は……)

やがて。竜正は憔悴し切った表情で、片手にルドルの首を抱いたまま——地面に突き立てられていた銅の剣に手を伸ばす。

(せめて……今、生きている人を守るしか、ない。この剣と、勇者の力で……！)

その柄を握る瞬間。

竜正の、長い旅が始まるのであった。

勇者の剣をルドルの墓標として、この地に残したまま……。

そして——それから三ヶ月後。竜正の搜索は打ち切られ、世間では勇者の戦死が報じられていた。

第29話 山村に迫る影

——王国領のとある山奥に、森に包まれた村がある。

城下町の活気には劣るが、のどかな自然に包まれた賑やかな村であり、城下町から遠く離れているため、戦場にされることもなかった場所だ。

元は小さな村だったのだが、戦火を逃れて迷い込んできた難民が多く集まり、現在は町と呼んでも差し支えない規模に成長している。

さらに、この村で穫れる作物は栄養価が高いことで評判であり、定期的に王宮への献上品として運ばれていた。

今日は、その献上を終えた者達が帰ってくる日——なのだが。

「おかしい……遅過ぎる。本来ならば夕べには帰ってこられるはずだが……」

茶色の髭を蓄えた壮年の村長は、村の入口をうろつきながら、眉間にシワを寄せている。そんな彼の背中を見つめる門番達も、不安げな表情を浮かべていた。

「戦争が終わって、もう二年になる。道中で戦いに巻き込まれたわけでもないだろうし……一体、何があったというんだ」

「お父さん！ まだお母さん達、帰ってきてきてないの!？」

すると、村長の後ろから澄んだ声が響いてくる。その声の主は、息を切らしながら門前に駆けつけてきた。

亜麻色の短髪をふわりと風に揺らし、父のそばへ駆け寄る少女。彼女は緊張した面持ちで、門の向こうから帰ってくる——はずの母を待ちわびていた。

白い柔肌、水色に澄んだ瞳、純朴な顔立ちに、歳不相応に育つた身体。そんな村一番の器量と評判の彼女であったが、母を案じるその表情は暗い。

「ベルタ、心配するな。お前は家に帰っていなさい」

「だって……」

「……少し予定が変わったのだろう。なに、じきに帰ってくるさ」

「……うん」

村長は娘に心配をかけさせまいと、諭すような口調で宥める。ベルタと呼ばれた少女は、そんな父の言葉に腑に落ちないと感じながらも、素直に従っていた。

「……」

——そして、彼ら親子の背中を見つめる、一振りの剣を携えた少年が、一人。

赤いマフラーを靡かせながら、門の向こうへと神妙な視線をむけていた。

「おーい、タツマサ君！ こっちの薪割りも手伝ってくれんかね！」

「あ、はい！」

しかし、他の村人に呼びかけられると、彼はその表情を一変させ、朗らかな笑顔で振り返る。

そんな彼の視界には、村名物の大浴場を沸かすための薪割りに参加する村人達の姿があった。彼らの呼びかけに応じ、タツマサと呼ばれた少年は早足でその場に駆けつけていく。

「おつ、タツマサ君のオハコが久々に拝めるな！」

「ハハハ、この前みたいに頭に薪をぶつけないでくれよ！」

「任せてください！」

少年は自分に注目する村人達に笑顔を向け、太く大きな丸太に歩み寄る。そして——
「……はあああッ！」

——天に向け、勢いよく丸太を蹴り上げた。太陽の後光を浴びた丸太が、青空へ舞い上がり——その影が、少年を覆う。

「たあああッ！」

さらに少年は、丸太の高さまで跳び上がり。腰に提げた銅の剣を引き抜くと、瞬く間に丸太を空中で切り刻んでしまった。

切り裂かれた丸太は幾つもの木片——薪と成り果て、地面に降り注ぐ。

その無数の薪は、幾重にも積み重なり、山となつていった。最後に少年がひらりと地

上に降り立つと、村人達から拍手が沸き起こる。

「おおつ、今日は何も頭に降ってこなかったな！ ツイてるぞタツマサ君！」

「はは、もう大丈夫ですよ。今までの俺とは一味……いだっ!？」

だが、宙へ跳んだ弾みですっぽ抜けていたのか——少年の腰から失われていた剣の鞘が、彼の脳天に直撃してしまう。

その痛みに頭を抱える彼の姿を目の当たりにして、村人達は揃って笑い声を上げた。

「がはははは！ まだまだこれからだな、タツマサ君！ もつと腕を上げるまでは、普通に切った方がいいんじゃないか？」

「そーそー、今にたんこぶじゃ済まなくなるぞ、ははは！」

そして、少年の一芸に気を良くした彼らは、満足げな表情で各々の仕事に戻っていく。少年はそんな村人達の背中を見遣りながら、痛みを堪えて薪を運び始めるのだった。

（この村に流れ着いて、もうじき一年か……。戦争の難民が多く集まったこの村に少しでも貢献できれば、償いの一つにはなるかもと思つて働いてきたけど……こんなことで、いいんだろうか。共に笑い合つて、いいんだろうか……）

その眼差しが、再び神妙な色を帯びようとする——瞬間。

「夕、タツマサくん。大丈夫なの？ 痛くない？」

「……平気、平気。俺のことなら心配いらぬよ、ベル夕。それより……」

少年の身を案じてか、村長の娘——ベルタが慌てて駆け寄ってくる。彼女は心配そうな表情で、一つ年下の少年の頭をさすり、顔を覗き込んできた。

そんな彼女を元気付けるため、少年は無理矢理笑顔を作るが——その作り笑いも、やがて消えてしまう。門の近くで、深刻そうに話し合う村の重鎮達の姿を見る彼の目は、不穏な事態を予感しているようだった。

少年の面持ちから意図を察したベルタの表情も、深く沈んでいる。

「……さつき、お父さん達が話し合ってるのを聞いたの。今晚、近隣を見回る捜索隊を作るって……」

「本当か?」

「うん。村のみんなに心配はかけられないから、少人数で行くって言ってた……」

戦争が終わった今、戦いに巻き込まれたとは考えにくい。しかし、戦争が終わったからと言って平和が訪れるとは限らない。

むしろ世情が大きく変わる分、その時流に乗れなかった人々が、生きるために盗賊になり果てるケースだってある。

まして、ここは山奥の村であり、敗戦国の地。帝国の支配体制が不完全である今を見計らい、略奪を目論む賊が現れても不思議ではない。

(この村に足を踏み入れる前に、山をうろついていた山賊共は軒並み排除したはずだが

……何も知らない他地方の賊が入って来たのか？ それとも猛獣……？)

だが、この山に巢食っていた盗賊の類は、一年以上前に少年によって壊滅させられている。それを知らない村人達は賊の可能性を考え、少年自身は猛獣の線を考えていた。

(……だが何にせよ、苦しみの果てにこの村へ辿り着いた人々を、無為に脅かす連中を野放しにはできない。これ以上、この国の人々を悲しませはしない……！)

そして、少年はある決意を固める。

「ベルタ、村長に頼んでくれないか。——その捜索隊、俺も入れてほしいんだ」

「タツマサくん……!?!」

——かくして、かつて帝国勇者と呼ばれた少年は、初めて「王国のため」に立ち上がるのだった。

第30話 呪いの亡霊

森が闇夜に包まれ、村が静寂に支配される頃。少数の見回りを除く村人の大半は、明日の仕事に備えて眠りにつき、穏やかに夜を過ごしていた。

一方、ごく僅かだが、そんな時間になつても酒を飲んで騒ぐ連中もいる。見回りの者が何度注意しても直らない者が多く、村人も彼らには手を焼いていた。

「あー、いいねえ平和つて！ ここには帝国軍もこねえし、ここ一年くれエは山賊も現れねエし！ なんてか知らねえけど、やっぱ平和が一番だぜ！」

「それなんだがよ。風の噂だと、どっかから来た凄腕の剣士が一人で、この辺の盗賊共をみんなのしちまつたつて話だぜ」

「へえ、ほんとかそりやあー！ ……うん？ そういや一年くれエ前から、ここに風来坊の剣士が居着いてたよな」

「タツマサのことか？ ははは、さすがにあいつはねえよ！ 確かに剣は持つてるけどオンボロだし、戦つてるところなんて見たことねえし、なによりチビでドジだもんな。あいつに盗賊が倒せるんなら、俺は魔王にデコピンで勝つね」

「ちげえねえ！ がははは——つと、噂をすりゃなんとやら、だな。どこ行く気だ、あい

つらっ。」

すると、彼らの視界に搜索隊の姿が映り込む。あり合わせの槍や斧、鍬などで武装し、物々しい表情で村の門へ向かう彼らの姿に、酔っ払い達の一人が酔いを覚まして息を飲む。

「……お、おい。なんだあいつら。あんな仰々しいカツコで、どこに行こうってんだ？」
「さあ、な。どうせ近くに猛獣でも出たんだろ。よくあることじゃねえか」

他の者達は大きくに気にしない様子で、再び酒に手を伸ばしていく。一方、酔いを覚ました中年の男は——訝しむように、搜索隊の列を見送っていた。

「あのタツマサとかいうチビまで……。なんだ……。何が起きようってんだ……。？」

その視線を浴びながら——剣を携えた少年は、仲間達と共に森の奥深くへと踏み込んでいくのだった。

森は闇に包まれ、数歩先が真っ暗になっている。村人達はカンテラで視界を確保しながら、歩み慣れた村への道を見渡していた。

「すまないね、タツマサ君。村へ来てまだ一年程度しか経っていないというのに、こんなことに付き合わせてしまつて」

「いえ、俺が望んだことですから。……。それにしても、なかなか見つかりませんね……」

「ああ……。ベルタが心配するのも、無理はないな」

この道の地面には、馬車の跡が残っていない。少なくとも、帰りの馬車はここに辿り着くことすらできなかつた、ということになる。

もつと遠いところで——何か、起きたのだ。

「村長さん……」

「……行こう、タツマサ君。仮に向こうが無事なら、この道を下る途中で合流できるはずだ」

「……はい」

不安を拭うように歩みを進めていく村長。その背中を、タツマサと武装した村人達が追いかけて行く。

——闇に紛れ、彼らの背中を追い続ける一つの影には気づかないまま。

「……！ 村長、これは……！」

「む……！」

そして、それから約一刻の時間が過ぎ——道を辿りながら行方を探していた村長一行は、ついに手がかりを発見する。

それは馬車のもので、思しき車輪の跡。その軌跡は本来通るべき道からは大きく逸れ、茂みの奥へと向かつていた。

「やっぱり……！ ここでは何か起きたんだ、村長！」

「おい、辺りの木を見てみる！ あちこち傷だらけだ！ まさか、猛獣に襲われたんじゃあ……」

「ば、ばかなことを言うな！ 縁起でもない！」

「じゃ、じゃあまた盗賊が出てきたのか!? 一年以上も出てこなくなったから、この山からいなくなつたもんだと思つてたのに……！」

村人達は、その周辺に残された痕跡を次々と発見し、身を震わせる。大きな切り傷が付いた木、踏み荒らされた茂み。それらを見付けていく度に、馬車が何かに襲われた可能性が高まつて行くのだから。

(……違う)

だが、その中で一人。

竜正だけが、現場の痕跡を冷静に見つめていた。彼の鋭い眼差しは、傷つけられた木に向かっている。

(猛獣の爪や牙で付いた傷なら、傷は平行に付いているはずだ。けど、この木の傷は線がみんなバラバラ。……それに、この跡の深さ……。これは、猛獣の仕業なんかじゃない) 猛獣の線が薄いとなると、残る可能性は盗賊。しかし、この山を根城にしていた盗賊は全て撃退したはず。

それ以外の「何か」が、この村に厄災をもたらしたのか……。竜正は、村人達と共に

周辺を探りながら、そう逡巡していた。

(……………?)

その時。

竜正はふと、搜索を中断して顔を上げ——周囲を見渡した。周りでは村人達が変わらず搜索を続けている。

(気のせいか……………? 今、人の足音が一つ多かつたような気がしたんだが……………)

茂みを掻き分ける時の足音が、今いる人数と一致しない。それに違和感を覚えた竜正だったが、辺りを見回しても、異変は見つけられなかった。

(聞き違い、だったのだろうか……………)

竜正はそれに対し、腑に落ちない感覚を抱きながらも、気のせいとして片付けようとする。——が。

「う、うわあああああッ!」

村人の悲鳴が竜正の思考を掻き消し、搜索隊の注目を一箇所に集中させた。声が聞こえた方向は、今いる場所からさらに奥の森であった。

「まさか……………!」

その叫びから事態を察した竜正は、最悪のケースを覚悟した上で、声がした場所へと飛び込んで行く。

そして、先に到着した捜索隊が絶叫を上げるさなか、最後に到着した竜正は……悍ましい現実を、目の当たりにするのだった。

馬車……だったものと思しき木片があちこちに散乱し、人の形をした肉塊が壊れた人形のように、そこら中に転がっていたのだ。

さらに近くの木々には、人の手足が幾つも突き刺さっている。加えて、馬車からその周辺に至るまで、赤い血潮の海が広がっていた。

地獄絵図。その一言が、この空間に集約されている。

「お、おえっ……！」

「ゲホッ、ゲエツ……！」

村人達は次々と吐き気を催し、眼前の惨劇から目を背けていく。その光景の恐ろしさと腐臭に、彼らの精神があっけなく崩れてしまったのだ。戦士でもない村人には、荷が重すぎたのである。

「……なんと、いうことだ……ミリア……！」

村長はそんな中、吐くことも背を向けることもなく。ただ悲しげな表情で、馬車の奥で永久に眠る妻を、見つめていた。

亜麻色の長髪は血の色に染まり、半開きになった眼からは魂が失われている。その苦しげな死に顔が、この事件の凄惨さを如実に物語っているようだった。

「……」

竜正は落胆する村長を一瞥すると、彼の視界に入らないよう気を遣いながら、周囲の調査を始める。

馬車の破壊された箇所。遺体に残された切り傷。それらに着目し、竜正は片膝をついて痕跡を撫でた。

すると——彼の手に、細かく砕かれた金属片が触れる。それは、剣の刃こぼれによって生じるものだ。

(……やはり。この壊れ方、切創の形……。これは剣によるものだ。しかも、馬車を破壊する程のパワーで……)

何者の仕業かは依然不明なままだが、犯人達が相当な膂力の持ち主であることは明らかだった。恐らく、犯人達を見つけたとしても村人達では歯が立たないだろう。

そう判断した竜正は、自身が背負う責任の重さを、改めて痛感する。この村に生きる人々の命運は、自分の手に懸っているのだと。

「いやああああー！」

その時。甲高い叫びが夜の森に轟き、村人達が一斉に顔を上げる。

竜正はその叫びに、思わず目を見開いた。この捜索隊に、女性は一人もいないはず。

それに、この声は……。

「ベルタ!? なぜ来たんだ、家にいろと言ったはずだぞ!」

「お母さん! お母さんっ! いや、ああああ!」

村長は茂みに隠れていたベルタを見つけ出すと、両肩を掴んで激しく揺さぶる。が、彼女は父の叱責には何の反応も示さず、ただ目の前に横たわる母の亡骸を見つめ、泣き叫んでいた。

(さっきの違和感はベルタだったのか! 迂闊だった……!)

竜正と村長はここに来る前、捜索隊に同行しようとしていたベルタを制止していた。臆病な性格ゆえ、普段なら絶対に夜は出歩かないはずの彼女が、母に会うために懸命に捜索隊に加わろうとしていたのだ。

もつとキツク言い聞かせておくべきだったと、竜正は後悔した。馬車の者達が皆殺しにされている可能性は、ここに来る前から覚悟していたのだから。

「……ッ!」

刹那。半狂乱になり喚き散らすベルタの声に隠れ、複数の殺気がこの場に集まろうとしていた。

—— 敏感にそれを感じ取った竜正は、条件反射で腰に提げた銅の剣に手を掛ける。そして本能に導かれるまま、その切っ先が振るわれた。

「ひあっ!」

村人の一人——の、背後から現れた黒い影へと。

後ろから村人を斬り殺そうとしていた影の動きは、自身の脇腹に直撃した銅の剣の衝撃により阻止された。

「…………ツ!?!」

だが、薄汚れた白いマントを纏うその影は、腹に一閃を浴びただけでは倒れず——そのまま破壊された馬車の上へと跳び乗った。

しかし——竜正はそのタフさよりも、自身の手にある銅の剣から伝わってきた「手応え」に、驚愕していた。

(今の感触……………まさか、いや、そんな……………ハツ!?!)

竜正はどこことなく身に覚えのある、その手応えに冷や汗をかいていたが……………やがて、近づいてきた新手の気配に気を取られ、思考を中断してしまった。

「な、なんだこいつらあ!」

「ひいひい!」

次々と草むらから飛び出し、馬車の上へと乗り移っていく白マントの男達。フードで顔を隠しているため、素顔はわからないが……………その腰に提げられた剣は、王国製のものだった。

「ウウ……………ウ……………」

「ア、アアアア……」

彼らはふらつきながら、低くくぐもった呻き声を上げている。さながら、生ける屍のように。

そんな異様な姿の男達を前に、村人達は震え上がり、尻餅をつく。本能で、この男達が危険であると感じ取ったのだ。

（俺と同じで、戦場から剣を奪ってきたクチか……！ この国を守るための剣で、この国の人々を傷付けたつてことかッ！）

先程の身のこなしや、竜正の一撃で倒れないタフネス。恐らくは、この者達こそ馬車を襲った襲撃犯なのだろう。

そう悟った竜正は怒りで歯を食いしばり、柄を握る手に力を込める。まるで、かつての自分自身を見せつけられているかのような苛立ちが、彼の感情を揺さぶったのだ。

「あ、あいつらがみんなを……くそつたれえええええ！」

「いかん！ 迂闊に近づくなッ！」

すると、村長の制止を聞かずに村人の一人が、鍬を振り上げて男達に突進し始めた。恐怖や怒りに惑わされた精神が、村人から冷静さを奪ったのである。

男達は自分達に突っ込んでくる敵に対し、雄叫びを上げながら剣を振り上げる。そして、村人の脳天に彼らの一閃が集中する瞬間――

「ぐえっ!」

——村人に追いついた竜正が後ろから襟を掴み、強引にその足を止めさせた。

その反動で村人は尻餅をつき、自然と頭が低くなる。結果として男達の斬撃は空を切り、村人は一命を取り留めたのだった。

「はッー」

間髪容れず、竜正は銅の剣を水平に振るう。男達はその一閃をかわすために同時にその場から飛び退き、距離を取った。

その隙に村人を庇うように矢面に立ち、竜正は銅の剣を静かに構える。

「奴らとは俺が戦います、村長達はベルタを連れて脱出を!」

「な、なんだと!? 君を置いていけというのか!」

「この暗闇の中では勝負になりません。早く!」

「くっ……!」

村長は竜正の判断が間違いであるとは——言い切れなかった。実際、村人のほとんどは敵の異様さに戦意を失っている上、全く戦えないベルタもいる。

対して、竜正だけは男達と対等以上に渡り合っているようだった。無理に戦おうとしても足手まといにしなければならないことは、明白である。

多数の人命を取って村の仲間を見捨てるか、義理を取って無理矢理戦いに加わるか。

苦渋の選択を迫られ、村長の頬を汗が伝う。

……しかし、ゆっくり考えている時間などない。すでに男達は剣を振りかざし、竜正に迫ろうとしていた。

「……約束してくれタツマサ君！ 必ず生きて帰ると！」

「——わかりました」

結果として、村長は村人を一人でも多く逃がすことを決断する。……そのために、竜正を囮にすることを。

だが、竜正は恨み言一つ吐かず、それどころか安堵した様子で、村長に微笑みかけるのだった。そして、男達に向け——銅の剣を構える。

（あの感触——やはり連中、あのマントの下に王国製の鎧を着込んでいるな。戦場から奪ってきたものをそのまま着てるんだろうが……これ以上、この国のために戦ってきた騎士の遺品を、こんなことのために使わせるわけにはいかない！）

静かに、それでいて熱く戦意を滾らせる竜正に、男達は化け物のような呻き声を上げながら突進していく。

息を合わせた連携など欠片もない、ただ群がるだけのがむしやらの攻撃。しかしその不安定さが、先の読めない不規則な連撃を生んでいた。

「……そんなもので、振り回される俺だと思ふな！」

しかし、竜正はそれにペースを乱されることなく、あくまで冷静に剣を振るう。最も近い距離まで接近してくる敵から、各個撃破で切り伏せていく。

やはり、最初に感じた手応えは気のせいではなく——倒れていく男達は皆、マントの下に王国製の鎧を装備していた。

騎士の証であり、誇りである武器や防具を略奪や殺戮の道具に使う。それが如何に許し難いことであるかは、騎士道に疎い竜正でも理解していた。

命を懸けて戦ってきた帝国騎士達も、己の武具を大切にしていたのだから。

「グエツ！」

「ガアアツ！」

「す、すげえ……！ あんなに一斉に襲われてるつてのに、一度も斬られてねえ！ しかも、今度は一撃だけであいつらを……！」

「タツマサ君……君は、一体……!?!」

次々と呻き声を上げ、倒れていく男達。すでにその数は半数以下になっていた。

竜正の圧倒的な強さに、村の誰もが息を飲む。剣士として村に訪れていながら、今迄一度も「強さ」を見せずに過ごしていた少年の実力を目撃し、彼らは驚嘆していた。

——しかし、その一方で。

竜正は男達の異様さに、疑問を抱き続けていた。

(なんなんだ、こいつらは。明らかに正気じゃないし、殺意というよりは——むしろ、恐怖に駆られて錯乱しているような声ばかり上げている。ただの盗賊じゃないぞ、

こいつら……!)

すると——男達の動きに、変化が現れた。

「ア、アウウアアア……!」

「ヒヒ、ヒギイイイイ!」

竜正に多くの同胞を倒されたためか……呻き声が変わったのだ。何かに怯えるような声色で、彼らは狂ったように叫び出す。

その変化に村人達は震え上がり、竜正は男達の猛襲を警戒し、村人達を庇うように立つ。

「テイ、コク……!」

「……テイコク……ユウシヤアアア!」

「——ツ!」

そして。血を吐くような男達の絶叫に、竜正は目を見張る。

その叫びを最後に、残った男達は蜘蛛の子を散らすように方々へ退散していった。

(帝国勇者……!?! 今、帝国勇者と言ったのか!?)

一方。竜正は、彼らが残した言葉に衝撃を受け、その場から動けずにいた。到底、追

撃どころではない。

村人達の多くは胸を撫で下ろしていたが、村長とベルタは未だに表情が暗い。

「……」

特に、男達の変化に気づいた村長は、竜正に訝しむような視線を向けていた。

(い、いや……今はそれより、村人全員の安全が第一。とにかく倒した連中だけでも縛り上げて——!?)

その視線に気づかないまま、竜正は自分が倒した男達の方へ振り返り——絶句した。

倒れた彼らのフードは風にめくられ、素顔が露わになっていたのである。そして、明らかになった彼らの素顔に——竜正は、見覚えがあつたのだ。

——二年前の戦場で、竜正に……帝国勇者に斬られた騎士は数知れない。だが、全ての騎士がそれで命を落としたわけではない。

勇者の剣が持つ異様な邪気に支配され、恐怖に囚われた騎士も僅かにいたのだ。彼らは発狂して戦場から逃亡し、行方不明になったという。

そうして生き延びた彼らの行く末を知る者はいなかった。しかし今、ようやく「知る者」が現れたのである。

「そん、な」

掠れた声で呟く竜正の脳裏に、久しく忘れていた戦いの日々が蘇った。傷の痛みと恐

怖に震え、自分から逃げ出していった騎士達。

彼らは今——ここにいます。

そう。馬車を襲撃し、村人の命を奪ったのは——騎士の武器を奪った盗賊などではない。略奪が目的だったわけでもない。

帝国勇者に……竜正に狂わされた騎士達が、錯乱の果てに起こした殺戮だったのだ。

「……」

その事実に向き合ってしまった竜正は、言葉を失い——剣を落としてしまった。顔からは血の気が失われ、その瞳は動揺に染まっている。

「……タツ、マサ……くん……」

何も知らないベルタは、母を失った悲しみに暮れながらも——そんな彼の背中を、案じ続けていた。

第31話 少女の涙

翌日。村では、犠牲となった人々への祈りがしめやかに行われていた。

藁に包まれた遺体は、門近くの墓場へ埋葬され、遺族でない村人達も数多く参列していた。この村にとっては誰もが家族であり、兄弟なのだろう。

「……かあ、さん……お母、さんっ……い！」

村人は皆悲しみに暮れ、昨日までの賑やかさは嘘のように失われていた。とりわけ、最愛の母を失ったベルタの悲しみは深く、墓に泣き継る彼女の姿は、人々の心に痛みを残している。

「……」

だが、村の誰もが、彼女にかけける言葉を見つけられずにいた。嘆き悲しむ背中を見つめるしかなかった竜正も、その一人である。

——あの後。村人達は倒された男達を全員縛り上げた後に納屋に閉じ込め、逃げた残りの連中を探す搜索隊を再編成することになった。

突如平和な村を襲った、王国騎士に「扮した」凶暴な男達。その異様な外敵を前に、村に住む人々は皆、剣呑な雰囲気に含まれていた。

(……俺の、せいだ。俺の過ちが、この村に災厄を呼び込んでしまった……)

今までの平穏な景色は一瞬にして失われ、人々を包む殺伐とした空気が、村の全てを包んでいる。

そんな光景を苦々しく見つめる竜正は、原因となった自分の行いを思い返していた。忘れかけていた悪夢を見るように。

——その夜。いつものように仕事を終え、この日の客が全て去った後の大浴場に、竜正は一人身を浸していた。

「ふ……う」

大浴場で働く身としては最年少である竜正は、最後の片付けをしなくてはならない代わりに、最後の風呂を一人で満喫することを許されている。

しかも竜正の実力が知れ渡った今となっては、片付けをする役目も他の村人が請け負うこととなっていた。「賊と戦える優秀な剣士だから」と、村人達が揃って彼の評価を変させたためである。

もはや彼らにとっては、竜正の比類なき強さのみが希望なのだ。

(巻き込んだのが俺なら、解決できるのも俺……か)

竜正が見下ろした水面に映る、諸悪の根源。その憂いを帯びた表情は、これから始まる戦いの虚しさを予感していた。

自分自身がそもそもの原因である以上、勝ったところで罪を償えるわけではない。負ければ、より多くの命が失われる。

その事実が生む心の淀みは、万病に効くと評判のこの浴場でも、洗い落とすことは出来ずにいた。

(それでも……せめて、今生きている村の皆だけは……ん?)

その時。竜正以外には誰も来ないはずの時間帯でありながら、湯煙の向こうに人影が現れる。

浴場の営業時間は終わっているはず。なのにここに来るということは、ここの職員なのか。

竜正は咄嗟にそう考えたが、その人影は彼が知る職場の先輩達の誰とも一致しなかった。

(……!?)

まさか、奴らがこのタイミングで村に……!? と、思考を巡らせた竜正は、咄嗟に目の色を変えて立ち上がる。

湯煙を越えて現れた人影の正体は、竜正の予測を遥かに越えていた。

「あつ……」

「え……………」

「竜正の目の前に現れたのは職場の先輩でもなければ、狂気に囚われた騎士でもない。タオル一枚に色白の肢体を隠した、亜麻色の髪的美少女——ベルタの姿だったのである。」

「な、なっ……………」

「女性の使用時間はとうに過ぎてている。生まれも育ちもこの村である彼女が、それを知らないはずがない。」

「……………」

「にもかかわらず、なぜ彼女がここににいるのか。その答えが見出せず、竜正は混乱する。」

「一方。ベルタも頬を赤らめ、恥じらうような表情で竜正を見つめていた。」

「その微熱を帯びた視線は、竜正の——ある部分へ向かっている。」

「うっ—」

「彼女の視線を追い、自分が裸のまま浴場から立ち上がっていることを思い出した竜正は、慌てて座り込む。激しい水飛沫が、彼の動揺を物語っていた。」

「そんな彼の様子を見遣りながら、ベルタはゆっくりと白い爪先から湯船に浸かり、竜正の側へ寄り添っていく。その白い肩が、少年の傷だらけの肩に触れるまで。」

「……………どうしたんだ。営業時間を知らない君じゃないだろう」

それから僅かな間を置き、冷静さを少しだけ取り戻した竜正が口を開く。村一番の器量と言われる彼女の柔肌を前にしたためか、その声は僅かに上ずっているようだった。

「……ごめんね。来ていい時間じゃないのは知ってたけど……番台さんに無理言つて、通してもらつたの」

「なんで、また」

「……ここにいれば、安心かな、つて」

「——そう、か」

ばつが悪そうにそう答えるベルタの言葉を受け、竜正は深く追及することなく彼女から視線を外す。正確には、彼女の胸元から。

——昨夜の戦いで男達の大半は仕留めたが、彼らの生き残りは今もこの近辺に潜んでいる。

村人達にとっては、身に迫る危険は今も続いているのだ。

母を失つた痛みは、時間が解決してくれるかも知れない。しかし、今自分達に近付いている危険は、時間が過ぎたところでどうにかなるものではない。

諸悪の根源が断たれるまで、永遠に続く苦しみなのだ。

肉親を亡くした苦しみに苛まれながらも、それだけに囚われず現状に気づいたから、彼女はここに来たのだろう。

少なくとも竜正のそばにいれば、殺されることはないのだから。

(……すまない、ベルタ)

彼女の短い言葉からそれを察した竜正は、自分の行いのせいで、好きでもない男と肌を寄せ合うことになった彼女の境遇に胸を痛めた。

自分が死ねば、父は独りになってしまう。それだけは避けねばという想いが、彼女をここへ誘ったのだろう。他意などない。

それが、彼女の行動についての竜正の見解であった。

「……タツマサくん、みんなを守ってくれたんだよね。お父さんから聞いたよ」

「ん、ああ……いや、守ってなんかいない。結局、俺は——」

「——お母さんも、きつとありがとう、って言いたかったと思うよ。私だって、感謝してるんだし。……ありがとう、私達を守ってくれて」

「ベルタ……」

泣き笑いにも似た表情で、ベルタは竜正に微笑みかける。その儂げな笑顔は、少年の心を深く抉った。

悪いのは、自分なのに。それを知らずに、彼女は自分を慕っている。

その状況に心を痛めながら、竜正は人知れず誓いを立てる。

(……今はただ、戦おう。たとえ甲斐がないとしても——この笑顔を、この優しさを、無

駄にはできない)

本当は、辛くてたまらないはずなのに。悲しくて、たまらないはずなのに。それでも彼女は、自分のために笑おうとしている。

自分を、追い詰めないために。きっと、それが彼女なりの礼だったのだろう。それでも。

「あつ……」

「……」

竜正は、見ていられなかったのだ。

少年の腕の中に、少女の白い裸身が収まる。抵抗する暇さえ与えない自然な動作に、少女は頬を赤らめ、思わず甘い声を漏らしてしまった。

「今ぐらい、泣いていい」

「……っ！」

そして少女は自分の声に恥じらう暇もなく、耳元で優しく囁かれ——本心を、暴かれてしまった。

「俺は今夜、誰の涙も見えていない。泣いてるところも見えていない。だから、いいんだ」
「……う、あ、ああっ……っ！」

取り繕う隙もない、甘い囁き。それは少女が懸命に作り上げた心の壁を、雪のように

溶かしていく。

その溶けた雫は涙として少女の頬を伝い、やがて少年の胸に滴り落ちた。

少年は何も言わず、ただ静かに少女を抱き締める。浴場に響く、彼女の噁り泣く声が消え去り——再び、この空間に静けさが戻るまで。

いつまでも、待ち続けた。

——それから、どれほど経つただろう。いつしか少女は安らいだ表情で、少年の胸板に身を委ねていた。

そうして生まれたままの姿で、自分に寄り掛かる少女の肩を抱き、少年は静かに呟く。彼女にしか、聞こえないように。

「こんなことを言える資格など、俺にはない。それでも……」
「……」

少年は穏やかに——力強く、宣言する。

「……君は、俺が守る」

あまりにも簡潔で、飾り気のない言葉。しかし、死の恐怖に晒されていたベルタにとっては、それだけで十分だった。

「……うん」

彼女も、小さくか細い声で呟くと、小さく頷いて見せた。赤く染まるその顔は、どこ

か恥じらっているようで——それでいて、幸せそうにはにかんでいる。

もはや、その笑顔に偽りはない。

少女はようやく、笑うことが出来たのだ。

第32話 過去との決別

夜明けを経て、村に広がる緊張はさらに強いものとなった。いよいよ、再編成された捜索隊が出発するのだ。

捜索隊に志願した村人は、村長と竜正を含め、僅か十名。先日の人数を、遥かに下回っていた。それだけ、あの狂人達は脅威なのである。

そんな数少ない勇士達を、村人達は静かに見守っていた。生還と勝利の祈りを、彼らに捧げて。

その見守る人々の一人であるベルタは、父と竜正には特に強く祈っていた。勝てなくてもいい。どうか、無事に帰ってきてほしい……と。

「……」

そんな彼女の視線から、先頭を進む村長は娘と竜正の繋がりを悟っていた。

娘の手作りである木の盾を手に、笑顔で彼女に手を振る竜正の顔を、後ろからちらりと見遣り——村長は穏やかでない表情を浮かべる。

（タツマサ君を疑うつもりはない。だが、しかし……）

だが、彼が竜正に疑惑の視線を向ける理由は、娘のことだけではなかった。

竜正と戦い始めてから、狂人達の様子は明らかに変わっていた。まるで何かに憤りをぶつけるかのように暴れまわっていたのに、竜正の強さを目の当たりにした途端、悪夢を思い出したかのようにのたうちまわり、逃げ出していった。

それについて他の村人達は口を揃えて、竜正の強さに恐れをなしたのだと決め付けている。確かにそれもあるのだろう。だが、それにしても狂人達の様子はあまりにもおかしい。

まるで、竜正と戦うことで「何か」を思い出したかのようなようだった。そして、彼らの叫びを聞いた竜正自身も、何か心当たりがあるかのような素振りを見せていた。

もし万が一、竜正と狂人達になんらかの繋がり——例えば仲間同士だった——というような関係があるとしたら。彼についての対応も、考えなくてはならない。

「頼むぜタツマサ、みんなの仇を取ってくれ！」

「お前しかいないんだ！ 頑張ってくれ！」

敵か、味方か。未だ全貌の見えない少年剣士に、人々は惜しめない声援を送っている。もし彼に疑う余地がなければ、村長もそれに続いていただろう。

しかし。今はまだ、判断する時ではない。少年の潔白が証明されるまで、村長は竜正を心から賞賛するわけにはいかなかった。

(……タツマサ君と奴らに繋がりがなければなら、彼は奴らを全員倒してくれるはずだ。

奴らがタツマサ君に何と叫んでいたかは聞き取れなかったが……その実態が掴めるまでは、油断はできない」

何より、得体の知れない男に娘を差し出すわけにはいかない。——そんな父親としての情を飲み込み、村長は門をくぐる直前で歩みを止め、勇士達の前に振り返る。

「……皆の衆。まずはこの搜索隊に参加してくれたことに、礼を言いたい。これは村の平和を懸けた、危険な戦いだ。無事に帰れる保証はない。それでも——来てくれるな？」

「何を今更！ 女房を殺られて、黙ってられるかってんだ！」

「俺だってお袋と妹を殺された！ 奴らに一泡吹かせなきや、やるせねえよ！」

「行こうぜ村長、みんなの仇を取るんだ！」

彼の最後の意思確認に、搜索隊の面々は威勢良く声を上げる。皆、純粹にこの村のため、命を投げ出す覚悟を持っていた。

もう、得体の知れない敵に震えていた、あの夜とは違う。

「……聞いての通り。皆、村のために命懸けで戦う所存だ。君が一番の主力ではあるが、君一人に負担を強いいることはない」

「そう……ですか」

村長はそんな彼らの想いを、竜正に迫るように伝える。

「だから君も。どうかもう一度だけ、我々に力を貸してほしいのだ。——娘の、笑顔のためにもな」

「……はっ」

まるで、裏切らないよう釘を刺すかのように。

そんな村長の意図を察したのか、竜正は僅かに強張った面持ちで頷いてみせる。自分のことに気づいているのか——と焦る彼の頬を、冷や汗が伝っていた。

「さあ、行くぞみんな！ 今日こそ奴らを見付け出し、全員捕え——」

そして。再び踵を返した村長が、搜索隊を鼓舞して前進していく。

——だが。

その足が、門を越える瞬間。

先陣を切る村長の身体が、あるはずのない影に覆われた。

次いで——狂気に囚われた幾つもの影が、門の上から降り注いでくる。まるで、雫が滴り落ちるかのよう。

——死を呼ぶ、冷たい雨となって。

「お父さつ——！」

刹那。少女の悲鳴が上がるよりも早く。

「飛劍風ッ！」

その雨を払うように、少年は叫び——飛空の剣を放つ。砂埃を巻き上げ、地から空へ撃ち放たれた銅の剣が、全ての影を蹴散らしていった。

「グガッ！」

「ギアアッ！」

おおよそ人間のものとは思えない悲鳴を上げ、白マントを纏う人面獣心の狂人達が墜落していく。その光景を目の当たりにして——

「ひ、ひいいい！」

「奴らだああ！ 奴らが、村に攻めてきたああああああ！」

「きやああああ！」

——村中が、パニックに陥った。

先程まで周囲を席卷していた歓声は悲鳴に変わり、村全体へ疫病のように伝染していく。

その影響を受けてか、不意打ちを受けてか。強気だったはずの捜索隊も、戦意を失ったかのように尻込みしていた。

一方。直接襲撃を受けた村長は、パニックに飲まれることなく。ただ、眼前の光景に目を奪われていた。

「……」

自分の身に降りかかる殺意の雨。その全てが、空を翔ける剣の一閃に吹き飛ばされていく。

その瞬間の光景が、目に焼き付いて離れなかったのだ。

あの技を放った張本人は、凜々しい面持ちで懐からロープを取り出し、木に突き刺さった己の得物に投げつけている。その隙を狙い、立ち上がった狂人達が彼に殺到した。

しかし、少年の眼に焦りはない。剣を手放した瞬間を狙われることも、織り込み済みだったのだろう。

「……とあアッ！」

自分と剣を結ぶ直線に、狂人達が集まる瞬間。竜正は柄に巻き付けたロープを一気に引き寄せ、木に刺さった銅の剣を解放した。

拘束から解き放たれた剣は弾かれたように、主人のもとへと帰っていく。行く手を阻む狂人達を、切り裂きながら。

「ガアアッ！」

「ウギアッ！」

その矢継ぎ早の攻撃を目撃し、人々の視線が竜正に集中していく。いつしかパニックは収まり、村の誰もが竜正の戦いを見守っていた。

「す……すげえ。話には聞いてたが……ほ、ほんとにつええんだな……！」
「タツマサの奴……あんなに強かったのかよ……！」

一方。二度に渡り強烈な斬撃を受け、狂人達は血だるまになって墜落していく。「普通の人間」であれば、間違ひなく再起不能になっているところだ。

——だが。痛みは彼らを止める抑止力にはなりえない。もがき苦しみながら、なおも立ち上がろうとする。なおも、暴れようとする。

(肉体の痛みでも止まらないほどに……彼らは……)

痛みにも勝る「恐怖」に突き動かされ、狂人達は身を起こしていく。それほどまでに彼らを狂わせた自分の手を見遣り、竜正は眉を顰めた。

「オウ、アアガ……！」

「ガアウ、ア……オオウ……」

これ以上無理に戦い続けられ、間違ひなく命に関わる。だが、それでも彼らは立ち上がった。

自分の脳裏に焼き付いた恐怖から、逃れるために。この苦しみから、脱するため。彼らは指先を震わせながら剣を拾い……デタラメな剣閃を描きながら、がむしやらに斬りかかって行く。

「……いいだろう!!? もう、十分だろう」

!？」

その光景を前に——竜正は、今にも泣きそうな表情で剣を振り上げた。少年の一閃に打ち倒されて行く狂人達の姿が、悲しみに暮れた瞳に映されていく。

「誰一人……ここを通るなアツ！」

圧倒的でありながら、どこか痛ましい彼の姿に、人々は言葉を失った。歓声を送るべきなのに——かける言葉が見つからないのだ。

「タツマサ、くん……？」

竜正の横顔を見つめるベルタも、彼の異様な様子に疑問を抱いていた。ただいたずらに傷付けることを嫌っている——とは思えないほどに、その表情は暗い。

まるで、彼らと戦うこと自体を忌避しているようだった。

——そして。戦いが始まり、半刻が過ぎた頃。

竜正の足元には、動けなくなるまで痛めつけられた狂人達の肢体が投げ出されていた。

「……」

いくら痛みを与えても止まらないとはいえ、身体を動かすには正常な骨格と筋肉が必要だ。それらを破壊されては、いかに狂人といえど指先一つ動かせない。

そこまでして、竜正はようやく狂人達を無力化したのだ。常人ならば確実に死に至る

打撃を、幾度となく繰り返して。

「や、やった……！ やった、勝った！ タツマサが勝ったんだ！」

「英雄だ、英雄の誕生だ！」

その苛烈な戦い振りを見守っていた村人達は、口々に竜正を称え、歓声を上げる。この戦いの異常さに、気付くこともなく。

「……疑い過ぎ、だったな。後で、謝らねばなるまい」

戦いが始まる前までは半信半疑だった村長も、この結果を目の当たりにして、考えを改めようとしていた。

気にかかる部分はあるにしても、結果として竜正は狂人達を全員仕留めてくれた。ならば、これ以上疑ってかかるのは道理に反する。

村長はそう判断し、胸を撫で下ろして竜正に微笑む娘を見遣った。

（タツマサ君が、この村に根を下ろしてくるなら……娘を託しても、いいかも知れん）
どのような道理があろうと、この世は強い者が正しく、弱者は悪となる。それは、王国が敗北した二年前の戦争が証明していた。

だが、これから帝国による弱肉強食の時代が始まったとしても。圧倒的な強さを持つ少年の力があれば、娘の幸せは守られるかも知れない。

（……？）

そんな仄かな期待を乗せて、村長は改めて少年の背を見つめる。——だが。少年の背は、震えていた。

今は寒さを感じる季節ではない。なのに——その背は、身を切るような寒さに凍えているようだった。

そんな彼の様子に、村長は首を傾げる。一体何が、彼の心を追い詰めているのか。

(「こんな……こんなことでは、俺は……」)

その答えは——少年の胸中に隠されていた。

自分の剣のせい、心と人生を狂わされた犠牲者に、さらに鞭打つような攻撃を加える。そんな非道な行いでしか、今生きている人を守ることをできない。

勇者としての在るべき姿から、ますます遠ざかっていく。王国の人々に償うはずが、さらに彼らを苦しめている。

そのジレンマは、竜正の精神を徐々に——そして確実に、追い詰めていた。

「こーなつちまえば、怖いものなしだ！ こいつらめ、縛り上げてやろうぜ！」

「他の仲間達と一緒に、納屋の牢屋行きだ！」

「……みんな、もう大丈夫だ。あとは俺に任せて、下がっていてくれ」

「え……だ、だけどよ……」

「頼む……まだ、皆に危険が及ばないとは限らないんだ」

とにかく、今は一人になりたい。

その思いから、竜正は狂人達を縛り上げようと歩み寄る人々に釘を刺していた。再び暴れ出したら危ないから、という建前を使って。

そんな彼の心境など知る由もなく、村人達は竜正の言葉に素直に従った。戦闘について門外漢である彼らには、狂人達の脅威が完全に失われていることなど、わからないのだ。

「……」

村人達が引き下がっていくのを確かめ、竜正はうつ伏せに倒れた狂人達の一人を見遣る。その一人は、微かに指先を震わせていた。

——まだ、動くのか。

その痛ましい様が一瞬だけ目を伏せたのち、竜正は再び銅の剣を振り上げた。少年の目と、狂人の眼光が交錯する。

しかし。

その狂人の瞳は、竜正が戦いの中で見てきた色とは——違っていた。

「あ、ううあ……わ、たし、は……」

「——ッ!?!」

もう一度とどめを刺そうとしていた竜正は、その声に耳を疑う。人語を話すことすらできなかった狂人が、「私」と発したのだ。

「なん、と……いう、ことを……」

「おい……!? まさか、正気に戻ったのか!? おいつ!」

その後が続いた言葉を聞き取り、竜正はその現象が気のせいではなかったと悟る。無我夢中で剣を捨て、竜正は焦燥を露わに片膝を突いた。

言葉を発したその狂人は、竜正の呼びかけに反応するように、顔を上げる。その目にはもはや——狂気の色はない。

彼はようやく、あるべき王国騎士の心を取り戻したのだ。

(シヨックを与え続けたのが効いたのか……。よかった、これなら他の騎士達も助けられる!)

狂人——だった騎士の様子からそれを確信し、淀んでいた竜正の瞳に光が灯る。ようやく一つ、王国に償うことができるかも知れない。

そんな——甘い夢を見たのだ。

「……殺してくれ! 帝国勇者よ、私を……我らを、殺してくれッ!」

「なっ……!」

そして。それは一瞬にして夢で終わり。

騎士は泣き絶るような声を上げ、悲痛な表情で竜正を見上げた。

そんな彼の様子に、竜正は気づかされてしまう。

——彼らは、狂っていた自分達が何をしたのかを……鮮明に覚えているのだ。

勇者の剣を振るっていた竜正が、そうだったように。

「王国の民を守るべき、我ら騎士団が……ただ死の恐怖から逃れるために、民を手にかけていたとは……！ こんなことが、許されていいはずがないッ……！」

「ま、待て！ あんた達が狂っていたのは——」

「言うな！ 敵に恐れをなし、守るべき民と仲間を見放して逃げ出したことは事実！ もはや我らに、弁明の余地などない！」

竜正の言葉に耳を貸さず、騎士は泣き叫ぶように己が犯した罪を悔いる。贖えない罪の重さに、もがき苦しみながら。

一方。様子が変わった狂人の叫びに、村人達は言葉を失っていた。

聞いてしまったからだ。狂気から解き放たれた騎士が発した、「帝国勇者」の名を。

「だ、だけど……」

「……だが。貴殿に折られたこの両腕では、自刃することもできん。帝国勇者よ……貴殿がどのような経緯で、この村の民と暮らしているのかは知らぬ。が、あの時のような邪気を持たぬ今の貴殿が戦ってくれたおかげで、この村は救われた」

「……」

「私には、今の貴殿が悪しき勇者には見えん。——ゆえに。その心を見込んで、頼みたいのだ。どうか貴殿の手で、この穢れた魂を救ってくれ」

「……俺は……」

「殺しは、好まぬのだろう。我らに剣を向けていた時の、あの悲しげな顔を見ればわかる。……だが。武人として、より強い者の剣に討たれることを……望まずには、いられないのだ」

「狂気に支配されてさえないなければ。この騎士が守るべき民を苦しめることなど、万に一つもなかったらう。」

だが——起きてしまった結果を変えることは出来ない。ゆえにこの騎士は、介錯を望むのだ。

竜正個人の意識としては、騎士の矜持といえど、これ以上人を殺めるようなことは何としても避けたかった。

だが。ここで自分が殺さなかったとしても、村人を何人も殺してきた彼らが許されるはずがない。まず間違いなく、村人達の手で処刑される。

自分の過ちのために、王国人が王国人を殺める事態になつてしまうのだ。

「これを、殺しと思わないでくれ。これは、救いなのだ。我々にとっては……何よりも尊

い、救済なのだ」

「ソウ……ダ……」

「ワレワレヲ……コロ、シ……テ、ク、レ……」

「スクイ、ヲ……テイコク、ユウシヤ……」

やがて、他の騎士達も徐々に正気を取り戻しつつあった。皆一様に、竜正の手でとどめを刺されることを願っている。

だが——どうしても、竜正は踏み切れなかった。勇者の剣を手放し、一年間に渡り戦いから身を引いていた少年の心は、再び人を殺めることを頑なに拒んでいる。

だが。

自分のために、罪のない人が手を汚すことになることの方が——彼には、堪えられなかった。

「俺、はッ……!」

「帝国勇者よ、どうか……救いを!」

「スクイヲ!」

「——あ、あああああああッ!」

救うために殺す。殺すことで救う。

その矛盾に苛まれた果てに——少年は、慟哭と共に螺旋の剣を放つ。

全てを切り裂くその一閃は、死を望む騎士達に救いをもたらし——木々を薙ぎ倒す突風を生んだ。

その刹那。少年は、確かに見た。

ありがとうと呟く、騎士の最期を。

「……」

——全てが終わった時。少年の足元には、強烈な風により引き裂かれた肉片が、あらゆる場所に散乱していた。閉じられた納屋の扉からは、赤い血潮が染み出している。

もう、ここに騎士達の魂はない。天へ召された彼らの御霊は、確かに「救われた」のだ。

ゆえに、今ここにあるのはただの肉塊に過ぎない。——その肉塊を一瞥し、竜正はゆつくりと振り返る。

そこには。

「……まさか帝国勇者様であらせられたとは露知らず！ 度重なる無礼を働き、誠に申し訳ありません！ 何卒、村人のお命だけは！」

全ての村人が、竜正に対して一様にひれ伏していた。共に笑い合い、暮らしてきた仲間達も。村のために働き続け、ようやく信頼を勝ち取った村長も。

そして——あの夜、情を交わした少女までも。

誰一人として、変わらざる竜正を受け入れる者など……いなかったのだ。

（まさか……タツマサ君が、帝国勇者だったとは！ 二年前に死んだと聞いていたのに……！） 何のためにこの村に近づいてきたのかは知らんが、今は村の全てを投げうってでも、皆をこの悪鬼から守らねば……！）

村人達の先頭で、頭を地面に擦り付ける村長は、村人達の人命を守るべく思考を巡らせる。

そして——ある決断をして、我が娘と視線を交わした。

（ベルタ……お前を守れぬ、この父を恨め……！）

（ううん、いいよ。だって……村の皆の、ためだから……）

父として、絶対に許されない願い。だが、それを叶えねば帝国勇者の機嫌を損ね、村人に危険が及ぶかも知れない。

その想いを汲んで、少女は眼差しで願いを聞き入れる。やがて、身を切るような決断を背負い、村長は顔を上げた。

同時に、娘も立ち上がる。

「帝国勇者様。この村一番の器量よしと評判の我が娘を、あなた様に差し上げましょう。どのように扱われても構いません。ですからどうか、この村の者達にお慈悲を……」

「……私からも、お願いします……。帝国勇者、様……」

娘——ベルタは震えながら、父に続くように竜正に声を掛ける。もはや、その表情には昨夜の安らぎなど一欠片も残されていない。

彼女の目に映る少年は、もはやタツマサという男ではなく——帝国勇者でしかないのだから。

(……)

自分を見る人々の——ベルタの目の色から、竜正は悟る。これこそ、本来自分が浴びるべき視線なのだ。

帝国勇者として、受けるべき咎なのだ。

(何故だろう。こうなることは、わかっていたはずなのに)

正気に戻った騎士が、帝国勇者と発言した瞬間から。こうなる予想はしていた。覚悟もしていた。

それでも……竜正の表情は暗い。

一夜限りだとしても、共に肌を寄せ合った少女が、自分に心を開いてくれていた彼女が——怯えながら、それでも勇気を振り絞って生贄になろうとしている。

村の皆を、自分から守るために。

「……」

「帝国勇者、様……?」

それがわかかってしまった竜正には……もう、ここに留まることは出来なかった。彼は重い足取りで踵を返すと、無言のまま歩み出す。

その背に、ベルタはおずおずと声を掛ける——が、かつて惹かれた少年は、振り返ることなく進んでいった。

村人達が戸惑いの声をあげても、少年は立ち止まることなく。

村から、一步。また一步と、遠ざかっていく。

孤独という吹雪に凍える日々に、立ち戻るように。

(俺は……俺のままでは。誰にも、償うことなどできない。たった一つの笑顔のために、戦うことさえ、許されない)

誰もいなくなった森の道を歩む少年は、昨日まで過ごしていた毎日を思い返す。

戦後の痛みを感じさせない、澆刺とした村人達。厳しくも温かい、村人達の父とも言うべき村長。

そして。臆病でありながら、誰よりも優しく、眩しい笑顔で皆を癒していた——

(——あの笑顔を守る資格など、俺には最初からなかった。それは、こうなる前からわかっていたはずだ。なのに……！)

その笑顔を見られないまま、終わってしまった。いくら頭でやむを得ないと理解していても、温もりを求める少年の本心が、この結末を嘆いていたのだ。

——死ぬことも。生きて償うことも、叶わない。笑顔のために戦うことさえ、許されない。

少年が伊達竜正である限り。帝国勇者である限り。どのように身を粉にしても、人々の悲しみを背負うことなどできない。

それをこの村に思い知らされた竜正は。

変わらず自分を見下ろす太陽を、視線で追う。その輝きは空を黄昏に彩り、地平線の果てに沈もうとしていた。

そして、この時になり。

少年は——決意したのだ。

(……変わらなくちやいけないんだ。俺が伊達竜正だから、償えないのなら。俺そのものを、変えなくちやいけないんだ。全く新しい、自分自身にならなくちや……いけないんだ！)

今までの自分を、根本から覆し。十五年に渡る伊達竜正としての人生に、幕を下ろし。何もかも違う、「ジブン」になることを。

第33話 流浪の剣士ダタツ

帝都。

そこは華やかな景観を持ち、煌びやかな服に身を包む人々が行き交う文明の都。

その中心には——この帝国の強大さを象徴するかのような荘厳さを持つ巨城が聳え立っていた。

そして。幾万もの軍勢を束ねる強国の存在感を主張する、その城の最上層には——帝国の全てを統べる皇族が座していた。

「……」

望むものがあれば、圧倒的な力をもって何もかも手にすることができると。そのような絶対的な強者でありながら——玉座に腰を下ろす時の皇帝は、憂いを帯びた表情で帝都を静かに見下ろしていた。

その胸中を悩ませる存在——帝国勇者と呼ばれた少年の戦死が知らされてから、既に二年が経過している。

それほどの月日を経た今でも、その報告を覆す情報は入ってこない。未だに遺体が見つかっていないとはいえ、もはや生存している可能性は絶望的と言っている。

だが。帝都の広場に建てられた、勇者の武勲を称えて造られた銅像を見つめる皇帝は。その結末を、今も受け入れ切れずにいた。

勇者の鎧と兜を纏い、勇者の剣を掲げる少年の像は、皇帝の記憶に残された彼の姿を彷彿させていた。それゆえに、彼は今も勇者の安否を気にかけているのである。

「……バルスレイから、報せは届いたか」

「いえ。未だに……」

「そうか……」

二年前。王国軍残党の鎮圧に当たっていた勇者タツマサは、敵の生き残りに背後から刺され、崖下に転落したという。

普通の兵士なら、間違いなく即死している状況だ。しかし、彼は神の力を齎された異世界の勇者。そうやすやすと死ねる身体ではない。

だが。崖の底には勇者の剣と、誰のものかわからない肉片が散乱していたという。

さしもの勇者も、墜落の衝撃には耐えられなかったのか。人類に牙を剥く勇者の所業に怒った神が、勇者から力を奪ったのではないか。

様々な説が横行したが——勇者の生存が絶望視されている点だけは、共通していた。

一方。目撃者の証言では、勇者を刺した残党も墜落したという。現場の肉片がその残党のものであったとするなら……勇者が生きている可能性もなくはない。

しかしそれも確証があるわけではなく、生存説の根拠とするには弱いと見られていた。

それでも皇帝は——その僅かな可能性に望みを懸けて、勇者の戦死を公表してからも密かに搜索を続けるよう臣下に命じていた。

帝国の英雄である勇者を、長く「行方不明」と扱っていても臣民の不安を招いてしまう。ゆえに、公的には早い段階で勇者は戦死したと発表していた。

英霊として勇者を祀り上げること、勇者がいなくなっている理由を「創り出した」のである。

それ以降も、皇帝はこうして勇者の行方を追い続けていたのだが——それを知らない皇女フィオナは勇者の死にショックを受け、再び自室に塞ぎ込んでしまっていた。

愛する娘のためにも。居場所を失ったあの少年を、もう一度迎え入れるためにも。なんととしても、彼を見つけ出したい。

それが、帝国の理想に貢献してくれた勇者への、せめてもの報いとなるならば……。

その思いを胸に、皇帝は勇者の像を静かに見下ろす。憂いを帯びた彼の瞳は、在りし日の少年の姿を求め続けていた。

(……タツマサよ。そなたは今、どこにいるのだ……。せめてこの世界のどこかで、生きていてくれ……)

——その頃。

王国領のとある山中を、一台の馬車が進んでいた。銀髪を靡かせる、一人の武人を乗せて。

「……バルスレイ將軍。この辺りが、例の噂があつた場所です」

「……そうか」

武人の名は、バルスレイ。帝国騎士の頂点に君臨する最強の武將として知られ、戦後処理に貢献した人物でもある。

彼は今、ある噂を確かめるために副官を連れ、この山道を進んでいた。

「しかし、どうにも信じられませんか。かの勇者様が、このような場所に現れたなどと……。最後に消息を絶たれた森林地帯からも、遠く離れているというのに」

「確かに、ただの噂でしかないかも知れん。……だが、皇帝陛下にとつても私にとつても、今はそれで十分なのだ。……皇女殿下の御気持ちを思えば、な」

「は……失礼しました」

馬車の中で向かい合う二人は、神妙な面持ちで窓から窺える森の風景を見遣る。二年前まで戦火に脅かされていたとは思えぬほど、穏やかな景色だった。

王国のとある山に死んだはずの帝国勇者が現れ、そこに逃げ込んでいた敗残兵を虐殺した。

バルスレイがその噂を耳にしたのは、先月のことだった。戦後処理を終え、王国の監視を上流貴族のババルオに託していた彼は、その噂を確かめるべく、再びこの異国へ足を踏み入れたのである。

「……ですが、なかなか有力な手がかりには辿り着けません……。先ほど立ち寄った村でも、それらしい情報は得られませんでしたし」

「本当に、そうか？」

「え……？」

だが、副官が言うとおりの情報収集は難航していた。彼らは道中で、大浴場を名物とする村に立ち寄っていたのだが——噂の場所から一番近い人里からも、手がかりは得られなかったのである。

やはり、この噂はただの噂でしかなかったのではないか。副官は、そう思い始めていた。

——しかし。バルスレイは、そうではない。

（聞き込みの際に帝国勇者の名を出した瞬間。彼らは一瞬だが……全員が怯えたような顔をしていた。戦場から遠く離れ、戦火に晒されることもなかったあの村の人間にしては、反応が大き過ぎる。直にその存在と力を見た人間でなければ、あそこまで過敏に反応すまい）

有名な人物の名前を出す時。その人物をよく知っている人間と、話に聞いただけの人間とでは、反応に大きな差が出る。

副官が気づいていなかったその違いを、バルスレイは見抜いていたのだ。記憶を掘り返されたように、顔を顰めた村人達の心境を。

（おそらくは帝国勇者——タツマサの報復行為を恐れて、知らぬ振りをしたつもりなのだろう。我々にとってはともかく、彼らにとってタツマサは恐ろしい怪物でしかないからな……）

そして、村人達の中でも——とある一人の少女は、一際特別な反応を示していた。怯えながらも、どこか寂しげなその瞳を——老境の武人は見逃さなかつたのである。

ゆえに。バルスレイはその少女の瞳を見て、確信したのだ。

（やはり、タツマサは生きている……！ 生きているのだ！）

「バルスレイ將軍……!?!」

生い茂る森を見つめる將軍の眼差しに、力が籠る。副官はそのただならぬ様子を前に、何事かと眉を顰めていた。

——その時。

「きやああああつー！」

「うわあああああー！」

数人の男女の悲鳴が、一定の方向から同時に響き渡ってきた。

「な、何事か!」

「……………」

突然起きた緊急事態に副官は冷や汗をかき、バルスレイは一瞬で眼の色を戦闘時の鋭いものに変える。

人々の叫びに、戦士としての直感が騒いだのだ。

(王国が敗戦して以来、アイラックスの威光により保たれていた治安が崩壊し、野盗共が横行するようになったと聞く。強者が世を去った途端に、自分達が強くなったと錯覚するとは……愚かな奴らめ)

バルスレイは迷わず馬車を飛び降り、悲鳴の出処を辿りながら森の中を駆ける。その素早さは老いを感じさせないばかりか、力強さを全身から放っているようだった。

二年前にアイラックスが戦死したことで、王国騎士団は士気を大きく削がれ、王国全体の戦力は著しく低下した。

その変化は治安にも現れ、今では王国の片田舎の多くが、盗賊の根城にされているという。王国内では都会と呼べる町には、決まって帝国の駐屯兵が居座っているため盗賊の脅威は排除されているのだが、そうではない田舎の町や村は格好の餌食なのだ。

事実、バルスレイ達が立ち寄った村も一年前までは、山賊の動きを警戒していたのだ

という。——ここしばらくは、その気配も途絶えているそうだが。

芝や草を掻き分け、猛獣にも勝る勢いで地を走るバルスレイ。その視界に現場の光景が映る瞬間は、すぐにやって来た。

ボロ布を纏うならず者達に包囲された、一台の馬車。その中には幾つもの楽器や小道具が積まれ、馬車の外で震えている数人の男女は芸人の衣装に身を包んでいる。

おそらく、狙われているのは旅芸人の一座。一稼ぎを終えて帰路についているところを襲われたのだろう。

（賊は十三人。馬車の上に二人、馬車前方に五人、後方に六人。馬車の二人から始末して奴らの頭上を取り、残りを仕留めるか……）

まだ盗賊達はバルスレイに気付いていない。この隙を突けば、労せず彼らを無力化できさる。

そう踏んだ老練の武人は、自らが現世に復活させた、帝国の秘剣を構える。——帝国式投剣術、飛剣風の構えを。

だが。

その一閃が、この戦いで放たれることはなかった。

「ぐはあっ!？」

バルスレイが飛剣風を撃つ直前。馬車の上から旅芸人達を脅していた盗賊の一人が

……突然悲鳴を上げ、のたうちまわったのだ。

その膝には——擦り切れた銅の剣が、突き立てられている。

「……ッ!？」

予想に反した事態に直面し、バルスレイは飛剣風を放とうとしていた手を止める。自分の眼で見切れない速さで、剣を投げつける。

そんな所業が出来る戦士など、彼が知る限りでは一人しかいない。

「やはり、そうか……!」

この状況から、バルスレイはある人物の登場を予測し——その直後に的中させる。

黒い髪。青い服。赤いマフラーに、古びた木の盾。

その少年が馬車の上に突如舞い降り、盗賊の膝から引き抜いた銅の剣で、もう一人を一撃で叩き伏せた時。

バルスレイは、戦闘中であるにも拘らず——我が子の無事を確かめたかのように、破顔した。

勇者タツマサは、やはり生きていたのだと。

「てめえ!」

「まだ護衛がいやがったのか!」

一瞬にして馬車の上に陣取っていた二人を倒した少年に、盗賊達は怒号を上げて襲い

掛かる。だが、近接戦闘においては高い位置に立つ者の方が遥かに有利だ。

少年は落ち着き払った様子で、馬車の上に登ってくる男達を、各個撃破で打ち倒していく。

だが、多勢に無勢という言葉もある。一斉に前後から挟み撃ちにされては、いかにこの少年といえど剣一本では切り抜けられない。

彼は素早くそう判断すると、馬車の下へくると回転しながら飛び降り、颯爽と着地した。

そして今度は、盗賊達が頭上となる。その好機にほくそ笑む彼らは、高笑いを上げながら、一気に少年目掛けて飛び掛かった。

——だが、それは少年の術中だったのだ。彼には「高所に立てば勝ったも同然」という、近接戦闘のセオリーを破る対空剣術があるのだから。

「……飛劍風ッ！」

「ぐわあああッ!?!」

「ぎゃあああッ！」

間髪容れず、少年は超高速の投剣術を放ち、策に嵌まった盗賊達を風圧で一掃する。吹き荒れる剣の風がならず者を切り刻み、鳥を射抜くように撃ち落としていった。

——少年がこの場に現れて、僅か一分。それだけの時間で、十三人の盗賊達は全員打

ちのめされてしまうのだった。

突然現れた少年剣士のあまりの強さに、守られていた旅芸人達は唾然としていた。

「おお……」

さらに彼を指導していたバルスレイも、感嘆の声を上げている。勇者の剣を手にしていた頃より、さらに腕に磨きをかけていることを戦い振りから感じていたのだ。

（二年前より動きの無駄が解消されただけでなく、飛剣風もさらに冴え渡っている。実戦を重ねたことで、自ずと身に付けた立ち回りなのだろう。……もはや私など、今のあの子の足元にも及ぶまい。なぜ二年も行方をくらましていたのかは知らぬが、とにかくこうして会えた以上、連れ帰らぬ手はない！）

その成長を喜ぶバルスレイは、少年と再会するべく一步を踏み出し――

「あ、あんたまさか……この近辺に出たっていう、帝国勇者か!？」

「え!?! あの、敗残兵さえ容赦なく殺すっていう……!?!」

――旅芸人達の怯えた声に、足を止める。

今、彼らは少年が帝国勇者ではないかと勘繰っている。ここで自分が飛び出せば、間違はなく旅芸人達は少年が帝国勇者であると確信するだろう。

少年は、自分が帝国勇者であると認めるつもりなのだろうか。認めないのだろうか。

それがわからないうちは、自分は動いてはならない。バルスレイは咄嗟にそう判断

し、様子を見守っていた。

「……」

彼は、何も語らない。ただ静かに、盗賊達が全員気絶していることを確認している。否定も肯定もしないつもりなのか——。バルスレイが、そう判断しかけた時。

「……帝国勇者なら、二年前に死んだはずでしょう。ジブンは、ただの風来坊ですよ」少年は穏やかに笑い、バルスレイの知らない「ジブンを演じていた。

(……！)

その光景に老将は目を見張り、少年が帝国勇者としての己を捨て去ったことを悟る。それゆえに帝国に戻らない、ということも。

「だ、だよなあ、ハハハ……。助けてもらったのに、疑うようなこと言つて悪かったよ。ありがとうな、風来坊さん！」

「しかし、べらぼうに強いなあんだ。名前はなんていうんだ？」
「名前は……」

少年が帝国勇者ではないと判断し、旅芸人達は胸を撫で下ろす。そんな彼らの問いに、少年は僅かに間を置いて——

「……ダタツツです。ジブンは、ダタツツといひます」

——新たな名を、名乗るのだった。

「ダタツツ? はは、変な名前だな!」

「えへへ、よく言われるんですよ。ジブンは結構気に入ってるんですけどね」

「よし、ダタツツ君。助けてもらった礼だ、麓の街に送るついでに一曲サービスしよう!」

「ホントですか!?! やった!」

少年——ダタツツは屈託のない笑みを浮かべると、賑やかな音楽を奏でる馬車に乗り、旅芸人達と共に山を下っていく。

バルスレイはその後ろ姿を、静かに見送っていた。誰にも、気付かれることなく。

(ダタツツ、か……。やはり、お前は全てを捨て去ってしまったのだな。勇者としての栄光も、名誉も。皇女殿下の、想いさえも)

悲しげなその瞳には、戦士としての色など欠片も残されていない。そこには、我が子と引き離された親のような、寂しげな色だけが湛えられている。

(だが……帝国が王国に勝利できたのは、間違いなくお前のおかげだ。誰にも文句は言えまい。……それがお前の選んだ生き方なら、私にはただ、武運を祈ることしか出来ん)

そして、ダタツツを乗せた馬車がバルスレイの視界から完全に消えた時。

老将は静かに踵を返し、歩み出す。哀愁の漂う背を、山道に向けて。

(——せめて、その道の果てに救いがあらんことを)

それだけを願ひ、彼は立ち去つていく。——やがて、彼の目の前に副官が駆けつけて来た。

「バルスレイ將軍！　いかがされたのです?!　まさか、何か手がかりが……?!」

「……いや。収穫はない。やはり、噂は噂だったようだな」

「將軍……?」

どこか諦観したような彼の声色に、副官は訝しむように眉を顰める。そんな彼の声など、聞いたことがないからだ。

「皇帝陛下には、諦めて頂く他あるまい。——帝国勇者は間違いなく帝国の理想に殉じ、英霊となつたのだ」

そう呟き、バルスレイは馬車が走り去つた方角を、一度だけ見遣る。そして、再び歩み出してからは——もう、振り返りはしなかつた。

(さらばだ、タツマサ)

最後に。心の奥底で、息子のように想つてきた少年の名を呼んで。

——私達が暮らすこの星から、遙か異次元の彼方に在る世界。

その異世界に渦巻く戦乱の渦中に、帝国勇者と呼ばれた男がいた。

人智を超越する膂力。生命力。劍技。

神に全てを齎されたその男は、並み居る敵を残らず斬り伏せ、戦場をその血で赤く染め上げたという。

如何なる武人も、如何なる武器も。彼の命を奪うことは叶わなかった。

しかし、戦が終わる時。

男は風のように行方をくらまし、表舞台からその姿を消した。

一騎当千。

その伝説だけを、彼らの世界に残して。

——そして、四年後。終戦から六年を経た今。

男の旅路は、今も続いている。

第三章 贖罪のツヴァイヘンダー

第34話 追憶を終えて

「……」

ダタツツと名を改め、四年。

青年へと成長した彼は、自分の全てを語り終えると——死を待つ囚人のように、静かに瞼を閉じる。

「そんな、ことが……」

蚊が鳴くような小さな声で、ダイアン姫は打ちのめされたように呟いた。話を聞いていた他の者達も、皆一様に言葉を手放している。

かつて帝国勇者として殺戮の限りを尽くした彼が、王国のために戦うようになった理由。その全てを知り、姫騎士は青年が言った「王国と戦う理由がなくなった」という言葉の意味を悟っていた。

（たった一人の肉親にすら会えなくなつたから……王国を倒す役目から解放された。そういう、ことなのですか……？）

母を失つたダイアン姫には、家族を大切に想う気持ちは痛いほどわかる。だからこ

そ、ダッツが同じ想いを抱え、それゆえに罪に塗れて戦い続けていたという現実には、複雑な思いを抱えていた。

それは、父を失ったロークも同様である。齢十四の彼女には、ダッツの過去はあまりにも重過ぎたのだ。

(もしオレが、あいつだったら……オレは、呪いに勝てたのかな……)

己の感情に従い、ダッツを敵対視していた自分の行動。それを顧みた少女騎士は、自分の在り方を疑い始めていた。

国と命の恩人に対し、仇で返すような態度を取り、それが当然であると決め付けていた。彼自身はそれすらも受け入れていたが、自分だったらそれが出来ただろうか。

——きつと、出来ない。間違いなく不条理に耐えかねて、逃げ出していた。

それがわかってしまったからか。青年を見つめる彼女の表情は、苦々しく歪んでいた。

「悔いることはない。その若さにしては、よく耐えた方だ」

「だけど……」

「……恥ずべきは、師を気取りながら何も気づけなかった、この私だ。敵方のアイラックスですら気づけたようなことに……な」

そんな彼女の肩に手を置くバルスレイも沈痛な面持ちで、逞しく成長した愛弟子を見

つめる。

（この世に生を受け、劍に生きて六十余年。武の道しか知らぬ私が、一丁前に「父親」をやろうとしたことが、そもそもその誤りだったというのか……）

誰よりも彼のそばにいたはずなのに、一番肝心なところを見落としていた。その事實は、拭い難い汚点として老将の心に染み付いている。

師としても父としても不明であつたがゆえに、息子のように想つていた愛弟子が、六年以上に渡り苦しみ続けていたこと。それに気付いてやれなかつたこと。それら全てが、バルスレイの胸に重くのしかかつていた。

「……して、ダタツツ殿。その話が本当なら、先日捕縛した賊も正氣に戻るのだな？」

「——はい。正常な意識さえ取り戻せば、ヴィクトリア様の動向についての情報も、聞き出せるでしょう」

一方、国王だけは陰鬱な空気に飲まれることなく、淡々と話を進めていた。だが、その声色はどこか、ダタツツを氣遣うような色を帯びている。

理性を保つたまま、欲望に支配され罪を犯し続ける。その生き地獄は、如何程のものか。この場にいる誰もが、想像出来ずにいた。

国王もまた、その一人なのだ。ゆえに、その闇の中に生きながら、なおも王国のために劍を振るう彼に、情を寄せたのである。

「——よし。城の兵には私から説明する。今のヴェイクトリアが勇者の剣に操られているとするなら、何も知らない兵が迂闊に近づき、被害を受けるかも知れん。ババルオの魔の手が去り、この国がようやく平和になろうとしている時に、王国人同士で殺し合うようなことだけは何としても阻止せねばなるまい」

「ジブンも同じ考えです、陛下。災いを振り撒いたジブンに、このようなことを口にする資格はないと重々承知しておりますが——どうか今一度、この国の人々のために戦わせて頂きたい。一つでも多くの、笑顔を守るために」

「うむ。アイラックス亡き今、人智を越えた超然の存在から力無き民を守れるのは、現代の勇者たる貴殿しかいまい。——今こそ、伝説通りの勇者として、その剣を振るってほしい」

「——仰せのままに」

その心に触れた青年は、静かに——そして熱く。国王と約束を交わし、王国のために立ち上がる決意を、新たにしていた。

そんな彼の力強い瞳を見遣り、国王は神妙な面持ちを浮かべる。

（勇者の敵が勇者の剣とは——なんとも皮肉なものよ。恐らくは先代の勇者も、正義の心を以て剣を振るつたのではなく……魔王以上の邪気を纏い、魔の者共を飲み込んだのだろう）

彼の眼前に映る青年は、人類に牙を剥いた悪の勇者と恐れられている。しかし、その評価は彼という一人の勇者としての「過程」でしかないのかも知れない。

現代に生き残った、ただ一つの闇を切り裂くための剣。それが、彼であるならば。——
—国王は、そう考えていた。

（魔王が倒れ、魔物が地上から消え去った今の時代において、唯一残されている邪悪な力。それが勇者の剣であるなら……彼は、その最後の闇を打ち破るため、神より遣わされたのかも知れないな）

——そして、ヴィクトリアの動きを警戒しつつ様子を見るといふ方向で、この件の話は纏まり。この場は解散となるのだった。

ロークは女性団員の兵舎へ。バルスレイは王宮近くの来賓館へ。ダタツツは予備団員用の詰所である小屋へ。それぞれの帰る場所へと、立ち去っていく。

そうして王室に残された国王とダイアン姫は、共に窓から窺える夜空を見上げていた。空に広がる星々は、鮮やかに闇の景色を彩っている。

「……お父様。帝国勇者を憎む、わたくしの感情は——間違っているのでしょうか」

「そんなことはない。彼の思いがどうであれ、彼の振るう剣が王国の民を苦しめたことは事実。彼もそれをわかっていたから、お前の責を受け入れたのだ。罪を償う、騎士としての道を」

「……」

父の言葉を聞きながら、幼い姫騎士は夜空を見上げ、黒髪の騎士を想う。

彼は自分の純粋な願いのために、罪に苦しみながら戦い続けてきた。だが、そうしたところで、もう彼には帰れる故郷などなく——罪を清算するために死ぬことすら許されなかった。

だからせめて、今生きている人々の笑顔だけは守ろうとしたが、帝国勇者という名を背負っているのは、恐怖を振り撒くことしかできない。

それでも彼は、償うことを諦めなかった。ゆえにかけがえのない家族から貰った名前さえ捨て去り、ダタツツというこの世界の住人となったのだ。

——彼が犯してきた罪は、確かに許し難い。だが、彼に良心がなければ、どうなっていたらう。

まず間違いなく自分はババルオの慰み者となり、この国も彼の掌上で弄ばれていた。この国に平和が戻ることもなかったらう。

そもそも彼が現れなければ、王国が帝国に屈することもなかったのだらうが——その代わり戦争が長期化し、今以上に豊かな大地が荒れ果ていたかも知れない。

何より。自分達のために、凜々しい面持ちでアンジャルノンと戦う彼の勇姿に、どうしようもなく心を奪われている自分がいたのだ。

考えれば考えるほど。ダイアン姫は、ダタツツへどう接するべきか、わからなくなっていた。

憎めばいいのか。愛すればいいのか。

複雑な想いのまま、碧い瞳は星々を見つめている。

一方——国王はこの件の行く末に、一抹の不安を感じていた。

それは、戦力の要となるダタツツの人柄に起因するものであった。

(王国の民を殺め続けてきたことを悔いる彼が——本当に、迷うことなくアイラックスの娘に剣を向けられるのだろうか)

彼が亡き父の面影を見たという、アイラックス。その娘を相手に、罪の意識を抱えた彼が全力で戦えるとは思えない。

——果たして、勇者の剣の力に囚われているであろうヴィクトリアを、今の彼が止められるのか。

(……それでも。今はただ、彼の力を信じるしかない、か。すでにこの戦いは、人間の枠などとうに超えた次元なのだから)

今はまだ、答えは出せない。

人間同士の決闘とは違う、超人達の戦いなのだ。自分の見解など及ばない部分があるのかも知れない。

その未知の領域が、希望となるか。絶望となるか。先の見えない王国の未来を憂い、国王は愛娘の横顔を見遣る。

(せめて——この娘の笑顔が守られる、結末であつてくれ)

そして。恋を患い、迷い続けるダイアン姫の姿を認め——国王は人知れず、娘の幸せを願うのだった。

第35話 笑顔にしたい

それから、数日が過ぎた。

国王からの指令により、ヴィクトリアが呪われている可能性があるとの報せが騎士団に行き渡り、発見・接触した場合は速やかに報告する体制が築かれた。

併せて箝口令も敷かれ、彼女のことで国民が不安にならないようにされている。

だが、城下町を見回る騎士団員の人数が大きく膨れ上がり、その中の誰もが緊迫した面持ちで巡回していることから、民間人の間でも噂が飛び交うようになっていた。

また帝国が攻めてくるのではないか。街の中に凶悪な猛獣が潜んでいるのではないか。箝口令により情報を絶たれたことで逆に、根も葉もない噂に惑わされる者も現れるようになったのである。

「なあ、もしかしたらババルオをやっつけたから、帝国の貴族が仕返しに来るんじゃないか……？」

「お、おい冗談だろ」

「もし本当なら、ここから逃げた方がいいんじゃないか……」

「だ、大丈夫だって。もうすぐヴィクトリア様だって帰ってくるんだ、何があったって平

「気さ」

白マントに身を包む騎士団員のそばで、道行く人々は口々に憶測を語る。

「——騎士達の目に見える警戒心のせいで、色々な噂が流れている……が、情報そのものは漏れていないようだ」

その言葉の端々まで耳を傾け、黒髪をフードに隠した騎士は箝口令が機能していることを確かめていた。

王国騎士団の人望が失われつつある今、民衆の希望はダイアン姫とヴィクトリアしかない。しかもダイアン姫の方は既に人々の目前で、帝国の手の者であるアンジャルノンに大敗を喫している。

その上、予備団員とはいえ王国騎士の一人となった帝国勇者に対する民衆の不信感、未だに拭われていない。

それに加えて、最後の望みであるヴィクトリアまでもが、呪いによって危険な存在となった——などということが知れては、城下町そのものが恐慌状態に陥りかねない。

今、国民に真実を知られるわけにはいかないのだ。

「——全ては、俺の浅ましさが招いたことだ。たとえ何があろうと……必ず、この国を守り抜いてみせる」

その未来を回避するべく。黒髪の騎士は日常を送る城下町の人々を見つめ、拳を握り

締めた。

(ダイアン姫やローク君は、俺に対してどう接するか悩んでいるようだった。……だが。ヴィクトリアが傷つけられたなら、もう俺を憎むべきか迷うことはなくなるだろう)

罵声も憎悪も怨恨も、全てこの身で受け止める。騎士は人知れず、自己犠牲の道に身を落とそうとしていた。

(……そうでもしなければ。勇者の剣を手にした相手に勝つことなどできない。万に一つでも俺が負けるようなことになれば、この国の人々にも甚大な被害が及ぶかも知れないんだ。この国の騎士となった以上、それだけは許すわけにはいかない)

数日前。城の牢を訪れた騎士は、自身が捕らえた盗賊達と面会していた。ヴィクトリアと接触して、生き残った者達と。

『すげえイイ女だったから、ふんづかまえてモノにしてやろうとしたらよ……剣を握った途端、化物みてえに襲ってきやがったんだ』

『あいつに斬られたと思つたら……体が震えて動かなくなつて、どんどん頭が回らなくなつて……とにかく怖いって感情だけが、ぐるぐるしてよ……』

『気がついたら、わけもわからねえまま暴れ回つてたんだ。今の城下町に手を出したら痛い目を見るって、わかりきつてたのに』

彼らは身を震わせて、ありのままに経緯を白状していた。意地を張る余裕もないほ

ど、精神が疲弊していたのだ。

騎士が睨んだ通り、彼らは勇者の剣に斬られて発狂してからも、その時の自分達の行動を鮮明に記憶していた。かつて帝国勇者により引導を渡された、王国騎士達のように。

盗賊達は偶然見かけたヴィクトリアの美貌に目をつけ、犯そうと近寄ったところを勇者の剣で斬られ、理性を失った狂人に成り果てた。

全ては、騎士の推察通りだったのである。

しかも盗賊達の話によると、ヴィクトリアに会ったのは城下町近くの山中。つまり彼女は、もうそこまで近づいているということなのだ。

彼女が斬らんとしているのは、父の仇である自分一人なのか。それとも、自分を匿う王国の人々も含んでいるのか。

それがわからない以上、全てを守るつもりでことに当たらなければならない。勇者の剣の呪いに掛かれば、恨みのない人間ですら容易に殺せてしまえるのだから。

虫も殺せない少年だった帝国勇者でさえ、初陣で躊躇なく敵兵を切り伏せてしまったように。

増して、彼女には父の仇という憎い相手がすでにいる。その点に付け込まれ、その憎しみを増大させられたら——もう、激情のままに誰を殺しても不思議ではない。

彼女が騎士として守ろうとしている、罪なき人々も。仕えるべき主君である、国王やダイアン姫でさえも。

（狙いが俺一人なら、俺がこの国を出てしまえば済む話だ。しかし、もしそれ以外の……王国の人々までもが斬られるようなことがあれば、彼らは為す術なく彼女の手に掛かってしまう）

国王もそれを最も恐れていたから、この騎士に未来を託したのだ。一振りの剣に、この国を滅ぼさせないために。

（それだけは、絶対に許されないんだ。……そのために、俺はここにいるんだから）

黒髪の騎士——ダタツツは、その想いを胸に踵を返し、とある場所へ向かう。

木材を運ぶ男達は何人も行き交う、その場所には——豪快に槌を振るう壮年の男性と、男達に手料理を振る舞う快活な少女の姿があつた。

「ようし、次の丸太持つてこおい！」

「おいおいルーケンさん、ちよつとは休んだらどうなんだい」

「そうだけ、俺達本職の大工より働いてんじやねーのか」

「なあに、これくらい手伝いのうちにも入らねえよ。なあハンナ！」

「うんっ！ ほらみんな、これ食べてファイトファイト！」

「おおっ、今度は骨付き肉の塩焼きか！ ハンナちゃんの味付けはやっぱり格別だぜ！」

「えへへ、店が直つたらお腹いっぱいになるまで食べさせるからね！」

「そりやあ楽しみだ！」

不安など微塵も感じさせない、賑やかな建築現場。かつて城下町でも評判の料亭があつたその場所では、活気に溢れた人々が揚々と再建に励んでいた。

作業に取り組む大工の中には、料亭の常連客だつた男達の姿も窺える。そんな彼らを纏める壮年——ルーケンも。献身的に彼を支える少女——ハンナも。度重なる逆境にめげることなく、懸命にこの時代を生きていた。

(……そうだ。あの笑顔を守るために、俺は……)

そんな彼らの健気な姿を、ダタツツは遠巻きに見守つていた。彼らに差し入れを持ち込む町民が続々と現れていることから、その人望の厚さが窺い知れる。

「……おい、騎士団の連中がまたこっち見てるぜ」

その様子を見届けたダタツツが、立ち去ろうとした瞬間。翻された白マントが彼らの視界に入り、大工達の一人が声を上げた。

彼の声に応じるように、この場にいる人間の視線がダタツツに集中していく。その瞳は先程までの明るさが嘘のように、冷たい。

「けつ、さも自分達が守つてやつてる、みたいなお高く止まったカツコシやがつてよ。お前らが姫様より働いたことが一度でもあるのかつての」

「ローク君も不憫だぜ、あんな奴らや帝国勇者と一緒に仕事しなくちゃならないなんてよ」

「俺だったら絶対にごめんだね。あの子の頑張りには頭が下がるよ」

「帝国將軍のバルスレイ様だって、この国のために尽力して下さってるのにさ」

一度愚痴が始まってしまえば、もう止まることはない。彼らは口々に騎士団への不満を漏らし、フードで顔を隠したダタツツに冷酷な視線を注ぐ。

「……」

その責めに晒されながら、黒髪の騎士は甘んじてそれを受け止めていた。さも、それが当然であるかの如く。

「……」

「あんな奴らを見るな、ハンナ。誇りを無くした騎士ほど、見苦しい生き物はいねえ。ドルが生きていた頃は、気高く、強い騎士ばかりだったのよ……」

そんな彼を見つめるハンナを、ルーケンはどこかやさぐれた様子で嗜める。その目は遠い日を懐かしみ、今を嘆くような色を滲ませていた。

「……っ！」

「お、おいハンナ！」

だが。少女はそれでも、フードの騎士から視線を外さなかった。そればかりか大工達

に渡していた骨付き肉を手に、迷うことなく騎士に駆け寄ったのである。

ルーケンの制止を耳にしても、その足が止まる気配はない。

やがて騎士の眼前に辿り着いた彼女は——满面の笑みで、骨付き肉を差し出すのだった。

「騎士さん、いつも見回りお疲れ様。大変だよ、一生懸命なのに周りからは文句ばかりで」

「……」

「それでも、みんなのために頑張ってくれるなんて、すつごくカッコイイよ。私、ホント尊敬してるんだ」

相手があのダタツツであると、知ってか知らずか。

天真爛漫な笑顔を浮かべて、ハンナは騎士を褒め称えた。白いフードに黒髪を隠した、帝国勇者に向けて。

「……よくわからないけど。今、いろいろ大変な時期なんだよね。町の人達、みんな噂してるよ。大切なお仕事のことだから、詳しいことは話せないだろうし……私もなんて言つて応援したらいいか、わかんないけど」

「……」

「——私達の笑顔を守るために、頑張ってくれてありがとう。それだけは、言つてもいい

よね？」

フードの下から覗き込むように、上目遣いで騎士を見遣る少女は、困ったような笑顔で微笑みかけている。

微かに覗いている、黒髪を見つめて。

「騎士さんが、みんなを笑顔にしてくれるように——私も、騎士さんを笑顔にしたいから」

「……………」

「…………それじゃあ、私もう行くね。騎士さんも、お仕事頑張つて！」

そして、骨付き肉を胸当て付近に押し付け、半ば強引に手渡すと——太陽のような笑顔を輝かせながら、ルーケンのもとへと帰っていった。

跳ねるように軽やかな足取りで去っていく、その後ろ姿を——ダタツツは無言のまま、見送っていた。

（俺が帝国勇者だと、気づかなかつたのか……）

暖かな優しさに触れた喜び。純粹な彼女を騙すような形になってしまった罪悪感。それら全ての感情が、彼の胸中で渦巻き——フードの下で、唇を噛み締めていた。

やがて、彼の視線はハンナの背から、手渡された骨付き肉に移される。耐え難い香りが、鼻腔を擦ったのだ。

「……」

ダタツツは踵を返してこの場から立ち去りながら——本能のまま、その肉を口にす
る。

味覚を通して心に染み込む、肉の味と——そこに込められた、彼女の愛情が。痩せこ
けた青年の心を、満たしていく。

「……やっぱり、美味しいな……」

憂いを帯びたその素顔を見た者はいない。悲しみも喜びも、白のフードに覆い隠され
ているのだから。

第36話 名前

——帝国に聳える、巨城の中で。

(生きていくのださった……勇者様が……)

銀髪の姫君は、帝国城の深窓から青空を見上げ、かつて求め続けた少年の姿に想いを馳せていた。

あれから六年。彼は、どのように暮らしていたのだろう。なぜ今、王国に現れたのだろう。——どのように、遅くなったのだろう。

想像するだけで身体が熱くなり、腹部が熱を帯びてくる。皇女フィオナの胸中はすでに、彼への想いに満たされていた。

(会いたい……なんとしても……けれど)

しかし、ただ浮かれているわけではない。その表情には、憂いもあつた。

その原因は、彼が帝国に帰らず、王国に身を置いている——という点にある。

優しい彼のことで、敗戦を迎えて疲弊している王国を狙う賊から、人々を守るために戦っていたのだらう。……だが、それにしても六年は長過ぎる。

このまま帝国に帰らず、王国に腰を据えるつもりなのか。それが、彼の望みなのか。

(私は……あなたの思うままに生きていてほしい)

彼を想えば想うほどに、フィオナは自分から彼が離れていくように感じていた。あくまで彼自身の想いを尊重したいフィオナにとって、今の状況は限りなく苦痛なのだ。

(でも……本当は。私を、選んでほしかった……)

故郷にも帝国にも帰らず、彼はどこに向かうのだろう。愛する勇者の行く末を憂い、彼女の瞳は空を映す。

——そうすることで、どこかで彼と繋がれるような、気がしていたから。

(……彼のことだ、罪を償うために王国に身を置いているのだろうか……生きていると判明した以上、放っておくわけにはいかぬ。早々に、迎えねばな)

そんな娘の横顔を見つめ、強大な帝国の頂点に立つ皇帝は、眉を顰めて勇者の像を見下ろす。終戦から六年を経た今も、その巨大な像は帝国の象徴として、人々の前に残されていた。

(タツマサよ……今度こそ、そなたを独りにはせぬぞ)

勇者が生きていた、という報告は今のところ内密にされている。あの場にいた貴族や皇族、衛兵達を除き、真相を知る者はいない。

姿を消したヴィクトリアのことも、今は「無事に王国へ出発した」ということにしていく。無闇に事を荒立てて、民衆を混乱させないための配慮であった。

だが、差し向けた追跡隊の奮闘も虚しく、彼女の行方は未だに掴めない。しかも、王国では不自然な賊の襲撃事件が発生したという。

もしヴィクトリアがそこまで辿り着いているとすれば——彼女と勇者がぶつかる可能性も出てくる。勇者の剣の実態を知らない皇帝も、彼女が纏う邪気に不穏な予感を覚えていた。

（頼む、無事であつてくれ……！）

彼をこの世界へ召喚した者として。娘の幸せを願う父として。皇帝はあの日見送った少年の背を想い、天へ願うのだった。

一方、その懸念の向かう先である王国騎士のダタツツは。

「……なあ、帝国『勇者』」

「ん？ 何かなロークく——あつっ！」

自身が駐在している小屋に、男勝りの少女騎士を招き入れていた。彼女に手製のコーヒーを振る舞うために。

だが、生来の不器用さが災いしてか準備は難航している。かつて帝国勇者と恐れられた男は、剣では敵わぬ敵に苦戦を強いられていた。

そんな彼の姿にため息をつきながらも、少女騎士は出来上がりを待ち、見守り続けていた。こうしていれば、普通の青年なのに——と、もどかしさを覚えながら。

(こいつがもし、帝国勇者なんかじゃなかったら……多分、オレは……)

ババルオから自分達を守るために戦ってくれた彼。穏やかで優しく、それでいて強い。もし自分に兄がいたら、こんな風だったのだろうか。

帝国勇者という過去がなければ、きっと……自分はもつと素直に懐いていただろう。好きになっていただろう。

——そう。父の仇でさえなければ。

「うあつちやちやちや！ ……つと、ごめんごめん。何かな？」

「……なんで帝国勇者は、ダタツツって名前にしたんだ？ 偽名にしたって、もつといい名前があつたんじゃないのか？ タツマサ・ダテだからダタツツって安直過ぎるって思うんだけど」

ロークは思う。この男はなぜ、「ダタツツ」と名乗ったのだろう。自分達に償うためだけに、伊達竜正という親から貰った名を捨ててまで——と。

「ふふ、確かにな。けど、安直でいいんだ。この名前なら……忘れずに済むから」
「忘れる……？」

「——たとえ捨てた名前だとしても、伊達竜正は母がくれた、大切な名前だ。この先、何十年経つても……地球でもこの世界でも、その名前が忘れられたとしても。ジブンだけは、覚えていたい。だから、ダタツツなんだ」

「……大切な、名前か……」

捨て去つても自分だけは覚えていたい、大切な名前。それを聞いた少女騎士は、天井を見上げて過去を振り返る。

今は亡き父に教えられた、自分の名前に込められた願いを。

「……オレの名前はさ。昔、王国を魔物から守るために戦つた騎士から取つたらいいんだ」

「そうなのか？」

「大して有名つてわけでもないし、歴史書の隅つこにちよつと載つてるくらいだけさ。その生き様に感動したからつて、父上が付けたんだ」

ロークの脳裏に映るのは、幼い頃の自分にその歴史を読み聞かせる父の姿。もう会えないその父の言葉の一つ一つが、今も彼女の心に住み着いている。

「——その当時、王国は魔物と戦いながら、敵国の侵攻にも抵抗していたんだ。魔物との戦いに乗じて略奪を働くなんて、その頃は当たり前だったから……自国民以外は信用しないのが鉄則だった」

「……」

「けどある時、敵対していた国の兵隊が駆けつけてきた。魔物に追い詰められた自分達を救つてほしいつて。王国の誰もが、相手にしちやいけない、これも罠に決まつてる、つ

て信じようとしなかったんだけど……ローク將軍だけは、違つたんだ」

その心が望むまま、言葉を紡いでいくローク。ダタツツは、そんな彼女の語りを静かに聞き続けた。

『弱きを助け、強きを挫く。騎士とはかくあるべきである』。ローク將軍はそう言つて、敵国の救援に向かった。そのおかげで向こうは救われて、以来その敵国は王国の傘下になつたんだ。……ローク將軍は、その戦いで命を落としたんだけど」

「そうか……」

「そんなローク將軍の生き様を、父上はいつも誇らしげに語つてたんだ。騎士の鑑だつて。だからオレに、その名前を付けたらしいんだ。……憎しみに囚われない、真の騎士になれるように、つて」

「なるほどね。そして今まさに、立派な騎士になつた——つてことか」

彼女の名前に込められた、父の想い。その一端を知り、ダタツツはしみじみとした面持ちで深く頷いた。だが、自分を肯定するダタツツに対し、ロークは苦々しい表情で首を振る。

「……なつてねえよ。全然なつてねえ」

「ローク君……」

そんな彼女の様子に、ダタツツは眉を顰める。明らかに、自分のことで思い悩んでい

るからだ。

(憎しみに囚われてるから、オレはお前を……)

ダタツツを見つめる少女騎士の瞳は——迷いの色を帯びている。父から授かった名前に背く、今の自分の在り方を、憂いているのだ。

「……もいつ、聞いてもいいか」

「……いいよ。何かな？」

それに気付いているダタツツは、彼女が呟くありのままの言葉に、静かに耳を傾けた。

「父上はさ……どんな最期だったんだ……？」

「……」

「知りたい……知りたいんだ、オレ。父上がどんな想いで、お前にぶつかっていったのか。どんな風に、戦ったのか」

少女騎士の憂いを帯びた眼差しが、ダタツツが淹れたコーヒーに向かう。その揺れる水面を見つめる彼女の呟きに、ダタツツは僅かに言葉を失った。

だが、すぐに気を取り直して過去を思い返し——在りし日の騎士団長、ルークの生き様を脳裏に浮かべた。

「……彼のことを、詳しく知ってるわけじゃない。けれど、誇り高い人だということだけは、子供だったジブンにもすぐにわかった。勇者の癖に人に剣を向けるジブンが許せな

いと、いの一番に一騎打ちを申し込んできたんだから」

「父上は……強かったか？」

「ああ、強かったさ。よほど、勇者という存在を大切に思っていたんだろう。凄まじい気迫だった」

勇者という神聖な存在でありながら、血に塗れ人類に暴威を振るう。そのような自分に向けられた敵意は、尋常ではなかった。

だからこそ自分も手など抜けなかつたし、彼を倒した後も油断できなかつた。王国騎士とは、これほどに恐ろしい敵なのかと。

「……そつ、か」

それを知った少女騎士——ロークは、僅かに頬を緩ませる。最強と謳われた帝国勇者にここまで言わせるほど、父は強い騎士だった。それが、娘として純粋に嬉しかったのだ。

「なあ、帝国勇者」

「ん？」

「オレ、父上みたいになれるかな。父上みたいに……強くなれるかな」

「……なれるさ、絶対。あの人の子供なんだから」

「……うん」

そんな彼女の胸中に触れたダタツツも、穏やかにその背中を押す。少女騎士の行く末に、いつか光が差すことを祈って。

第37話 幕開け

その夜。

王国を守る姫騎士は、老境の武将を連れ、城下町を巡回していた。王族でありながら、一介の騎士と同様に己の足で街を歩む彼女の姿は、道行く人々から注目を大いに集めている。

「姫様だ……!」

「バルスレイ様も御一緒だぞ!」

「やっぱり何かあつたんじやないのか……!? あの御二方が動いてるなんて……!」
「シツ! 聞かれるぞ!」

ダイアン姫も、バルスレイも、厳しい表情で辺りを警戒しながら、街道を進んでいる。王国の主力である彼らがこうして警戒を厳にしている——という状況は、民衆の憶測を大いに呼んでいた。

無論、当の本人達もそれに気付いている。

「……やはり、民衆も何がある、とは薄々ながら勘付いているようですね」

「それでも、まだ真実を知られるわけには参りません。ヴィクトリアの無事が確認でき

るまでは……」

神妙な面持ちでありながら、まだ眼差しに余裕を残しているバルスレイとは違い、ダイアン姫の表情には明らかな焦りがあった。

母を失い、傷心していた自分と共に支え合い、生きてきたヴィクトリア。姉代わりとも言うべきその存在が、かつてない窮地に立たされている。

その現状が、彼女の心から平静を奪っているのだ。……だが、彼女の胸中を乱す要因はそれだけではない。

「ダタツツ様も、ヴィクトリアを止められるかどうか……」

「……彼なら大丈夫、と言いたいところではありますが。勇者でありながら——彼はまだ、魔物との交戦経験がない。ヴィクトリア殿と戦うことになれば、彼が主力となるでしょうが……助力は必要かと」

「そう、ですね……」

勇者が魔王を倒し、魔物を滅ぼしてから数百年。そのような時代に召喚されたダタツツは当然、魔物との戦いなど経験していない。

そんな彼が初めて戦う魔物は——魔王さえ屠った邪気を纏う勇者の剣なのだ。常人の理解を超えた超人同士の戦いとはいえ、ダタツツが不利なのは火を見るよりも明らか。

彼自身は勝ってみせると意気込んでいるが、それも自分達を不安にさせないためのハツタリでしかない可能性もある。勝てる保証がないということは、直にその邪気に触れた上で、その力に真つ向から立ち向かうことになった彼の方が分かっているはずなのだから。

——それから約一刻。

人通りの少ない、王宮に続く道を歩み。

(ダタツツ様……)

「……姫様。案ずることはありません。ダタツツには我が帝国に伝わる投剣術があるのですから」

黒髪の騎士を想いながら、ダイアン姫は豊かな胸元に手を当てる。その横顔から彼女の胸中を悟るバルスレイは、敢えて気付かぬ振りをしていた。

そんな彼の気遣いを察してか。ダイアン姫は顔を上げると、話題を変えようと口を開く。

「——そういえば。バルスレイ様はなぜ、古代の投剣術を復活させようと考えられたのですか？ 剣士としての探究心ゆえ……でしょうか」

「……ふふ、姫様が考えられておられるような、殊勝な動機ではありません」

己の過去を問われ、老将は自虐するような笑みを浮かべる。遠い過去を見つめるその

瞳は、夜空の先に在る祖国へと向けられていた。

「公爵家の三男坊だった私は、貴族としての教養を備えた兄達とは違い、剣術にしか興味のない暴れ者でした。十四の頃に父の薦めで帝国騎士団に入るまでは、私は腫れ物扱いでしたな。——投剣術を知ったのは、丁度その頃です」

「……………」

「私は剣士としての自分を誇り、騎士団に入団しました——が、いかに凄腕の騎士といえど、弓や槍に剣で立ち向かうことなどできはしない。剣士は万能にはなりえない。その現実を、突き付けられたのです」

「それで……………投剣術を？」

「ええ。今にして思えば、それは当然のことなのですが……………若過ぎた私には、それが耐えられなかった。遠くから敵を攻めるような連中に、自分の剣が負けるなんて我慢ならぬ。——ゆえに、古文書に記されていた投剣術を独学で研究するようになったのです」

「それで……………」

あまりといえばあまりにも、子供のようない理由。そんな動機から、あの驚異的な対空剣術が現代に蘇ったのかと——ダイアン姫は、しばし呆気にとられていた。

「……………かつてのダタツツに稽古を付けていた頃は、まるで若き日の自分を見ているようでした。ひたすら無鉄砲に、自身を取り巻く不条理を吹き飛ばそうとする」

「……」

次いで、バルスレイに対して、微かに嫉妬もしている。自分が知らない彼の姿を、多く知っている老将に対して。

「あの熱意が健在ならば、勇者の剣に屈することもありますまい。信じましょう、彼を」

「……はい」

それに気付かぬ振りを通すバルスレイは、愛弟子の勝利を願ひ、彼がいるであろう王宮を見上げる。

そして。

眼前に、「二太刀」が迫った。

「ぬウツ！」

その一刀に絶たれようとした老将は唸りを上げ、腰から引き抜いた剣で咄嗟に受け止める。激しい金属音が周囲に響き、剣同士が火花を散らした。

月光を背に振り下ろされた、光速の一閃。それを凌いだバルスレイの眼前には——

「帝国将軍、バルスレイだな」

——憎悪。怨恨。悪意。殺意。全ての負の感情に支配され、変わり果てた姿の。

「王国騎士ヴィクトリアの名の下に——貴様を、討つ」

「そんなっ……ヴィクトリア！」

「とうとう、現れたか……！」

王国最強の騎士が、立ちはだかっていた。

女性らしさを隠す荘厳な鎧を纏い。正規団員のそれよりも、勇ましくそそり立つ一角を備えた兜を被り。

『チダ……ヨウヤク、チガスエル……』

呪われし剣を、携えて。

第38話 式之断不要の威力

月明かりに照らされた、王宮に続く道の中で。

「やはり……彼が危惧した通りになってしまったか」

「……」

帝国騎士の頂点と王国騎士の頂点が、互いに眼差しで火花を散らし、対峙していた。その一騎打ちを見守るダイアン姫は、姉であり師でもあったヴィクトリアの姿に、悲しげな表情を浮かべている。

「ヴィクトリア……わたくしの言葉がわかるなら、剣を納めて！」

「……姫様。危険ですので、お下がりにください」

だが、勇者の剣に囚われた彼女の心に、その言葉は届かない。既に悪しき力に魅入られている彼女は、冷たく突き放すような声で、主の呼びかけを拒む。

人のものとは思えぬ程の殺気を浴びるバルスレイは、その様子から勇者の剣が持つ呪いの威力を垣間見た。従うべき主君の嘆きさえ、届かなくなる程の激情。

それを引き出す、勇者の剣の呪いの強さを。

「……貴殿の手にある剣のことは、我が帝国の勇者から全て聞いている。御身が、抗えぬ

感情に支配されていることも」

「……」

「だから、問うのはこれが最後だ。——その剣を、捨てる気は無いか」

その問いかけに——ヴィクトリアは黒の長髪を靡かせ、剣で応えた。

瞬く間に放たれる、勇者の剣の一閃によって。

「——そうか」

鋭い眼差しでその閃光を見切り、バルスレイは再び剣で受け止める。

「ていこくしきとうけんじゆつ帝国式闘剣術——あすか朱鳥ツ！」

間髪容れず反撃に出るが——彼が下段から放った刺突は、空を貫いていた。

すでに彼女は間合いを取り、バルスレイの攻撃範囲から逃れていたのだ。その一瞬の判断力と、それを実行できる彼女の力量に、老将は感嘆の声を漏らす。

「……なるほどな。帝国騎士達が、教えを乞いたくなるはずだ」

「……」

天賦の才能。それを殺さぬ努力。全てが合わさり、ようやく辿り着ける境地。それがヴィクトリアという剣士なのだと、バルスレイは改めて実感する。あのアイラックスの、娘なのだということも。

さらに今の彼女には、勇者の剣により戦意を激しく煽られ、本来以上の戦闘力を発揮

している。もはや、人間の枠に収まる力ではない。

——本物の勇者にも劣らぬ、超人なのだ。

(だが、だからこそ——この前途ある騎士を野放しにはしておけぬ。それが、己の至らなさであの子を絶望に追いやった、この私にできるせめてもの贖い)

柄を握る手に、力が籠もる。その瞳に宿る闘志は、一寸の狂いもなくヴィクトリアを射抜いていた。

飛剣風の態勢に入るバルスレイの眼光は、味方であるダイアン姫まで威圧している。

(凄まじい殺気……。これが、帝国最強と謳われた武人バルスレイの……！)

その氣勢に圧倒されるダイアン姫は、息を飲んで双方を見守る。

王国騎士でありながら、敵に回ったヴィクトリア。帝国騎士でありながら、味方に付いたバルスレイ。どちらを心から応援すべきなのか、迷っているのだ。

「……来い」

一方。ヴィクトリアは、何が来るのかわかっているらしい。勇者の剣で防御の姿勢を取り、静かにバルスレイの出方を窺っていた。

もはや、奇襲など通じない。あるがままに一撃を放ち、打ち勝つ他ないのだ。

「小細工無用か……結構！」

バルスレイの眼光が鋭さを増し、手にした剣が唸りを上げる。

「ヴィクトリア。貴殿を、あの子のところへ行かせはせんぞッ！」

空を裂き、撃ち放たれた飛劍風。その一閃の風が、矢と化した剣と共に、ヴィクトリアに向かい吹き抜けていった。

——そして。

「なっ………にいい!？」

「そんな………!？」

眼前の光景に——老将と姫騎士は驚愕し、目を剥いた。歴戦の経験を以ってしても、今の彼女の行動を読むことはできなかつたのだ。

「——こんなものなのか。父を殺めた、帝国式投剣術とは」

ヴィクトリアは防御の構えを解くと——籠手で飛劍風を『掴んで』しまったのである。まるで、宙を舞う羽根をさらうかのように。

老いさらばえたとはいえ、帝国式投剣術を極めた剣士の一闪は——全く通用しなかつたのだ。

(かわされたことならある。防がれたこともある。だが、掴まれたことなど今まで一度も——ッ!?)

さらに彼女は無言のまま、返してやると言わんばかりに剣を投げ返してきた。——パルスレイの飛劍風を、上回る速さで。

「——うぐわあああッ！」

「バルスレイ様っ！」

老将と姫騎士の悲鳴は、同時だった。バルスレイの肩口に突き刺さった剣は血飛沫を上げながら、持ち主の身体を紙切れのように吹き飛ばしていく。

「まだだ。我が王国が……父上が受けた痛みは、この程度では到底贖えぬ」

すでに老将の状態は、戦闘不能に等しい。だがヴィクトリアに攻撃の手を緩める気配はない。ゆらりと歩み寄る彼女の眼は、憎悪と敵意に染まり、敵の血を求めている。

「そこままですヴィクトリア！ 剣を捨てなさい！ それは、あなたが持つべきではありません！」

その光景を見せ付けられ——見たことのないヴィクトリアの表情を目の当たりにして。ようやく姫騎士は決意を固め、彼女の前に立ちはだかった。

姉のように慕ってきた相手とはいえ、話が通じる望みは薄い。万が一に備え、左手に装備した盾を突き出していた。

「……もう一度申し上げます。お下がりにください、姫様。今、奴の息の根を止めますゆえ」

「……そんな眼をしたあなたなど、見たことはありませんし、見たくもありません。これ以上その剣を振るうおつもりならば、わたくしもこの剣を抜かざるを得ませんよ」

「この眼を見たことがない……。当然でしょう。見せないよう、今日まで抑え続けてきたのですから。此の身を焦がす、憎しみの炎を」

「……………」

そこでダイアン姫は、ダタツツの話を思い出した。

勇者の剣はあくまで、本人の中にある負の感情を強く引き出しているに過ぎず、決して意識を乗っ取って操っているわけではない——。

だからある意味では、ヴィクトリアの言葉は嘘偽りない、彼女自身の本心なのだ。

「……………それでも、わたくしは……………」

彼女の想いは、痛いほどわかる。大切な人を失った悲しみ。祖国を蹂躪されてきた苦しみ。帝国への怒り。

その全てを、彼女と二人で背負ってきたのだから。

「あなたを……………このまま進ませるわけには、行かないのです」

——だが。それをわかっていてなお、ダイアン姫は立ち塞がる。なぜそうしてしまうのか——なぜ、帝国を、ダタツツを庇おうとしているのか。

その答えが、わからないまま。

「これほどまでに姫様を誑かすとは……………やはり帝国人共、万死に値するな」

そんな主君の眼を見遣り、一瞬だけ悲しげな表情を浮かべたヴィクトリアは——再び

険しい面持ちになると、手にした刀を上段に構える。

王国式闘剣術、式之断不要の体勢だ。

「……………」

その技が誇る破壊力を知る姫騎士は、間近で見る彼女の威圧感に触れ、息を飲む。今の状態で父譲りの式之断不要を放てば、一体どれほどの――。

そんな考えが過つた瞬間、ダイアン姫の体は僅かに強張ってしまった。それを見遣るヴィクトリアは戦意が崩れたことを悟り、彼女のそばを通り過ぎていく。

——刹那。

「姫様、將軍！　ここは我々が！」

「散開！　包囲を固めろ！」

赤いマントを翻し、バルスレイ直属の精鋭騎士達が集まってくる。

「帝国騎士団!?!」

「いかん、下がれお前達！　お前達でどうにかなる相手では——うぐっ！」

街でパトロールしていた数少ない駐屯兵である彼らは、王宮内で待機している王国騎士達より早く、異変を察知して駆けつけてきたのだ。

さらに、その内の一人はすでに王宮へ向かい、状況報告のために走り出していた。

「……………私が仕掛けてから、五分も経っていない。にもかかわらず素早く状況を判断し、救

援要請も欠かさず包囲網を構築する——か。さすがに精強だな」

「そこまでだヴィクトリア殿！ 剣を捨て、投降されよ！ 我々は、無益に争うべきではない！」

「それに引き換え……我が王国騎士団の、なんと懦弱なことか。私が帰ってきたからには、徹底的に叩き直さねば——いや」

「……っ!?!」

——だが、この超人にとっては包囲網を打ち破ることなど、造作もない。彼女の手に握られた勇者の剣から迸る殺気は、帝国騎士達の氣勢さえ容易く飲み込んでいく。

「……一度皆殺しにして。新たに再編すべきなのだろう。この私が率いる新しい王国騎士団を、な」

そして、式之断不要の構えを取る彼女の気迫が、最高潮に達した瞬間。

「か、かかれ！ なんとしても取り押さえ——！」

「いかん！ 下がれ、前に出るなアツ！」

恐怖に屈しまいと気を張る余り、冷静さを欠いた帝国騎士団が一斉に飛びかかっている。上官の命令を無視してしまうほど、焦燥を露わにして。

——次の瞬間。

「式之断不要——破散弾ッ！」

ヴィクトリアの叫びと共に、勇者の剣の刀身が唸りを上げ、地面に振り下ろされた。その一撃により、石畳は粉々に破壊され——この場にいる人間全てに、破片となつて襲いかかる。

「ぐあああああッ！」

「ぎやあああああッ！」

帝国騎士団とバルスレイを、容赦無く撃ち抜いていく石の嵐。それを防ぐ手立てなどない彼らは為す術もなく、悲鳴を上げて倒れ伏していく。

「なんて力……あうっ！」

さらに、その圧倒的な破壊力の余波はダイアン姫にまで及んでいた。目の前に飛んできた流れ弾を察知した彼女は、咄嗟に盾で防いだのだが——勢いを殺しきれず、尻餅をついたのである。

彼女が立っていたのは、ヴィクトリアのほぼ真横。弾が飛んで来やすい場所ではないが、危険なことには変わりないし、本来ならば使い手であるヴィクトリア本人がそれに気づかないはずがない。

つまり彼女はダイアン姫が安全でないにもかかわらず、破散弾を放つたのだ。

（わたくしがいるにもかかわらず、躊躇なしに式之断不要を……！ しかも、拳ほどの大きさもない小石をぶつけられただけなのに、これほどの威力があるだなんて……！）

しかし、ダツツツから今の彼女の危険性を聞かされていたダイアン姫は、その事実よりも——盾を持つ手に伝わる衝撃から感じる、破散弾の威力に驚愕していた。

彼女が盾で凌いだ小石と比べて、バルスレイ達が生身のまま受けた破片は余りにも大きい。受けたダメージは……計り知れない。

事実、帝国騎士団はあつけなく壊滅しており……唯一意識を保っているバルスレイさえも、剣を杖代わりになんとか立っている状態だ。

「……随分と、やって……くれたものだ」

「さすがに、歴戦の猛将と謳われるだけのことはあるな。長い戦いの人生にも疲れただろう。今、楽にしてやる」

「まだだ……まだ私が生きている限り、勝負は……」

「——黙れ下郎がアアアアッ！」

そんな彼が、なおも戦おうとしている姿に、業を煮やしたか。怒号と共に、ヴィクトリアは彼の首を掴むと——激情のまま、彼を砲丸のように投げ飛ばしてしまった。

紙切れのように吹き飛ばされた老将は、その勢いそのまま城門を突き破り——王宮内に墜落する。その緊急事態に、王宮は騒然となっていた。

「敵襲、敵襲——ッ！」

「城門前を固めろ、門が破壊されている！」

「バルスレイ將軍がやられている!? まだ……五分も経ってないんだぞ!」

王国騎士達は狼狽しながらも、ただならぬ事態を察して城門前に集結していく。そして、城門を包む土埃の先に、視線を集中させるのだった。

「さて……残る帝国人は報告に向かった騎士と——奴だけか」

「待ちなさいヴィクトリア——うっ!」

一方、帝国騎士団を壊滅させたヴィクトリアは、淡々とした声色で小さく呟くと、次の獲物を狙って歩み出していく。自身が抹殺の対象とした、王国騎士団がいる方向へと。

ダイアン姫はそれを阻止しようと走り出すが……もう一つの小石が足を掠めていたことによりやく気づき、痛みのあまり立ち止まってしまった。

そうしている間にも、ヴィクトリアは徐々に王宮へと進んでいき——

「あ、あれは……!」

「まま、まさか、あのお方は……!」

——ついに。

「帰ってきたぞ。情弱な貴様らを生贄に、新たな騎士団を創るためにな」

勇者の剣に囚われし、聖なる血統の末裔は。混沌とした王宮の中へと、足を踏み込んでいくのだった。

第39話 運命の対決

城門に現れた王国最強の騎士。その威風堂々たる姿に、王国騎士達は戦慄する。

「このような存在に、我々は立ち向かわなくてはならないのか——と。」

「無茶だ……やっぱ無茶だよ、ヴィクトリア様と戦おうなんて！」

「バルスレイ将軍が敵わないのに、帝国騎士団だって負けたのに、俺達がどうこうできるはずないじゃないか！」

その威圧感に屈してか、戦う前から彼らは尻込みしてしまっている。その姿を一瞥するヴィクトリアは、深くため息をついた。

「……」まで性根が腐つていようとはな。父上が健在だった頃とは、まるで正反対だ。やはり、私が血を代償に創り直すしかなさそうだな」

次いで、瓦礫の上に乗った体勢から、式之断不要の構えを見せる。——この瓦礫全てを弾丸に変え、ぶつけるつもりなのか。

「いけないッ！ 騎士団よ、引きなさい！ 逃げなさいッ！」

ようやく追い付いたダイアン姫は、その光景からヴィクトリアの行動を読み、悲鳴にも似た声色で叫び出す。石畳を砕くだけでも相当な威力だったというのに、巨大な瓦礫

や木片で同じ技を發揮したら——どれほどの被害になるといふのか。

少なくとも、多くの騎士が集まっているこの状況で破散弾を使われるようなことがあれば、王国騎士団が全滅する恐れがある。……恐らくはそれこそが、彼女の狙いでもあるのだから。

「——碎け散れ、跡形もなく！」

そして、姫騎士の予感に沿うように——ヴィクトリアの剣が振り上げられた。

それを目の当たりにした誰もが、悲劇の到来を悟った——その時。

「血の代償なんか、いらナイッ！」

けたたましい少女騎士の叫びが王宮内に轟き——青い髪の少女が、騎士達を掻き分けてヴィクトリアの前に立つ。

かつてダイアン姫と共に指導したこともある、先代騎士団長の忘れ形見を前に——ヴィクトリアは初めて、剣を止めた。

「ロークか……。腐った騎士ばかりだと思っていたが、お前は違うようだな。立派な顔付きになっている」

「ヴィクトリア様！ 確かに、今の王国騎士はダメダメかも知れねえよ！ けど、だからって王国人同士が傷付け合うなんて間違ってる！ アイラックス将軍が、そんなこと望むもんかよ！」

「望むはずは、ないだろうな。そんなことはわかつている。だが、今の情弱な王国をそのままにしているのは、遠からず次の侵略に屈してしまうだろう。それを避けられるならば、誰にどれほど忌み嫌われようと、蔑まれようと私は構わん」

「そんなつー!」

「——さあ、そこをどけ。お前という芽まで摘んでしまつては、再興も何もあつたものではない。私達で力を合わせ、どのような力にも屈さぬ王国騎士団を創り上げるのだ」

ロークにとつて、ヴィクトリアは師匠であり母でもあつた。そんな彼女からこれほど買われているとなれば、両手を上げて喜んでいたに違いない。——彼女の手には、勇者の剣がなければ。

「違う……違うよ、そんなのっ……」

「そこまで拒むというなら……お前にも一度、味わわせておくべきか。真の力が、如何程のものかを」

ダイアン姫の説得にも耳を貸さなかつた、とは聞いている。もとより説得で解決できるとは期待していなかつた。それでも、かけがえのない存在であるヴィクトリアの変わり果てた姿には、シヨックを隠し切れないでいた。

——すると。

「どく必要はないさ。彼女に破散弾が当たることは、万に一つもない」

澄み渡る青年の声に、ロークはふと顔を上げる。見上げた先には、月明かりを背に浴びながら穏やかに微笑みかける、美しい黒髪の騎士がいた。

吸い込まれそうな黒い瞳に見つめられ、少女騎士の鼓動が微かに高鳴る。次いで、それを感じた彼女自身は彼に悟られまいと、慌てて視線を逸らしてしまった。

「……おせえよ、いつまでチンタラしてたんだ」

「悪かったよ。ちよつと、忘れ物を取りに戻つてね」

「忘れ物? ……あつ!？」

すると、彼女の前に愛用の短剣が差し出された。それは本来、戦いに出向く騎士が必ず携行しなければならぬ得物であるはず。

今の今まで、自分が丸腰だったことに気づかなかつたロークは、らしくない自分のミスに驚愕していた。

「剣なんか頼らなくなつて、ヴィクトリア様ならきつとわかつてくれる。心のどこかでそう信じていたから、無意識に剣を持たずに飛び出しちゃつたんだろうね」

「オ、オレは……」

「——ジブンも、叶うならそれが一番だと思つている。残念ながら、君の思うようには行かなそうだけど……安心していい。決して、君の剣をここで振るわせたりはしない」

家族のように育つてきた少女騎士の切ない願いを、容赦なく踏みこむ勇者の剣。そ

の刀身に纏われた邪気を睨み据え、黒髪 of 騎士——ダタツツは静かに、剣を抜く。

「ついに現れたな。とうとう、この日がやってきた」

「……」

「——帝国勇者。貴様さえ討てば、父とこの国の無念も晴らされよう。そして姫様やロークも、お喜びになるに違いない。……諸悪の根源を、今ここで絶たせてもらうぞ。かつて貴様が振るつた、この勇者の剣でな！」

そんな彼の姿を見据えた瞬間、ヴィクトリアは瞳に炎を滾らせ、勇者の剣を再び振り上げる。今度こそ、容赦のない破散弾を放つつもりだ。

それを察した王国騎士団は悲鳴とともに武器を投げ捨て、方々に退散していく。まるで、蜘蛛の子を散らすように。

だが、ヴィクトリアはそれに気を留める様子も見せず、ただ静かにダタツツを睨みつけていた。もはや彼女にとって、帝国勇者以外の敵など眼中にないのだろう。

「……」つだけ間違ってるよ、ヴィクトリア。ジブンを討てば、確かに無念は晴れるかも知れない。けれども、この国の人々は血など望んではいないんだ」

ダタツツは後方で倒れ伏しているバルスレイと、不安げに自分を見つめるロークの方に振り返る。そして、心配いらぬ、と励ますように微笑み——凜々しい面持ちで、ヴィクトリアの方へと向き直るのだった。

「ダタツツ様……！」

一方。とうとう始まってしまった二人の戦いを前に、ダイアン姫は息を飲む。黒髪の騎士の凛々しい姿に、思わず頬を染めながら。

「——姫様。今、目を覚まさせてご覧に入れます」

「……！」

そんな彼女の様子を一瞥し——ヴィクトリアは迷うことなく、再び式之断不要を放つた。剛力のまま垂直に振り下ろされた一閃は、大量の瓦礫を一瞬で破片に変え——ダタツツを襲わせていく。

もはや、さっきの破散弾とは次元が違う質量であった。大砲さえ容易に凌ぐ破壊力を孕んだ瓦礫が、雨のようにダタツツに迫る。

「……！」

だが、ダタツツは決して逃げない。避けようとする気配もない。ロークやバルスレイを庇うような立つ彼は、一步も引くことなくゆっくりと盾を構えた。

「む、無理だよ帝国勇者！ そんな鉄の盾で防ぎ切れるわけが——」

そして、ロークの言葉が終わる前に……一つ目の瓦礫が、ダタツツの盾に触れた。

刹那。彼の盾は瓦礫の表面を撫でるような軌道を描き——側面にたどり着いた瞬間、押しつけるような力を加えた。

すると、ダタツツを押し潰すはずだった瓦礫は川のように流れを変え、地面に激突していった。

(……!?)

(なにが……起きていますの……!?)

その光景にダイアン姫もロークも目を見張り、硬直してしまう。それが偶然による現象ではない、ということがすぐに証明されたからだ。

——同じように、彼に向かつていく瓦礫の全てが、盾で弾かれていったことによつて。(あれは、予備団員用の簡素な盾ではないはず！ 普通、あんな巨大な瓦礫を受け止めようとしたら盾の方が一瞬で壊れるはずなのに！)

(どんなカラクリで破散弾を凌いでるんだ、こいつは!?)

ヴィクトリアは足元から瓦礫がなくなるまで、幾度となく式之断不要を放ってきた。その都度、瓦礫は砲弾となつてダタツツに迫つたのだが——彼に命中した瓦礫は、一つもなかったのである。

——そう。瓦礫が一個もなくなり、ヴィクトリアが攻撃を止める瞬間まで。

ダタツツは、擦り傷一つ負つていなかったのだ。

「……全弾、パライしたのか。さすがだな」

「ジブンもまだ、討たれるわけにはいかなくてね」

破散弾を立て続けに撃ち続けていたヴィクトリアも、それを防ぎ続けていたダタツツも、涼しい表情のまま互いを見つめていた。

だが穏やかなのは彼らだけであり、城門周辺は戦いの余波で、甚大な損害を被っていた。あちこちに隠れていた王国騎士団も、揃って腰を抜かしている。

ダイアン姫とロークも——二人の余裕を残した態度に、驚愕していた。

「パライ……!? 相手の攻撃を盾で受け流す、あのパライ!? それで破散弾を全て打ち落とした、とても言うの!?!」

「こ、これが……勇者と勇者の末裔の……超人同士の、戦いなのか……!?!」

そんな彼女らの様子を尻目に、ダタツツとヴィクトリアは再び剣を手に睨み合いを始める。先ほどの凄まじい攻防など、なかったかのように。

「貴様のしたことは風の噂で聞いている。ババルオを、倒したそうだな。……何を望む? 帝国を裏切り、王国に取り入り、畏怖と憎悪を浴びてまで、貴様は何を望んでいる?」

「……贖罪」

「贖罪、か。ならば大人しく、この剣にかかるがいい。命を差し出せば、もう罪の意識に苛まれることもなからう」

「——死ぬことが許されたなら、ジブンはすでにそうしていた。苦しみから逃れるため

の死など、逃げ以外の何物でもない。だからジブンは、生きて君達に償い続けなくてはならないんだ」

そして——ダタツツの強い眼差しに射抜かれた女騎士の眼光が、鋭さをます。刹那、彼女の籠手がギリギリと柄を締めつけた。

「そうか、それはご苦労だったな。——ならばその旅、私が終わらせてやろう」

「終わらせるのは君じゃない。——ジブんだ」

その問答が、合図だったのか。ヴィクトリアが剣を振り上げ飛び掛かる瞬間、ダタツツも剣を翳して迎撃に入る。

双方の剣が交わり、激しい金属音が響き渡ると——二人は幾度となく互いの得物をぶつけ合いながら、王宮の中へと戦いの場を移していく。

ある時はヴィクトリアが攻め、ダタツツが守り。またある時は、ダタツツの攻撃をヴィクトリアが凌ぐ。

休むことなく続く、剣と剣の攻防。それを見守るダイアン姫とロークは、不安げな面持ちで彼らの行方を追う。

一抹の不安を覚えながら——それでも、ダタツツの勝利を信じて。

……一方。

王宮の最上層で、病床に伏していた国王は。

遙か下の階層で練り広げられている剣戟の音を、微かに感じ取っていた。

「……始まってしまったか」

そして、蚊が鳴くような小さな声で呟き——窓から窺える満月を見上げる。弱った身体に似合わぬ、力強い眼差しで。

——まるで、今夜が見納めであるかのように。

「……今や、頼れる者は貴殿しかおらぬ。……頼んだぞ、勇者ダタツツ」

第40話 王宮の死闘

幾度となく交わる剣は金属音を響かせ続け、その持ち主達は絶えず戦う場所を変えていく。

廊下。練兵場。庭園。あらゆる場所で剣を振るい、互いが抱える想いのために戦う。そこに他者が踏み入る余地などなく、少女騎士と姫騎士は固唾を飲んで見守るばかりだった。

刃をぶつけ合い、鏢で競り合う。それを繰り返す彼らは、やがて食堂へと戦いの場を移していった。

ヴィクトリアは無数にある椅子の中の一つを蹴り飛ばし、牽制としてダタツツにぶつける。それを盾でパライシしながら接敵する彼は、追撃の一閃を振るうが——彼女は素早く跳び上がり、テーブルに乗ってそれをかわした。

高所を取ったヴィクトリアは好機と見て剣を振り上げ、忒之断不要の体勢に入る。だが、それを読んでいたダタツツは盾を装備している左手で椅子を掴み、彼女の眉間に投げつけた。

その不意打ちを咄嗟に切り払う頃には——すでにダタツツもテーブルの上に飛び

乗っていた。

「ちっ!」

「——ッ!」

ヴィクトリアは素早く踏み込んで斬りかかるが、ダタツツは容易に盾で受け流し、反撃の一閃を振り下ろす。女騎士はそれを横に飛んで回避し、隣のテーブルに飛び移った。

すかさずダタツツも、両足に力を込める。その様子から、こちらに飛び移るつもりと睨んだヴィクトリアは、再び牽制のために椅子を投げつけた——が。

「——飛劍風!」

「ぬっ!」

待っていたのは、飛び移ると見せかけての飛劍風だった。投げ付けた椅子は真つ二つに両断され、その先から劍の切っ先が迫ってくる。

「ぬ、ぐ!」

反射的にその一閃を勇者の劍で受け止めた彼女だったが、手に力を込めるのが遅れたのか——それほど強力な攻撃ではなかったにも拘らず、勇者の劍を取り落としてしまった。

それを目撃したダタツツは間髪容れず、ヴィクトリアに覆いかぶさるように飛び掛か

る。こうして取り押さえることが狙いだっただと悟った彼女は、身を翻して狙いを外し、彼の顔を強烈に蹴り上げる。

「ぐー！」

重鎧に固められた脚での蹴り上げを喰らい、ダタツツは空中で半回転しながら転倒し、頭を床に強打する。その隙に頭を踏み潰そうとヴィクトリアは足を上げる——が、ダタツツの反応はそれよりも早かった。

両足を上げ、勢いよく振り下ろす。その動作から生まれる反動を使い、ダタツツは仰向けの姿勢から前方へ向かい、弾かれるように転がっていく。ヴィクトリアの踏みつけを間一髪でかわした彼は、そのままテーブルの下を転がっていく。その先にある自分の剣を拾い上げた。

先に武器を拾ったのは、ダタツツ。ヴィクトリアもすぐに勇者の剣を拾うだろうが、それよりもダタツツが次の攻撃に入る方が速いだろう。

勝負はついた。誰もが、そう思った矢先。

「ぬああッ！」

「……なにっ!？」

ヴィクトリアは少し離れた自分の剣を拾いに行くことが危険であると判断すると、テーブルを縦にひっくり返し——ダタツツに向けて蹴り飛ばしてきたのだ。

それに気づいたダタツツは素早く跳び上がり、迫りくるテーブルをかわす。だがジャンプに専念する余り着地を誤り、尻餅をついてしまった。

そして、その不意打ちを辛うじてかわし、彼が立ち上がる頃には——すでにヴィクトリアも、勇者の剣を拾い上げていた。

……一方。その戦いを見つめ続けていたダイアン姫とロークは、双方の戦い振りに驚嘆している。そして、埋め難いレベルの違いを肌で感じていた。

「す、すげえ……あいつ、あんなに強いヴィクトリア様が相手なのに、全然負けてねえ……！」

「……きつと、血の濃さが原因なのでしょう。ダタツツ様は異世界からやってきた——いわば、純血の勇者。ヴィクトリアは確かに先代勇者の末裔ではあるけれど、勇者の血はダタツツ様に比べれば薄い。だから勇者の剣も、本来の性能が発揮できないでいる……」

「じゃあ、あいつは死なずに……済むってことですよね！」

「……ええ。けれど……」

現状、戦いは拮抗している。純血でない勇者の末裔が勇者の剣を握っている今なら、魔物との交戦経験がないダタツツでも、この邪剣に打ち勝ち、ヴィクトリアを救い出せるかも知れない。

だが、ダイアン姫には一抹の不安があった。その原因は、ダタツツが戦いの最中に取った行動にある。

（あれほど危ない状況でありながら、ダタツツ様はヴィクトリアを丸腰で取り押さえようとしていらした。普通なら確実に殺められるような局面でも、仕掛けることはなかった。まさか、ダタツツ様は……）

その先にある、仮説。それを脳裏に描いた姫騎士は、青ざめた表情で黒髪の騎士を見守る。自分の胸を熱く、甘く焦がした、あの凛々しい横顔を。

「……なら」

ダイアン姫の思案を尻目に、ダタツツは鋭い表情のまま次の攻撃に移る。飛劍風の体勢に入った彼は、真正面から技を繰り出す——と見せかけ、水平に薙ぎ払う一閃で椅子を弾き飛ばした。

それを見切っていたヴィクトリアは難なく椅子を切り払う。……しかし、その時すでにダタツツは高い位置にまで跳び上がり、天井のシャンデリアに迫ろうとしていた。（シャンデリアを背にして私の視界をくらませた上で、高所からの飛劍風——といったところか。安い手段に出たものだ）

ヴィクトリアに動揺の色はない。すでに飛劍風を破ったことがある彼女には、そのような小細工は通じない、という自負があった。

——だが。

「帝国式——対地投剣術ツ！」
ていこくしき
たいちとうけんじゆつ

「ぬツ!？」

ダタツツの小細工は、ヴィクトリアの予想をさらに凌ぐものであった。

シャンデリアに触れる寸前、というところで上昇が止まり、あとは落ちていくだけ……と見られた瞬間。ダタツツは体を上下に半回転させ、両足でシャンデリアを蹴り付けたのだ。

彼に蹴られたシャンデリアは墜落し、テーブルに激突して破片を撒き散らす。それを目くらましに使いながら、ダタツツはヴィクトリアめがけて急降下していくのだった。

女騎士の予測を上回る速さで、黒髪の騎士は彼女に向かい接近していく。なんとかそれに対応しようと、彼女は回避の姿勢に入った。

しかし、ダタツツの真の攻撃は、ただ加速を付けて上空から襲い掛かることではない。

「——飛剣風『稲妻』アツ！」
ひけんふう
いなづま

ダタツツは空中で飛剣風を放つと——再び体を半回転させ、今度は片足の前足底で剣の柄頭を押し込んでいく。さながら飛び蹴りの姿勢で、剣に片足の先を乗せるような格好で。

そうして飛剣風の威力にダタツツの体重が加わると——剣の速度はさらに高まり、巨

大な矢となつてヴィクトリアに襲い掛かるのだつた。

「……………くッ！」

その一閃は、彼女の想定を遙かに超えている。彼女は悪い予感を覚え、回避に移ろうとするが——稲妻の如き剣の弓矢は、それよりも速く床に激突するのだつた。

衝撃の余波でテーブルや椅子は吹き飛び、周囲に撒き散らされていく。

「うわああ！」

「くうッ！」

その破片の猛襲は、ある程度離れていたダイアン姫とロークにまで及んでいた。ダイアン姫は盾で凌ぎ、ロークは懸命に頭を抱えながら地に伏せてやり過ごしている。

やがて、その余波が静かになり——土埃が徐々に晴れていくと。二人はハツとして前方に視線を移す。

鏑近くまで深く突き刺さった予備団員の剣と、その柄頭を踏みつけているダタツツの足。それが土埃の中から窺えた瞬間、ダイアン姫達は悟った。

ヴィクトリアは、あの凄まじい一閃を——かわしたのだと。

「避けたつてののかよ!?! アレを！」

「ダタツツ様、危ないッ！」

それを脳で理解した瞬間、ダイアン姫はヴィクトリアの反撃を予測し、声を上げる。

——だが、当のダタツツ本人はそれに気づいていないのか。困惑した表情で、足元を見つめていた。

(馬鹿な……。俺は確かに、彼女の手にある勇者の剣を狙った。狙いは完璧だったはずだ。なのに、なぜ……。)

飛劍風「稲妻」は城内に侵入してきた外敵を排除するために編み出された飛劍風の派生技であり、投劍術の中でダタツツが最も得意とする技でもある。屋内でしか効果を発揮できない不便さはあるものの、条件さえ揃えば無類の威力と速さを併せ持つ技だ。

それを使っているから……。外してしまった。百発百中であるはずの、稲妻を。

そのシヨックゆえか……。彼は技をかわされた危険性を理解しながら、暫しの間動けずにいた。

そして——土埃の奥から。

「ぬうあああッ！」

突如姿を現したヴィクトリアの、雄叫びが轟き。鬼神の如き形相で、その姿が飛び出てくる。

その叫びでようやく我に返ったダタツツは、反射的に深く床に刺さった自分の剣を抜こうとする——が。それよりも彼女の反撃の方が速かった。

「ぐあッ……！」

「ダタツツ様！」

「帝国勇者あ！」

脇腹に強烈な回し蹴りを喰らい。予備団員用とはいえ、鉄製の鎧を纏っているはずのダタツツの体が、紙切れのように吹き飛ばされていく。その衝撃で、手にしていた予備団員用の剣は棒切れの如くへし折られてしまった。

壁を突き破り、王宮から転落する彼が、武器庫の屋根に墜落していく。その様を目撃したダイアン姫とロークは、揃って悲鳴を上げた。

「があああああッ！」

「やめっ——！」

間髪容れず、ヴィクトリアは勇者の剣を振りかざして壁に空いた穴から飛び降り、武器庫に落ちたダタツツを追う。それを引き止めようと叫ぶダイアン姫の声など、気にも留めていない。

（なんてパワーだ……んっ!?!）

一方、ダタツツは墜落していくさなかで、ヴィクトリアの圧倒的な力に驚嘆していた。少なくとも単純な膂力だけなら、神に力を授けられた超人である勇者すら凌いでいる。

——その時だった。逆さまの体勢で武器庫に落ちていく彼の視界に、地上の惨状が映される。残骸や倒れた騎士が死屍累々と転がっている地獄絵図の中には——彼の師の

姿もあった。

(バルスレイさん……!)

全身を瓦礫に打たれ、力無く倒れ伏している師匠の姿に、ダタツツの体が熱を帯びていく。

自分に対して無理解であつても。剣を交えた先にある価値観しか持たない、無骨な男であつても。

彼は、アイラックスを殺したシヨックで錯乱する自分を、懸命に助けようとしていた。自分を独りにさせまいと、赤マフラーを託してくれた。

その想いだけは、今もダタツツの心に確かに染み付いている。だからこそ、今も彼がくれたマフラーを使い続けているのだ。

そう、そんな彼の不器用さも含めて。伊達竜正は、バルスレイを師として——父代わりとして、愛情を抱いている。

「——ヴィクトリアアツ！」

だから彼は——自分の行いを、一瞬だけ柵に上げて。ヴィクトリアへの怒りに、眉を顰めるのだった。

そして、その怒りを帯びた眼差しを浴びる彼女は勢いよく飛び降り、武器庫の屋根に空いた穴に入り込んでいく。

一寸先が見えない、闇の空間に踏み込んだ彼女は――。

「ふん！」

「くっ!？」

勇者の剣を叩き落とそうと、闇に紛れて背後から斬り掛かったダタツツの一閃を、背を向けたままあつさりを受け止めるのだった。

武器庫に保管されていた、正規団員用の剣を握るダタツツは、その手応えから防がれたことを悟る。武器庫内を照らしていた蠟燭の火を全て消し、入念に奇襲の準備をしていたというのに――その目論見は、容易に破られてしまったのだ。

そこから……ヴィクトリアの怒涛の反撃が始まる。絶叫と共に振るわれる斬撃の嵐に、ダタツツは防戦一方となり、彼の足は武器庫から王宮の入り口へ、入り口から階段へと後ずさっていく。

だが、彼女の攻撃の手が緩むことはない。激しい連撃でダタツツを追い詰める彼女は、階段を駆け上がりながら剣を振り続けていく。対するダタツツも、剣と盾で懸命に彼女の猛攻を凌ぎながら、階段を跳ぶように上がっていった。

――もう、戦いの場を選ばいとまはない。黒髪の子は勇者の末裔に追われるがまま、王宮の上層へと上がっていく。

その道中、自分に不安げな視線を送る姫騎士の姿が目に入り――彼の胸中はさらに影

を帯びていった。

やがて、永遠のように続いていた階段の道は終わりを迎え、水平な足場で二人は剣を交えた。階段という不安定な場所から解放されたヴィクトリアは、さらに攻撃の激しさを増し、ダタツツに襲い掛かる。

一方。壁を背に、懸命にそれを凌ぐダタツツは険しい表情で防御に徹していたが……もはや、限界であった。

強烈な斬り上げで盾と剣の防御体勢を崩された彼は、腹に正面蹴りを受けて吹き飛ばされてしまう。だが——今度突き破ったのは、壁ではなかった。彼が背にしていたのは、実は壁ではなく——

「やはり、来てしまったか……」

「国王、陛下……！……しまった、ここは……！……」

——王宮の最上層に位置する、国王の寝室であった。

床に就く彼の背後に飾られた、アイラックス將軍の両手剣を見遣り……その娘は一瞬だけ眼に光を取り戻すと、闇の中から助けを求めるような声を漏らす。

「父、上……」

『チダ……チガモウスグ……モウスグダ……』

その一方で。勇者の剣に宿る邪気は、狂喜に満ちた声色で、血を渴望するのだった。

第41話 十字の傷

ついに戦いの場は、国王の寝室にまで流れてしまった。変わり果てたヴィクトリアの姿に、この城の君主は沈痛な面持ちを浮かべている。

「……そうか。やはり、ヴィクトリアはダタツツ殿の言うとおり……」

「陛下。暫しお待ちを……。今、この国に取り入ろうと目論む賊を成敗しますゆえ」
「必要ない。……と言ったところで、お主は聞かぬのだろうな」

主君である国王には目もくれず、ヴィクトリアはただ憎しみだけに染め上げられた眼光で、ダタツツを射抜いている。一方、ダタツツはこの場で戦うことになってしまったことに、焦りを募らせていた。

（なんとということだ……！ まさか、国王陛下の御前にまで流れてしまうなんて！ とにかく、急いで戦場を移さないと、陛下の身が危ない！）

ここで戦うことがどれほど危険か。それがわかつているがために、黒髪の騎士は平静を欠いていた。

下手に動こうとすれば、ヴィクトリアは必ずその隙を突いてくる。それをかわしたとしても、ダイアン姫のように危害が国王に波及する恐れがある。

病床の国王に戦いの余波が及ぶようなことになれば、どういうことになるかは——想像に難くない。

最も確実に国王を守るには、敢えてこの場でヴィクトリアに隙が生まれるまで戦うしかない。その結論に至ったダタツツは、意を決して正規団員の剣を構える。

しかし、虎の子だった飛劍風「稲妻」をかわされた彼の胸中は憔悴し始めており、顎からは絶えず汗を滴らせていた。

(やはり……この技しかないか)

飛劍風「稲妻」を避けられた今、決め手となる手段は一つに絞られた。そう判断した彼は——帝国式投剣術奥義「螺劍風」の構えを取る。

ダタツツの構えの変化に気づいたヴィクトリアは、相手の面持ちから次の攻撃が正念場であることを悟り、眼の色を変える。

そして再び剣を上段に振り上げ——式之断不要の体勢になるのだった。

「……来い」

「ああ、行かせてもらう。……陛下、しばしお待ちを。すぐに、終わらせます」

「——うむ。信じよう」

あるがままを受け入れる。そう決心していたのか、国王は眼前で危険な戦いが繰り広げられているにも拘らず、あくまで冷静に二人を見守っていた。

そして。

「ハア、ハ、ハアツ……お、お父様ッ！」

「帝国勇者！ ヴィクトリア様ッ！」

ようやく二人の猛者に追い付いたダイアン姫とロークが、息を切らせてこの場に駆けつけた瞬間。

「——おおおおおッ！」

「——はああああッ！」

まるで、それが引き金であつたかのように。

螺旋風と式之断不要は、双方の想いを乗せて——激突した。

激しい衝撃音が、王宮から響き渡り——夜空へと轟いていく。その轟音は……王宮内に留まらず、城下町にまで波及していた。

「な、なんだ……今の？ 王宮の方から、何か凄い音がしたような……」

「おい、ハンナ？」

この日の復興作業を終えた大工達が、夜の城下町で飲んで騒いでいる頃。突如彼らの耳に届いた不自然な衝撃音が、どよめきとなり広がっていく。

そんな彼らと共に過ごしていたルーケンとハンナも、同様だった。何事かと戸惑うルーケンを他所に、ハンナは不安げな面持ちで王宮の最上層を見上げる。

あそこで何かが起きているという、直感だった。

(ダタツツさん……)

あの日、自分達のために戦ってくれた彼を想い。少女は胸の前に指を絡ませ、その無事を祈る。

——だが。

その祈りは、届かなかった。

「ぐ……あがッ!？」

鎧を紙切れのように切り裂く、式之断不要の余波が生む鎌鼬。その空を裂く一閃を受けたダタツツの胸は縦一文字に斬られ、鮮血を噴き出していた。

その光景にダイアン姫とロークは短い悲鳴を上げ、ヴィクトリアは口元を吊り上げる。国王は……沈痛な面持ちで、それでもダタツツを見守り続けていた。

「な、なぜ……なぜ螺剣風が負けたのです!? 速さでは式之断不要を上回っていたはず……!？」

動揺を露わにして、ダイアン姫は眼前の状況を凝視する。技の出は、明らかにダタツツの方が速かった。なのに後出しの式之断不要が、勝負を制している。

その謎の答えは——ヴィクトリアの後方に開けられた、巨大な風穴と。勇者の剣の柄についた、微かな傷にあった。

穴の中心は、僅かに彼女とダタツツを結ぶ直線から外れている。つまり——螺剣風の狙いが僅かに逸れ、掠った程度のダメージしか与えられていなかったのだ。

そう。螺剣風は、紙一重で外れていたのだ。

本来ならばあり得ないようなミス。先程の飛剣風「稲妻」の時と言い、明らかに本調子ではない。

(やはり、ダタツツ様は……！)

(くッ……どうしたんだ、俺は……！)

その原因は本人すら理解していない——が、今が途轍もなく劣勢であることだけは、誰の目にも明らかだった。

胸を押さえ、膝を突くダタツツに、ヴィクトリアは静かに迫る。血を求める勇者の剣の呪いに、導かれるがまま。

(わ、わたくしは……わたくしは……！)

その状況を前に。ダイアン姫は咄嗟に回復魔法を使おうとして——発動寸前のところで停止した。緑色の輝きが、風前の灯のように消えていく。

……まだ、葛藤があつたのだ。ダタツツに心を許すことで、自分の全てを捧げること
に。

そして。その躊躇が、さらにダタツツを追い詰めていく。

「いかん……ダタツツ殿、ここは一旦引くのだ！ 今、これ以上戦つては傷が開くばかりであるぞ！」

「やめてくれよ！ ヴイクトリア様っ！」

ヴイクトリアに対し、本来あるべき姿を知る国王とロークは口々に彼女を説得しようとして声を上げる。だが——帰ってきた反応は、冷酷な眼差しだけだった。

「……帝国勇者に、ここまで侵略されていたとはな。国王陛下も姫様もロークまでも……。もはや、取り返しはつかぬか」

「な、なんだと……!?!」

そして——仕えるべき主君に向き直る彼女は。勇者の剣を、高らかに振りかざす。

「陛下。貴方様が帝国勇者に屈してしまわれた今、私達が懸命に守ろうとしてきた王国は滅びました。これからは——私がこの剣を以て、一からこの国のあるべき姿に再建します」

「ヴイクトリア……お主……!?!」

「そのためにも。まずは、貴方様に舞台から降りて頂かなくてはなりません。……お覚悟を」

やがて。問答無用、とばかりに剣が振り下ろされる——瞬間。

「——許しませんッ！」

我に返る瞬間、弾かれるように飛び出したダイアン姫が、国王の前に立ち。手にした盾で、勇者の剣の一閃を受け止められたのだ。盾は、彼女の力で受け流せるようなものではない。衝撃に耐え切れず、彼女は再び尻餅をついてしまった。

だが、その瞳は不利な体勢になろうとも揺るぐことはなく。ただ真つ直ぐに、姉代わりだった女騎士を射抜いている。

その瞳を見つめるヴィクトリアは——微かに、人の情を残した眼差しで姫騎士を見遣るのだった。

「姫様……」

「思い出しなさいヴィクトリア！ その力で何を守るのか！ 誰を守るのか！ 何のためか！ 鍛えてきたのか！」

「わ……私、は……」

怒りと悲しみをなげき、したたかに姫騎士の一喝を受け、ヴィクトリアの瞳に滲む情の色は、徐々に濃さを増していく。……だが。

『オモイダセ。ウシナツタモノヲ。ニクムベキテキヲ！』

「う、ああがあああああああ！」

勇者の剣に囚われた彼女の心は、再び闇に引きずり込まれてしまった。激しい慟哭と

共に、ヴィクトリアは勇者の剣を勢いよく水平に振るう。まるで、邪魔なものを振り払おうとするかのように。

「姫様、あぶねえっ！」

「あつ——！」

その一閃が、ダイアン姫の首を刎ねる——直前。

「……おおあああああッ！」

痛みを押し、弾かれるように飛び出すダタツツは手にした盾を突き出し——それもろとも激しく切り裂かれていった。式之断不要の生傷を、さらに抉るように。

「あ、ああ……！」

「う、嘘だろ、帝国勇者……！」

ヴィクトリアの一閃に吹き飛ばされた彼は——ダイアン姫や国王の頭上を通り過ぎ、アイラックスの両手剣に激突する。

だが、それだけでは到底勢いは止まらず。血だるまと化した彼の体は、両手剣と共に壁を突き破り——最上層から、転落していくのだった。

式之断不要を受けた傷にさらに斬撃を受け、この高さから落ちれば。さしもの帝国勇者も……。

「帝国、勇者……。帝国勇者、帝国勇者！——ダタツツううううッ！」

そう察した瞬間。少女騎士は初めて。

黒髪の騎士の名を、呼ぶのだった。

「……ヴィク、トリアアッ！」

そして。彼の首からはらりと落ちた、赤マフラーを拾う姫騎士は。瞳に涙を滲ませながら、強い眼差しを消すことなく。

王家の剣を振りかざし、ヴィクトリアと相對するのだった。

「……なぜ、怒るのです。奴は、我々の仇でしょう」

「わかっています！ いいえ、わかってしまった。なぜその仇が斬られて、こんな涙が出るのか。なぜ、こんなにも胸が苦しいのか。わかってしまったからこそ、わたくしは……あなたをッ！」

そう。ついにダイアン姫は、認めてしまった。この瞬間、認めてしまったのだ。

自分がダタツツという男を、愛してしまったのだと。

第42話 想い

王家の剣を上段に構え、ダイアン姫はヴィクトリアを鋭く見据える。その瞳の色には、迷いを感じさせるような濁りは微塵もなく——決意に満ちるように、澄み渡っていた。

自分がこの国を離れる前とは、比べものにならないほどの胆力を身に付けた彼女の前に、ヴィクトリアは彼女の師として目を見張る。これほどまでに成長していたとは、予想だにしていなかったのだ。

「……驚きました。まさか、これほどまでに氣勢を高められるようになっていたとは」

「……」

「——ですが。私を超えるには至らない力です。姫様、今ならまだ引き返せます。剣をお納めください」

「剣を納めて……どうなるというのです、ヴィクトリア。この国の民と大地を血に染めようとする、今のあなたの行いを——見過ごせというのですか。わたくしは、そんなことをあなたに教わった覚えはありません」

邪気に魅入られたヴィクトリアの面持ちには、まだ微かに……かつての彼女の面影が

残されている。その瞳を見つめ、ダイアン姫は彼女と過ごした日々を思い返す。

『姫様、劍の稽古に参りましょう！』

『だ、だけどわたくし……劍など、握れません。女に、劍なんて……』

『私も女だてらに、劍を嗜んでおります。いざという時の護身術くらいなら、私でも教えられますし、姫様なら絶対に身に付けられます！』

『そ、そう……でしうか……』

『姫様なら出来ます！ 絶対に！……もう、これ以上。何も失ってはならないのです、姫様！』

戦後から数年が経った頃。彼女は母を失い意気消沈していた自分を、強引に劍の稽古に連れ出し、身の守り方を教えるようになった――。

終戦直後は、彼女の方が沈んでいたというのに。それでも自分を奮い立たせ、騎士の本文を全うするために立ち上がるようになったのだ。当時、劍の握り方すら知らなかった彼女に、護身術としての劍技を教えることで。

『うわああん！ 痛い、痛い……！』

『泣いてはなりません、姫様！ こんなところで躓いては、自分の身など守れはしません！ 私達が帝国の凶刃に倒れた時、御自身をお守りするのは、その手に握られた劍だけなのですよ！』

『そんな……そんなの無理、無理ですつ……』

『姫様!』

——無論、ダイアン姫は容易に今の強さに辿り着いたわけではない。稽古を始めてから三年間のうちは、痛みに泣き喚いてヴィクトリアを困らせるばかりだった。挫けてしまい、逃げ出そうとした日もある。

だが——自分に逃げられ、独りになつても懸命に修業に励む彼女の姿を見る度、ダイアン姫は必ず帰つてきた。雨に打たれても、猛暑や吹雪に晒されても、休むことなく自分のために鍛え続ける彼女の背中に、惹かれている自分がいたから。

そして、終戦から六年の年月を経た今。ダイアン姫は己が学んだ技の全てを、師にぶつけるべく——自身の氣勢を最大限に練り上げ、剣を振りかざしていた。

その構えを前にして……この場にいる全員が目を見開く。今まで何度も目撃してきた、王国式闘剣術の真髄となる技。

——式之断不要を、前にして。

「姫様が、式之断不要を!?!」

「まさか体得していたというのか!?! アイラックスとヴィクトリアにしか、極められぬと言われた式之断不要を!」

動揺するロークと父の言葉に耳を貸すことなく。ダイアン姫は、静かに——鋭く。

ヴィクトリアを睨み据えた。

「……あなたの背中を追いかけて、もう何年になるでしょう。まさか、この技をあなたにぶつけることになるなんて……考えてもみなかった」

「姫様。弑之断不要は確かに、絶大な破壊力を誇る一撃必殺です。力量差を覆す、起死回生の技にもなりましょう。ただ、それは技に見合う筋力と氣勢が伴って初めて成立するものです。あなたでは氣勢が充分でも、その細腕のために己の身体を壊すだけです」

「無論、承知の上ですわ。——わたくしにとつては、命を削る技だということくらい」

「……」

ヴィクトリアの指摘を受けてなお、ダイアン姫は構えを崩さない。弑之断不要を自分が使うことで生じるリスクなど、覚悟の上なのだ。

そう言い切ってみせた彼女の気迫に、女騎士は戦慄を覚えていた。木剣で軽く打ち合っただけで、尻餅をついて泣き喚いていた彼女を知るヴィクトリアにとって、今の彼女の姿はそれほどまでに衝撃だったのである。

「……帝国、勇者ア……」

そして——その事実を、さらにヴィクトリアの胸の内にある黒い感情を滾らせていく。

今の彼女がある理由の一つが——帝国勇者への恋だったからだ。

よりによって憎い仇に、自分が鍛え、見守ってきた姫騎士が奪われようとしている。その現状への怒りが、ヴィクトリアに纏わり付く呪いをさらに強くしているのだ。

『コワセ……ニクシミノママニ……!』

「殺すだけでは足りない。首を取り、四肢を刻み、その骸を衆目にさらしてやる! そして帝国人全てに、それを見せつけてやるのだ……!」

「そんなこと……絶対に許しません! これ以上、わたくし達は——もう、何も失つてはならないのですから!」

そんな彼女に怯る気配も見せず、かつての師の教えに従い。ダイアン姫は、眼差しでヴィクトリアを射抜いてみせる。

凛々しく、勇ましいその背中を見つめ、ロークは固唾を飲み——国王は険しい表情で見守っていた。対峙する二人の女剣士が放つ気迫は、他者の介入を決して許さない。

「……ならば簡単なこと。何も失いたくなければ——全てを奪い去ればいい」

「……本当に墜ちてしまわれたのですね。あなたの心が一欠片でも残っていたならば、決してそのような言葉は口にしなかつたはず」

「わかるものですか。姫様に、何がわかると!」

「今、あなたが苦しんでいること! わかることなどそれで充分です!」

そして、その問答を最後に——ダイアン姫の氣勢は限界まで高まり、放出する瞬間を

迎える。

「だからわたくしが——あなたを目覚めさせるッ！」

「——出来ますかな」

リスクを度外視した、捨て身の式之断不要。それを迎え撃つ、ヴィクトリアの式之断不要。

双方が、交わる時。

その余波が、人々を際限なく巻き込んでいった。

彼女達の同質の剣技が激突した瞬間——衝撃のあまり天井が吹き飛び、王室は月明かりの下に晒されてしまった。ロークは盾で懸命に国王を守りながら、勝負の行方を見極めるため、土埃の向こうを見つめる。

「姫様！ 姫さ、ま……」

そして——言葉を失うのだった。

一方。式之断不要の衝撃により吹き飛ばされ、瓦礫と化して王宮前に墜落した天井部分分は、下にいた騎士達を大混乱に陥れていた。

「うわあああ！ なんだ、何がどうなってるんだ！」

「姫様は無事なのか!? 陛下は!?!」

「と、とにかく逃げろ！ ここにいたらぺしゃんこだ！」

右往左往し、逃げ惑う王国騎士団。彼らは瓦礫の下敷きにされた一人の予備団員に気づくことなく——王宮から方々に散っていく。

その予備団員は……瓦礫の中で流血している状態のまま、目の前の光景を見つめていた。

(……今ならわかる。あの時、なぜ技が二度も外れた——いや、外したのか)

予備団員——ダタツツは、虚ろな瞳で逃げ回る騎士団員達を見つめる。その情けない背中に、自分自身を重ねるように。

(俺は……この戦いの中で。いや、それよりもずっと前から……死にたかつたんだ)
それが答えだった。

自分自身ですら気付けなかったそれこそが、彼の本心だったのだ。

自害など償いにはならない、死ぬことなど逃げに等しい。そう自分に言い聞かせていながら、心の奥底では死により楽になることを望んでいたのだ。

かつての自分と重なるヴィクトリアを前にして、罪の意識を抉り出された彼は、無意識のうちにその本心を引き出し——彼女に殺されようとしていた。

本来、勝てる相手だったというのに。

(やはり……俺が勇者をやるうなんて、おこがましかつたんだ。そんなことに気づくのに、六年もかけて……)

この土壇場で、この世から逃げようとする。そんな自分の浅ましさを改めて思い知り、ダタツツは失意のまま瞼を閉じる。

元の世界でもこの世界でもない、現世から離れた場所へと立ち去るように。

(すまない、ローク君。ハンナさん、ルーケンさん、バルスレイさん、国王陛下。フィオナ、皇帝陛下、ダイアン姫——ベルタ)

勇者どころか、人として失格。そう感じたダタツツの意識が、闇の中へと消えていく。覚めることのない、眠りへと。

——沈んでいく。

寸前のことだった。

(…………?)

永く眠ろうとしていたダタツツの耳に、何かが落下してくる音が届く。瓦礫とは全く違う、その風を切る音色が——彼の意識を僅かに現世に繋ぎとめていた。

(…………!)

それから僅かな間を置いて。ダタツツは、気づいてしまう。

これは——剣が落ちる音だと。

「…………ツ！」

そして、反射的に顔を上げる彼の眼は。

——地に墜ち、粉々に砕けた王家の剣を目撃する。

(ダイアン姫……!)

その光景が意味するもの。それを察したダタツツは、自分の体の芯から広がる、えもいわれぬ熱さに戸惑いを覚えていた。

死んで楽になりたい、何もかもどうでもいい。そんな人間であるはずの自分がなぜ——こんなにも、熱くなっているのか。

なぜ、無力な自分に怒っているのか。

(……俺、は……)

その答えは——瓦礫の中で彼が無意識に握り締めていた、剣の柄にあった。

かつて自分を救おうと懸命に戦い、命を落としたアイラックス。その魂が宿る両手剣に伝わる熱が、眠ろうとしていたダタツツの心を突き動かしていたのだ。

(そうか……それでも、俺は……)

ダタツツの胸に残された熱気。それは——誰かを救いたいという想い。

家族に会う道を絶たれ、償うことも死ぬことも許されず、責められ続けてきた人生であつても。自分が醜い人間だと思ひ知らされても。

それでも捨てきれない、ダタツツ——否、伊達竜正という人間の根幹。それがまだ生きているからこそ、彼の手にはアイラックスの剣が握られているのだ。

己の命を差し出すことさえ厭わず、子供達の未来のために逝った、あのアイラックスのように。

(まだ……寝られない。まだ冷めない熱が、残っているのなら。俺は、まだ……！)
それに気づいた彼は、もう立ち止まることはない。罪から逃れるために、己の命を軽んじることもない。

ただ想うままに。人々を守るために剣を振るう。それが、勇者ダタツツとしての在り方であるならば——。

「まだ……止まらない。止まらないんだ！」

その叫びと共に。彼を押しさえつけていた瓦礫は弾けるように四散し、周囲に飛び散っていく。だが、凄惨な戦場と化したこの王宮内には、もう騎士はほとんど残っていない。いるとすれば王宮の外か——あの最上階か。

「……」

「彼女」が待つ戦場を見上げ、ダタツツは両手剣の柄を握りしめる。もはや、その眼には寸分の迷いもない。

(泣き言も弱音も、吐けるだけ吐いた。……行こう。皆が、待っている)

激しく傷付いた今の体では、本当に全力を出したとしても勝てるかはわからない。だが、不思議と彼の胸中に不安の色はなく。

ただ、戦わねばならないという決意だけが、その胸を焦がしていた。

第43話　ロークの勇氣

「う、ああああ……！」

「姫様っ！」

「ダイアンツッ！」

両手を震わせ、うづくまる姫騎士の姿を目にして、ロークと国王は悲痛な声を漏らす。身の丈に合わない式之断不要は、ダイアン姫の体を確実に追い詰めていた。大技同士の激突が生む衝撃により、両腕をへし折られた彼女は、想像を絶する痛みを受けて目尻に涙を浮かべ——るが。

「く、う……！」

「姫様……」

それでもなお、気丈な光を瞳に灯していた。決して諦めることなく、なおも立ち上がろうとする彼女の姿を前に、惻怍冷徹な姿勢を崩さなかつたヴィクトリアは——初めて、表情に躊躇いの色を浮かべる。

「……！」

それから僅かな間を置き。今度は、驚愕の表情で己の得物を見つめた。

幾度となく式之断不要を使つても、刃こぼれ一つ出来なかつた勇者の劍に——微かな亀裂が走つていたのだ。

ダイアン姫の式之断不要は、確かに無謀な諸刃の劍だった。だが、相手に与えた威力は、紛れもなく本物だったのだ。

「……もう、いい。もういいでしょう、姫様」

彼女の成長が生んだ結果を前に、ヴィクトリアは論すような声色で降伏を呼び掛ける。彼女の心に残された微かな情が、その瞳に温もりを齎していた。

「——諦める、わけには……いかないのです。あなたが、その劍を捨てるまでは……！」
「——わかりました。そこまで仰るならば、私も一劍士として敬意を表し……この劍の錆にさせて頂きましょう」

だが、戦意を失わない彼女の姿を危険と判断したのか。再び冷酷な眼差しに戻ると、勇者の劍を彼女の頭上に振り上げた。

「姫様……お覚悟を」

「……ッ！」

僅かな迷いを心に残したまま。その刀身は弧を描くように、姫騎士の頭上に振り下ろされていく。もはや、死は逃れられない。

ダイアン姫はとつさに目を閉じ、迫る死の瞬間に覚悟を決め——

「でやあああああッ！」

「なっ……!?!」

——思わぬ助太刀に、その命を救われたのだった。確定していたはずの死を免れた上、予想だにしていなかった乱入者の登場を前に、ダイアン姫は驚愕の表情を浮かべる。跳ねるようにその場から飛び出し、手にした剣の一閃でヴィクトリアのとどめを切り払ったのは——幼き少女騎士、ロークだったのである。

「……その無鉄砲さ。私に指摘されても是正しない頑固さ。姫様と比べて、なんと進歩のない」

「——オレ、頭悪いからさ。こうする以外の方法がわからねえんだ、ヴィクトリア様」
「だろいな。……だが、剣腕だけは見違えるように高まっている。そこは評価しておいてやろう」

「……光栄だっ！」

短い問答の後、ロークは遥かに体格で優るヴィクトリアの縦一閃を打ち上げるように弾き、ばねのように跳ね上がりながら切り上げを放つ。

最小限の動きでそれを回避したヴィクトリアは、小虫を払うように裏拳を放つ——
が、ロークは空中でキックを真横に放ち、その拳を止めてみせた。

「……………」

その反応の速さに、ヴィクトリアが思わず目を剥く瞬間。ロークは裏拳を放った彼女の腕を足場に、さらに高く飛び跳ね——彼女の頭上に、全体重をかけた一閃を振り下ろすのだった。

「武之断不要もどきいいいいっ！」

巨大な一角を誇る蒼い鉄兜に、少女騎士の渾身の一撃が炸裂する。

だが、ヴィクトリアは微動だにしない。不意を突かれて微かな隙を見せはしたが、ロークの一撃を物ともせず反撃に転じる。

この王国の最上級騎士の証である、一際大きい鉄兜の一角。その得物で突き上げるように——彼女はロークの小さな体を跳ね飛ばしてしまった。

「うああああっ！」

「ロークっ！」

幼い少女にさえ容赦のない攻撃を加えるヴィクトリア。その冷徹な攻撃を目の当たりにして、ダイアン姫は腕の痛みも忘れて悲鳴を上げる。

少女騎士の体は天井があつた高さよりも大きく跳ね上がり、力無く地面へと墜落していく。

その鈍い衝撃音がこの場に響く瞬間、ダイアン姫は目をつぶり顔を背け、ヴィクトリアは終わったと言わんばかりに踵を返した。

「あ、ああ……ローク……！」

「ヴィクトリア、お主……！」

かつての教え子にも手をかけるヴィクトリアの変わり果てた姿に、国王は歯を食いしばる。王国のために立ち上がった帝国騎士団と帝国勇者が倒れ、愛娘も両腕を負傷し、唯一残った正規団員も激しく痛めつけられた。

それをやったのが、旧知のアイラックスの忘れ形見だという事実が、国王の心に重くのしかかる。

同時に、絶望も襲い掛かった。もう、希望はないのだと。

「……ま、だ、だっ……！」

——だが。この国の主が、そう感じていようとも。諦めずに立ち上がる者がいた。

この小さな体のどこに、そんな力があるのか。その姿を見る人々全てが、そう感じているほどに——ロークは猛々しい炎を瞳に宿し、両の足で立ち上がっている。

足元はふらつき、視線も定まらず。兜の内側から滴る赤い筋が、彼女のダメージの深さを物語っている。

「ローク、だめ！ 下がって、下がらなさい！」

「いかん、ローク！ 逃げるのだ、今度こそ殺されるぞ！」

もはや戦える状況にないことは、誰の目にも明らかだった。しかし、それでも彼女は

がむしやらに、ヴィクトリアに向かつていこうとしている。

悟っているからだ。たとえ勝ち目などなくとも、騎士であるからには戦わねばならない時があるのだと。

(父上が、そうだったように……！)

父を奪った帝国勇者は倒された。だが、自分もダイアン姫も国王も。仇が討たれたにも拘らず、誰一人喜びはしなかった。

それが答えだった。自分達はもう、彼を憎んでなどいない。それを認めてしまうことが怖かったから、冷たく接しようとしていたに過ぎなかった。

自分達にとつてもあの騎士はもう、「勇者」だったのだ。

(だから——ヴィクトリア様。オレは、あなたを……！)

その勇者を倒されて。守るべき姫君も、痛ましい傷を負った。こうなった今、騎士である自分のすべきことは明白。

命に代えてもヴィクトリアに打ち勝ち、勇者ダタツツが守ったこの国を救う。

そのためにこそ、彼女は立ち上がり、剣を取るのだ。

「……待、て。君一人に、戦わせはせぬ。私も、加勢するぞ……！」

「なっ……バルスレイ様!?!」

「バルスレイ殿か!?!」

さらに、思わぬ乱入者がもう一人現れる。城門前でヴィクトリアに倒されたはずのバルスレイまでもが、傷を押ししてこの最上階に乗り込んできたのである。

全身に痣を残し、文字通りの満身創痕の状況でありながら——その武人としての瞳には、寸分の恐れもない。

「……死に損ないが。よかろう。ならばまとめて、私が連れていつてやろう。帝国勇者が眠る世界に——な」

「……っ！　お願い！　お願いヴィクトリア、もうやめて！　わたくしの命を差し上げますから……わたくしならいくらでも傷つきますから、もうこれ以上誰かを……！」

そんな彼らに対し、ヴィクトリアは苛立ちを露わにして勇者の剣を振り上げる。式之断不要「破散弾」の体勢だ。

戦える人間が全員、手痛い傷を負っているこの状況で、全方位に瓦礫の砲弾を打ち出されては——もはや、逃れる術はない。

仮に逃げようものなら、間違はなく国王は余波に巻き込まれ命を落とす。誰もが、万事休すかと。覚悟を決めた。

そんな彼らを冷ややかに見遣るヴィクトリアは、引導を渡すように勇者の剣を振り下ろし……。

「飛劍風ッ！」

「ぐッ……!?!」

どこからともなく、風を切るように吹き抜けた一本の剣に、その豊かな胸を撃ち抜かれた。

彼女を撃った剣——アイラックスの両手剣は重鎧で全身を固めたヴィクトリアの身体を容易に跳ね飛ばし、反動で大きく跳ね返る。

そして、空中で激しく回転していたその巨大な剣は——黒髪の騎士の手元へと収まるのだった。

胸に十字の傷を刻まれ、服の色とも血の色ともつかない赤色に全身を染め上げ——それでも、黒い瞳はその奥に希望を灯し、ヴィクトリアを射抜いている。

さながら、魔王に立ち向かう勇者のように。

「ダタツツ……!」

「勇者、ダタツツ……」

「ダタツツ様っ……!」

その姿に、ロークと国王は感嘆の声を漏らし——ダイアン姫は感情のままに美しい顔をくしゃくしゃに歪め、すすり泣く。

そして。

「……まだ、生きていたか」

「死にはしないさ。——ジブンには、まだ……守りたい笑顔がある」
当代の勇者と先代勇者の末裔は。

再び互いに剣を取り——相対するのだった。

『チダ……チヲ、モットダ……!』

第44話 ダタツツ剣風

「よく生きていられたものだ……。確実に仕留めたと思っていたが」

「……守ってくれたのさ。この国の人が」

「なんだと……？」

再びヴィクトリアと相対するダタツツ。

十字に刻まれた胸に掌を当てる彼の言葉に、勇者の末裔は眉を吊り上げた。王国人から蛇蝎の如く忌み嫌われるはずの彼が、王国人に守られるなど、到底信じられないからだ。

だが、ダタツツは嘘は言っていない。彼の命を紙一重で現世に繋ぎ止めるために犠牲となった、予備団員の鎧と盾は——紛れもなく、王国人の寄付によるものだからだ。

「そうだ。守ってくれたんだ、ハンナさんが！」

「バカな……！」

「ジブンは独りじゃない。例え、この国の中であつても。ジブンが今も戦っている理由なんて、もうそれだけで十分だ！」

「……！」

あらゆる闇も負の感情も、突き抜けてしまいうな——真つ直ぐな瞳。その眼差しに真つ向から射抜かれ、ヴィクトリアは目を剥く。

彼の眼が、似ているからだ。かつて、自分が追い求めた父の姿に。

黒髪の前衛の手にある、今は亡き名将の両手剣。その刀身を見つめ、ヴィクトリアは父の姿を思い浮かべる。

彼女の脳裏には今、父が遺した言葉が——憎しみに囚われてはならないという教えが過っていた。

(父上、私は……)

勇者の剣に囚われた今もなお、その心の奥底に封じられた良心は、確かに息づいている。闇の中から、救いの手を求めるように。

『チガホシイダロウ！ ニクイダロウ!?』

「あ……ぐ、あああッ！」

だが、その微かな善の心も——勇者の剣は容赦なく飲み込もうとする。逆らうことを許さない呪いの圧力に、ヴィクトリアは苦悶の表情を浮かべ、片手で頭を抑え込む。

「ヴィクトリア……!? 一体、どうしたというの!?」

「ヴィクトリア様……!」

「呪いの影響なのか……!? ダタツツより遥かにダメージは浅いはずなのに、あの苦し

みようは……一体……」

「——勇者ダタツツがアイラックスの剣を持ち込んでから、随分ヴィクトリアの様子が変わっている。ヴィクトリアよ、やはりお主にはまだ、人の情が……」

その光景に、戦いの行方を見守る人々は揃って緊迫した面持ちを浮かべる。この場にいる人間全てが、ヴィクトリアの変化に気づいていた。

（許されぬでもいうのか、父上。あなたの仇を討とうとすることが、そんなにいけないことなのか！）

自分の胸中に渦巻く人間としての情と、呪いに促された憎しみの炎が、絶えず絡み合い、争い合う。

それほどまでに己の心が乱れている理由は——自らの行いへの自覚と。直に戦った帝国勇者の人の柄にあった。

正気を完全に失わせるほどに呪いが強ければ。帝国勇者が血も涙もない冷血な男だったならば。

こんなにも、苦しい気持ちになどならなかった。

ダタツツと名を変えた帝国勇者は身を挺してババルオから王国を救い——民を守るために自分が狂わせた盗賊達とも戦ったと聞く。ここに来る途中、城下町の男達に手料理を振る舞う少女が、そう話していた。

その上、自分との戦いにおいても。彼はあくまで自分を殺さないために、当たるはずの技を外して自分の剣にかかった。

勇者の力を振りかざす外道——という評判とは対極の位置にいる。勇気と慈愛に溢れた若者を呼ぶ、という勇者召喚の言い伝え通りの人物だった。

帝国勇者は——悪などではなかった。それは、直に剣を交えた今なら痛いほどにわかる。

(帝国勇者！　あなたはなぜ……どうしてッ！)

だが、だからこそ。そんな彼が帝国勇者として自分達を追い詰め、父を奪った張本人であるという事実を受け入れることができなかった。

その苦悩から逃れるために、彼女は憎しみに走り——勇者の剣に囚われてしまったのだ。

「……もう、いい。私を離さない憎しみの力が正しいか。多くの命を奪っていながら、今になって正義面するあなたが正しいか。全ては、この戦いが——次の一撃が教えてくれる」

「そうだな——ッ！」

その時。一歩踏み出そうと進み出たダタツツは、突然崩れ落ちるかのように片膝を着いてしまった。

十字に刻まれた胸からは、今も絶えず鮮血が滴り、その傷の重さは確実に彼の命を蝕んでいる。あらゆる箇所がびび割れている予備団員の鎧からも、彼が背負うダメージの深さが伺えた。

「ダタツツ様あつー！」

ダイアン姫の悲痛な叫びに応える余力もなく——満身創痍の黒髪の騎士は、荒い息で肩を震わせながら、光を失わない瞳で目の前の敵を狙う。

だが、敵はヴィクトリアではない。その心を黒く染める、勇者の剣だ。

「もういい！ もういいですから、逃げてくださいダタツツ様！ そんな身体で、ヴィクトリアを倒せるはずがありませんっ！」

「……ダイアン姫。過去がどうであれ、今のジブンは王国に仕える騎士の端くれ。ここで引き下がるわけには、行かないのです」

「なら、わたくしはあなたの任を解きます！ あなたなどクビです！ もう、わたくしを守る資格はありません！ だから早く逃げて——」

「——クビだろうと！ 資格がなからうと！ 俺は必ず君を守るッ！」

「……！」

その瞳に宿る光は、どんな言葉でも揺るぐことなく、ただ前だけを見つめている。今までとは違う、力強いその宣言にダイアン姫は言葉を失い——同時に、頬を熱く染める。

一方で——ふらつきながらも立ち上がり、両手剣を再び構えるダタツツの姿を見遣るバルスレイは、焦りを胸中に滲ませながら、この死闘の行方を見つめていた。

(ダタツツ。お前は、まさか……!)

その予測は——次のダタツツの行動で的中することになる。

「む……やはり、決め手はその技か」

ヴィクトリアは勇者の剣を構え——再び螺剣風の体勢に入るダタツツを睨み付ける。すでに一度破った技であるが、彼女の眼に慢心はない。

彼の眼差しから感じ取っていたからだ。今度の一発は、本気で当てに来ると。

「いかんツ！ ダタツツ、その剣で螺剣風を使うなツ！」

「バルスレイ様!」

刹那、ダタツツの構えを目の当たりにしたバルスレイは顔を青くして叫び出す。何事かと視線を移すダイアン姫を尻目に、老将はまくし立てるようにその行動の意味を彼に伝える。

「螺剣風は己の腕を回転させ、貫通力を高める投剣術最強の奥義！ だが、それは回転による腕の負担が大きく、使用者を確実に苦しめる諸刃の剣なのだぞ！ しかも……その威力と負荷は、放つ剣の重量に比例するのだ！」

「なんだって!」

「それは……本当なのですか……!?!」

その発言に、ダイアン姫とロークは驚愕して彼を問い詰める。バルスレイは、あるがままの真実で応えた。

「……事実です。比較的質量の軽い勇者の剣や予備団員の剣ですら、腕に相当な負担をかけていたというのに……」

「じゃ、じゃああの両手剣で同じ技を放とうものなら——」

「——腕が吹き飛んでも、不思議ではない」

バルスレイが言い放った冷酷な結末に、ロークは同時に血の気を失い——切迫した面持ちでダタツツに制止するよう呼びかける。

だが、その叫びは途中で遮られてしまった。王国が誇る姫騎士、ダイアン姫の眼で。

「なんでだよ姫様、このままじゃダタツツが!」

「——大丈夫、です。きっと大丈夫。ダタツツ様が、守ると……仰ったのですもの」

「姫様……」

その時の彼女は、彼の身を案じながらも——ひたむきに、愛する男の勝利を信じる乙女の姿そのものであった。

必ず勝ってくれる。彼女をそう信じさせる力が、ダタツツの瞳に宿っているのだ。

今まで、幾度となく回復魔法を捧げることを躊躇ってきた彼女だが——もはや、その

碧い瞳に迷いはない。すでに彼女の体からは、新緑の光が滲み出ている。

この時代に残された、癒しの力が。

「聞いての通りだ、ヴィクトリア。君の言う通り——次の一撃が最後になる」

「恐れを知らぬ——否、知った上で敢えて突き進む、その氣勢。確かに見せてもらった。ならば私も……この激情を剣に乗せ、あなたに捧ぐ」

姫騎士の熱い視線を背に、螺旋風の構えを見せるダタツツ。その姿を見据え——ヴィクトリアは勇者の剣に走る亀裂を気にする気配もなく、再び式之断不要の体勢に入った。

この一閃さえ放てれば、後のことなどどうでもいい。そう言わんばかりの、捨て身の姿勢に。

「そして死ぬ——帝国勇者アアアツ！」

それが、彼女が迷いの末に出した結論。彼の意志に応え、剣士としての己の全てをぶつける。根源にある動機が憎しみであっても、そうでなかったとしても。

全力には全力で応える。その、一剣士として絶対に破つてはならない矜持だけが、今の彼女を突き動かしたのだ。

自分の中にある正義が正しいかどうかを、この一閃に、委ねるように。

「帝国式、投剣術——奥義ツ！」

ある意味では、助けを求めているようにも見える。そんなヴィクトリアの想いを乗せた一撃が生む、鎌鼬を前に。

ダタツツは火を吐くが如く、雄叫びを上げ——大きく上体を捻る。まるで、弓を引き絞るかのように。

「……負けんなよ。負けたら許さねえぞ。……ダタツツッ！」

その瞬間。小さな少女騎士は、懸命に勇気を振り絞り、精一杯のエアールを送る。父の仇を好きになってしまふという、恐れを振り切り。

今、自分達を守るために戦っている彼に——素直な気持ち伝えるために。

「勇者ダタツツよ——最後にもう一度！ 今一度！ この国に、光を——」

「……こうなるしか、ないというのか!? ならば——生きろ、ダタツツ！ 勝つて、生き抜くののだッ！」

国王とバルスレイも、ダタツツが握る両手剣に祈りを捧げる。黒髪の騎士が、ヴィクトリアの放つ鎌鼬に打ち勝つと——信じて。

——そして。

「……螺旋剣、風ウウウウッ！」

弾けるように突き出された右腕は、螺旋を描いて唸りながら——握り締めていた両手剣を撃ち放つ。雄々しく猛る一角獣の幻影を、その刀身に纏わせて。

刹那。ダタツツの右腕は劍の動きに釣られるように、本来の関節ではあり得ない方向へと捻れていく。そして——劍が手から完全に離れた頃には、すでに彼の右腕は鮮血を撒き散らし、主人の体からネジ切れていた。

一方、放たれた両手劍は。

矢という比喻に収まらない——さながら、砲弾のような轟音を上げ、猛烈な回転と共に突き進んで行く。全てを薙ぎ払う突風を纏つて。

「ぬっ——お、オオオオオオオオオッ！」

その圧倒的な力に、ヴィクトリアは忒之断不要の一閃を以て、真つ向から立ち向かう。鎌鼬を蠟燭の火の如く吹き消し、勇者の劍に迫る両手劍を、彼女は恐れることなく受け止めた。

その圧力はヴィクトリアの足元に亀裂を走らせ、鎧を軋ませる。一瞬でも油断すれば瞬く間に飲まれてしまいそうな風を浴び、彼女は懸命に堪え——叫ぶ。

だが。

「風よ——吹けええッ！」

「ぐあ、アアアアアアアッ！」

隻腕となったダタツツの叫びとともに、ヴィクトリアの力は劍が生む旋風にねじ伏せられて行く。

いくら勇者の剣を使つてしようと、使い手は勇者の血を引いている生身の人間。迷いを捨てた純血の勇者が、真に全力を込めて放つ一撃の前では、限界がある。

異世界の勇者は、人々の平和のために戦わねばならない責任と引き換えに——超人の力を持っているのだから。

そして今まさに、伊達竜正は。その責任を、果たさんとしているのだから。

この世界にただ一つ残る、魔の物を屠ることで。

「あ、ああああああアツ！」

ゆえに。勇者の剣の刀身は、螺旋剣風の直撃によりさらに亀裂を広げられ——やがて限界を迎え、なまぐらの如くへし折られてしまう。

ヴィクトリアが風に飲まれ、遙かな夜空へと舞い上げられたのは、その直後だった。

「わああツ！」

「きやああああツ！」

鎧に全身を固めた彼女を、容易に吹き飛ばす激しい風。

その余波は周囲にも及び、ダイアン姫達は自分達も吹き飛ばされないよう、瓦礫や柱に掴まり、懸命に堪えていた。その風に抵抗できる力を持たない国王の身体は、老いたなお堅牢な肉体を保っているバルスレイが保護している。

さらに、この風は王宮の最上階を中心に——そよ風として、城下町にも及んでいた。

その町中から、王宮を見つめ続ける少女の頬を、吹き抜ける風が撫でる時。

「……剣けんの、風かぜ……」

自らが慕う騎士の技が生んだ風を思い出し——彼女は頬を濡らして、眩くらくのだった。直感したからだ。この風と引き換えに、あの人は命を削けっているのだと。

そして。

夜空の彼方から。流れ星の如く舞い降りたヴィクトリアの身体が、鎧よろいで空を切る轟音と共に墜落する瞬間。

「く、あああッ——」

片腕のまま、弾かれるように飛び出したダタツツは、彼女の落下地点に倒れ込むと——自分の身体を緩衝材として使い、ヴィクトリアの身を墜落の衝撃から守り切るのだ。た。

うつ伏せに倒れた彼の周囲に広がる亀裂が、その衝撃の威力を物語っている。

それから数秒の間を置いて——ヴィクトリアと共に風で舞い上げられていた両手剣と、折れた勇者の剣が落下してくる。

その二本が床に突き刺さる時。

この場にいる人間全てが、ついに悟るのだった。

——もう。戦いは、終わったのだと。

第45話 王国の夜明け

ダタツツの、右腕を対価に放った螺旋剣風により、勇者の剣は破壊された。

「ダタツツ！ ヴイクトリア様ッ！」

その瞬間を見届けたロークは、倒れたまま動かない二人目掛けて、弾かれるように走り出す。

——だが。

『ヤドリギガ……ヤドリギガッ！』

「ッ!？」

戦いは終わっても——全てが終わったわけではなかった。

折れた勇者の剣から伸びる黒い影が、煙のように立ち上り——行く手を阻むようにロークの前に現れたのだ。

「な、なんだあれは！」

「あれが勇者の剣の実体……！」

「いけません！ ローク、逃げてッ！」

「下がるのだ、ローク君！ その剣に近づくなッ！」

その現象に驚愕する他の者達は、言い知れぬ不気味さを覚え、ロークに引き返すよう呼び掛ける。

だが、一刻も早くダタツツのもとへ行きたい少女騎士は、その言葉に素直に従うことができなかった。

彼女は息を飲むと、腰の短剣を握り締めて、自身の目の前に現れた闇を睨みつける。

「お前か……全部、お前のせいかつ！」

『……オマエカ、オサナキムスメ。ニクイダロウ？ オマエノナカニモ、ニクシミガアルダロウ？』

「お前のことなら、ダタツツから聞いている。その手には乗らないぞー！」

『ホントウニイイノカ？ ニクイチチノカタキヲ、ウタナクテモ。イマガゼツコウノキカイダ、ツギハナイゾ』

「な……なんだと？」

だが、闇の影は悪びれる様子もなく。そればかりか諭すような声色で、黒い暗雲を広げていく。まるで、少女騎士を飲み込もうとするかのように。

本来、勇者の剣は勇者にしか扱うことはできない——。その理由は、剣そのものが同郷の者を望み続けていたことであつた。

勇者の血縁に当たらないロークに白羽の矢が立てられたことは、その拘りを捨てざる

を得ないほどに、勇者の剣が追い詰められていることを意味している。

『イママデ、ツライオモイヲシテ、イキテキタノダロウ？ コロシテヤリタイホドニクイハズ。ナノニ、オンハアルシ、ワルイヤツトモオモエナイ。ムシロ、スキトオモウジブンモイル』

「……」

『ダガスクナクトモ。オマエノチチハ、アヤツヲニクミ、コロソウトシタ。オマエノシアワセノタメ、アエテ、ソノミヲニクシミニソメタ。ダカラアヤツモ、ゼンリヨクヲダシタノダ。ニクシミコソ、ヒトヲツヨクスル。ニクシミガ、ヒトヲ、コラマモルノダ』

かつてないほど饒舌に言葉を並べ、闇はロークの小さな身体に纏わり付いていく。未成熟なその肢体を、爪先から頭頂まで舐め回すように。

一方、ロークは動揺した面持ちで、ダタツツと——勇者の剣を見つめていた。

（父上は、オレのためにダタツツを憎んでた……。なら、憎しみを持つことは、正しいこと……？ 父上が、そうしたのなら……オレも……）

そして、勇者の剣の柄に、自然と手が伸びていく。その掌に、妖刀を握るために。

父への想いを何より重んじる彼女は、闇の誘いに促されるまま。憎しみに囚われる自分を、肯定しようとしていた。

『サア、ワレヲツカエ。ソシテ、フクシユウヲハタセ……』

ダイアン姫やバルスレイが、外から叫び続けているが——もはや、誰の声も少女騎士には届かない。彼女は、彼女自身の意思で、剣を握ろうとしている。

(でも……父上は、オレに……)

だが。父への愛情は、ロークに過去の記憶を蘇らせていく。それは、自身に付けられた名の由来。

父が成せなかった、騎士の理想。そして——娘に託した願い。

「父上……ごめん」

それに、辿り着いた瞬間。勇者の剣に伸びていた手は、動きを止め——彼女の眼差しが、闇を貫き。

「はあああああッ！」

弧を描くように振るわれた短剣の一閃が、彼女に纏わり付く闇を一掃するのだった。

『……ナゼダ！ ナゼヤドリギニナラヌ！ ワレヲコバメルモノナド、イルハズガ！』

「父上は願った。ダタツツは信じた！ オレは、本当の騎士になるって！」

『ナラバ、ケンヲトレ！』

「いいや、取らない。オレが騎士になるには、強くならなきゃいけない。お前なんかに甘えない、本当の強さが必要なんだっ！」

そして、高らかに宣言する。自分は決して、憎しみになど染まらない。勇者の剣の呪

いになど、屈しないと。

そう。彼女は打ち勝ったのだ。

当代の勇者でも、勇者の末裔でも敵わなかった、「自分」という天敵に。

『オノレ！ ヤドリギサエアレバ、ヤドリギサエアレバ……！』

そんな少女騎士の、毅然とした態度を前に。闇は、人の形になると——逆上したかのように猛り狂い、彼女の喉首を両腕で吊るし上げた。

「あ、がつ……!?!」

『ワレニシタガエ。ワレヲウケイレロ！ オマエハヤドリギダ、ワレノ——!?!』

そして、もがき苦しむロークに服従を迫るが——その言葉が最後まで続くことはなかった。

『ア、アアアアア！ キエル！ ワレガキエテイク！ ワレガアアアア！』

次いで、絶叫と共にのたうちまわり、人の形が溶けるように崩れていく。そんな闇の後ろでは——

「ヴィクトリア……様あ……」

「……よく、戦ってくれた。素晴らしかったぞ、ローク」

——ヴィクトリアが父の形見で、勇者の剣を粉々に粉碎していた。その瞳は、憎しみも怒りもなく——青く澄み渡る空のように澄んでいる。

彼女の眼差しは、苦悶の声を上げて消滅していく闇を、哀れむように見つめ続けた。

「……この黒い影は、私の未熟な心が生んだ——私という人間の正体なのだろう。先に、地獄へ沈むがいい。いつの日か、私も相応の報いを受ける……」

『アア……ヤドリギ、ヤド、リ、ギ……』

黒い影が完全に消え去り、声も聞こえなくなる頃。感涙を浮かべ、自身に寄り添うロークを抱き締め、ヴィクトリアはダイアン姫達に——どこか儂い、微笑みを送る。

「姫様。陛下。遅くなりましたが……ただいま、戻りました」

「ええ……お帰りなさい、ヴィクトリア」

「よくぞ、帰ってきてくれたな……」

そんな彼女に、ダイアン姫と国王は、優しいな笑みで応え——ヴィクトリアのもとへと駆け寄っていく。

ついに、闇を打ち払った王国の人々。そんな彼らの背中を見つめ、バルスレイも肩の荷が下りたかのように胸を撫で下ろす。

「さあ……ヴィクトリア、下がっていて。ダタツツ様の治療を始めます」

「姫様。その前に御自身の両腕を……」

「大丈夫です。わたくしなど、彼に比べれば遥かに軽傷です」

「そうですか……本当に、強くなられましたね。——愛の力、ですか」

「……か、からかわないで下さい」

「からかってなどおりません。帝国勇者——否、勇者ダタツツ殿ならば……そうなってしまわれても、不思議ではない。今なら、そう思えます」

「もう……」

そして、右腕を失ったまま気を失っている、この国の勇者を見つめ。ダイアン姫は、己の中に眠る神秘の力を、惜しむことなく解き放つていく。

その輝きには、躊躇いも迷いもない。ただ一途に、愛する男を癒す女として。ダイアン姫は、神に許された魔の力を、行使する。

やがて、新緑の光がダタツツの身体を——この空間を包み込み、空にまで届く頃。王国を包んでいた夜は明け——眩い太陽が、希望を灯すように煌めいていた。

第46話 新たな時代

——それから、しばらくの月日が流れた。

「報告によれば、ヴィクトリアの身柄は無事に王国で保護されたようだが——やはり、その王国騎士団の予備団員だというダタツツなる者が……タツマサであるか?」

「はい。示された特徴とも一致しております、間違いありません」

「そうか……」

帝国城の皇室にて、言葉を交わす皇帝とバルスレイの元副官は、互いに渋い表情で纏まった書類を見つめていた。そこには、王国内で行われた調査結果が記されている。

王国騎士団に所属するダタツツという男は——かつての勇者であると。

「して、いかがされます?」

「決まっていよう。直ちに使者を送り、タツマサを連れ帰る」

「ですが、勇者様は世間的にはすでに死んだ身。勇者様もそれを踏まえて、ダタツツと名を変えられたのでしょうか。無理に帝国の勇者様とお呼びしてお連れしようとしても、御本人が納得されるかどうか……」

「わかっておる。だから、ヴィクトリアに代わる王国からの剣術指南役として『王国騎士

のダタツツ』を指名するのだ。一時的でもここに連れてくることが出来れば、いくらでも話はできる」

「……は、畏まりました。では、そのように」

「うむ。……頼んだぞ」

かつて帝国勇者と呼ばれた青年を、取り戻すため。元副官は皇帝から預かった資料を手に、皇室を後にする。

その背中を見送った後、皇帝は席を離れ——窓から、緑と花で彩られた庭園を見下ろす。正確には、その中に佇む愛娘を。

(フィオナ……)

深窓の皇女フィオナは、物憂げな表情で花々を見つめ、蒼い瞳を揺らしている。愛する勇者の行方を想い続けていることは、誰の目にも明らかだ。

(案ずるな、フィオナ。生きている限り——諦めぬ限り。会える可能性は、きっとある。余が、それを証明してみせよう)

今もなお、一途に勇者を慕う娘のため。皇帝は窓の縁を握り締め、青空を見上げる。あの少年も、この空の下で生きているのだろうと、思いを馳せて。

一方、その頃。

「ぐぎゃあッ!？」

帝国城の練兵場からは、耳をつんぎくような悲鳴が絶えず響いていた。ただの訓練で上がるような叫びではなく、その異常さに気づいた城の者達は続々と練兵場に集まっていくな。

そして彼らは——目撃する。斧と盾を装備した一人の少年が、帝国騎士達を相手に大立ち回りを演じている光景を。

「お、おい。なんだあのガキは？ 見たところ、十二歳くらいだが……」

「なんでも、帝国騎士団に入りたがってるらしいんだが……年齢を理由に断られてな。それでも食い下がってくるから、騎士団の連中が騎士団全員に勝ったら入れてやるって言い出して……」

「はあ!? 全員!? 無理に決まってるだろ、あのガキ! 本気でやるつもりでいるのか!?」

「わからねえが……もう、騎士団員の半分以上にはストレート勝ちしてるって話だぜ!」
「な、なんだって!?!」

ギャラリーの喧騒を尻目に——燃えるような赤毛の少年は、自分より遙かに体格で勝る大人の騎士を相手に、互角以上に渡り合っていた。

それも、単純な腕力で。

「ぬう……う!? バカな、こんなバカな!」

「どうしたおっさん、そんなもんか？　——なら、こっちから行くぜッ！」

騎士団きつての鉄球の使い手であり、アンジャルノンの一番弟子だった騎士。その巨漢が放つ鉄球の一撃を、少年は己の小さな身体で容易に受け止めていた。

そして——まるで軽いボールのように。その圧倒的な鉄の塊を、投げ返してしまう。

「ゴわああああ！」

その反撃を浴びた巨漢はあっさり転倒し、戦意を失ってしまう。怯えたように自分を見つめる相手の様子から、それを察した少年は手にした斧を空に掲げ、高らかに勝利を宣言した。

「これで五千七百八十勝。さあ、次はどうだ？」

「な、なんだ……お前、なんなんだ！」

「あん？　オレかい？　オレはな——」

そんな少年に、巨漢は慄くような声色で尋ねる。赤毛の少年は、その問いに対し……自信に満ちた叫びで、ギャララー全てに宣言するように答えるのだった。

「——オレの名はマクシミリアン！　帝国最強の騎士になって——勇者を、超える男だアアアッ！」

第47話 王国勇者ダタツツ

そうして、帝国騎士に新たな時代が芽吹こうとしている頃。

「やはり、行かれるのですか」

「……はい」

王国では、一人の男が新たな旅立ちの時を迎えようとしていた。

青い服に袖を通し、首に赤いマフラーを巻く若者の眼前には——煌びやかな新緑のドレスに身を包む、美しいブラウンの髪を持つ姫君の姿がある。

かつて、この国の騎士だったダタツツ。かつて、この国の姫騎士だったダイアン姫。二人は今、互いに新たな道へと歩み出そうとしていた。

二人の後ろでは、町の人々や騎士達が入り乱れ、破壊された王宮の復興に奔走している。

「あれほど王宮が破壊されたとあつては、国民に全てを隠し通すことも出来ません。ジブンが本性を露わにして暴れていたところを、駆け付けたヴィクトリア様が追い払った——としておくのが、一番の理想でしょう」

「……否定は、できませんわね。事実、民衆は皆、あなたを疑っていた……」

「ダイアン姫。短い間ではありましたが、お世話になりました。ヴィクトリア様が正気に戻られ、王国への帰還を果たした今、ジブンの力はもう必要ありません。今の王国ならば、必ず立ち上がっていける。ジブンは、そう信じています」

「……ええ。ヴィクトリアもあれから随分、騎士団の指導に精を出しているようですよ。もう、わたくしが姫騎士として剣を振るう必要もなくなってしまうましたわ」

——あの死闘の後。

治療を受けたダタツツが意識を回復させた頃には、すでに数日が経過していた。戦いで破壊された王宮は、有志の民衆や騎士団の手で復興が進められ、バルスレイがその指揮を執っている。

それと並行して、騎士団ではヴィクトリアによる激指導が始まり、団員達は来る日も来る日も彼女のシゴキに悲鳴を上げる羽目になっていた。

そんな彼女の手には今、父の形見である両手剣が託されている。

一度は持つ資格がないからとダタツツに譲ろうとしていた彼女だったが、彼自身の「その剣で人々を守ってほしい」という頼みに応じ、今では父の形見に見合う騎士になることを目指し、騎士団をシゴく傍ら、自らにも苛烈な修行を課している。

また、ヴィクトリアによる猛特訓に、唯一弱音を吐くことなく耐え続けているロークは、既に弱冠十四歳の若さで小隊長の座を掴んでいる。

ダタツツが騎士団に入ってから今日に至るまでの短期間で、飛躍的に実力を上げた彼女に注目している人間は非常に多く、一部では次期団長になるとも噂されていた。

一方、あの死闘でダタツツの右腕を治すために魔力を使い切ったダイアン姫は、自身の両腕に後遺症を残すことになり——剣を振るえない身体となってしまう。以来、彼女は病床の父に代わりこの国を治めるべく、政を学んでいる。

結果として、彼女の身体には消えない傷が残ることとなったのだが——今の彼女は、憑き物が落ちたように笑顔を多く見せるようになり、その美しさに見惚れる者達が続出するようになっていた。

——そうして、少しずつこの国が前に進んで行こうとしている、この時に。

ダタツツは、王宮破壊の罪を被る形で——この国を立ち去ろうとしているのだ。

「とにかく、国民にそう発表した以上、ジブンがここにいるわけには参りません。では、達者で——」

「——お待ちくださいい！」

踵を返し、短い挨拶だけを残して立ち去ろうとするダタツツ。その手を握り、引き留めるダイアン姫の眼差しは、かつてないほどに熱い。

それが女の顔であることを察するダタツツは、無言のまま彼女の様子を窺う。伝えた言葉がある、と言いたげな彼女が、勇気を振り絞る時を待ったために。

だが、出てきた言葉は。

「あなたの、その旅に……このダイアンも、お供しようございます。わたくしも、連れて行って頂くわけには——参りませんか？」

「ダイアン姫……」

ダタツの予想を、大きく超えるものだった。剣も盾も失い、姫騎士を引退して父の政治を支えるようになった彼女。

今、ダイアン姫が王国を抜けてしまえば、ただでさえ不安定なこの国が、さらに傾いてしまう。彼女の発言は、王女としての責任を放棄しているようなものだ。

「……それは、不可能です。あなたは、この国にはなくてはならない方。今の王国には、あなたの力が必要なのです」

「そんな……ひどい」

「あなたの、そのお気持ちだけは——有り難く、頂きます」

ゆえに、多少冷たく突き放すことになろうとも。ここで彼女の想いを受け取るわけにはいかない。

ダタツは彼女と目を合わせないよう顔を伏せ、立ち去ろうとする——が。

「ふ……ふ……ふ……ふ……」

「……？」

ダイアン姫の、笑いを堪えるような声に、思わず振り返ってしまう。その視線の先には、悪戯っぽい笑みを浮かべる年相応の少女の姿があった。

「ダタツツ様ったら、今の言葉を真に受けるなんて。本当に単純なのですから。そんなことでは、いつか悪い女に騙されてしまいますわよ?」

「……それは、あなたではありませんか。冗談が過ぎますぞ」

「——冗談では、ありませんわ。あなたをお慕い申し上げているのは、本当です」

「……!」

からかうような笑みから一転し、真剣な眼差しを見せるダイアン姫。一途なその瞳に、ダタツツも目の色を変える。

「ですが——あなたが仰る通り、わたくしは王女としてこの王国を支える柱とならねばならない。きつと、これを叶わぬ恋と呼ぶのでしょうか」

「……」

「だから——せめて。わたくしだと思って、持つていつて頂きたいものがありますの」
「……?」

すると、ダイアン姫は視線を後方へと移し——その先から、ヴィクトリアが現れた。

王国騎士団の正規団員の証である、一角獣の兜。鋼鉄の盾や鎧に、青い柄の剣。その装備一式を、全て両手に抱えて。

「ダタツツ殿。たとえ、この国を去ろうとも——王国のために戦い抜かれたあなたは間違ひなく、誉れ高い王国の騎士だ。その証明として、この装備を捧げたい」

「受け取ってくださいいますか？——帝国勇者などとは違う、王国勇者のダタツツ様」
「ヴィクトリア様、ダイアン姫……」

彼女達の真摯な言葉に、ダタツツは僅かに逡巡し——決意を固めた面持ちで、それを受け取る。次いで、その装備を素早く身に纏い、雄々しい騎士の姿となった。

「……やはり、ダタツツ殿にはよく似合う。予備団員の鎧では、様にならんからな」
「素敵ですわ……ダタツツ様」

「——ありがとうございます」

見惚れるように頬を染める二人に、ダタツツは僅かにはにかむと——気を取り直すように踵を返し、赤いマフラーを靡かせる。

今度こそ、立ち止まることはない。

「——さあ。行ってくださいませ。あなたの、思うままに」
「ダタツツ殿。——ご武運を」

彼女達の、別れの言葉に深く頷き。黒髪 of 騎士は、一步、また一步を足を進め——この国から、立ち去っていく。

声を殺して泣き崩れる姫君にも、その細い肩を優しく抱きしめる女騎士にも。振り返

ることなく。

一つでも多くの笑顔を守るために。自分にある力で、一つでも多くの希望を守るために。彼は、終わることのない旅へと、その身を投じていく。

「……ありがとう」

姫君が、涙ながらに残した最後の言葉を、耳にして。

「ローク君、良かったのか？ 見送りに行かなくて」

「別に。オレはまだまだ未熟だからな。次にダタツツに会って、あいつをビックリさせてやる日までは——修練あるのみ、さ。あんたこそ弟子の門出だったのに、ここで油売ってる場合かよ」

「……その必要はない。もうあの子は——いや、彼は。見送りが必要になるような男ではあるまい」

「はは、違いねえな」

その頃、喧騒の中で復興に尽力していたバルスレイとロークは。互いに笑い合いながら、別れを惜しむ必要などない、と言わんばかりに。今の自分達が為すべき使命に、奔走していた。

（私は、彼の父にはなり切れなかった。だが、せめて……彼の強さだけは、信じてやりたい。もはや、私にできることはそれだけだ）

息子のように想ってきた青年の行く末を憂う一方で、彼の選択を尊重した我也想う。そんな矛盾した思いを胸中に抱えるバルスレイが、一瞬だけ弟子がいるであろう方角を見遣る時。

「ローク君、バルスレイ様！ そろそろお昼にしませんか——」

遙か遠くから自分達を呼ぶ大声が轟いてくる。元気が取り柄と評判の、料亭の看板娘だ。

「よし、そいつはそこに積んでくれ！ ……ふう」

「どーしたんでえ、親父さん。ため息なんてらしくもねえ」

「……いや、なに。いなくなっちゃいけねえ奴がいなくなる——そんな気がしてよ」

彼女の隣では、彼女の父代わりが男達を率いて、復興を進めていた。——明るく、豪快なよう。その面持ちには、どこか儂い。

「む、もうそんな時間か。……行くか、ローク君」

「おう、行く行く！ 朝っぱらから荷物だの何だの運んでばっかで、腹ペコなんだ！」

その一方で。彼女の呼び声に応じるように、二人は歩み出していく。希望に溢れた、笑みを浮かべて。——また、温かい食事を持って彼らを迎える茶髪の少女も。

（きつと……理由があつたんだよね。私は信じるよ、ダタツツさん。——だからどうか、元気で……ね）

人知れず。あの日、恋い焦がれた黒髪 of 騎士に思いを馳せながら——この国の人々に
尽くす日々を送っていた。

——そして、さらに数日が過ぎた頃。

帝国の使者がこの国に訪れた頃には——既に予備団員ダタツツは、騎士団の名簿から
その存在を抹消されていた。

最終話 次の時代へと

澄み渡る青空の下。

緑に囲まれた山道の中を、赤いマフラーを靡かせる一人の騎士が歩んでいた。

風のせせらぎ。小鳥のさえずり。それだけが響く、穏やかな道。その道程を歩む彼は……腰に、一振りの剣を提げていた。

この争いとは無縁な世界には、到底そぐわれないものを。

「……………」

ふと、彼は何か近づいてくる気配を感じ——振り返る。

木が軋む音。馬の蹄が地を踏みつける音。それらが立て続けに響く、そのリズムを——

——騎士はよく知っていた。

彼が振り返った先から現れたのは——馬車の一団。土埃を巻き上げ、山道を駆け抜ける馬車の群れを前に、小鳥達は散り散りに逃げていく。

だが、騎士はその場に立ち止まったまま、一団を静かに見つめていた。

「なあ、本当に良かったのかい？ 村を出ていくなんてさあ——」

「しようがねえべ。なんでも王宮じゃあ、帝国勇者が大暴れして、たいそう死人が出たっ

て話じゃねえか。きつと今頃、帝国軍が調子に乗って攻めてきてるんだよ。これ以上、この国にいたら危ない」

「だけど、身重のベルタちゃんまで連れていくこたあなかつたんじやないかい？　これから行く公国って国は、随分遠いんだろう？」

「だから安心なんだべ。公国はまだ帝国に侵略されてねえ、中立国だ。そこまで行きやあ、ベルタもゆつくり出産に臨めるさ」

「そうだといいいけど……」

一団の中の一台では、熟年夫婦がそんな会話をしながら窓から外の景色を見つめていた。

その後方に続く二台目の中では、亜麻色の髪を持つ美しい妊婦が、我が子を宿す腹部を愛おしげに見つめている。

その向かいに座る彼女の父も、優しげな笑みで娘を見守っていた。

——そうして彼らは、追い抜いた騎士の存在に気づくことなく、遙か遠くの国を目指して、旅を続けていた。

一団が通り過ぎた後に残された土埃と風に、騎士の黒髪が撫でられる。艶やかに揺れる彼の髪が落ち着き、再びこの山道に静けさが戻る頃には——あの一団は、影も形もなく姿を消していた。

「……」

彼らが走り去った方向を、騎士は暫し見つめ続ける。その中にいた、妊婦の姿を思い浮かべて。

(……最後に、君の笑顔に会えて……良かった)

やがて。彼は朗らかな笑みを浮かべると——再び、この山道を歩み始めていく。決して終わることのない、償いの旅路を。

そして。

その背中を、戻ってきた小鳥達がさえざりと共に見送っていた。

——私達が暮らすこの星から、遙か異次元の彼方に在る世界。

その異世界に渦巻く戦乱の渦中に、帝国勇者と呼ばれた男がいた。

人智を超越する膂力。生命力。剣技。

神に全てを齎されたその男は、並み居る敵を残らず斬り伏せ、戦場をその血で赤く染め上げたという。

如何なる武人も、如何なる武器も。彼の命を奪うことは叶わなかった。

しかし、戦が終わる時。

男は風のように行方をくらまし、表舞台からその姿を消した。

一騎当千。

その伝説だけを、彼らの世界に残して。

だが。

男の旅路は、まだ終わらない。

人類の希望たる、勇者としての使命を全うするまで。つまり——死ぬまで。

人々の笑顔を守るため、奴隷のように戦い続けていく。

それでも。

彼を孤独にさせまいとする者の、一途な愛があれば。

彼はきつと、この戦いの人生を——駆け抜けていける。

人々に希望を齎す、本当の勇者として。

断章 生還のグラデイウス

第1話 フィオナの苦悩

肉を断つ剣。その柄を握る手に伝わる、骨や内臓を裂いていく感覚。忘れられぬ感觸が記憶に染み付き、少年の心さえ蝕んでいく。

そしていつも、その悪夢の最後には。自ら手にかけて「父」の貌が現れていた。

「あ、ああうあ、がつ、ああ……！」

「勇者様！……どうか、どうかお気を確かに！……ここはもう戦地ではありませんん！」

その幻覺と、魂への幻痛が絶えず少年に降りかかる。豪華なベッドの中でのたうちまわる彼には、常に一人の少女が寄り添っていた。

十歳にも満たないほどの歳でありながら、桃色のシャギーシヨートを揺らして少年を宥める彼女の姿はさながら聖女のようにであり、年齢を感じさせない凛々しさを漂わせている。

「気をしっかり持って！……お願い、負けないで！」

「リコリス様、あまり近づかれては危険ですぞ！……乱心めされている勇者様の力で、突き飛ばされでもしたら……！」

「何を言っているのです！ 我が帝国のために、こんな姿になるまで戦ってこられた方なのですよ！ ああ、こんなにも心を荒ませて……！」

少女の従者達は、そんな彼女を引き離そうとするが——少女は毅然とした表情で彼ら突き放し、なおも少年の手を懸命に掴む。

（なんとという心の乱れ……。こんな勇者様のお姿、フィオナ様をご覧になればどれほど悲しまれるか……）

この帝国に未来を齎すために、異世界から遣わされたという伝説の勇者。神の使徒とも云うべき彼が王国での遠征に心を病み、療養のために帝国へ送還されることになったのが数日前。

以来彼は、帝都の手前であるこの地方都市で安静にする日々を送っていた。建物に囲まれた帝都よりは、自然の多いこの街の方が療養には適しているという理由だ。

だが、窓から外を見れば豊かな森が広がるこの邸宅の中に居ても、勇者だった少年の心に安寧が戻る気配はない。そればかりか、彼を蝕む悪夢は日を追う毎に、色濃くその魂を暗黒に染めようとしていた。

——それはまるで、「呪い」のように。

「……異世界から無理矢理に呼びつけ、縁もゆかりも無いこの国のために戦わせ……こんな姿になっても、誰一人崇め、絶るばかりで手を差し伸べない。……ありますか、そ

のような勝手な話が」

「リ、リコリス様……」

「フィオナ様もそのことでずつと、気に病んでおられました。私も同じです。——勇者の伝説は、あくまで伝説。今ここにおられる殿方は、私達のために身命を賭して戦われた『人間』ですわ。でなければ、今のお姿に説明が付きません」

その「呪い」に周囲の誰もが慄く中。誰もが肌で感じる狂気を間近で浴びながら、それでもなお、少女は臆することなく手を握り続ける。超常の力を持っている、「人間」の手を。

「……そう、人間。人間ですわ。あなたは、誰が何と言つても人間。フィオナ様が慕われておられたのは、人間のあなたですもの」

「う、う……」

「だから今は、どうか安らかにお眠り下さい。私が、決して独りにはさせません。フィオナ様に、そう誓いましたの」

敬愛すべき皇女にして、親愛を寄せる親友でもあるフィオナ。その儂げな貌を思い浮かべる少女は、滝のような汗をかきながら、ようやく落ち着きを見せ始めた少年の手を握り締める。

白い柔肌を剣ダコだらけの手に重ね、労わるように撫でる。その傷だらけの手を見つ

める彼女の瞳が、憂いに揺れた。

「……こんな傷だらけになつて……。何が無敵の勇者。何が帝国の守護神。私達に祀られたせいで、この人は……」

そして、許しを乞うように。その手の甲に頬を摺り寄せ、頬を伝う雫をその場所へと導いた。

「神よ。彼をこの世界に遣わした、神々よ。貴方様が、自らの使徒に救いを齎さぬと仰るのであれば——我々が、その救いを齎します。ですからどうか……。どうか無力な我らに、御加護を……」

その決意に満ちた瞳を、眠りに沈む少年に注ぎ。少女は、彼の手を自分の両手で包みながら、神への祈りを捧げる。

——だが、その祈りが神へ届くことは叶わず。この数日後に回復に向かった勇者は、当初の予定に反して戦線に復帰。それから間も無く、悲運の戦死を遂げることとなる。突き付けられた結末に悲嘆した彼女は、それでも自分以上に追い込まれたフィオナを慮り、胸のうちに悲しみを封じて——遠征軍の慰安に奔走することとなる。

戦後まで生き延びた戦士達の命を次代へ紡ぐことこそが、彼の命に報いる術であると信じて。

——それが、七年前のことであつた。

◇

「どうしてですか……!?」なぜ、この程度の規模しか動かせないのです!」

「皇女殿下。その心中、さぞお苦しいものと御察します。……が、リコリス様はあくまで地方の領地の出。その家格に見合った人数としては、これでも破格なものなのです」

「そんな! リコリスは、リコリスは私の大切な……!」

帝国城の、とある上層の執務室。その絢爛な室内においてなお、際立つた輝きを放つ特徴の椅子に腰掛ける銀髪の皇女が、真紅の鎧を纏う帝国騎士に言い募る。

大陸の大部分を支配している一大国家の帝国、その頂点に君臨する皇族の子女。誰もが逆らうことを許されず、下々が声を掛けることすらも憚られる絶対の存在。

それほどの大人物の前に、騎士はいっ一族郎党残さず首が飛ぶかわからない——という状況に冷や汗をかきつつ。それでもなお、伝えねばならないことを伝える義務に殉じていた。

「皇女殿下。貴女様がリコリス様と懇意の仲であることは、我々として周知のこと。しかし一介の地方令嬢のために、これ以上の騎士を動かしては周辺諸国に無用な隙を見せることにもなりかねないのです!」

「けれど……!」

「皇女殿下のお気持ちも確かなものと存じております! ——しかし、皇族に名を連ね

るお方ならばなおのこと！　より多くの臣民への影響を顧みて頂かなくてはなりません！」

「……………」

皇女殿下は、確かに皇帝に次ぐ権威を保持している。だが、それはあらゆるものを際限なく左右できることには結びつかない。

むしろその重責ゆえ、厳重な縛りの中に生きねばならない、いわば籠の鳥なのだ。

「……………我々帝国騎士団の采配に、どうかご容赦を。万一の時はこの首を貴女様に献上し、リコリス様への供養とさせて頂く所存です」

「……………あなたの、首など誰も欲しがりはしません。私も、リコリスも。……………必ず、彼女を救い出してください。私から申し上げることは、もうそれだけです」

「必ずや。このレオポルドの身命を賭して、騎士の本分を全うします」

そのやり取りを最後に、焦げ茶色の髪を靡かせる壮年の騎士は、踵を返して白いマフラーを揺らし、執務室を立ち去っていく。何の力も持たず、ただ親友の無事を祈るしかない皇女は——窓から窺える青空に、祈りを捧げるより他なかった。

「リコリス……………ああ、どうか……………無事でいて」

縋るように、祈るように。膨らみというものがまるで感じられない、平らな胸の前でか細い指を絡め——彼女は蒼い瞳を揺らし、その肩を震わせる。

(勇者様……)

そして、いつものように。儂い想いを、自身とこの国の英雄に捧げるのだった。

◇

「隊長！ 皇女殿下は……!?!」

「——かなり、リコリス様のことと気を病まれているようだった。生死問わず結論を急がねば、さらに体調を崩される恐れもある」

「生死問わず——つて、それでは隊長が!」

執務室を出たレオポルドを、若い騎士が出迎える。髪と同じ色の口髭を撫で、皇女殿下が佇む扉の向こうを見つめる彼に、部下は青ざめた表情で詰め寄った。

「……件の誘拐事件から、もう三日。最悪の事態も想定に入れて行動せねばなるまい。その時は、この首を差し出す他には責任の取りようもないからな」

「しかし!」

「私の進退に構う暇があるなら、草の根分けてもリコリス様を見つけ出せ」

だが、レオポルドは顔色一つ変えずに踵を返し、煌びやかな廊下を歩き始めていく。その後ろに続く部下には、一瞥もくれず。

「——感情に任せて生きているうちは、出世は望めんど。私が空けた席に座れるのは、生き恥を晒してなおも戦い続けられる強かさを持つ者だけだ」

「隊長……」

「如何なる結果になろうとも、我々はただ己の使命を全うするのみ。それが強者たる帝国騎士団に名を連ねる者達に課せられた、不動の使命だ」

「……ハッ！」

若き騎士には、その生き様を否定する力はない。その背に続き、彼を死なせぬ戦いに身を投じるより、他はなかつた。

（——勇者様。かつて戦場にてあなた様に救われしこの命。ここで使い果てるやも知れませぬ。どうか、ご容赦を）

◇

——帝国と王国の運命を分けた大戦から、七年。戦後、という言葉が似合わないほどに平穩を取り戻した帝都に、地方令嬢が誘拐された事件が知らされたのは三日前のこと。

帝都からやや離れた、のどかで活気のある地方都市。帝都を目指す遠方からの行商人や使者から、中継地として頻繁に利用されるその街には、美しい領主の娘がいた。

リコリスという名の彼女は、領民である都市の住民達からも慕われる人柄であり——地方令嬢の身でありながら、雲の上の存在である皇女フィオナの幼馴染でもあった。

戦時中。王国への遠征から帰ってきた帝国軍への慰安を務めた地方都市への視察を

きっかけに、身分を越えて知り合った彼女達は同い年であることから意気投合し、出会つてからの日々を親友として過ごしてきた。

——だが三日前、久方ぶりのお茶会の帰りの馬車が行方不明となる事件が発生。その翌朝、急遽編成された捜索隊は破壊された馬車と瀕死の重傷を負わされた従者達を発見した。

この近辺で暗躍している——と噂されていた奴隷商の仕業と当たりをつけた帝国騎士団は、約二百名の特捜隊を結成。法で禁じられた奴隷商を陰ながら続行する悪人を取り出すべく、捜索を開始していた。

——大陸を統べる強者たる帝国の者であるなら。弱き者を隷属し、売り払つても蹂躪しても構わない。そのような「強さ」を履き違えた者達を食い止めるため、三十年以上も昔から奴隷禁止法は制定されていた。

だが、容易に多額の金が入る奴隷商を、強欲な人間が手放すはずもない。現皇帝の手で奴隷商が違法化された昨今も、狡猾に「金目」になる人間を狙う輩は後を絶たなかった。

そんな無法者を駆逐する使命を帯びている帝国騎士団としては、皇女の友人を攫われたという事態はすでに類を見ないほどの不祥事であった。

そのため、事を大きくしたくない——という軍部の主張とリコリス自身の貴族的身分

がそれほど高くない事実が重なり、特捜隊の規模は最小限のものとなってしまった。

その苦境に苛まれながらも——特捜隊隊長レオポルドは己が使命を果たすべく、部下達を連れて帝都を旅立っていく。

主犯格がいる可能性の最も高い——地方都市と帝都を繋ぐ道を目指して。

「隊長、現時点で判明している情報ですが……」

「何か新しい発見はあったか」

「はい。地方都市の住民が、闇夜に紛れて蠢く数十人規模の集団を、三日前の夜に目撃していたとのこと。報告によれば、その中には王国製の鎧を着た者がいたとか……」

「王国製、か」

「ええ。もし事実なら国際問題に——」

「——短絡的にも程があるわ馬鹿者。本当に王国騎士の仕業なら、わざわざ身元を明かすことになる鎧など着るものか。そのように仕向けて捜査を攪乱する目的だとは思わないか」

「ハ、ハッ！ 失礼しました」

……その道中。部下から新たに入手した情報に耳を傾け、レオポルドは静かに遙か彼方の街道を見つめる。その胸中に、一つの懸念を秘めて。

（……王国騎士の格好をした者、か。ないとは思うが……この時期に王国騎士の使者が

来れば、
要らぬ誹りを受けかねんな
)

第2話 地方都市の来訪者

(……ここに来るのは、アイラックス將軍を倒した後に運ばれてきた時以来、か)

普段は活気に溢れた明るい街であるはずの、地方都市。笑顔に溢れた人々で賑わっているはずのその街並みは——どこか寂れている。

道行く人々の表情もどこか、陰りを滲ませていた。

そんな彼らの様子を横目に見遣りながら、一人の騎士が街道の中央を歩んでいた。黒髪と赤いマフラーを靡かせ、白銀の鎧を煌めかせる彼は——太陽の輝きの下、凜々しき眼差しで青空を見上げる。

(あれから一年、行く当てもなく彷徨って流れた場所がこことはな)

舗装された石畳や整然とした街並みは、戦時中から何も変わっていない。まるでこの街が——否、帝国そのものが時空から切り離されているかのように。

だが、魔法の力が剥奪された現代において、その事象はあり得ない。破壊と復興を繰り返した王国ばかりが、時間を進めているように見えて——帝国もまた、目につかないだけで同じ七年の「戦後」を共有しているはずなのだ。

(……帰巢本能、とても云うのかな。それともただ、俺の心が弱いだけのことか……)

あの戦争が終わり、それほどの日日が流れた今も昔も。変わらないままでいられるのは、それだけこの街が平和であることの証左である。

それは望ましいことであり、それはこれからも揺らぐことなく続いていくはずだ。……はずだったのだ。

(リコリスさんを攫った奴隷商……か)

黒髪の騎士にも、件の事件は耳に入っていた。街中がその話題で持ちきりであり、それゆえに暗いものだから自明の理でもあるが。

彼自身にとって、リコリスという令嬢との面識はハッキリしていない。自身が疲弊していた時に看病されていた——という事実だけは聞き及んでいるが、その頃の記憶は曖昧で、ろくに人相も知らない。

(……事件が起きたのは三日前と聞いている。なら、手の打ちようはあるはずだ)

——それでも。件の事件を見過ぎさない理由としては十分過ぎる案件だった。無意識のうちに、握られた拳に力が籠る。

「おいお前っ！」

その時だった。背後から幼い少年らしき声突き刺さり、騎士は思わず振り返る。

見下ろした先では、三人組の少年少女がこちらを睨み上げていた。全員、七歳前後のように窺える。

そんな目つきで睨まれるようなことをした覚えどころか、面識すらないが——彼らの眼差しに宿る敵意はただならぬものであった。

「えつと……ジブン？」

「他に誰がいるんだ、奴隷商の手先め！」

「奴隷商の手先？」

彼らのリーダー格と思しき金髪の少年は、碧い瞳で黒髪の騎士を睨む。腰から引き抜いた、一振りの短グラブナイフ剣を翳して。

彼の発した言葉から、奴隷商絡みの事件のことを言っていることは窺えたが——正直、その容疑については身に覚えが全くない。

「そうだ！ 奴らの怪しい影を見た父ちゃんと言ってたんだ、奴らの中に王国製の鎧を着た奴がいたって！」

「……」

「あんたなんですよ、リコリス様を攫った悪い奴は！ 観念してリコリス様を返しなさい悪党！」

だが、自分がいきなり奴隷商の手先呼ばわりされた理由は思いの外、早く発覚した。事件当初からあつた目撃情報を頼りに、当たりをつけていたのだ。

(……やはり、そう見るか)

一角獣を模した鉄兜。青く縁取りされた白銀の鎧。ライトブルーのインナー。首に巻かれた赤いマフラーを除く全てが、彼が王国騎士であることの証左となっている。

王国騎士を格好をした一味の仕業、とだけ聞いていた少年達が疑いの目を向けるのも、無理からぬことであつた。

よく周りを見渡してみれば、街の誰もが遠目に自分を見ながら、ヒソヒソと言葉を交わしている様が窺える。三人組が声を張る前から、この奇異の視線は騎士に降りかかつていた。

(……この時期に、この辺りをうろつく王国騎士などそうそういない。そんな格好をしてる奴が、白昼堂々街中に現れれば、こうなるのも当然か)

「ね、ねえカイン、ミイ。や、やっぱやめようよ、勝てっこないよ……。それに、この人が犯人っていう保証だつて……」

「なに言つてんだよポロ！ リコリス様を見捨てる気か！」

「そうよそうよ！ 大人達は全然頼りにならないんだから、あたし達でなんとかしなきゃダメじゃない！」

そんな中、三人組の中で唯一尻込みしていた丸顔の少年が、二人におずおずと声をかける。だが、金髪の少年と赤い髪の少女は眉を吊り上げ徹底抗戦を訴えた。

「で、でも……」

「でも何も無い！ ミイ、こいつ見張ってる！ オレ、騎士団に知らせてくる！」
「わかったわ！」

カインと呼ばれた少年は、ミイという少女に指示を送りながら、領主の邸宅がある方向へ走り出して行く。正しくは、その方角にある騎士団の詰所へと。

その間、ポロという丸顔の少年はずっと彼らを交互に見やり、慌てふためいていた。

（——俺も大人しい方だったから、小さい頃はこんな風だったっけ）

そんなポロの慌てようを、微笑ましく見守る黒髪の騎士。そんな彼に、ミイの鋭い眼差しが突き刺さる。

「あんた！ カインの命令なんだから、大人しくここにいてることね！ 逃げようたって、あたし達リコリス親衛隊が逃がさないんだから！」

「リコリス親衛隊？」

「ね、ねえミイやめなよ。僕たち、いつもリコリス様と一緒に遊んでるだけで……」

「黙ってなさいよポロ！ 黙ってたらわかりやしないわ！」

「……くす」

ミイとポロのやり取りから、彼らがリコリスとどのような関係であり、どのように過ごしてきたかを感じ取った騎士は——拳を口元に当て、和やかな笑みを浮かべる。

そんな彼の反応を侮辱と受け取ったのか、少女はさらに眉を釣り上げた。

「んなっ！ 今笑ったわね！ あたし達リコリス親衛隊を舐めてると、痛い目に遭うわよー！」

「ふふ、そうだな」

「だ、だめだよミイ、刺激したら危ないよ！」

ミイの可愛らしい怒声を浴びながら、騎士はくすくすと微笑むばかり。そんな彼にいきり立つ彼女を、ポロが懸命に宥めていた。

「通報を聞いた！ お前が件の王国騎士か!？」

「騎士団のみんな、あいつだよ！ リコリス様を攫った犯人！」

すると、数人の帝国騎士が双角の兜を揺らして駆け付けてくる。そのそばを懸命に走るカインが、赤マフラーの騎士を指差した。

その様を見つめる騎士は——まるで抵抗する気配を見せず、彼らの前に進み出た。

「……？ とにかく、詰所で貴様の身柄を預からせてもらおう。無駄な抵抗はするな」

「わかってますよ。あ、お手柔らかにお願いしますね」

「黙れ！ さっさと歩け！」

そんな彼の様子に訝しみながらも、帝国騎士達は予定通りに取り調べに移るべく、騎士から鉄製の剣と盾を取り上げ、手錠をかける。

そうして連行されるまでの間。最後まで何も行動を起こさなかった彼を、三人組は暫

し呆然と見送っていた。

「ね、ねえカイン。結局あの人、最後まで何もしなかったね……。やっぱり事件とは関係ないんじゃないか……」

「バカ、そんなわけないだろ。事件と関係ない奴があんなカッコでこの街に来るかよ。きつと暴れるのがカッコつかないから、負け惜しみで余裕ぶってんだ」

「きつとそうね。あ、もしかしたら何か隠してるのかも知れないわ！ 追いかけて見張ろうよ！」

「だなー！ よおし、リコリス親衛隊、出勤っ！」

「ちよ、ちよつと二人とも待つてよ〜！」

だが、結局疑念が晴れたわけではなく。さらに何かを隠してのではと勘ぐった三人組は、帝国騎士達を追っていく。

◇ そんな彼らの駆け足を、黒髪の騎士は肩越しに見つめていた。

帝国騎士の詰所にある、レンガ製の牢屋。その中に閉じ込められた騎士は、鎧も剣も盾も没収され、青い服一着と赤マフラーだけの姿で佇んでいた。

壁にもたれかかりながら腕を組み、鉄格子に阻まれた窓から外を見やる彼。そこへ——カインと呼ばれた少年が踏み込んでくる。

「へへ、ざまあねえな！ さあ観念してリコリス様の居場所を教え——あだだだ！」
「ガキはとつとと帰れ！——それと貴様、ダタツツと言つたな。今夜には隊長が平原の巡回を終えて戻られる。貴様への尋問はそれから行うから、それまで大人しくしていろ。いいな」

……すぐさま帝国騎士に耳をつねられたが。

若い騎士はダタツツという黒髪の男を訝しげに睨み、今後の予定を告げて立ち去っていく。その後が続くように、カインも忌々しげにダタツツを睨みながら去っていった。

彼らの様子を静かに見送る黒髪の騎士は、神妙な面持ちで外に目を向ける。隙間から覗く空は、徐々に黄昏の色を滲ませていた。

(さて……上手く行くといいが)

第3話 小さな勇氣

帝都と地方都市を繋ぐ平原。一本道に舗装されたその道の途中には、小さな林に挟まれた地点がある。

その林の中——茂みの中に隠された、人二人が入れるかどうか、という小さな穴。その暗闇の奥から続く階段を降りた先には——

「しっかしいつ見ても、こいつあとんだ上玉だな」

「ああ。平和ボケして油断しきったお嬢様なんて捕らえるのは訳ねえが……ここまでの別嬪はなかなかないねえ。高く売れるってレベルじゃねえぞ」

——薄暗い集落のような、入り組んだ地下室の数々。ならず者達がひしめく、その魔境の最奥で——大勢の野獣が、舌なめずりと共に獣欲に滾る眼差しで、一人の少女を射抜いていた。

だが鎖に繋がれ、踊り子の衣裳のような格好にされた彼女の肢体は、少女と呼ぶにはあまりにも豊満であり——男達の黒く爛れた欲望を、爆炎のように焚きつける。

燭台に照らされた、白い柔肌。芸術的な軌跡を描く、滑らかな曲線。そのラインを成す臀部、くびれ、そして胸。完成されたその肢体を、大切な場所だけを隠した衣裳に包

み。

両手を上に拘束された彼女は、今この瞬間も、男達の下卑た視線に晒されていた。

その事実から目を背けるように、彼女は薄い桜の唇を噛み締め、目を伏せている。頬に滲む紅い色が、恥じらいの強さを訴えていた。

桃色のショートシャギーは、その表情を隠し切れず——燭台の灯に照らされた彼女の貌が、さらに男達の劣情を駆り立てる。

「お頭あ、本当にヤツちやダメなんですかい!? もう俺達ヤア、丸三日生殺しなんですぜ!」

「だったら女の一匹や二匹、お前らで攫ってこい。こいつはかなりの上玉な上に貴族であり、何より処女。……これだけの条件が揃えば、俺達全員の武装を高値に買い換えても釣りが来る収入になるんだ」

「だからつてよオ……いいじゃねえか、ちよつと味見するくらい!」

「処女じゃなくなったら、この女の商品価値は半減だ。テメエで値段を落としてどうする。明日には買い手と合流するんだ、下手な真似はするな」

周りの野獣達が囁し立てる中、リーダーらしき茶髪の男が、紅い瞳で少女を見つめる。その粘つくような視線を浴びても、両手を封じられた彼女は身をよじることしかできない。

「しかしお頭よ。この女の色香に、もう何人かは暴発寸前なんだぜ。……処女さえ奪わなきゃ、少々のおいたも許されていいんじやねえか？　せつかくの上玉なんだ。褒美が金だけ、なんてケチなことは言いなさんな」

「……仕方ねえな。壊すんじやねえぞ」

「ヒヤッホーウイ！　さつすがお頭アア！」

「お頭の許可頂きましたア！」

そして、今まで彼女の純潔が犯されなかつた理由である「商品価値」の壁さえ越えて、今——無防備な肢体に、色に飢えた野獣達が群がろうとしていた。

自らを翩らんと迫る、獯猛な雄の群集。その悍ましい光景に、少女——リコリスは、声にならない悲鳴を上げる。

そうして男達の影が彼女の身体を覆い尽くし、肉の宴が幕を開け——るはずだった。

「大変だお頭アア！　アーマドの野郎が捕まりやがった！」

「……なにイ!？」

その寸前に響く声に、リーダーの唸りが反響する。報告に駆け付けた男の発言内容に、他の野獣達も騒ぎを忘れて立ち尽くした。

「街の連中が噂してたんだ！　今日、王国騎士の鎧を着た野郎が捕まったらしい！」

「なんだと!?　くそッ、アーマドのグズ野郎ッ……!」

「まずいぞお頭！ 帝国騎士の尋問でここがバレたら……！」

「アーマドが上手く逃げてりやいいが……見てこいカルロス！ もし奴がまだ生きて街に居たなら、口を封じろ！」

「りよ、了解ツス！」

リーダーの怒号を受け、カルロスと呼ばれた細身の男が素早く走り出す。その背を見送る男達は、リコリスを黷ることも忘れてどよめきに包まれる。

「どうすんだよ……もしアーマドの奴がここを喋つちまったら……！」

「おい！ その話はいつ聞いた!?!」

「昼下がりがだが……今夜には取り調べが始まるつて聞いた……！」

「まずいな……もう外は夕方だ。早く手を打たねえと……！」

口々に今後の動きを話し合うならず者達。そんな彼らを一瞥し、リーダーは齒を食いしぼる。すでにその手は、背にした大槍ランスに伸びていた。

「アーマドの野郎……死んでいようが生きていようが、今度会つたらそのツラをブツ刺して——」

「——あつしがどうかしやしたか？」

「あ？」

その時。野獸達が集まる空間に、鎧を着た醜い男がひよつこりと顔を出してきた。

無精髭にダルマのような体型を持つ彼は、古びた王国製の鎧を鳴らし、のっしのっしと歩み寄る。

そんな彼の姿に、リーダーを含む誰もが目を点にして固まっていた。

「お、おいアーマド。お前、街で帝国騎士に捕まったんじや……」

「は？ あつし、今日は街になんて行つてないでやんす。今日はちよつと遠くまで食料を狩りに——」

「——カルロスを呼び戻せ！ 奴らこれが狙いだッ！」

だが。本人が目の前に確かに存在し……行方不明だった本人が、こう発言している。その紛れもない事実が、リーダーに全てを悟らせた。

「くそッ！ よりによつて、俺達の中でもぶつちぎりで足の速いカルロスか……！！ 馬車を出せ！ 最悪、戦闘にもなるかも知れん！ 選抜隊は速やかにカルロスを呼び戻せ！ 残りは戦闘準備だ！」

「え、え？ な、なにがどうなつてるでやんす？」

そこから矢継ぎ早に飛び出す命令を受け、男達は一転して慌ただしく駆け回り出した。その騒ぎに取り残されたリコリスは、状況が見えないまま目を伏せ——ただ静かに祈る。

（ああ、勇者様……人間である貴方様に祈ってしまう、私の弱さをお許してください……）

◇

夜の帳が下り、月の光が地方都市に差し込んでくる。その輝きは鉄格子の隙間を縫い、ダタツツの牢屋にも差し込んでいた。

(取り調べの時間まで、あと少しか……)

首を上に向け、その光を見上げるダタツツ。そんな彼の意識を、小さく響く足音が引きつけた。

だが、音が伝わる方向へ目を向ける彼の前に現れたのは。

「君は……」

「あ、あの……タゴ飯です」

帝国騎士の隊長——ではなく、リコリス親衛隊の一員であるポロだった。つぶらな瞳でダタツツを見つめる丸顔の少年は、鉄格子の隙間からおずおずとパンとスープを差し出す。

そんな彼の姿に、騎士は微笑を浮かべて歩み寄る。敵意というものをまるで感じさせないその面持ちに、ポロは戸惑いの表情になる。

「ありがとう、頂くよ。ポロ、だったね。他の二人は一緒じゃないのか？」

「は、はい。カインとミイは夜の見回りをやっていて……あの、こんなことになってごめんなさい。隊長さんは話のわかる人だから、きつとすぐに釈放してくれます」

「そうなのかな？ それは助かるな。にしても、君は随分と優しいね」

「よ、よく言われます。でも、カインやミイにはいつも意気地なして……」

「あはは、確かにあの子達からすればそう見えるかもな。でも、君が意気地なしだとジブンは思わないよ。リコリスさんを攫った……かも知れない容疑者相手にご飯を持っていくなんて、大した勇気じゃないか」

「……」

まるで友人のように、柔らかく接するダタツツ。そんな彼が悪人だとは、どうしてもポロには思えなかった。

自分に気づかれないよう、巧妙に隠しているのか。そんな考えも過るが、目の前の屈託無い笑顔を疑うことは、少年の良心を深く苛む。

「でも、そろそろ家に帰った方がいい。きつとお母さんも心配してるよ」

「お母さんも、お父さんもいません。僕らはみんな、戦争で親をなくした孤児なんです」
「……すまない、余計なことを」

「いいんです。僕らみんな、生まれて間も無いうちに戦争が終わって、親の顔も知らずに育ってきたんです。僕らにとってのお母様は、リコリス様なんです」

「……君達はみんな、戦後に生まれてきたのか」

「はい。今ある平和は、自分達が生まれる前から頑張ってきた騎士様達のおかげだって、

学校で習いました」

「……」

無垢な少年の言葉に、ダタツツは目を伏せる。戦時中、「強さ」を履き違い略奪を繰り返す輩が絶えなかった帝国軍の騎士の醜態は、見るに堪えないものだった。

「王国騎士の人達も、戦争には負けたけど強くて勇敢な人ばかりだって教わりました。ダタツツさんも強いんですか？」

「そう胸を張りたいところだけど、ジブンは騎士団を辞めた身だし、騎士団に入ったのも戦争の後だ。ごめんな、かつこいい騎士じゃなくて」

「そんなことないです、あんなに落ち着いていられるなんて、凄くかつこいいって思います」

「あはは、ありがとうな」

その歴史の一欠片でも伝われば、彼の理想を穢しかねない。その忌まわしい記憶が闇に消え去ることを、祈る他なかった。

(……あの地獄を終えた先に、生まれた命……か)

第4話 反撃の狼煙

それから暫し、ダタツツはポロとの取り止めのない私語を続けていた。少年は自分を肯定してくれる大人に、徐々に懐くようになり——やがて彼は警戒心のない、朗らかな笑顔を浮かべるようになっていた。

そんなポロの様子を、聞き手に回りながら静かに見つめていたダタツツだったが——次の瞬間。

「——！」

「わっ!?!」

突如鋭い顔付きになると、いきなり立ち上がって後方に視線を移した。何もなはずの方向を凝視する彼の変貌に、ポロはおずおずと問い掛ける。

「……あ、あの、どうしたんですか？ 向こうに何か……?」

「ポロ。……はじきに危なくなる、すぐに帰るんだ」

さっきまでとは別人のような横顔に、声。人が変わってしまったような目付きになった彼を見上げ、ポロは肩を震わせる。

そんな彼の両肩に、しなやかでありつつも逞しい腕が置かれ、臆病な少年はびくりと

心臓を跳ねさせた。

「大丈夫。君達の大切な人は、必ず取り返してみせるから」

「…………え…………？」

——だが、両肩を掴みながらポロを見つめるダタツツの表情は。先ほどまでと変わらない、優しげなものだった。

まるで、彼を安心させるためだけのよう。

◇

月明かりに照らされた夜の地方都市。街灯の影に紛れ、その暗闇に蠢く獣が一匹。

カルロスと呼ばれるその獣——男は、息を殺してある場所を目指していた。

（アーマドのグズ野郎が牢にいとすれば、尋問で俺らの居場所を吐かされる前に始末するしかねえ。全く、余計な手間ア掛けさせやがって）

帝国騎士団の詰所に連行されたという王国騎士。それが同胞のダルマ男であると確信していたカルロスは、口封じのために詰所の牢に向かっている。

詰所の裏手にある牢には窓があり、そこから中が窺える。そこから持ち込んだ槍を突き刺し、殺害する腹積もりなのだ。

（ま、奴隷商最速の暗殺者カルロス様の手に掛りやあ、奴の命も今夜限りよ。せいぜい、テメエの不甲斐なさを呪いながらくたば——あ？）

今まで、狙った獲物を仕損じたことのない彼は、尊大さを表情に滲ませて暗闇を進んでいく。その時、彼の目に薄暗い街道から響く喧騒が目に入った。

普段なら酔っ払いのケンカと切り捨て、気にも留めないところだったが……自分達が使う黒塗りの馬車が見えたとあつては、そももいかない。

目を凝らして見てみれば、馬車を引き連れた数人が、短剣を持った小さな少年を殴り倒している様が窺えた。さらに一人の少女が、数人のうちの一人に縛り上げられている。

(……なあにしてんだあいつらは。新しい売り物の確保か？ あんな大人数でぞろぞろ歩いてちゃ、見つかるのも時間の問題だろうが。全くこれだから、暗殺つてもんをわかってないド素人はよ)

その光景を、暫し冷ややかに見つめた後。カルロスは骨と皮だけのような細身を走らせ、目的地へと風のように向かっていく。

鉄格子で阻まれた窓が見えたのは、それから数分も経たないうちのことだった。

「へっ……それじゃあ、とつとと済ませて帰るとするかい。ここまで来てお縄なんてゴメンだからな」

舌なめずりと共に、レンガ造りの壁をよじ登った彼は、鉄格子を掴んで自身の上体を引き上げる。そして、その先にある牢の中を見下ろし――

「あ……う？ な、なんでえ。誰もいねえじゃねえか」

——そこにいるはずのダルマ男の姿が見えず、目をしばたたかせる。

もしや、すでに取り調べ室に連れていかれたのでは。なら、話を聞き出した騎士達も狙うしか……。

そう思考を巡らせた彼が、背にした槍に手を伸ばした——その時。

「があっ!？」

突如、レンガが砕ける音が響き渡り——同時に、カルロスの細足が何か引つ張られた。予想だにしない事態に、彼は思わず声を漏らして下を見やる。

——そこには、レンガ壁を突き破った何者かの手が、自分の片足を掴んでいる、という異常な光景が広がっていた。

「ぎゃああああッ!？」

その事態に思考が追いつく前に。その手に無理やり引き込まれたカルロスの身体は、レンガ壁を破壊しながら牢の中へと引きずり込まれてしまった。

地べたを転げ回り、やがて壁に激突した彼はすでに血だるまと化し——何が起きたのかもわからないまま、自分を玩具にした「手」の持ち主を凝視する。

その持ち主——赤いマフラーを巻いた黒髪の男は、冷ややかな眼差しでカルロスに歩み寄り、その胸倉を掴み上げる。カルロスの細身は腕一本でふわりと持ち上げられ、彼

は苦悶の表情を浮かべた。

「当たり前だが、こんな男は仲間達の中にはいない。だが、牢の中にこの男がいたということは、噂の王国騎士が彼だったことを意味する。」

つまり、アーマドが捕まったという情報は、ブラフだったのだ。

「……作戦、とは言い難い分の悪い賭けだったが。どうやら吉と出たらしいな」

「て、テメエは一体!？」

「元王国騎士、といったところだ。お前達奴隷商の仲間に、王国製の鎧を着た奴がいると聞いてな。同じ格好の人間が捕まれば、仲間が捕まったと勘違いする可能性に賭けたんだ」

「……………」

「お前達は存在そのものがご法度。そのアジトを隠し通すためなら、仲間殺しも辞さない連中だ。それに話によれば組織は数十人規模。それだけ人数がいるなら、たとえ途中で勘違いが解けたとしても、正確な情報が全員に伝わる前に誰かは『口封じ』に来るはず。この世界にラインでもあれば、違つただろうがな」

「ラ、ライン……？　なんだそ——ぐつ！」

「胸倉を掴む手に、さらに力が籠る。これ以上の問答に付き合う気は無い——と暗に宣告する男に、カルロスは反撃のため背中の槍に手を伸ばし——」

「ぎええッ！」

「こつちの要求はわかるだろう。変な気を起こすと怪我が増えるぞ」

——その手を握り潰されてしまう。鮮血が噴き出す根元からは、握撃によつて白い骨が放り出されていた。

激痛による気絶から、さらなる激痛で呼び覚まされる。その責め苦に威勢を挫かれたカルロスは、観念したように視線で降伏を訴えた。

それを汲んだ男——ダタツツは、カルロスを降ろすと冷酷な眼差しで言外に命じる。さつさと案内しろ、と。

「ダタツツさん、ダタツツさんどうしよう！ カインが、ミイが攫われた！」

「なに!？」

その時だった。家に帰したはずのポロが、切迫した表情で駆け込んでくる。その報せを受けたダタツツは目の色を変え、カルロスを睨み付けた。

「他にも仲間を連れていたのか。連中はどこだ！」

「ま、街の入り口からここに続く街道の途中だ！ で、でも俺が連れてきたわけじゃねえ！」

「……途中でブラフに気づいて、こいつを連れ戻しに来たのか。そこでカインとミイに見つかつて……くそッ！」

予想だにしない展開に、ダタツツは初めて表情に焦りを滲ませる。そして、すぐさまカルロスの首を掴むと、彼を引きずりながら壁の大穴から外へ飛び出していった。

「案内しろ、死にたくなかったらな！」

「ぎゃああああ！ す、する！ 案内するから離し、離してください！ 離してくださいお願いします！ 骨、骨が地面に当たって……いでええええ！」

あつという間に姿を消した二人。その様子を、ポロはただ、黙って見ていることしかできなかった。

ダタツツがカルロスを引きずり込んだ時から今に至るまで、一分も経っていない。轟音に眠気を覚まされた帝国騎士達が、慌てて牢に駆け込んできた頃には、すでにポロだけが残された状態であった。

「な、なんださっきの——う、うわあああ！ なんだこれ、牢の壁が！」

「おいポロ！ あのダタツツとかいう男はどうした！ 一体ここで何があつた！」

駆けつけた帝国騎士達は、破壊されたレンガ壁を目の当たりにして、戦慄する。そんな彼らの詰問に応える余力もなく、少年は両膝を突いた。

少年に出来ることはもう、何もない。——あの黒髪の騎士が語った言葉が、真実になると信じるしか。

(ダタツツさん……みんなあ……！)

第5話 リコリス親衛隊の勇氣

「むっ—」

カルロスを引きずりながら街道を疾走するダタツツが、走り去っていく馬車を見つけたのは、牢を出てから約三分が過ぎた頃。

馬が駆ける蹄の音が、舗装された石畳に反響していく。それを聞きつけた黒髪の騎士は音の出処を目指し——血だるまになるまで殴打された少年を発見した。

その少年が倒れている先を、黒塗りの馬車が走っている。そこから導き出される答えに辿り着いたダタツツは、ボロ雑巾のようにされたカルロスを投げ捨てると少年——カインのもとへと駆け寄った。

「カイン—」

「ぢぐ、じょう……ぢぐじょう！ ミイが、ミイが……」

「……」

すでに意識も朦朧としているのか、もがくように身をよじらせている。痛みと怒り、そして無力感に震える少年の手を、ダタツツは静かに握り締めた。

「……大丈夫。絶対、みんな帰ってくる」

そして、傷だらけの小さな手から零れ落ちた短剣を拾い——彼の鋭い眼差しが、馬車へと向かう。

「おいダタツツとやら！ 貴様一体何を……！」

「この子をお願いします」

「お、おい貴様っ!?!」

そこへ帝国騎士達が、彼を捕縛せんと駆けつけてくる。が、ダタツツは手早くカインの介抱を彼らに託すと、すぐさま馬車を追って走り出した。

——常人では、まるで追いつけないほどの速さで。

「な、なんだあのヤロウ!?!」

「走って……馬車に追いついてやがる!?!」

その異様な光景に慄く馬車の乗員。彼らの前に、その張本人が飛び乗ってきたのはその直後だった。

「んー!?! んーっ!?!」

「助太刀に来た。もう、大丈夫だよ」

彼の目に、縛り上げられた少女の姿が映る。猿轡で言葉を封じられながらも、彼女は懸命に逃げろと訴えていた。

そんな彼女に、一瞬だけ優しげな眼差しを送るダタツツは——じろり、と物々しい乗

員達に目を付ける。

「ヤ、ヤロウふざけやがっ……!」

得体の知れない不気味な相手だが、敵意に満ちた瞳や手にした短剣を見れば、自分達に仇なす敵であることは間違いない。

乗員達は素早く得物を手に襲い掛かる。……が、馬車に勝る速さで動く超人が相手では、勝負になるはずもなく。

「あがあっ!」

「ひぎやあっ! や、やめ、落とさ——あああああっ!」

次々と短剣の柄で打ち据えられては、馬車の外へと放り出されていった。ダタツツは速やかに乗員達を片付けると、唯一残った御者の首に刃先を当てる。

「このまま、アジトに向かえ。元々そうだったんだろ?」

「は、はい……」

その刃に抗う術などない。言われるがままに手綱を取る御者とダタツツの背を、ミイは信じられない、と言いたげな表情で見送っていた。

(あ、あんたは一体……!?)

◇

夜の闇に包まれた林。野獣共が息を殺して潜む、その魔境に——黒塗りの馬車が駆け

込んでくる。仲間達が無事に帰ってきたと、安堵した悪漢の群れは、任務を果たしてきたのであろう彼らを迎え入れ――

「うぎやあ!？」

「なっ、なんだこいつらっ――ぎあああ!」

――荷台から飛び出してきた曲者の、奇襲を浴びることとなる。

短剣の柄による殴打、体術による回し蹴り。あらゆる打撃に打ちのめされた野獣達の体が、地面に叩きつけられていく。

その初撃に入り口の外にいた者達は全滅し、立っているのはダタツツ一人のみとなった。奇襲が始まり、まだ三十秒も経っていないが。

「……あ、あんたって、こんなに強かったんだ……」

「ミイ、作戦はわかってるか?」

「子供だからってバカにすぎ! あんたが暴れてる間に、リコリス様を助け出すんでしょ? ……でも、本当に大丈夫なの? カインだって、あんなに……」

馬車から降りてきた赤毛の少女は、ダタツツの赤いマフラーを摘みながら、上目遣いでその顔を見上げる。幼馴染が痛めつけられる様を見せつけられた手前、不安が拭えないらしい。

そんな彼女の頭を優しく撫でつつ、ダタツツは穏やかに笑いかける。先ほどまで修

羅の形相で男達を打ちのめしていた騎士とは、似ても似つかぬ表情だ。

「……大丈夫、大丈夫。今頃、騎士団が保護してくれてるさ。ポロが報せてくれたおかげで、ジブンも間に合ったしな」

「え？ あ、あのポロが……？」

「強い子だよ、あの子は。いつの日かきつと、君やカインにもわかる」

「……」

自分達が窮地を脱したきっかけが、あの意気地なしのポロだと言われ、ミイは複雑な表情で俯く。そんな彼女に微笑みながら、ダタツツは階段を降りて地下の洞窟へ向かった。

——七年前のあの日。自分の手を握った、あの温もり。記憶の片隅で生きる、その感覚を求めるように。

第6話 奴隸商との決戦

「てめえか……俺達をハメやがったのは。随分ナメたマネをしてくれたな」

「さて、何のことやら。ジブンは勝手に捕まり、お前達は勝手に勘違いをした。それだけの話だと思うが?」

「ヤロウ……」

天を衝くように逆立つ茶色の短髪。怒りに猛り狂うかのような、赤い瞳。その獯猛な顔つきに違わぬ、小麦色の筋肉質な肉体を持つ、腰蓑一丁の悪漢。

奴隸商の頭目であるその男は、自分達のアジトに土足で踏み込んできた上、同胞達全員を昏倒させた赤マフラーの黒髪男を睨みつける。だが、リコリスの従者達を震え上がらせた彼の眼光は、目の前の仇敵にはまるで通じていない。

「自分達より弱い者を、散々いたぶってきたお前達だ。こうして報いを受けることも、覚悟の上ではなかったのか?」

「うるせえッ! てめえら帝国人が勝手に決めたルールなんぞ知るか! 俺達にとっちゃあ金が全て、女が全て! てめえらの道理なんぞ、知ったこっちゃねーんだ!」

「……一理はあるな。ここが奴隸商を禁じられた帝国領内でなくば、だが」

黒髪男——ダタツツは足元に転がる男達を跨ぎながら、最低限の足場がある場所へと身を移す。その様子を遠巻きに、ミイが驚愕の表情で見つめていた。

「ど、どんだけ強い、アイツ……」

「ミイ」

「ひゃい！ ……じゃなくて何よ！」

「この先にリコリスさんが囚われているそうだ。君は先にそこへ行きなさい」

「だ、だけど……」

「ジブンなら大丈夫。さあ、急いで」

ふと自分に向けられた指示にたじろぎつつも、ミイは最後の下り階段に向かっていく。——その様子を見やるリーダーの眼差しを、ダタツツは見逃さなかった。

「行かすかガキヤアアア！」

「……！」

ミイを狙い、投げ飛ばされる大槍。轟音と共に空を裂き、幼気な少女へと襲い掛かる鋭い鉄塊を前に——ミイは思わず目を伏せる。

「——帝国式投剣術、飛剣風ッ！」

刹那。ダタツツの手に握られた短剣が、閃いた。

◇

「なっ——!?!」

「え……!?!」

その果てにあるのは少女の血飛沫ではなく——彼女の目前で爆散した、大槍の破片だった。

来るはずだった「絶対の死」から逃れている現状を飲み込めず、ミイは腰を抜かしたまま辺りを見渡す。

——やがて彼女は、自分の傍らに一振りの短剣が突き刺さっていることに気づいた。いつも自分達を引っ張ってくれる、頼れるリーダーが……攫われる自分を助けるために、捨て身で戦ってくれたリーダーが、いつも大切にしていた短剣。

帝国騎士の副兵装である、その短剣を握り締め——少女は強い眼差しで、それを「投げつけて」大槍を破壊したダタツツを見遣る。

「……鎖で繋がれていたとしても、その剣なら破壊できるはずだ。リコリスさんのこと、任せたよ」

「……あつたりまえよ。リコリス親衛隊を、ナメンじゃないっ!」

そして、勇ましく短剣を振りかざしながら、階段を駆け下りていく。その後ろ姿を、暫し微笑ましく見送ったダタツツは——自分を睨む悪漢に目を移した。

「なんだ……なんだ今のは、一体なにをしゃがった!」

「短剣を投げて大槍を壊した……それだけのことだが？ 速すぎて見えなかったか？」

「バカな！ あんなちっぽけな剣を投げつけたくらいで、俺の大槍がッ——！」

「——ちっぽけなんかじゃない」

唾を吐き散らし、眼前の現実を拒絶するリーダー。そんな彼を諭すかのように、ダタツツは静かに——それでいて、厳かに告げる。

「あの短剣は、戦火の果てに生まれた命が、大切なものを護るために振るわれた剣。たとえ刃が小さかろうと、弱き者を屠ることにしか使われない脆弱な大槍を穿つには、過ぎた『強さ』を持っている」

「バ、バカな……こんなバカナッ……！」

「——さ、話は終わりだ。部下は全滅、得物は大破。もうお前に勝ち目は無い、大人しく投降しろ」

その宣告は、洞窟内に静かに響き渡る。——が、リーダーは焦りを表情に滲ませながらも、口元を歪に釣り上げ獰猛な笑みを浮かべた。

「投降だとオ……バカ言えエツ！」

「——ッ！」

次の瞬間。目にも留まらぬ速さで、リーダーの懐に隠されていた刃が、唸りを上げてダタツツに襲い掛かる。空を裂く脅威を察知した彼は、咄嗟に首を捻るが——その頬

に、赤い傷跡が残された。

刃はやがて空を駆け抜け、持ち主の手へと帰ってくる。くの字に曲がった刃が、ダタツツの血を吸って妖しい輝きを放っていた。

「ブーメラン、か」

「ハツハハハ！ 俺にはまだこいつがある！ だが貴様は丸腰！ 勝負あつたな、身の程知らずが！」

優位を取り戻したことで増長し、狂ったように嘲笑の声を上げるリーダー。そんな彼を冷ややかに見つめながら、ダタツツは静かに呟く。

「ならさっさと終わらせてみる。その玩具でジブンを殺せるというなら」

「なっ——なんだとオツ!! 負け惜しみ抜かしやがって……死ねえええ！」

その挑発を受けた悪漢は、目を剥いて憤怒の形相となり——勢いよくブーメランを振りかぶる。回転する刃は空間を切り裂き、弧を描くように、ダタツツに襲い掛かった。

この状況に立たされてなお、ダタツツに動きはない。もうすぐ減らず口も終わると確信したリーダーは、歪に釣り上った口元から涎を垂らす。

——しかしその未来は、夢想到に終わった。

「は——ッ？」

ダタツツの首を切り落とさんと、唸りを上げて襲い来る刃。その刃先を——彼は指二

本で挟み、止めてしまったのだ。

必殺の意思で放った、渾身の一闪を、指二本で。

あまりに現実離れた光景に、リーダーは理解が追いつかず間拔けな声を漏らす。彼がこの状況が現実のものとして受け止めたのは——投げ返されたブルーメランが、右胸に突き刺さった時だった。

「ぐぎやああああああッ！」

「——あくびが出るな、この速さは」

右胸を押さえ、うずくまるリーダー。その身に、容赦無く激痛が襲い来る。

……が、出血量はその傷には見合わないほどの少なさだった。だが痛みから逃れるべく、無理に抜こうとすると鮮血が噴水のように溢れ出る。

「い、いでえええ！　ちくしよう、ちくしようおー！」

「無理に抜けば出血多量で今度こそ死ぬぞ。明日には、騎士団がお前達を検挙しに押し掛けてくる。それまで我慢しなさい」

「あ、明日!?　それまでずっと、こうして刺されっぱなしでいろってのか!?　じよ、冗談じゃねえ！　助けろ、助けてくださいお願いします！　もう悪いことしねえからあああ——」

「お前に痛めつけられた従者達も、そう言っただろうな。——ジブンは、殺しはしない。」

苦痛の果ての生還か、安楽な死か。それはお前が選べ」

「そ、そんなああああ！」

激痛にのたうちまわり、涙目になりながら命乞いをするリーダー。そんな彼を一瞥しつつ、ダタツツは階段を下りていく。

この戦いに、幕を下ろすため。

◇

「…………… あ、ダタツツ！ よかった、勝ったんだ！ よかった……………」

ダタツツは洞窟の最奥である空間で、ぴよんぴよんと跳ね回るミイの出迎えを受けた。……………しかし、ここでダタツツと対面したのは、彼女だけではない。

「——ダタツツ!? まさか、そんな……………あなたは！」

「初めまして……………でも、ないのかな」

驚愕の表情で、黒髪の騎士を見上げる桃色髪の美女。あの日と変わらないシャギーシヨートの髪が、騎士の微かな記憶と重なっていく。

ダタツツという名に衝撃を受けるあまり、殿方の前で肌のほとんどを晒していることも忘れ、彼女は両手で口元を覆い、歓喜の涙を零す。その現象に戸惑うミイは、「リコリス様どうしちやったの!」と不安げにダタツツを見上げた。

そんな彼女を安心させるように、ふわりと頭を撫でて——ダタツツは穏やかな眼差し

で、あの日感じた「温もり」を見つめる。

（ああ……フィオナ様。こんな、このようなことが……あつて、よいのでしょうか。こんな、こんな……）

——リコリスは一年前、帝国勇者と思しき人物が王国に現れたという話をフィオナから聞かされていた。かつて伊達竜正という少年だった彼が、ダタツツと名を改めていることも。

その彼が王国騎士団から除名され、再び行方不明となったという報告が上がった時は、フィオナは深い哀しみに沈み、リコリス自身も胸を痛めていた。

フィオナとダタツツは、もう会うことは叶わないのか。——自分自身も、彼の健在な姿を見ることは叶わないのか。

そんな哀しみだけが、胸を突く日々だった。その哀しみが、このような形で晴らされるなど、どうして想像できようか。

大切な親友の、心からの笑顔を見ることさえ叶わず、奴隸に落とされる運命にあった自分を救い出してくれた騎士が、彼だったなど。

「ダ、タツツ……様……！」

「七年も、心配を掛けて……済まなかった。もう、大丈夫だから。……リコリスさん」

「う、あああ……ああああつ！」

状況は理性で理解できても、心はまるで追いつかない。その責任を求めするように、リコリスは騎士の胸元へと駆け出した。

その胸に身を委ねんと、彼女は幼子のように啜り泣き、ひた走る。

そんな彼女を、穏やかに見つめた後。ダタツツは、困惑しているミイに苦笑いを送りつつ、両手を開いて迎え入れる準備をする。

(……俺はずっと、この温もりが欲しかったのかも知れない。俺を人として迎え入れてくれる、この温もりが)

そして、彼女がダタツツの胸に飛び込む——その時だった。

「きゃんー」

子犬のような悲鳴と共に、リコリスは路傍の小石に躓き。べちゃり、と顔面から転倒してしまった。

豊満な臀部を突き出し、顔と胸を地面に沈めたその光景に、ダタツツとミイは二人揃って微妙な表情になる。

そんな彼女の一面から、黒髪の騎士は彼女のある「属性」を垣間見るのだった。

(ど、どどどっ娘……)

最終話 王国勇者

——帝国騎士団が洞窟に突入し、奴隷商を全員拘束したのは翌朝のこと。胸にブーメランを刺された頭目が、涙ながらに助けを求めてくる光景に、騎士団の誰もが困惑していた。

「お、おーい！ あっしは王国騎士ですぞ旦那！ 縛るなんてひでえ——ぶげっ!？」

「今更そんなでまかせが通じるか！ さっさと歩けダルマ男！」

「いでえよー！ 蹴飛ばすことねーでしょー！」

「ああもう、さっさと連れていけ！」

縛り上げられ、次々と騎士団に連行されていく奴隷商の面々を見送る壮年の騎士——レオポルド。馬上から状況を見つめる彼のもとに、若い騎士が馳せ参じた。

「隊長。リコリス様の証言によれば、元王国騎士のダタツツという男による仕業とのことです。……が、いくらなんでも、独りでこんな真似ができるとは到底……」

「あのヴィクトリア殿を輩出した王国騎士だ、これくらいは容易いのやも知れん。お前も彼女の強さは身に染みて学んでいよう？」

「は、はっ！」

一年前に剣術指南の一環で、容赦無くヴィクトリアに滅多打ちにされた過去を思い返し——騎士の顔から血の気が失われていく。そんな部下の様子を一瞥しつつ、レオポルドは帝都の方角へと視線を移した。

青空の向こうに輝く太陽は、この戦いの終焉を静かに告げている。

(……勇者様。またしても、このレオポルドの命を救ってくださいましたか。もはや、いかなる感謝の言葉も足りませぬ。——命を救われていながら、貴方様に願う道理などありませんが……どうか今一度、皇女殿下を……)

◇

さらに、一週間が過ぎた。

豊かな自然を一望できる、地方都市の丘に建てられた豪邸。その一室から、晴れやかな青空を一人の美女が見つめていた。

窓から吹き抜ける風が、シャギーシヨートの髪を撫で——彼女の微笑みを誘う。この安らぎが、彼女に平和の到来を告げているのだ。……もう、脅威は去ったのだと。

「お嬢様。いつものあの子達が見舞いに伺いたいと……」

「……うん、いいよ。通してあげて、リリーヌ」

「畏まりました」

メイド服に身を包む、若い使用人に向ける華やかな笑みは、窓から差し込む光を浴び

て煌々と輝いているようだった。

今回の一件で重体となっていた従者達も快復に向かい、ようやく誰もが前を向く時が来たのである。

そんな彼女に恭しく一礼し、部屋を出た使用人と入れ替わるように——リコリス親衛隊の面々が飛び込んでくる。

「リコリス様あーっ！」

「よく来てくれましたね、カイン。ミイ。ポロ。あなた達には、本当に救われました。……カインは、もう怪我は良いのですか？」

「へへっ、これくらいへっっちゃらさ！ なんとってオレはリコリス親衛隊のリーダー……いててー！」

「何がリーダーよ、無理しちゃって。あたしの方が今回は大活躍だったんだからね！」

「……ま、ポロも頑張った、らしいけど？」

「ぼ、僕なんか全然……」

「なよなよしてんじゃねー！ リコリス親衛隊なら、胸張っていやがれ！」

「カ、カイン……」

先週の死闘が嘘だったかのように、リコリス親衛隊は元気を取り戻している。カインは身体の各部に包帯を巻いているが、大の大人から暴行された後とは思えないほどの

回復力を發揮していた。

そんな彼が率いるミイとポロも、リコリスの無事を確かめるように彼女の顔をまじまじと見つめ、胸を撫で下ろしているようだった。

子供達もリコリスも、こうして無事に生還することが出来た。彼が何度も宣言した通り、「大丈夫」だったのだ。

残酷な死と凌辱を味わうはずだった、自分達四人の運命が変わったことを実感し、リコリスは歓喜の色を表情に滲ませる。

「……ねえリコリス様、ダタツツの奴いつ帰ってくるかなー！」

「……！」

「今度はダタツツも誘って遊ぼうよ！ リコリス様！」

「ぼ、僕も、ダタツツさんに会いたいな……！」

そんな彼女の胸中を知る由もなく、カインを筆頭に子供達が声を上げる。ダタツツの活躍は街中に知れ渡り、彼らの中にあの黒髪の騎士を疑う者はいなくなっていた。

それは喜ばしいことであり、彼がフィオナが待つ帝都へ旅立ったことは、何より祝福すべきことであつた。

——が。

それでもどこか、彼女は切なげな想いを、あの日から胸に秘め続けていた。

（この気持ちは……許されてはならない気持ちは。誰にも、知られてはならない……私だけの……）

寝ても覚めても、気がつけばあの逞しい騎士の背を思い出している。弱り切った少年時代の一面しか知らなかった彼女にとつて、凜々しい青年へと成長を遂げた彼の美貌は、乙女の胸中に耐え難い衝撃を与えていた。

——親友でもある皇女殿下の想い人と知りながら、その彼へと横恋慕してしまうほどに。

彼女自身は、その想いを許されざる恋と断じて頬を赤らめつつ、窓の外へと視線を移す。その向こうにいるであろう、彼の背に想いを馳せて——

「リコリス様ー、帝都はあっちだよ？」

「どこ見てんのかなー？」

「はうっ!？」

——いたのだが。何を思っていたのかを見透かされた挙句、全く逆の方向に熱を帯びた視線を送っていたことを指摘され、リコリスは羞恥に顔を赤らめるのだった。

◇

——その頃。

（勇者様……）

帝国の広大な街並みを一望できる帝国城のテラスに、一人の銀髪の美少女が佇んでいた。蒼いリボンで髪を一つに束ね、色白な肌を強調するかのような、ウエディングドレスを彷彿させる形状の礼服。

その絶対的な美貌の前には帝国の誰もがひれ伏し、不動の忠誠を誓うと言われている。彼女が一声掛ければ、その命令のために我が身を差し出す騎士はごまんといるだろう。

だが——その天上の地位にある彼女の権威を以ってしても、叶わぬ願いがある。愛する男との再会は、この時代の戦火が許さなかったのだ。

帝国の皇女フィオナの威光が如何に強大であれ、広大な大陸の中から一人見付け出すことは、魔法の力が廃れた現代においては容易ではない。ましてや相手が、戦死したものと公に発表されている帝国勇者とあつては、搜索規模も限られてしまう。

帝国勇者の存命が確定したといつても、帝国に帰ってくる保証はどこにもない。彼が行方をくらましていた理由を考えれば、迂闊に公表して帰還が難しい状況を作ってしまう展開は避けねばならなかった。

ゆえにフィオナから出来ることは、もう何も残されてはおらず——こうして、愛する勇者の帰りを待ち続けるより他なかった。

一日千秋の想いを抱えて過ごした一年は、さながら永遠の時のよう——彼女は僅か

な時間の中ですら、気の遠くなるような心境であった。

(……勇者様。ファイオナのもとへは、もう戻れぬと……もう会えぬと仰るならば。せめて、最後に一度、どうかもう一度だけ……)

瞼を閉じ、青空の下で風を浴びながら——彼女はただひたすら、帝国勇者へと想いを馳せる。

この日々の中で、諦めかけたことは一度や二度ではない。何度も、この想いに終止符を打とうと決意しては——その猛るような愛情が邪魔をする。

忘れようと思えば思うほどに、その恋情は火を増すばかり。戦後からずっと変わらな
い、ただ一人の男への想い。

異国の王子。大陸外の有力者。絶世の美男子と名高い皇太子。どんな見合いを用意されても、それが揺らぐことはなく。

時を経てさらに、その想いは熱を増しているようであった。

——リコリスを救出し、奴隷商の頭目を打ち倒した後。風のように姿を消したという謎の騎士。

リコリスが無事であることも奴隷商の全員確保も紛れもない真実として報告されてはいたが、その騎士の実態だけは依然として不明なままであった。

だが、ファイオナにはわかっていて。いや、彼女だけではない。

帝国勇者の存命を知る一部の有力者は、皆悟っている。

——帝国勇者が、ここまで来ているのだと。

目的が不明である以上、迂闊な対応はできないと静観を決め込んでいる勢力が大半であり、フィオナ自身も周囲の忠告を受けてその立場を取っている。

……が、何としてでも当人と接触し、帝国に連れ戻したい、というのが彼女の本音であることは誰の目にも明らかだった。

青空を仰ぎ、この空の向こうで繋がっていると、信じつつも。姿を見せない彼の心が見えず、フィオナの胸は焦燥に締め付けられる。その苦悩のあまり、無意識のうちに瞼を閉じて視界という現実を封じてしまうほどに。

絶壁の胸の前でか細い指を絡め、哀願するように祈りを捧げる彼女。その瞼が蒼い瞳を開いた時——

「よっ、と」

「——、え」

——テラスをよじ登る曲者が、視界の正面に飛び込んでくる。

帝国城の最上層であるこのテラスまで、身一つで登ってくる体力も。その行動力も。何もかもが非常識で、衝動的な侵入者だった。

条件反射で衛兵を呼ぼうと、フィオナは咄嗟に口を開く。……が。

その小さな口からは、音が微かに漏れる程度の声しか出さず……彼女は目を剥いたまま、立ち尽くしていた。

「……あ、なた、は」

「はは、壁登りなんて久しくやってなかったなあ。あんまり楽しかったもんで、ついここまで来ちまったよ。——久しぶり、ファイオナ」

黒い髪と、瞳。たなびく赤いマフラーと、王国製の鎧。鋼の剣と盾。

——穏やかながらも、どこか凜々しい精悍な顔立ちは、あの日と見違えている一方で、確かな面影を残している。筋骨逞しい肉体に成長しても、体つきはまるで違っていない。

その眼差しだけは、七年前から変わらない——少女が愛した、伊達竜正のものだった。思えば昔から、彼はあちこちに登ったり降りたりしては、自分や騎士団を困らせていた。あの日々と変わらない、少しだけやんちゃな彼が、そこにいる。

驚愕と、シヨックの余りの思考停止の期間を経て——彼女はようやくよく、突然に訪れた「再会」を理解する。

自分が遠い青空を見つめ、途方に暮れている間に。彼はもう、こんなにも目の前まで来ていたのだ。

……こんなにも、驚かされることがあるだろうか。こんなにも、幸せな気持ちがある

だろうか。

「……もう、ここには来ない。それくらいのもりで、旅に出た気でいた」

「……う、ううっ……」

「でもさ。やつぱり、帰ってきちゃった。たぶん、俺に帰る場所があるのだとしたら、きつと『ここ』なんだと思う」

目を伏せ、両手で顔を覆い、泣き崩れる彼女。手すりに腰掛け、そんな彼女を見つめる帝国勇者——伊達竜正は、暫し目を伏せる。

思えば、この世界に來た時に初めて自分を迎えたのも、彼女だった。

——理由の如何を問わず、殺人を禁忌とする国で生まれ育ってきた少年にとって。この世界で過ごしてきた七年は、苦悩と苦闘の日々だった。

確かに大量殺人とはいっても、彼の行いはあくまで「戦場で敵兵を殺した」ことに過ぎない。自分も殺されるリスクを背負っている以上、この世界ではありふれた事象であり、「普通」なら罪に問われることもない。

だが、その理屈は互いが対等な「人間」である前提の上に成り立っている。神から超常の力を齎された「勇者」である伊達竜正に、当てはまる道理ではない。

神の力を受けた身でありながら、その力で生身の人間を手に掛ける。それはこの世界にとっても伊達竜正にとっても、未だかつてない「不条理」であった。

そんな「不条理」を、人殺しを厭う温厚な少年が背負った結果。そのギャップから生まれた心の闇を「勇者の剣」に付け込まれ、王国に凄惨な爪痕を残すことになってしまった。

そこから始まった贖罪の旅の中で、王国を救い——王女の赦しを得た今。伊達竜正は、ようやく。

罪に塗れた今でも、帰れる場所に辿り着いたのである。

「……」

泣き腫らしながらも、しつかりと。

愛する男の顔が見たいと、懸命に顔を上げる彼女と、視線を交わす。

あの日と変わらない笑顔。それを目の当たりにして、フィオナはようやく実感するに至る。

彼は、ようやく、帰ってきてくれたのだと。

「ゆう、しゃ、さま」

「ん。待たせて、ごめんな。……ただいま、フィオナ」

「……おかえり、なさい。勇者、様あああああつ！」

全ての感情が、奔流となり溢れ、爆発し、弾けて。フィオナは、皇女としての気高さも佇まいも全て捨て去り——ただの少女として、その胸へ飛び込んでいく。

羽を休めに来た鳥を、抱き締めるために。

◇

——私達が暮らすこの星から、遙か異次元の彼方に在る世界。

その異世界に渦巻く戦乱の渦中に、帝国勇者と呼ばれた男がいた。

人智を超越する膂力。生命力。剣技。

神に全てを齎されたその男は、並み居る敵を残らず斬り伏せ、戦場をその血で赤く染め上げたという。

如何なる武人も、如何なる武器も。彼の命を奪うことは叶わなかった。

しかし、戦が終わる時。

男は風のように行方をくらまし、表舞台からその姿を消した。

一騎当千。

その伝説だけを、彼らの世界に残して。
だが。

男の旅路は、まだ終わらない。

人類の希望たる、勇者としての使命を全うするまで。つまり——死ぬまで。
人々の笑顔を守るため、奴隷のように戦い続けていく。真の、勇者として。
しかし。

今は。

今だけは。

彼は剣を捨て、「人」の身と成る。彼を神と崇めず、「人」として愛する者達の傍らで。そう。まるで、ただの人間のように。

勇者は暫し、羽を休めるのだった。

いつの日か再び。力無き人々を救うための旅へと羽ばたいていく、その時まで……。

真最終話 変わりゆく運命

前編 変わる未来、新たな旅立ち

——それから、しばらくの月日が流れた。

「報告によれば、ヴィクトリアの身柄は無事に王国で保護されたようだが——やはり、その王国騎士団の予備団員だというダタツツなる者が……タツマサであると?」

「はい。示された特徴とも一致しております、間違いありません」

「そうか……」

帝国城の皇室にて、言葉を交わす皇帝とバルスレイの元副官は、互いに渋い表情で纏まった書類を見つめていた。そこには、王国内で行われた調査結果が記されている。

王国騎士団に所属するダタツツという男は——かつての勇者であると。

「して、いかがされます?」

「決まっていよう。直ちに使者を送り、タツマサを連れ帰る」

「ですが、勇者様は世間的にはすでに死んだ身。勇者様もそれを顧みて、ダタツツと名を変えられたのでしょうか。無理に帝国の勇者様とお呼びしてお連れしようとしても、御本人が納得されるかどうか……」

「わかっておる。だから、ヴィクトリアに代わる王国からの剣術指南役として『王国騎士のダタツツ』を指名するのだ。一時的でもここに連れてくるのが出来れば、いくらでも本人と話是可以する」

「……は、畏まりました。では、そのように」「うむ。……頼んだぞ」

かつて帝国勇者と呼ばれた青年を、取り戻すため。元副官は皇帝から預かった資料を手に、皇室を後にする。

その背中を見送った後、皇帝は席を離れ——窓から、緑と花で彩られた庭園を見下ろす。正確には、その中に佇む愛娘を。

(フィオナ……)

深窓の皇女フィオナは、物憂げな表情で花々を見つめ、蒼い瞳を揺らしている。愛する勇者の行方を想い続けていることは、誰の目にも明らかだ。

(案ずるな、フィオナ。生きている限り——諦めぬ限り。会える可能性は、きつとある。余が、それを証明してみせよう)

今もなお、一途に勇者を慕う娘のため。皇帝は窓の縁を握り締め、青空を見上げる。あの少年も、この空の下で生きているのだろうと、思いを馳せて。

——そうして、帝国に新たな動きが現れてから数週間。

「……行かれるのか。ダタツツ殿」

「……ああ。君がいるなら、ジブンの力も必要ないだろう。元の鞆に収まる、というわけだ」

王国では、一人の男が新たな旅立ちの時を迎えようとしていた。王国が騎士のために飼いならしていた、一頭の騎馬に跨って。

予備団員のプロテクターを赤い服の上に纏い、首に赤マフラーを巻く若者の眼前には——青い荘厳な鎧に身を固め、父の両手剣を背にした女騎士の姿がある。

「応じるのだな。私に代わる剣術指南役——という名目の、帰還要請に」
「六年前に、あそこから逃げたつきりだったからな。遅かれ早かれ、いずれ向き合う必要はあったさ」

「……怖くはないのか。裏切り者として、処刑されるやも知れんのだぞ」

「なら、それもジブンの役目の一つだ」

かつて、この国を脅かす勇者だったダタツツ。かつて、この国最強の騎士だったヴィクトリア。二人は今、互いに新たな道へと歩み出そうとしていた。

二人の後ろでは、町の人々や騎士達が入り乱れ、破壊された王宮の復興に奔走している。

「——それに、王国が帝国の属国であることには変わりない。王国人の身分で帝国の意

向に逆らっても、この国の立場が悪くなるだけだ」

そう言いながら、ダタツツはプロテクターに固められた己の胸に拳を当てる。その鎧も、剣も、盾も。全て、あの戦いの後に寄付されたものだ。

——この国にただ一人存在している予備団員のために、その予算を提供した料亭の少女によって。

「ダタツツ殿……」

「心配ないさ。今のこの国には——君がいるんだ」

「……わかった。約束しよう、ダタツツ殿。あなたが託された、この父の形見に見合う——真の騎士になる、と」

——あの死闘の後。

治療を受けたダタツツが意識を回復させた頃には、すでに数日が経過していた。戦いで破壊された王宮は、有志の民衆や騎士団の手で復興が進められ、バルスレイがその指揮を執っている。

それと並行して、騎士団ではヴィクトリアによる激指導が始まり、団員達は来る日も来る日も彼女のシゴキに悲鳴を上げる羽目になっていた。その苛烈な訓練に、ただ一人難なく付いていっているロークは、次期団長とも噂されている。

ダタツツに新たな鎧や剣、盾を寄付した料亭の娘は、復興作業に勤しむ者達に無料で

料理を振舞っているらしい。そんな彼女にナンパを敢行する若者を、父がわりの男性が鉄拳制裁する——という光景は、名物になっているそうだ。

あの戦いから生き延びた国王は、世に残された最後の魔物が討たれた——という結果が精神に影響してか、徐々に快復に向かっているという。今現在では、再び雄々しい国王として国民の前に立つべく、リハビリを始めているようだ。

そして——

「ダイアン姫も見送りには来ず……か」

「すまない。貴殿が件の話を受けると聞いてから、随分と塞ぎ込んでしまわれてな……。一度でも貴殿に帝国へ行かれては、二度と帰ってこないのではないかと思われているよ
うだ」

「そうか……確かに、帰ってこれるかはわからないからな。彼女の懸念も、間違いじやな
ら」

「——私としては、誓ってほしいのだがな。必ず、姫様の許へ帰ると」

「ジブンがそういうことを口走るのは、絶対に出来る確信がある時だけさ」

——ダタツツの出稽古が決まった日から。ダイアン姫は一步も自室を出ることなく、塞ぎ込んだ毎日を送っていた。

誰とも合わぬ日々を過びしているため、誰も彼女の胸中を知ることとは叶わず——城の

誰もが、彼女の様子を案じていた。

「彼女には、長く心配を掛けることになるな……だが、いつかは帰ってくる。今は、そう信じて頂く他はない」

「私も——それを信じたい。この国と姫様、そして私の命を救って下さった貴殿の言葉を、信じたい。だから——必ず帰ってきてくれ」

「承知した」

そんな姫君の苦悩に胸を痛め、切なげな表情を浮かべるヴィクトリア。そんな彼女を励ますように、ダタツツは穏やかな微笑を送る。

——そして、彼を乗せた馬が。嘶きと共に蹄を鳴らし、この国を去りゆくため、踵を返した瞬間。

「お待ちなさいッ！」

「……!?!」

聞こえるはずのない声が轟き——現れるはずのない影が。颯爽と、ダタツツが跨る馬に飛び乗ってきた。ブラウンの美しい髪を、荒々しく靡かせて。

まるで風に舞う葉のように、艶やかな軌道を描き——鞍の後ろに収まる少女。新緑の姫騎士の鎧を纏う彼女は、得意げな笑みを浮かべると——信じられない、といたげな表情のダタツツとヴィクトリアを、交互に見やる。

そして——不服そうに、鼻を鳴らすのだった。

「全く……わたくしを差し置いて、何を勝手に話を進めておられるのですか。油断も隙もありませんわね」

「ダイアン姫……!」

「ひ、姫様……!」

「なんですの? 御二方。まるで、信じられないものを見るような眼でわたくしを見て。——わたくしがあのまま、ダタツツ様がおられなくなるまで引き籠もっているつもりだった、とでも?」

「し、しかし……!」

先程まで塞ぎ込んでいた、と話されていたとは思えないほどの、澆刺とした表情でダタツツを見遣るダイアン姫。その佇まいに、黒髪の騎士は困惑と共に振り返ると——

「んっ……!」

「……!」

——その口を、塞がれてしまった。柔らかく、温かい——姫騎士の、唇によつて。

僅か数秒の口付けだったが、その体感は永遠のように長く——彼らの脳裏に焼き付いている。

そして、ようやく互いの唇が離れた時。上気した頬のまま、愛おしげに騎士を見つめ

る姫君は、隠すことなく己の想いを口にした。

「わたくしは——もう、決めましたの。もう、自分の気持ちに嘘はつかない。背も向けない。ただ真つ直ぐに——想うままに、愛する人を愛しますわ」

「ダイアン姫……」

飾り気のない、直球の告白。それを受け、ダタツツは逡巡する。顔を赤らめて視線を逸らし、咳ばらいを繰り返すヴィクトリアを一瞥して。

——受けても、いいのだろうか。ジブンが、彼女の愛を……。

そう重い悩む彼の思考を断ち切るように、ダイアン姫は再び声を張り上げる。反論など許さない、と言わんばかりに。

「ですので——その出稽古。わたくしも、同行しますわー！」

「なっ……いー！」

「資格がなくとも、わたくしを守ってくださいるのでしょう？　なら、わたくしが帝国に行くというなら、同行して護衛するしかない。違いますか？」

「……」

真剣な眼差しで、こちらを射抜く姫君の碧眼。その宝石と視線を交わし、ダタツツは言葉を失ってしまふ。

物々しい装備に身を固めた姫騎士は、これから戦に赴くかのような佇まいで、彼の後

ろに跨っている。その年不相応に發育している肢体を——隙間なく、男の背に密着させて。

さらに、決して離すまいと両腕を絡めて、ダタツツを後方から抱きしめていた。その温もりと、少女のものとは思えぬ色香に耐え切れず、黒髪の騎士は思わず彼女から視線を外してしまった。

「……何も、姫が直々に来られずとも……」

「あなたはどうかやら、行く先々で女性にちよつかいを掛ける、ふしだらな殿方のようですからね。帝国で粗相をすることがないよう……わたくしが監視せねばなりません」

「そ、そのようなことは……」

「それに。フィオナ皇女殿下にも、直に報告すべきでしょうから。——もう、この方はわたくしのものであり、わたくしはこの方のもなのだと」

そこへ追い討ちをかけるように、ダイアン姫は胸や腹、脚を擦り付け、耳元に甘い吐息を吹き掛ける。まるで、自分の香りをマーキングするかのよう。

——他の女を寄せ付けまい、とするかのよう。

さらに、彼女は挑戦的な笑みを浮かべ、帝国の方角を見つめている。大国の皇女からダタツツを——勇者を奪うと宣言した彼女の瞳は、かつてない情熱を帯びていた。

焼け付くような煌めきを放つその眼にたじろぎながら、ダタツツは助けを求めよう

にヴィクトリアを見遣る。だが、剣にのみ生きた女騎士には刺激が強過ぎたのか——彼女は真つ赤な顔を両手で覆ったまま、顔を伏せていた。

……どうやら彼女が知らないうちに、この姫君は大人に近づき過ぎていたようだ。

「ダ、ダイアン姫。あまり無茶は……んっ!？」

「ちゅっ……ん、あ、れうっ……」

「ん、ん……」

そんな彼女を宥めるため、振り返ったダタツツは——またしても、彼女に唇を塞がれてしまった。

しかも、今度は唇同士が軽く触れ合うだけでは済まされない。彼女の舌はダタツツという男を知ろうと、彼の口内に押し入り——じやれる猫のように、ねぶるのだった。

抑え続けてきた想いが、枷を失い弾けたためか。彼女の求愛は、それまでの素っ気ない装いからは想像もつかない情熱を纏っている。

その身を焦がすような熱に、ダタツツも——彼女自身も、翻弄されているようだった。

「んぷっ、はあ……ん……。ダタツツ、様……もう、独りには……」

「……」

それから、数秒。ようやく彼から唇を離れた彼女は、透明な糸を引いていた口元をそのままに、再び愛する騎士に身を摺り寄せた。

今まで戦い続けた分だけ、内側に押し込んできた「甘え」を、この瞬間に解き放つかのように。

そんな彼女の、弱さを汲んでか。ダタツツはそれ以上何かを言うことなく、静かに彼女の行動を受け入れていた。そのままようやく、手綱を引き——馬の歩みを進めるまで。

「ダタツツ殿……。姫様を、頼む」

「……ああ、わかった」

ようやく気を取り直したヴィクトリアとも、別れの挨拶を済まし。今度こそ、彼は旅立っていく。独りになるはずだった旅路に、予期せぬ人物を伴って。

上気した頬のまま、自分の背にもたれ掛かる姫君を一瞥したのを最後に、彼は振り返ることなく旅路を進んでいく。その行く先を見守る女騎士は、今まで背負い続けてきたものを下ろしたかのような——穏やかな笑みで、彼らの門出を見送っていた。

「ダタツツ殿……。ありがとう」

——この国の誰もが、どこかで胸に秘めていながら。過去の因縁ゆえに、口に出せないままでいた言葉を——その旅立ちに添えて。

「ローク君、良かったのか？ 見送りに行かなくて」

「別に。オレはまだまだ未熟だからな。次にダタツツに会って、あいつをビックリさせ

てやる日までは——修練あるのみ、さ。あんたこそ弟子の門出だつてのに、ここで油売つてる場合かよ」

「……その必要はない。もうあの子は——いや、彼は。見送りが必要になるような男ではあるまい」

「はは、違いねえな」

その頃、喧騒の中で復興に尽力していたバルスレイとロークは。互いに笑い合いながら、別れを惜しむ必要などない、と言わんばかりに。今の自分達が為すべき使命に、奔走していた。

（私は、彼の父にはなり切れなかった。だが、せめて……彼の強さだけは、信じてやりたい。もはや、私にできることはそれだけだ）

息子のように想つてきた青年の行く末を憂う一方で、彼の選択を尊重したいとも願う。そんな矛盾した思いを胸中に抱えるバルスレイが、一瞬だけ弟子がいるであろう方角を見遣る時。

「ローク君、バルスレイ様！ そろそろお昼にしませんか——」

遙か遠くから自分達を呼ぶ大声が轟いてくる。元気が取り柄と評判の、料亭の看板娘だ。

「よーし、そいつはそこに積んでくれ！ ……ふう」

「どーしたんでえ、親父さん。ため息なんてらしくもねえ」

「……いや、なに。いなくなっちゃいけねえ奴がいなくなる——そんな気がしてよ」

彼女の隣では、彼女の父代わりが男達を率いて、復興を進めていた。——明るく、豪快なよう。その面持ちは、どこか儂い。

「む、もうそんな時間か。……行くか、ローク君」

「おう、行く行く！ 朝っぱらから荷物だの何だの運んでばつかで、腹ペコなんだ！」

その一方で、彼女の呼び声に応じるように、二人は歩み出していく。希望に溢れた、笑みを浮かべて。——また、温かい食事を持つて彼らを迎える茶髪の少女も。

（きつと……理由があつたんだよね。私は信じるよ、ダタツツさん。——だからどうか、元気で……ね）

人知れず。あの日、恋い焦がれた黒髪の騎士に思いを馳せながら——この国の人々に尽くす日々を送っていた。

後編 君は、独りじゃない

澄み渡る青空の下。

緑に囲まれた山道の中を、赤いマフラーを靡かせる騎士が、一頭の馬に跨り静かな山道を歩んでいた。その後ろに、艶やかなブラウンの髪を持つ少女を乗せて。

風のせせらぎ。小鳥のさえずり。それだけが響く、穏やかな道。その道程を歩む彼らは……腰に、一振りの剣を提げていた。

この争いとは無縁な世界には、到底そぐわれないものを。

「……」

「ダタツツ様、あれが……?」

「ええ……そうです」

彼らはその道中にある、丘の上へと向かい——そこから、一面に広がる森を一望できる景色を見下ろしていた。

その中には——笑顔を浮かべてのどかな毎日を送る、山村の人々の様子も窺える。かつての争いも悲しみも感じさせない、力強い生気が、その空間から噴き出しているようだった。

「……」

そんな、笑顔の中には——騎士がかつて愛し、守ろうとした、亜麻色の髪の毛、美女の姿もあつた。彼が想像していた以上に、見目麗しく成長した彼女は、澆刺とした笑みを浮かべて平穩な日常を過ごしている。

その光景を遠い高みから見つめる騎士は——暫し瞼を閉じ。思い出に別れを告げ、穩やかな笑みを浮かべた。

(……最後に。君の笑顔に、会えてよかつた)

そして、前を向くために眼を開き、青空を仰ぐ。その視界に広がる澄んだ空が、騎士の心を満たしていた。

「ダタツツ様……」

「——さあ、参りましょう。ジブン達を、待っている人がいる」

不安げに自身を見つめる姫君に、華やかな笑顔を向ける彼は。そう呟くと、手綱を引いて馬を転進させていく。もう二度と、振り返らぬように。

(……ありがとう。ベルタ)

そうして、彼らは丘を降りると。山道へと戻り、本来歩むべき道へと帰っていく。騎士の故郷へと続く、長い旅路へと。

そして。

そんな彼らの背を、小鳥達の囀りだけが見送っていた。

——私達が暮らすこの星から、遙か異次元の彼方に在る世界。

その異世界に渦巻く戦乱の渦中に、帝国勇者と呼ばれた男がいた。

人智を超越する膂力。生命力。剣技。

神に全てを齎されたその男は、並み居る敵を残らず斬り伏せ、戦場をその血で赤く染め上げたという。

如何なる武人も、如何なる武器も。彼の命を奪うことは叶わなかった。

しかし、戦が終わる時。

男は風のように行方をくらまし、表舞台からその姿を消した。

一騎当千。

その伝説だけを、彼らの世界に残して。

——そして、終戦から六年を経た今。

男の旅路は、今も続いている。

だが。

その旅路は——もう、
独りではない。

番外編 虚勢の姫騎士

わたくしに覆い被さる冷や水が、この白い柔肌を濡らし——床に出来た水溜りが、歳不相応に発育してしまった、この肢体を映し出す。

髪の毛先から、唇から、顎から滴る水滴が、たわわに実った双丘を伝い——括れた腰を通じて、豊満な臀部と下腹部に流れ、地上へと堕ちていく。わたくし自身を除いて、その雫に涙が紛れていることを知る者はいない。

「姫様、お時間です」

「——ええ」

背後から響く侍女の呼びかけに応え、私は白い布を手取る。生まれたままの体を吹く私の眼前には——これから身に纏う、戦装束が用意されていた。

私は侍女に背を向け、胸中の不安を悟られないよう、体を拭いて……その装束に手を伸ばした。そして白い下着から順番に、袖を通していく。

静寂に包まれた、この水浴び場には今——私が出す衣擦れの音だけが響いていた。

やがて新緑の軽鎧と、白銀の剣と盾を備えて。私は侍女の方へと向き直り、恐怖を殺

して凜々しい貌を作り出す。

「……姫様、武運を」

「……はい」

その虚勢を知ってか知らずか。侍女は言葉少なに、わたくしを鼓舞する。そんな彼女の傍らを通り過ぎ、民の待つ闘技舞台を目指すわたくしの白い脚は——すでに震え上がっていた。

しかし、怯えることなど許されない。英雄が斃れ、師匠がいなアイラックス今……：帝国軍の横暴から力無き民を守る剣は、わたくしだけなのだから。

「姫様あ——」

「ダイアン姫ええ——」

やがて、闘技舞台に辿り着いたわたくしを、民の歓声が盛大に出迎える。そして、こちらに下卑た視線を注ぐ対戦相手が、舌舐めずりと共に臨戦態勢に入っていた。

「へへ……速攻で押し倒してやるぜ？ お姫様ア」

「……っ」

身を、竦ませてしまいそうになる。だが、屈してはならない。

戦勝国の地位に物を言わせて、王国を我が物顔で踏み躪る、帝国貴族ババルオ。彼の放つ刺客との決闘に勝ち続けねば——我が王国の民は、絶え果てるまで帝国に虐げられ

てしまうのだから。

「わたくしは負けません……必ず！」

（お願い……助けて……誰かつ！）

だから、わたくしは精一杯の虚勢を張り、剣を掲げるのだ。「姫騎士ダイアン」としての、初陣を飾るのだ。

誰にも知られてはならない、胸中の恐れを隠しながら。

だが。この絶え間ない決闘の向こうに待ち受ける、敗北と屈辱の先に。わたくし自身が待ちわびていた、「誰か」の到来が実現するなど。この日のわたくしには、知る由もなかった。

——それが、よりにもよって。諸悪の根源たる、あの「帝国勇者」であるなど。

番外編 ジューシーにジエラシー

——ダタツツ様が予備団員として騎士団に組み込まれて、数週間。食堂には連日、彼専用のランチが用意されていた。

出来立てのパンに熱いスープ、脂が乗ったステーキ。鼻腔をくすぐるその香りは、騎士団でも評判になってきている。

確かに、あのランチを出す料亭から漂っている香りは良い。わたくしも食客として訪ねたいと思ったのは一度や二度ではない。

だが、この国の王女であるわたくしが平民の料亭に足を運ぶのは好ましいことではないと、周囲の貴族達がうるさいのだ。周辺諸国の噂になるような隙を与えないでくれ……と。

「あの、ダイアン姫。ジブンが何か……？」

「……いいえ？ 別に？」

そう、だからわたくしは今。向かいの席で人の気も知らずに、ランチを堪能している彼に腹を立てているのだ。

……他意はない。別に彼が誰の手料理を美味しそうに食べていようと、わたくしには

関係ない。

そんなわたくしの思案もやもやになど、まるで気づく気配もなく。彼はわたくしの膨れっ面を前に、困惑の表情を浮かべている。

……困りながらもすっかりスープは味わっている辺りが、もう憎たらしいっただらな
い。

「……ただ先程から、随分美味しそうに頂いておられますから。いいご身分ですこと」

「……? あ、ダイアン姫も欲しいんですか。じゃあこれ、お裾分けつてことで」

「なっ! て、帝国勇者の施しなど受けませんっ!」

「大丈夫ですよ、今なら誰も見てませんから」

「う、う……」

不意打ちを受けて、わたくしはしどろもどろになりながら辺りを見渡す。……他の団員達が彼を避けていることもあって、確かにこの場にはわたくしと彼しかいない。

——このランチを味わえるのは、今しかない。

気づけばわたくしは、瞼をキュツと閉じて、彼が差し出した一切れのステーキに食いついていた。口の中で広がる濃厚な塩味と肉汁が、想像以上の美味となって味覚を包み込んでいく。

——その味わいに、恍惚の表情を浮かべるわたくし。その姿を、微笑ましく見つめる

ダタツツ様。

そこでわたくしは、気づいてしまった。自分が、彼が使っていたフォークに刺さった肉に食いついていたことに。

「……っ！ か、帰りますっ！」

「え？ もういいんですか？」

「もういいんですっ！ ばかっ！」

「え、ええ……」

またしても困惑している彼を放置して、わたくしは耳まで真っ赤になりながら、この食堂を後にする。

——唇の中に残る彼の味を、人知れず噛み締めて。

番外編 夢の世界に望む未来

木々のざわめきが響く、森の只中。

わたくしはダタツツ様に付いていく形で、帝国を目指す旅を続けていた。彼を帝国のものにはさせないと、皇女フィオナに宣言する為に。

……彼女は今もお、ダタツツ様の帰りを待ち続けているという。彼は、そんな彼女を放っておけるような人ではないだろう。

彼は「帝国勇者」とは名ばかりの、本当の勇者なのだから。

——だからこそ、憂う。

彼は当然ながら、わたくしより皇女フィオナとの付き合いの方が長い。

恐らくは彼も、皇女フィオナとの再会は心待ちにしているのだろう。

彼を渡すまいと、こうして付いてきたけれど。

再会を果たした時、それでもダタツツ様は……王国に、わたくしと共に帰ってくれようか。

◇

夜の帳が下り、野宿することになったわたくし達は今、馬を休ませて火を焚いている。

わたくしは、薪をくべる彼の貌をじつと見つめていた。

「眠そうですし、そろそろ休みましようか。不寝番はジブんに任せて、ダイアン姫はゆっくり休んでください。明日も早いですから」

「……別に、これくらい……」

彼はいつものように、穏やかな面持ちでわたくしに微笑んでいる。……わたくしの、気も知らないで。この方は、いつもそうなのだ。

——参ってしまう。そんな彼を、心の底から愛してしまっただから。

「……ダタツツ様、行かないでくださいね」

気づけば、わたくしは。か細く折れてしまいそうな声色で、そう呟いていた。……彼を困らせてしまうだけに、言わずにはいられなかった。

——もはや、誤魔化しようもない。わたくしはもう、彼なしでは生きられない女になっっている。

ダタツツ様はそんなわたくしに、何も言わず。わたくしの白くか弱い手を、握ってくれた。

「大丈夫。ちゃんと俺は、ここにいます。——言っただろ。資格がなくても、必ず君を守るって」

「……っ」

それはダテ・タツマサという、本来の彼が見せる貌。わたくしの心を虜にした、ずるい貌だ。

そんな貌で笑みを向けられたら、わたくしはもう――

「ダタツツ様、わたくし……」

「……ダイアン」

――旅の疲れか、安心ゆえか。わたくしは微睡みに囚われ、彼の肩に頭を乗せると……そのまま彼の胸に身を預けて、夢の世界へと沈んでいく。

「……う、ん……」

その先で見えた、幸せな未来が……この旅路の向こうに待つ真実であるようにと、わたくしは祈っている。

そして、願わくば。同じ望みを、彼も抱いてくれているように……と。

ダタツツ様……愛しています。